

伏見城跡

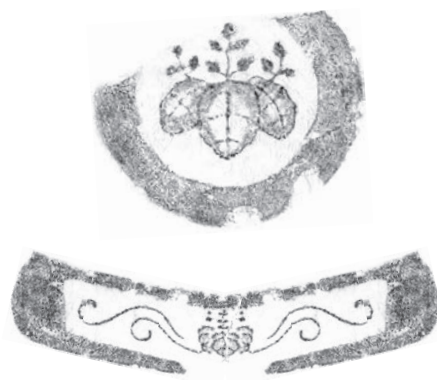
京都市伏見区桃山町下野 27-1 の発掘調査

2018 年

株式会社 四門

伏見城跡

京都市伏見区桃山町下野 27-1 の発掘調査



2018 年

株式会社 四門



1 調査地上空より京都市内及び伏見城模擬天主を望む（南上空から）



2 調査地全景（南上空から）



3 調査地上空より旧巨椋池方面を望む（北上空から）



4 調査地全景（上空から）



5 石組溝 08SD (南から)



6 石垣 01SL の検出状況（西から）



7 石垣 01SL 最上部残存石材（築石）の被熱状態と石爆ぜ（西から）

例 言

1. 本書は、京都市伏見区桃山町下野 27-1 における、伏見城跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本調査は、御牧隆氏（京都市伏見区桃山町下野 27-7）の計画する、共同住宅の建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。文化財保護法（昭和 25 年法律第 214 号）第 92 条の規定により、平成 29 年 9 月 29 日付けで届出し、平成 29 年 11 月 9 日付け、文文財第 683 号で許可を得た、受付番号 16F684 にあたる。
3. 調査の体制は、京都府教育庁指導部文化財保護課並びに京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の指導のもとに、株式会社四門西日本・中部支社・京都支店が契約し実施した。
4. 発掘調査の面積は、370㎡である。
5. 発掘（現地）調査は、平成 29（2017）年 10 月 16 日～平成 29（2017）年 12 月 15 日で実施した。整理調査は、平成 30（2018）年 3 月 31 日まで発掘調査に継続して行い報告書を刊行した。
6. 発掘調査及び本報告書作成は、下記の体制にて行った。

株式会社四門西日本・中部支社京都支店

西日本・中部支社長	山内 伸治
支 店 長	五十嵐 大（前支店長 青山賢二）
主任調査員	千喜良淳
調 査 員	辻 広志、浅野広美、布村晋士、小林万容
補 助 員	小谷亮二、小林郁也、森 直美、菟場育美、小谷実菜子、東山 華
作 業 員	株式会社アート

7. 発掘調査は千喜良、辻が、整理作業は洗浄・注記を森、菟場、小谷（実）が、土器実測を布村が、瓦実測を辻が、拓本を浅野が、遺物のデジタルトレースを小谷が、挿図・瓦観察表の作成を小林（郁）が、土器観察表作成は小林（万）が主に担当した。
8. 遺構の写真撮影は千喜良、布村が、遺物の写真撮影は辻、浅野が、遺構番号の管理と遺物の取り上げは浅野、小林（万）が行なった。
9. 本書の執筆は、第 1 章を浅野が、第 2 章第 1 節を辻が、第 2 章第 2・3 節を小林（万）が、第 3 章第 1 節を辻が、第 3 章第 2 節を千喜良、辻が、第 4 章第 2・3 節を千喜良が、第 4 章第 1・4 節を辻が、第 5 章第 1 節を布村が、第 5 章第 2 節を辻が、第 5 章第 3 節を千喜良が行った。編集は、辻の指示の下に東山が行なった。
10. 遺構図に使用した基準点の設置（座標・水準測量）及び遺構平面図・立面図の作成は、テクノシステム株式会社島津功が行った。
11. 使用石材の岩種等の分析については、検証委員会委員をお願いした橋本清一氏（同志社女子大学・京都府立大学非常勤講師）の調査指導と助言を得た。
12. 金箔瓦の保存処理については、岡田文男氏（京都造形芸術大学芸術学部歴史遺産学科教授）の指導と助言により、洗浄と生ゴムによる処理を行った。
13. 発掘調査及び整理作業、報告書作成にあたっては、下記の方々及び関係機関のご指導、ご協力を得ることができた。ご芳名を記して感謝の意を表します。

芦田恭彦、石山淳、馬瀬智光、岡田文男、奥井智子、熊谷舞子、郡邦辰、鈴木康高、園田和洋、中居和志、中村武生、橋本清一、古川匠、前田義明、南孝雄、持田透、森岡秀人、安田智聡、山田邦和（五十音順）

京都府教育庁管理部総務企画課、京都府教育庁指導部文化財保護課、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課、京都市歴史資料館、（公財）京都市埋蔵文化財研究所、大東建託株式会社京都山科支店、伏見城研究会、京都歴史地理同考会、株式会社アート、テクノシステム株式会社、三星商事印刷株式会社、西近畿文化財調査研究所、やましろ文化財株式会社

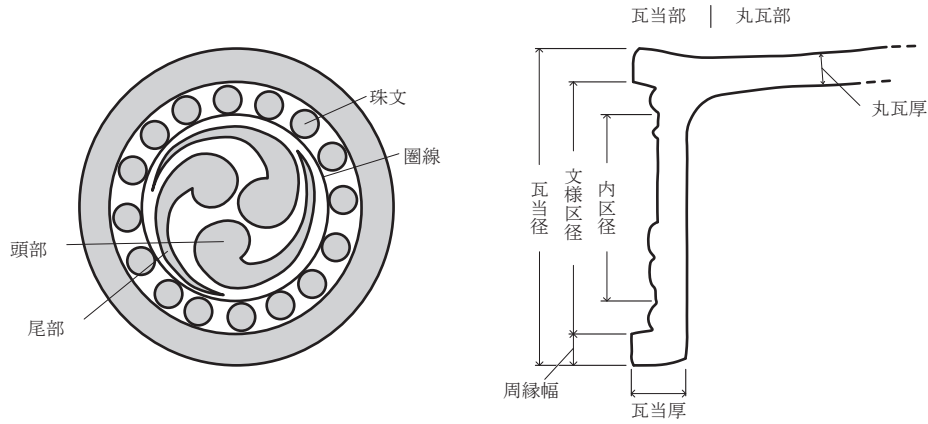
凡 例

1. 遺構に使用した座標値は、世界測地系平面直角座標系VI（測量成果 2011）に基づいており、方位は座標北を北として表記し、本文中では単位の「m」を省略した。標高は、海拔高（東京湾平均海面高度）を使用し、本文中では「T.P.」を省略した。
2. 色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄 1994）に準拠した。
3. 使用地図は、2,500 分の 1 の「丹波橋」（京都市都市計画局発行）を調整して用いた。
4. 遺構図は、各図にスケールを掲載し、原則として縮尺を 60・80・200・300・1000・5000 分の 1 とした。
5. 遺物実測図は各図スケールを掲載し、土器・瓦は原則として縮尺を 4 分の 1 とし、銭貨・金属製品のみ 2 分の 1 とした。
6. 本書に収録した各資料の図は、本書の体裁に合わせて整えるために、それぞれ縮小拡大し加筆した。
7. 本書に収録した図・資料等の引用・参考文献、索引は、各章の本文末に纏めて掲載した。
8. 本書では、室町時代後期から安土桃山時代を、「戦国時代」と呼称して記載する。
9. 遺構番号は全て 01 に始まる 2 桁の通し番号とし、遺構の性格（種類・属性）は下記の呼称か略記号を遺構番号の後ろに付した。
 柵（塀）・杭列；SA、溝・暗渠排水溝；SD、路；SF、土坑；SK、柱穴；SP、石垣；SL、
10. 遺構の撮影方向の表示は、石組溝や石垣の主軸は正確には座標北よりも 7.43° 東に傾くが、南北に長い 2～4 区を仮に南北として置き換えて表示した。
11. 出土遺物には通し番号を付した。実測図・写真図版共に一致している。
12. 出土遺物の年代については、下記の文献を主に使用した。なお、下記の小森俊寛氏の編年を使用する場合は「京〇期」と記載し、相対年代は下記の表に基づいた。
 ・中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』 1995 年
 ・小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要第 3 号』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996 年

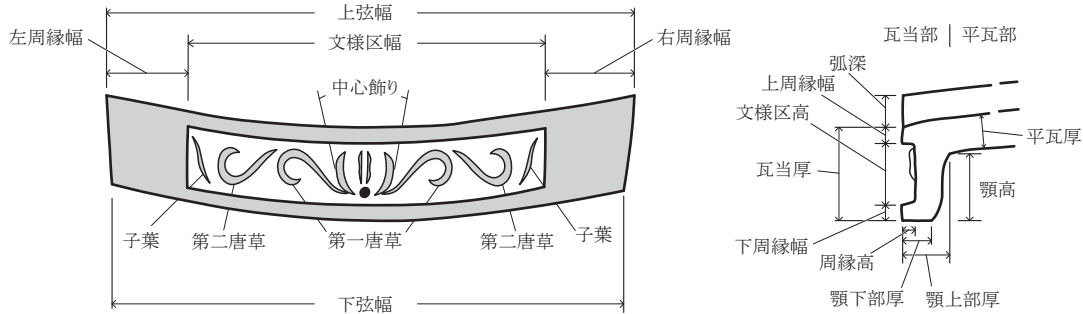
750年頃	840年頃	930年頃	1010年頃	1080年頃	1180年頃	1270年頃	1360頃	1440年頃	1500年頃	1580～90年頃	1660年頃	1740年代頃	1820年代頃	
京Ⅱ期 (京都Ⅰ期)	京Ⅲ期 (京都Ⅱ期)	京Ⅳ期 (京都Ⅲ期)	京Ⅴ期 (京都Ⅳ期)	京Ⅵ期 (京都Ⅴ期)	京Ⅶ期 (京都Ⅵ期)	京Ⅷ期 (京都Ⅶ期)	京Ⅸ期 (京都Ⅷ期)	京Ⅹ期 (京都Ⅹ期)	京Ⅺ期 (京都Ⅺ期)	京Ⅻ期 (京都Ⅻ期)	京Ⅼ期 (京都Ⅼ期)	京Ⅽ期 (京都Ⅽ期)	京Ⅾ期 (京都Ⅾ期)	
古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新

瓦の各部分の名称や計測点、成形手法や調整法による分類は、下記の凡例と文献を主に使用した。
 ・加藤晃・金子智「御殿下記念館地点, 山上会館地点検出の瓦について」『山上会館・御殿下記念会館』
 地点』第3分冊(考察編) 東京大学埋蔵文化財調査室 1990年

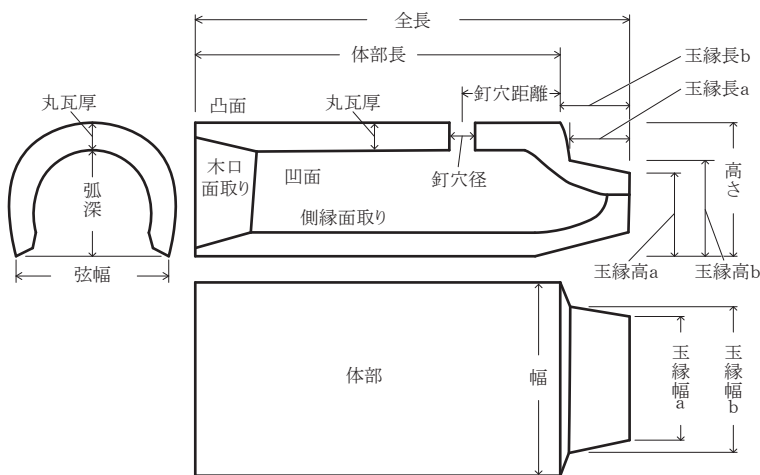
【軒丸瓦】



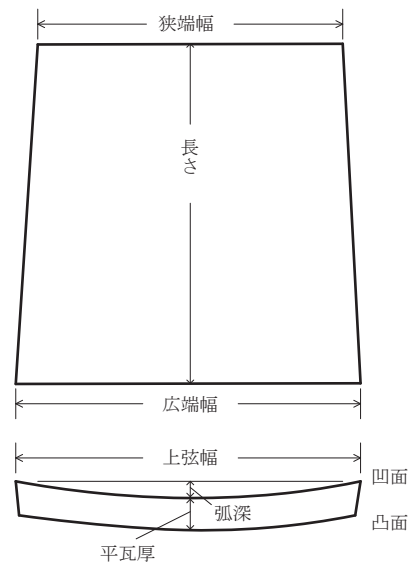
【軒平瓦】



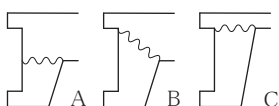
【丸瓦】



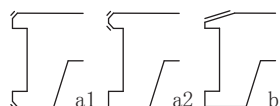
【平瓦】



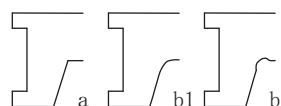
軒平瓦接合方法



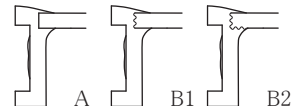
軒平瓦面取り



軒平瓦接合部調整



軒丸瓦接合方法



本文目次

巻頭図版

例言 / 凡例 / 目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の経過	3
第2章	地理的環境と歴史的環境	7
第1節	地理的環境と調査地の位置	7
第2節	歴史的環境	8
第3節	周辺の調査	12
第3章	遺構	17
第1節	基本層序と遺構面	17
1.	基本層序	17
2.	遺構面	23
第2節	遺構	23
1.	遺構の概要	23
2.	遺構	23
第4章	遺物	41
第1節	遺物の概要	41
第2節	土器	41
第3節	金属製品	46
1.	鉄製品	46
2.	銭貨	46
第4節	瓦	47
1.	軒丸瓦	47
2.	軒平瓦	60
3.	丸瓦	70
4.	平瓦	75
5.	道具瓦	78
6.	出土瓦の特徴と組み合わせ	78
第5章	総括	85
第1節	調査地内の石材	85
1.	石垣、石組溝および石組暗渠排水溝等の石材鑑定	85
2.	石材の産地	88
3.	石組溝 08SD の構築年代と矢穴痕	92
第2節	検出遺構と周辺調査遺構	93
1.	周辺調査の遺構	93
2.	2時期の石垣と周辺調査遺構との関連	95
3.	まとめ	96

遺物観察表 / 図版
抄録 / 奥付

挿 図 目 次

図 1 調査地位置図 1 (1:500,000)	1	図 29 軒丸瓦 (右巻三巴文 4 類 A ~ E)	52
図 2 調査地位置図 2 (1:5,000)	1	図 30 軒丸瓦 (右巻三巴文 5 類 A ~ C)	54
図 3 試掘トレンチと調査実施範囲	2	図 31 軒丸瓦 (右巻三巴文 5 類 D・E)	56
図 4 1・2Tr 南壁断面図 (1:150)	2	図 32 軒丸瓦 (右巻三巴文 5 類 E)	57
図 5 3Tr 南壁断面図 (1:100)	3	図 33 軒丸瓦 (右巻三巴文 5 類 F ~ L)	59
図 6 調査区全体図 (1:300)	4	図 34 軒丸瓦 (型式不明)	61
図 7 調査地周辺地質図 (独法) 産業技術総合研究所発行 「京都東南部」に加筆。1:50,000)	7	図 35 軒平瓦 顎貼付け A 技法 (唐草文 1 類 A ~ G)	64
図 8 周辺の調査地位置図 (1:25,000)	13	図 36 軒平瓦 顎貼付け A 技法 (唐草文 1 類 H ~ L)	66
図 9 中央壁断面図 (1:60)	19	図 37 軒平瓦 顎貼付け B 技法 (唐草文 2 類 A・B、巴文 2 類 C)	67
図 10 北壁断面図 (1:60)	20	図 38 軒平瓦 顎貼付け C 技法 (花文 3 類 A、唐草文 3 類 B ~ I)	69
図 11 南壁断面図 (1:60)	21	図 39 丸瓦 1	72
図 12 遺構全体図 (1:200)	24	図 40 丸瓦 2	73
図 13 石垣 01SL・杭列 02SA 平面図 (1:80)	26	図 41 丸瓦 3	74
図 14 石垣 01SL 平面図・立面図 (1:40)	27	図 42 丸瓦 4	75
図 15 掘立柱柵 (塀) 03SA 壁面図 (1:60)	31	図 43 平瓦 1	76
図 16 石垣 05SL 平面図 (1:80)	32	図 44 平瓦 2 (195 ~ 196)・塀瓦 (197)・道具瓦 (198 ~ 201)	77
図 17 素掘り溝 06SD・石組溝 08SD 平面図・立面図 1 (1:60)	34	図 45 軒瓦の組み合わせ案	83
図 18 素掘り溝 06SD・石組溝 08SD 平面図・立面図 2 (1:60)	35	図 46 石垣 01SL 石材番号図	87
図 19 素掘り溝 06SD・石組溝 08SD 平面図・立面図 3 (1:60)	36	図 47 石組溝 08SD 東側壁石材種別立面図 (上段から北→南)	89
図 20 素掘り溝 06SD・石組溝 08SD 平面図・立面図 4 (1:60)	37	図 48 石組溝 08SD 西側壁石材種別立面図 (上段から南→北)	90
図 21 石組暗渠排水溝 09SD 平面図・断面図 (1:40)	40	図 49 調査地周辺の地質図	91
図 22 土器 (表土層 (1・4・8 ~ 12)、攪乱 (5・6)、 試掘トレンチ埋土層 (2・3・7))	42	図 50 石組溝 08SD の矢穴石実測図	92
図 23 土器 (石組溝 08SD (13 ~ 43)、素掘り溝 06SD (44・45)、石組暗渠排水溝 09SD (46))	45	図 51 北側調査地①平面図 (梶川 (1996) より転載・一部加筆、1:800)	93
図 24 金属製品 (鉄製品 (47 ~ 50)、銭貨 (51・52))	46	図 52 北側調査地①石垣 2 立面・断面図 (梶川 (1996) より転載、1:30)	94
図 25 軒丸瓦 (桐文 1 類 A の 1)	48	図 53 南側調査地②平面図 (星野 (2006) より転載、1:800)	95
図 26 軒丸瓦 (桐文 1 類 A の 2)	49	図 54 第 2 トレンチ南壁面スケッチ (星野 (2006) より転載)	95
図 27 軒丸瓦 (菊文 2 類 A ~ C)	50	図 55 石垣 05SL 期周辺遺構推測図 (1:1,000)	97
図 28 軒丸瓦 (左巻三巴文 3 類 A・B)	51	図 56 石垣 01SL 期周辺遺構推測図 (1:1,000)	98

表 目 次

表 1 伏見城関連年表	9	表 7 鉄製品観察表	102
表 2 周辺の調査地一覧	13	表 8 銭貨観察表	102
表 3 出土遺物概要表	41	表 9 軒丸瓦観察表	103
表 4 伏見城跡出土石材分類表	86	表 10 軒平瓦観察表	107
表 5 石垣 01SL 石材分類表	88	表 11 丸瓦観察表	109
表 6 土器観察表	101	表 12 平瓦観察表	109

写 真 目 次

写真 1 2 区遺構の検出作業	5	写真 6 森岡氏の矢穴痕調査	6
写真 2 4 区石組溝の掘削作業	5	写真 7 岡田氏の金箔瓦保存処理	6
写真 3 御牧氏関係者現地説明会	5	写真 8 報道関係への公表	6
写真 4 橋本氏の石材調査	5	写真 9 天明八年「伏見御城櫓并屋敷取之絵図」 (京都市歴史資料館蔵) 調査地周辺部分	11
写真 5 出土遺物の分類と洗浄作業	6		

巻頭図版目次

巻頭図版 1

- 1 調査地上空より京都市内及び伏見城模擬天主を望む
(南上空から)
- 2 調査地全景 (南上空から)

巻頭図版 2

- 3 調査地上空より旧巨椋池方面を望む (北上空から)
- 4 調査地全景 (上空から)

巻頭図版 3

- 5 石組溝 08SD (南から)

巻頭図版 4

- 6 石垣 01SL の検出状況 (西から)
- 7 石垣 01SL 最上部残存石材 (築石) の被熱状態と石爆ぜ (西から)

図版目次

図版 1

- 1 調査前の状況 (南から)
- 2 調査前の状況 (北から)

図版 2

- 1 調査地と伏見城下町を望む (東から)
- 2 調査地、桃山町下野の平場、伏見城跡主郭部等を望む (南西から)

図版 3

- 1 石垣 01SL と裏込 (北西から)

図版 4

- 1 路面より上に残存する石垣 01SL (西から)
- 2 石垣 01SL と断割トレンチ検出の根石 (西から)

図版 5

- 1 石垣 01SL の基礎地業と根石設置溝の断面 (北から)
- 2 根石の傾斜 (南から)
- 3 基礎地業の傾斜 (西から)
- 4 裏込栗石の状況 (北西から)

図版 6

- 1 石垣 01SL 根石 (西から)
- 2 石垣 01SL 根石 (北西から)

図版 7

- 1 石垣 01SL 根石の北側細部 (西から)
- 2 石垣 01SL 根石の南側細部 (西から)

図版 8

- 1 掘立柱柵 (塀) 03SA の根石を持つ柱穴 09SP (西から)
- 2 掘立柱柵 (塀) 03SA の柱穴 12SP (西から)
- 3 掘立柱柵 (塀) 03SA の柱穴 26SP・27SP (西から)

図版 9

- 1 石垣 05SL 裏込 (北西から)

図版 10

- 1 石垣 05SL 裏込と西側の道路 07SF (西から)
- 2 石垣 05SL 裏込と西側の道路 07SF (北西から)

図版 11

- 1 石垣 05SL の裏込、根石設置溝と道路 07SF、石組溝 08SD (北から)
- 2 石垣 05SL の裏込、根石設置溝と道路 07SF、石組溝 08SD (南から)

図版 12

- 1 石垣 05SL の裏込と壁面 (北から)
- 2 石垣 05SL の裏込 (北東から)
- 3 石垣 05SL の根石設置溝 (北から)
- 4 石垣 05SL の裏込栗石状況 (西から)

図版 13

- 1 素掘り溝 06SD (南から)

図版 14

- 1 素掘り溝 06SD 南半 (北から)
- 2 素掘り溝 06SD 北半 (南から)
- 3 素掘り溝 06SD 南半の溝の形状 (北から)
- 4 素掘り溝 06SD の南壁面 (北から)

図版 15

- 1 石組溝 08SD の溝内完掘 (北から)

図版 16

- 2 石組溝 08SD の溝内完掘 (南から)

図版 17

- 1 石組溝 08SD の溝内完掘 (南東から)
- 2 石組溝 08SD の溝内 (北から)
- 3 石組溝 08SD の溝内 (南から)

図版 18

- 1 石組溝 08SD の掘方完掘 (北から)

図版 19

- 1 石組溝 08SD の掘方完掘 (南から)

図版 20

- 1 石組溝 08SD 北半の掘方完掘 (北から)
- 2 石組溝 08SD 南半の掘方完掘 (北から)
- 3 石組溝 08SD 南半の溝内・掘方完掘 (北から)

図版 21

- 1 石組溝 08SD、24 グリット東側列の矢穴のある花崗岩 (北西から)
- 2 石組溝 08SD、24 グリット東側列の矢穴のある花崗岩 (西から)
- 3 矢穴のある花崗岩
- 4 矢穴のある花崗岩裏側
- 5 石組溝 08SD、6 グリット東側列の方形加工された花崗岩 (西から)

- 6 方形加工された花崗岩裏側

- 7 石組溝 08SD、6・7 グリット溝底の焚火跡 (北西から)

- 8 石組溝 08SD、6・7 グリット溝底の焚火跡 (西上から)

図版 22

- 1 石組暗渠排水溝 09SD (西から)

図版 23

- 1 石組暗渠排水溝 09SD (南西から)
- 2 石組暗渠排水溝 09SD (北西から)

図版 24

- 1 土器 (1～19)

図版 25

- 1 土器 (20～31)

図版 26

- 1 土器 (32～46)、銅銭 (51・52)

図版 27

- 1 軒丸瓦 (53～72)

図版 28

- 1 軒丸瓦 (73～89)

図版 29

- 1 軒丸瓦 (90～107)

図版 30

- 1 軒丸瓦 (141～160)

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

今回の発掘調査の経緯は、図1・2の京都市伏見区桃山町下野27-1の竹林(1,832.86㎡)にて、御牧隆氏が計画、大東建託株式会社京都山科支店が設計監理する共同住宅の建設が計画されたことが発端である。

当該地は、周知の遺跡である「伏見城跡」内に所在する。1975年には敷地の南側標高74m付近から、石垣と石組溝が伏見城研究会により検出された。1995年には敷地の北側においても石垣と石組溝が京都市文化財保護課の試掘調査により検出されているこ

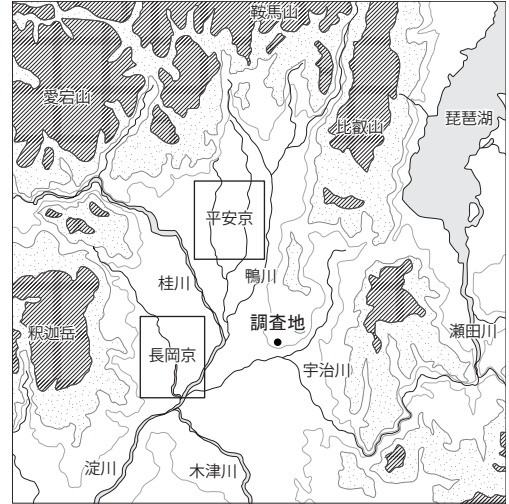


図1 調査地位置図1 (1:500,000)



図2 調査地位置図2 (1:5,000)

とから、遺構の存在が予測された。

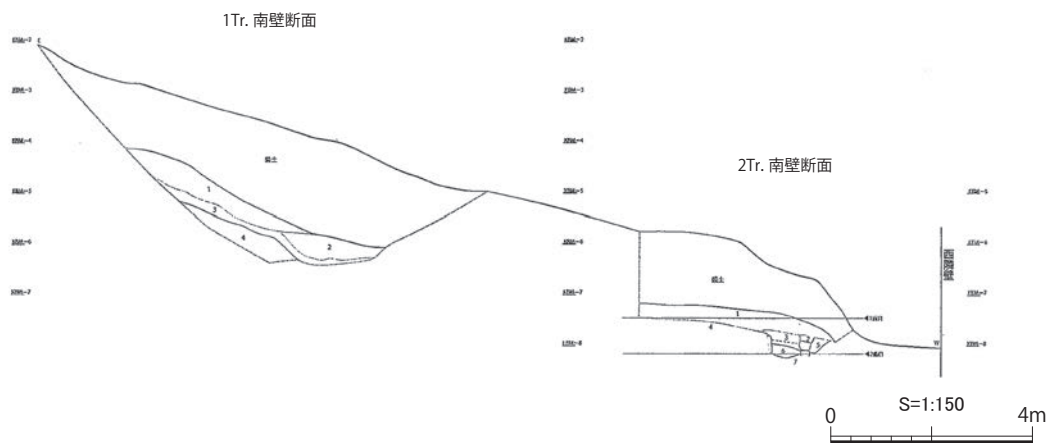
このため、平成 29 年 8 月に京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「市文化財保護課」という。）は、これらの状況等を踏まえて、開発地域の遺構・遺物の有無、残存状況等を確認するため試掘調査を行った。なお、敷地の現状は、東から西への傾斜が約 10～70°、落差が標高 79.4～72.1 m と約 7.3 m の急傾斜地（写真図版 1）であり、十分な注意を要した。

試掘調査では、図 3 の地点で計 6 本のトレンチにより調査が行われた。敷地の北側、中央、南側に、各々東から西への急斜面の上段と下段に東西に 2 本ずつトレンチが設けられた。1 トレンチ（図 4）は、敷地北側上段に設置された東西トレンチである。明確な遺構は確認されていないが、褐色粘質土層、暗褐色泥砂層から瓦が出土した。1

トレンチの北側下段に設置された 2 トレンチ（図 4）と、南側下段に設置された 5 トレンチでは、2 列の南北方向の石列と整地層が検出された。中央上段の 3 トレンチ（図 5）や南側上段の 6 トレンチでは、褐灰色泥砂層から、裏込に用いられた栗石、明褐色泥砂層からは、瓦を含む整地層が検出された。



図 3 試掘トレンチと調査実施範囲



- | | |
|-------------------------------------|-------------------------------------------------------|
| 1Tr. 南壁断面 | 2Tr. 南壁断面 |
| 1 10YR4/6 褐色泥砂 (φ3cm程度の礫含む, しまり無し) | 1 10YR3/3 暗褐色泥砂 (φ5cm大の礫混じる, しまり無し) |
| 2 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土 (φ5cm程度の礫多量に含む) | 2 10YR4/6 褐色泥砂 (φ5cm大の礫混じる)【石垣抜き取り?】 |
| 3 7.5YR4/6 褐色粘質土 (礫・瓦片少量含む) | 3 10YR5/6 黄褐色泥砂 (焼土, 10YR6/6明黄褐色砂質土ブロック状に含む, 礫・瓦多く含む) |
| 4 7.5YR3/4 暗褐色泥砂 (粘板岩片多く含む, 瓦含む) | 4 10YR4/6 褐色泥砂 (瓦含む)【整地層】 |
| | 5 7.5YR4/6 褐色泥砂 (瓦含む, 長石混じる)【裏込め?】 |
| | 6 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト (瓦少量含む) |
| | 7 10YR5/8 黄褐色泥砂【整地層】 |

図 4 1・2Tr 南壁断面図 (1:150)

3Tr. 南壁断面

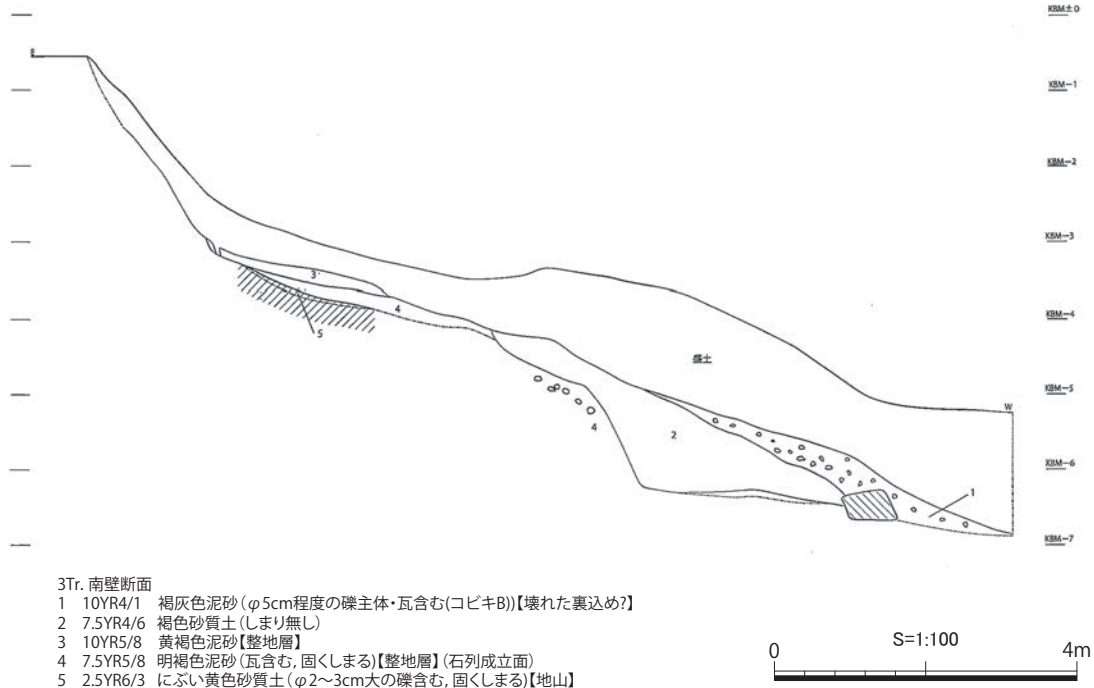


図5 3Tr 南壁断面図 (1:100)

これらのことから、今回の調査では2列の石列(石組溝)と整地層が伏見城跡に関連することが十分に予測された。このため、南北50m×東西6mの石組溝検出用トレンチと、中央部に南北10m×東西7mの石垣検出用トレンチを加えた凸型の約370㎡の要発掘調査範囲を設け、市文化財保護課の指導・監督のもとに、株式会社四門が御牧隆氏より委託を受けて、発掘調査を行うこととなった。

第2節 調査の経過

発掘調査の調査区は、図6のとおりである。高低差が大きく、掘削土の搬出が困難なため、調査範囲東側の凸部に1区を設定し、1区の埋め戻し後に、南北に長い石列の調査に移行する計画であった。しかし、1区で石垣が検出されたため、1区西側前面への拡張として2区を先に調査した。次いで北側の石組溝08SDを検出するために2区北側に3区を、さらに2区の南側の石組溝08SDを検出するため4区を順次設けて調査を実施した。

石組溝08SDの遺物の取上げ方法は、4区南端から3区北端への2m毎の任意の1~25のグリット(図6)を設けて行った。

調査体制としては、主任調査員1名、調査員4名、調査補助員6名、作業員6名、重機オペ2名、重機(0.45㎡)2台の配置を行った。また、市文化財保護課の指導により、調査検証委員会を設立し、同志社女子大学現代社会学部教授山田邦和氏と、京都府立大学非常勤講師橋本清一氏に委員を委託した。

以下、調査経過の概要を記す。

平成 29 年 10 月 16 日から 18 日にかけて、現場事務所プレハブ、機材等の搬入、仮設電気・仮設水道の設置等を行った。また、斜面地の下段が民家と隣接しているため、防塵ネットとスチールフェンスを二重に施工し、防塵と落下物の予防を行った。

10 月 16 日、当該地は竹を伐採したばかりの荒れ地で、調査区内の竹の地下茎と表土を、重機により掘削除去した。

10 月 17 日、市文化財保護課による調査範囲の位置決めが行われた。なお、1 区の当初予定地北東部に大きな切り株があったため、南へ 3.5 m 移動することで了解を得た。

10 月 26 日から、1 区の重機掘削及び人力掘削を行った。また、試掘 3 トレンチを確認し、試掘調査成果と検出土層の検証を行った。試掘調査にて検出された灰褐泥砂層の遺構面を掘削したところ、1 区の上部と下部に石垣の裏込と考えられる多量の栗石を検出した。

10 月 31 日から、2 区の重機掘削及び人力掘削を開始した。

11 月 1 日に、1 区と 2 区の南壁際を断割り、裏込背後の地山の確認を試みたが、栗石の落下が激しく困難を極めた。2 区では南北方向に 2 列の石列が並ぶ石組溝 08SD を検出（写真 1）した。石垣は残存していなかったが、焼土層を検出した。裏込の栗石の流失堆積を除去したところ、整地層が確認出来、石垣 05SL を設置するための素掘りの根石設置溝を検出した。

11 月 2 日、市文化財保護課に現状を報告し、今後の方針を相談した。石組溝 08SD については、溝内の掘削を行った。溝内には、石材が転落したと思われるものや、石材の抜き取り跡が確認された。

11 月 6 日、2 区の北側を 3 区とし、包含層まで重機掘削、その後人力掘削にて精査を行う。同時に、2 区の石組溝 08SD の掘削を引き続き行った。

11 月 9 日より、1 区と 2 区の南壁断割り幅を 2 m に拡張して深掘りを行い、地山検出を試みた。その結果、1 区の裏込を約 2 m 掘り進んだところで、新たな石垣 SL01 が検出された。石垣の表面は一部が赤く変色して割れている状況が確認できた。さらに、焼土層がこの石垣で止まっていることを確認した。「伏見城の戦い」による、火

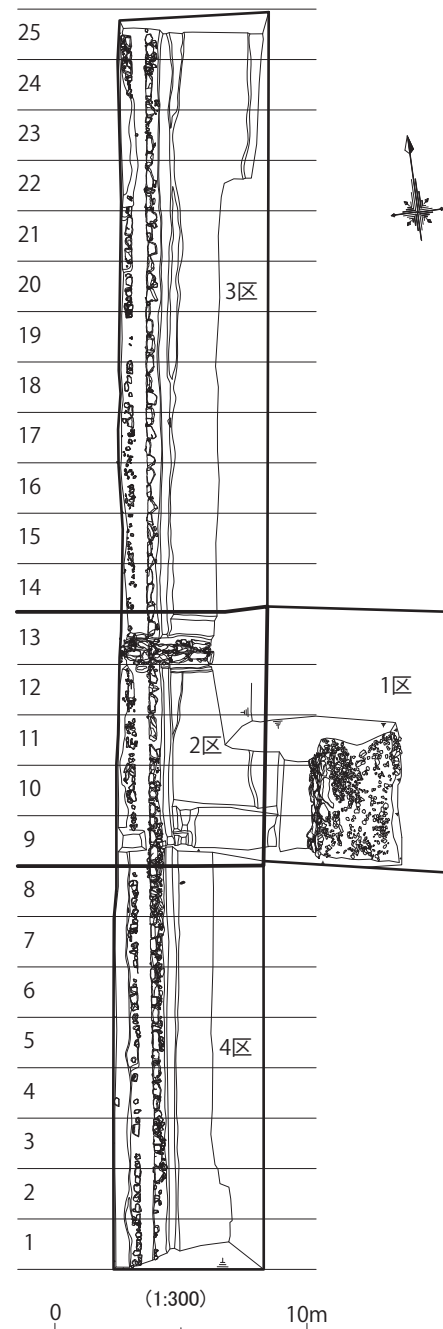


図 6 調査区全体図 (1 : 300)

災跡ではないかと推測された。

11月13日、石垣01SLを幅0.5mで基底部まで掘削した結果、三段からなる根石が検出できた。

11月15日、石組溝08SDの壊されている所があるため、掘り下げを行っていなかった試掘3トレンチをさらに掘り下げたところ、東西方向に延びる石組暗渠排水溝09SDを検出した。この石組暗渠排水溝は、石組溝08SDを壊しているため、最も新しい遺構ではあるが、いまだ街路としての利用があった時期の遺構と考えられた。

11月17日、2区の南側を4区とし、包含層まで重機掘削を行った。調査区南側より石組溝08SDの掘削(写真2)を引き続き行った。3区石組溝08SD東側壁の北側24グリットより、矢穴痕のある花崗岩の側壁材1石を検出した。また、溝内からは桐紋の軒丸瓦等も検出した。

11月20日～29日、石組溝08SD、素掘り溝06SDの掘削作業を中心に実施した。この内、素掘り溝06SD上部からは、瓦が多量に出土した。この石組溝08SDの東側にある素掘り溝06SDを、4区、2区、3区の順に掘削した際、石組溝08SDと並行して南北方向に延びる掘立柱の柱穴列03SAを、焼土層下に検出した。掘立柱柵(塀)03SAは検出が遅れたため、素掘り溝06SDの東側壁面図作成のみ行い、平面確認を行うことができなかった。

11月23日、調査委託者である御牧氏関係者(8名)を対象として、現地説明会(写真3)を実施した。

11月24日と27日の2日間、橋本清一氏により石組溝08SD、石垣01SLと裏込栗石、石垣05SLの裏込栗石、転落石5石の石材種別調査(写真4)が行われた。石垣残存部分及び転落石の石材などを実見した範囲では、刻印や矢穴痕と考えられる加工痕は存在しなかった。矢穴痕は、石組溝08SDの1石のみであった。しかし、石垣には



写真1 2区遺構の検出作業



写真2 4区石組溝の掘削作業



写真3 御牧氏関係者現地説明会



写真4 橋本氏の石材調査

人為的割れや斫り等の加工痕が確認できた。また、4区石組溝 08SD の6グリット東側壁では、五輪塔の地輪と考えられる転用石が1石確認された。

11月30日、市文化財保護課による最終確認を受け、石垣 01SL をシート養生した後、1区の埋め戻しを行った。2～4区については、市文化財保護課と事業者との協議に基づき、埋め戻しは行わず、現状のまま引き渡しを行った。

その後、12月8日まで、出土遺物の洗浄を中心とした1次整理（写真5）を現場事務所にて継続して行った。

12月4日、石組溝 08SD より出土した矢穴痕を残す花崗岩を調査するため、関西大学大学院文学研究科非常勤講師森岡秀人氏に実見（写真6）していただき有益な助言を得た。

12月11日～13日、事務所プレハブ・重機・仮設電気・水道設備等の搬出撤去作業を行った。

12月13日以降数度にわたって、京都造形芸術大学教授岡田文男氏に、金箔瓦の洗浄と保存処理の指導（写真7）を受けた。

12月14日、京都府庁教育記者クラブにて、今回の伏見城跡発掘調査成果の記者発表（写真8）を行った。

12月15日、施主側の確認を得て現地を引き渡し、現地調査を終了した。



写真5 出土遺物の分類と洗浄作業



写真6 森岡氏の矢穴痕調査



写真7 岡田氏の金箔瓦保存処理



写真8 報道関係への公表

第2章 地理的環境と歴史的環境

第1節 地理的環境と調査地の位置

調査地が所在する桃山丘陵は、構造性の盆地である京都盆地と山科盆地の間に細長く南北に延びる比叡山地南端にあって、西縁を花折断層帯南部の桃山断層、東縁を花山・勸修寺断層、南縁を宇治川沿いの宇治川断層に限られる、南北約8km、東西約2kmの丘陵である。丘陵の最高所は清水山（標高242.3m）で、調査地東側の木幡山周辺は地形改変が激しいが、標高100m余りである。特に丘陵の南側である宇治川左岸には、昭和8～16年の干拓事業で消滅するまで、巨椋池（794ha）という巨大な湖沼が存在した。また、丘陵の西側沖積地では、京都盆地北西部に丹波山地から流入する桂川（大堰川）、盆地北東部から流入する鴨川、琵琶湖を水源とする宇治川（瀬田川）、鈴鹿山脈を源流とする木津川が合流し、淀川となる。さらに、宇治川には山科盆地か



図7 調査地周辺地質図（（独法）産業技術総合研究所発行「京都東南部」に加筆。1：50,000）

ら山科川が合流しており、石材供給を担っていた可能性が指摘されている。

桃山丘陵の地質は、基部に中生代の丹波帯Ⅰ型地層群（砂岩・泥岩・珪質泥岩・チャート・砥石型珪質粘土岩等）が、その両側には新生代更新世の大阪層群でも最も新しい深草層上部（泥・砂・礫層）が、更に丘陵縁辺部では中位・低位の段丘堆積物が堆積している。伏見城の城下町は、この中位段丘を中心に低位段丘上にかけて形成されている。ここで注目しておきたいのが、丘陵上の堆積層である深草層に南西や西から深く入り込んだ、「更新世高位段丘堆積物」（図7）が堆積する高位段丘や埋谷暖傾斜地として分類された谷状地の存在である。これらの谷は、丘陵西側の京都盆地側に数多く認められる。木幡山伏見城築城時においては本丸北側の堀としてそのまま改変して組み込まれており、今日残る「治部池」や「北堀跡」がこれに当たるものと考えられる。調査地は、これらの谷状地を南北に閉塞する堤防状の郭の西側斜面下に位置しており、築城時には大規模な盛土（築堤）造成が実施されたものと予想された。

第2節 歴史的環境

伏見では、縄文時代の金森出雲遺跡（伏見区桃山金森出雲町）、古墳時代の桃山古墳群（伏見区桃山町）、奈良時代前期に平安京郊外にあったとされる板橋廃寺跡（伏見区下板橋町）と御香宮廃寺（紀伊寺・伏見区御香宮門前町）などがあり、古代から脈々と人々の営みが続いている。

伏見城は表1伏見城関連年表に示すように、文禄元年（1592）に豊臣秀吉が隠居所として指月屋敷を築き始めたことから始まる（第Ⅰ期）。伏見の地は月見の名所であり、秀吉が隠居所を築くには相応しい土地であった。ところが翌年、指月屋敷を本格的な城郭として改築し、文禄3年（1594）には淀城の天守と櫓を伏見城へ移築し、城下町建設のため社寺や村落を移転させた。この頃から、伏見へ豊臣政権の拠点としての機能が集約化されていく。また、加賀の前田利家に命じて榎島堤を築かせ、宇治川の流れを変えるという大規模な土木工事を行った。これは川を桃山丘陵の南辺まで延長させる工事であり、伏見城下に港を建設し水運の便を図ること、伏見城下の南辺を外堀として機能させることの狙いがあったと言われる。榎島堤の築造に伴い、大和国に向かう大和街道も堤上にルートを変更して新たに設けられた。さらに、指月伏見城の石垣や惣構堀の工事は、大坂城の惣構工事と同時に進められていたことが、『駒井日記』文禄3年正月20日条に記されている。

文禄4年（1595）に指月伏見城が完成する。同じ時期に豊臣秀次に切腹の命が下り、それがきっかけとなり聚楽第が破却され、その建物の多くを指月伏見城へ移築、秀次に仕えていた家臣らも伏見へ移動し武家屋敷が増加したことで、伏見城は豊臣政権の中核となり機能していくこととなる（第Ⅱ期）。堀と土塁からなる惣構えも、この第Ⅱ期には完成していたと思われる。

文禄5年（1596）、文禄の役を終わらせるために、明から使者が来日することとなり、これを迎えるため豪華絢爛な城郭へ改修する。しかし、文禄5年（1596）の伏見大地震により指月伏見城は倒壊し、大名屋敷も甚大な被害を受ける。直ちに秀吉は指月伏見城に代わる城として慶長

表1 伏見城関連年表

和暦	西暦	大坂城	方広寺	聚楽第	伏見城	二条城	淀城	肥後名古屋城
天正11年	1583	・豊臣秀吉が石山本願寺跡に築城を命じる						
	12年	1584						
	13年	1585	・大坂城天守完成					
	14年	1586	・豊臣秀吉は東大寺大仏に代わる大仏の造立を発願し、興福寺南坊にて造成を開始するが中止	・豊臣秀吉の政庁兼邸宅として着工				
	15年	1587		・聚楽第 完成				
	16年	1588	・二の丸完成	・蓮華王院北側仏光寺敷地に決定	・後陽成天皇を迎え徳川家康ら有力大名に忠誠を誓わせる			
	17年	1589						
	18年	1590		・小田原征伐 開戦戦勝し天下統一となる			・豊臣秀吉が茶々(淀殿)の出産のため修復	
	19年	1591	・大仏殿立柱式	・秀吉が御土用を築き始める ・秀吉が関白職を譲る豊臣秀次に譲り太閤となる ・秀吉が聚楽第へ入城				・築城開始
文禄元年	1592				・豊臣秀吉が隠居所として指月屋敷を築き始める			・主要部分の普請完成し、豊臣秀吉が普請・文禄・慶長の役(1592~1598)
	2年	1593	・上棟式		・指月屋敷を本格的な城郭として改築			
	3年	1594		・北の丸が秀次により増築	・豊臣秀吉が伏見城の普請を擯賢 ・伏見城下町造成のため社寺や村落を移転する ・加賀の前田利家に命じ「積島堤」を築かせる		・指月伏見城築城のため破却し天守・雉を伏見城に移す	
	4年	1595	・完成 ・経堂にて千僧供養会実施	・秀次を高野山に流放 ・聚楽第を徹底的に破却(建築物の多くを指月伏見城へ移築)	・指月伏見城が完成			
慶長元年	1596		・大地震により木造大仏倒壊、大仏殿木倒壊		・文禄5年の大地震により指月城が倒壊し、豊臣秀吉も被災 ・指月城に代わる城として木幡山に築城を開始			
	2年	1597	・善光寺如来を大仏殿に遷座		・木幡山伏見城築城完成			
	3年	1598	・善光寺如来を善光寺に戻す		・伏見城にて豊臣秀吉死去(62歳)			・豊臣秀吉死去に伴い空軍撤去
	4年	1599	・豊臣大坂城完成 ・豊臣秀頼が秀吉の遺言により大坂城へ移る	・豊臣秀頼が頼達大仏圓る	・徳川家康が向島城より伏見城西の丸へ入城			
	5年	1600			・関ヶ原の戦いの前哨戦「伏見城の戦い」で落城			
	6年	1601			・徳川家康により伏見城再建 ・伏見に銀座を設置	・徳川家康が西日本の諸大名に築城を命じる		
	7年	1602	・建造中の事故により大仏、大仏殿共に灰塵		・伏見城番の制度を設ける	・二条城の造営に着手		・寺沢広高領地となり唐津城に移築
	8年	1603			・徳川家康が征夷大将軍宣下を伏見城で受ける	・二条城 完成		
	9年	1604			・徳川家康が西国大名に命じて伏見城を修築させる			
	10年	1605			・朝鮮使節団を伏見城に迎える ・徳川秀忠が征夷大将軍宣下を伏見城で受ける ・伏見城本丸の殿舎の修造をはかる ・伏見の城中法制を養育する ・伏見立売町で火災が起こり大名屋敷などが多数焼失			
	11年	1606			・徳川家康が万石以下の諸士へ、伏見城の石垣の修築を命ずる			
	12年	1607			・聴府城築城に際し、伏見城の資材・財宝・器物を聴府へ送る ・伏見城三年番の制を定める			
	13年	1608	・再建開始					
	14年	1609						
	15年	1610	・地鎮祭 ・立柱式	・聚楽第跡から本願寺へ石を移転させる	・徳川家康が上洛し伏見城へ入る ・伏見大火が起こり大名屋敷の多くが消失			
	16年	1611				・豊臣秀頼が二条城で家康と会見する		
	17年	1612	・大仏に金箔押し					
	18年	1613			・伏見城三年番の制を一年とする			
	19年	1614	・大坂冬の陣 和議となり外堀埋立	・梵鐘完成するも、銘文問題発生 ・開闢法要中止				
元和元年	1615	・大坂夏の陣 大坂城落城し豊臣家滅ぶ						
	2年	1616						
	3年	1617						
	4年	1618						
	5年	1619			・徳川秀忠が伏見城へ入る ・伏見城の廃城が決定し城代と城番を大坂へ移す		・徳川秀忠が松平定綱に築城を命じる	
	6年	1620	・徳川大坂城の再建が始まる		・城割開始			
	7年	1621			・伏見城の遺材で養源寺を再建する			
	8年	1622						
	9年	1623			・徳川家光が伏見城で征夷大将軍宣下を受ける		・松平定綱が新たな淀城築城にむけ着工	
寛永元年	1624				・廃城(石材は二条城・淀城・大坂城等にて使用される)	・徳川家光が二条城の拡張・殿舎の整備に着手		
	2年	1625					・淀城 完成	

2年（1597）に指月伏見城から北東方向に位置する木幡山に新しく木幡山伏見城の築城を開始する（第Ⅲ期）。本丸を中心に多くの曲輪が配置され、本丸以外の曲輪工事は本丸完成後も進められたと思われる。

この築城の過程で、伏見の城下町も形成されていくこととなる。伏見の城下町は、階層により居住区域が分けられており、城下には武家屋敷が多く造営され、有力大名の武家屋敷は城郭周辺に集められた。その範囲は、南北 1700 m、東西 900 mにも及ぶ。町人らの居住場所は京町通・両替町通が中心となり、土地の形態から惣構建設以降に町人地が形成されたと考えられる。まだ指月屋敷であった時期にも立売町周辺に城下町は存在していたが、この城郭への改築工事を期に、さらに発展していったと想定できる。その西側には寺社が置かれていたとされる。また、城下町の南側の一角に港が置かれていた。さらに、この時に豊臣政権の中枢であった五奉行らは、伏見城内の曲輪に屋敷を構えた。

慶長3年（1598）に秀吉が伏見城で死去し、その遺言で豊臣秀頼が大坂城へ移ったことで、大坂が豊臣家の本拠地となる。翌年の慶長4年（1599）に徳川家康が伏見向島屋敷から伏見城西の丸へ入城する。慶長5年（1600）、家康は会津攻めに向かうため伏見城を家臣の鳥居元忠らに守らせた。しかし、関ヶ原の戦いの前哨戦である「伏見城の戦い」で、西軍の豊臣方の攻撃を受け落城し焼失する。

関ヶ原の戦いで勝利した家康は、翌年の慶長6年（1601）に伏見城の再建に取り掛かり、伏見城下町も再編されることとなる（第Ⅳ a 期）。さらに、伏見に銀座を設置し、丁銀・小粒銀を鑄造する。周りには会所や有力商人の屋敷などが建ち並んだといわれている。

慶長8年（1603）に家康は伏見城にて征夷大將軍宣下を受け、のちに徳川秀忠・徳川家光もこの城で征夷大將軍宣下を受けることとなる。

慶長10年（1605）に朝鮮使節団を伏見城に迎え、秀吉の朝鮮出兵による関係悪化を修正する場を設けた。これは再建した秀吉の城で行うことが、重要だったのではないかと考えられる。同年、秀忠が征夷大將軍宣下を受ける。

元和元年（1615）の大坂夏の陣で、大坂城が落城し豊臣家が滅ぶ。しばらくは儀典用に二条城を使用し、居館用に伏見城を使用していたが、一国一城令が発令され、元和5年（1619）に伏見城の廃城が決定する。翌年から、城割が開始された（第Ⅳ b 期）。

元和6年（1620）から大坂城の再建が始まる。『台徳院殿御実記』元和5年8月条によると、大坂城の石垣の修築には伏見城の石垣が転用されたとされている。

元和9年（1623）に、松平定綱が新たな淀城築城に向け着工し始める。同年、家光が伏見城で征夷大將軍宣下を受けることとなるが、すでに解体が進んでいたため、残されていた本丸御殿で執り行われた。『義演准后日記』寛永元年10月条には「伏見城跡を見物す、浅ましき体なり」と記されており、すでにこの時期には城としての機能をほとんど失い、石垣の大半が撤去されていたものと考えられる。

新たな拠点として家康により二条城が築城されたことで、寛永元年（1624）に伏見城は廃城



写真9 天明八年「伏見御城柳并屋敷取之絵図」(京都市歴史資料館蔵) 調査地周辺部分

となる。その際に出た石材は二条城・淀城・大坂城・京都の社寺にて使用され、天主、御殿、御風呂屋等は伏見城より二条城へ、唐門は西本願寺や京都の諸寺へと移築されたと伝えられている。

それまで伏見に置かれていた城代職などは城代と城番を大坂へ移したため、伏見には奉行職のみとなり、その後、慶応4年の鳥羽・伏見の戦い時に御香宮や丘陵からの官軍の砲撃により全焼・全壊するまで伏見奉行所は置かれた。

寛永3年（1625）には新たに淀城が完成する。淀城の天守は二条城から移築されたものであるが、元々伏見城から移築される予定であったため、天守台の大きさに喰い違いが生じた。そのため天守台の四隅に隅櫓を配置し、それらを土塀でつなぐという方法をとっている。

伏見城が廃城となり武家屋敷や大名屋敷も多くが移転してからの伏見では、町人らの居住地域のみが残され維持されており、さらに依然として徳川政権下にあった。そのため、江戸時代を通じて京都と大坂を結ぶ重要な街道、商業都市として発展することとなる。屋敷があった一帯は田畑や耕作地として開発され、新たに町屋が建てられるなど、市街地として発展していった。

江戸時代中期には城跡に桃の木が植えられ、桃の花見でにぎわい、実が収穫されたという。のちに桃花の名所として「桃山」と称され、これが伏見区桃山町という地名に繋がる。

また、調査地は京都の町並みが見渡せる明治天皇陵や桓武天皇陵のすぐそばであり、天気の良いれば大坂にある高層ビルまでも肉眼で確認することができるほど見晴らしの良い場所である。

第3節 周辺の調査

これまでに、伏見城跡に関連する発掘・立会調査が数多く行われている。ここでは、調査地周辺の調査の位置を図8と表2に示し概要を以下に記す。

【No①】

伏見区桃山町下野 29-1 に位置し、調査地の北側隣接地で、石垣を検出した。

石垣1は、前面がやや不揃いである。石材は1mを超える大きさもあるが、基本的に伏見城にて使用されている花崗岩を矢割りしたものではなく、一見して庭園に使用するような自然石が主体である。トレンチを設けて範囲確認を行った結果、東西に20m以上にわたって存在することが判明した。南側は東の法面側に向かって弧を描き、途中で途切れてしまう。また、石垣1の一段下方の西側にも石列が平行して存在することが明らかとなったが、石材は小ぶりであることから石垣1に伴う西側の縁石とみられる。この下方にある石垣の西側一帯には焼土が一面に広がっていることから、かつて火災に遭った大名屋敷が存在した可能性もある。

石垣2は、石垣1と同じく西向きで、ほぼ平行している。2段のみ残存しており、当初は4～5段の石垣が積まれていた可能性がある。石材は比較的大ぶりで花崗岩の切り石が主である。表面観察からは矢穴のある石や刻印のある石は確認できなかった。

石垣の構築方法として、表面の隙間や裏込には人の頭ほどの大きさもある河原石を詰めている

表 2 周辺の調査地一覧

No.	調査地	調査方法	検出遺構	出土遺物	引用文献
1	桃山町下野29-1	試掘	桃山期の石垣、南北方向の石列溝	桃山期の瓦、土師器	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成7年度』京都市埋蔵文化財調査研究センター 1996年
2	桃山町下野26-27	発掘	伏見城の裏込めの礎、石垣石材、南北方向の石列溝	不明	『器瓦録想 其二 伏見城』伏見城研究会 2006年
3	桃山町島津47-25	発掘	桃山期の大名屋敷の石垣、整地土	桃山期の瓦、陶磁器、石製品	『伏見城跡・桃山古墳群』公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 2016年
4	桃山町三河	発掘	江戸前期の土坑、柱穴、溝	瓦、金箔瓦、土師器、陶磁器、鉄製品	『昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 2011年
5	桃山毛利長門東町8	発掘	桃山期と江戸期の土坑	桃山期の瓦、金箔瓦	『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1982年
6	桃山福島太夫西町1-2	発掘	桃山期～江戸期の石組溝、石垣、礎石	桃山期～江戸期の瓦、金箔瓦、陶磁器、土師器	『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告書 2007-10 伏見城跡』財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 2008年
7	豊後橋町	発掘	時期・規模が不明の土壌、石積	瓦類、土器類、刻印のある石材	『伏見城豊後橋北詰の調査』伏見城研究会 1975年
8	東奉行町5番、西奉行町2	発掘	桃山期～江戸期の建物、井戸、土壌、溝	瓦、陶磁器、土師器、須恵器、石製品、金属製品	『伏見城跡・桃山遺跡発掘調査報告書』西近畿文化財調査研究所 2010年
9	桃山町金森出雲	発掘	桃山～江戸初期の門址、石組井戸、堀、溝	瓦、金箔瓦、陶磁器、漆器、木製品、金属製品	『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1988年
10	桃山町立亮	発掘	桃山期の大名屋敷、礎石群	桃山期の瓦、金箔瓦、陶磁器	『平成11年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 2002年
11	桃山町永井久太郎56	発掘	桃山期～江戸初期の礎石建物、井戸、溝、柱穴、土坑	土師器、陶器、須恵器、埴輪	『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1989年
12	桃山町永井久太郎他地内	発掘	徳川期の大名屋敷の石垣、石組溝、犬走	桃山期～江戸前期の瓦、土師器、須恵器	『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 2000年
13	桃山町永井久太郎59-2	発掘	築地遺構、犬走、石組溝、路面	瓦、金箔瓦、土師器、陶器、埴輪	『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1993年
14	桃山町毛利長門西町	発掘	桃山期～江戸初期の礎石建物、溝、土壌、井戸	桃山期～江戸初期の瓦、土師器、陶磁器	『京都府遺跡調査概報 第44冊』財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1981年
15	桃山町立亮	発掘	桃山期の礎石、井戸、通路、側溝	桃山期の土師器、陶磁器	『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1991年
16	片桐町	発掘	伏見奉行所の石垣、溝	桃山期～江戸期の瓦、土器、陶磁器	『伏見奉行所発掘調査報告』京都市住宅局 伏見城研究会 1996年
17	西奉行町	発掘	伏見奉行所の石垣、溝	桃山期～江戸期の瓦、土器、陶磁器	『伏見奉行所発掘調査報告』京都市住宅局 伏見城研究会 1990年
18	桃陵町	発掘	桃山期～江戸初期の建物、井戸、溝、柱穴、土坑	桃山期～江戸初期の瓦、金箔瓦、土器、陶磁器	『伏見城武家屋敷跡発掘調査報告』大阪経済法科大学 1976年
19	桃陵町	発掘	桃山期～江戸初期の建物、井戸、溝、柱穴、土坑	桃山期～江戸初期の瓦、金箔瓦、土器、陶磁器	『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1993年
20	桃山町伊賀	発掘	桃山期～江戸初期の堀、溝、建物、櫓列、築地、土坑	桃山期～江戸初期の瓦、金箔瓦、土器、陶磁器	『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1984年
21	桃山町大蔵	発掘	桃山期の堀、土壌、溝	桃山期の瓦、土師器、陶磁器	『平成16年度 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所年報』財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 2006年
22	京町7丁目、両替町9丁目	発掘	町屋跡、建物、堀、櫓、井戸、土坑	桃山期～江戸初期の瓦、土器、陶磁器	『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1993年
23	竹中町	発掘	江戸期の墓地	座館、卒塔婆、土師器、陶磁器	『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-27 伏見城跡』財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 2007年
24	今町	発掘	桃山期～江戸初期の井戸、土坑、建物、櫓	桃山期～江戸初期の土器、漆器	『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1989年
25	東組町698	発掘	桃山期～江戸前期の堀込、井戸、土坑	桃山期以降の土器、陶磁器、瓦、木製品	『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1989年
26	深草内膳町10-1	試掘	桃山期の南北溝、南北石列	桃山期の瓦、土師器、陶器	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成7年度』京都市埋蔵文化財調査研究センター 1996年



図 8 周辺の調査地位置図 (1 : 25,000)

ところ、粘土混じりの砂泥で埋めているところなどがあり、場所によって構築方法が異なるようである。

出土遺物は、伏見城期の丸瓦・平瓦の破片や、土師器の細片などが石垣の前面から出土しているが、復元して実測図を掲載できるようなものは発見されなかった。

【No②】

伏見区桃山町下野 26～27 に位置する。調査地の南側隣接地である。

トレンチ 1 から瓦溜りとレンズ状の炭を包む焼土層 2 箇所を検出し、トレンチ 2～5 では裏込礫と石垣石材を検出した。調査終了後の工事で新たに石材 30 個余りを検出したため確認したところ、調査中に検出した石垣石材に続くものであることが分かった。

礫敷も検出され、石垣の基底部だと思われる。伏見城の中枢部に通ずる主要道の虎口が設けられていた場所と考えられるが、攪乱で石垣以外の検出はできなかった。

出土遺物は、銅銭、鉄製品、土器類、軒平瓦・軒丸瓦などの瓦類である。銅銭の中には 1 枚のみ慶長通宝があったと記録されている。土器類では、須恵器杯、石垣付近からは美濃焼天目茶碗が出土した。瓦類は伏見城期に作られたもので、軒瓦の中には連珠文のモチーフを施したのも見つかっている。軒平は瓦当両端の鏡瓦で隠れる無文の袖部を広くするなど近世の特徴を示している。小菊・巴文が見つかっており、その中には金箔瓦も含まれる。

【No③】

伏見区桃山町島津 47-25 に位置し、『京都市遺跡地図』によると伏見城跡及び桃山古墳群にあたる場所である。

調査地東側からは安土桃山時代の焼土面や石垣抜取跡を確認し、調査地西側からは伊達街道と屋敷地を画する石垣の裏込を検出した。

出土遺物は、古墳時代・安土桃山時代・江戸時代の土器・瓦類・石製品が出土し、出土量が最も多い時期は安土桃山時代、次いで江戸時代、古墳時代となる。瓦類では巴文の金箔瓦も出土している。石製品は小型の硯で、石材の色調の異なる部分を利用し装飾を施している。

【No④】

伏見区桃山町三河 48 に位置し、伏見城城下町の松平三河守秀康の屋敷地に推定されている。

遺構は 2 時期に分けられる。第 1 面は江戸時代前期と考えられ、土壇、柱穴、溝などが確認された。第 2 面は、この面を覆う焼土と炭層が文禄 5 年の大地震または慶長 10 年の大火によるものだと考えられるため、それ以前の遺構だと思われる。

出土遺物は、主に桃山時代から江戸時代の土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・磁器などの土器類、瓦類、土製品、鉄製品などが出土した。瓦類には金箔瓦も含まれており、他にも軒丸瓦・軒平瓦・飾り瓦がある。いずれも「扇に月丸」の家紋が採用されている。

【No⑤】

伏見区桃山毛利長門東町 8 に位置する。

遺構は、桃山時代の土壇 3 基と江戸時代の土壇 1 基であった。

出土遺物は、桃山時代から近世までのもので、桃山時代では軒平の金箔瓦・平瓦が出土し、江戸時代では平瓦、染付が出土している。

【No.⑥】

伏見区桃山福島大夫西町 1-2 に位置し、伏見城下の大名屋敷が配置されていた一角にあたる場所である。

桃山時代から江戸時代までの遺構が検出され、石組側溝、石垣基礎、礎石土壇、柵、土壇であった。

出土遺物は、平安時代の須恵器、桃山時代から江戸時代の土師器皿、施釉陶器、焼締陶器、明染付、瓦類、銭貨などである。銭貨は「洪武通寶」「寛永通寶」が出土した。瓦類は軒丸瓦・軒平瓦・道具瓦で、軒丸瓦の文様は五本骨扇に月丸文・巴文・菊花文、軒平瓦は唐草文がある。その中には五本骨扇に月丸文金箔瓦が出土している。

【No.⑦】

伏見区豊後橋町に位置し、時期や規模が定かでない土壇と石積が検出された。

出土遺物は、瓦、土師質小皿・陶器・染付磁器・青磁などの土器類である。瓦類は丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦・面戸瓦・飾瓦・鳥衾・軒平重ね瓦で、軒丸瓦には菊文・巴文・桐紋の3種類が見つかっている。さらに、刻印のある石材も発見されている。

【No.⑧】

伏見区東奉行町 5、西奉行町 2 に位置する。

弥生時代から江戸時代、近代 1 面目までの遺構が確認された。主な遺構は桃山時代から江戸時代の掘立柱建物、井戸、土壇、溝、近代の戦争遺構などである。伏見城期に関連する明確な遺構は船入と思われる溝が検出されている。2 面目の主な遺構は奈良時代の掘立柱建物と溝と土壇、平安時代から鎌倉時代にかけては掘立柱建物、室町時代の墓などである。3 面目の主な遺構は弥生時代の溝、土壇などである。

出土遺物は縄文時代から江戸時代、近代までのもので、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器などの土器類、丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦などの瓦類、一石五輪塔・硯などの石製品、金属製品では銭・釘が少量、近代の武器、鳥羽伏見の戦いの際の弾丸などが出土している。瓦類の中には、金箔瓦も含まれている。

【No.⑨】

伏見区桃山町金森出雲 3-3 他の御香宮神社の西側に位置し、縄文時代の金森出雲遺跡、奈良時代から平安時代後期とされる御香宮廃寺跡、桃山時代から江戸時代初頭の伏見城跡等の遺跡が重複する地域となっている。

奈良時代から江戸時代の遺構が検出されている。奈良時代から平安時代の遺構では、溝、井戸、掘込、ピットなどが検出し、各遺構から土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器・輸入陶磁器や瓦類などが出土している。鎌倉時代から室町時代の遺構では、溝、柵列、ピットなどが検出し、各遺構から土師器・瓦器・須恵器土器・焼締陶器・輸入陶磁器や瓦類などが出土している。桃山時

代から江戸時代初頭の遺構では、門址、石組井戸、掘込、溝などがある。門址は遺存する礎石の配置から内側に大きく「八」の字に開く形式だと思われる。さらにこの門址には焼け瓦を含む焼土層が直接被っており、焼け落ちたものとみられる。このことから、これらの遺構は大名屋敷の諸施設だと考えられる。建物等については、残存施設や遺構面上に残る礎石の状況からみて、調査区内にも建物が建てられていたと思われる。遺存していない理由として、伏見城廃城時の屋敷地移転などに伴い、礎石まで持ち去ったものと考えられる。

出土遺物は、瀬戸・美濃・信楽・備前などの茶陶を含む国産陶磁器類や、軒丸瓦（金箔瓦含む）・軒平瓦などの瓦類、木簡（墨書のある付け札など）・漆器椀、下駄・箸などの木製品、刀・小柄などの金属製品等多数の遺物が出土している。

〈引用参考文献〉

・歴史的環境については、次の文献を参考にした。

梶川敏夫『平成7年度京都市内遺跡試掘調査概報』京都市埋蔵文化財センター 1996年

川上貢『日本建築史論考』中央公論美術出版 1998年

山本雅和ほか「伏見城跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2006-27（財）京都市埋蔵文化財研究所 2007年
『歴史地震 第22号』歴史地震研究会 2007年

長谷川達「伏見城跡」『京都府遺跡調査概報』第8冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 1983年

山本雅和ほか「伏見城跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2007-15（財）京都市埋蔵文化財研究所 2008年

村尾政人ほか『伏見城跡・桃陵遺跡 公務員宿舍伏見住宅（仮称）整備事業発掘調査報告書-』西近畿文化財調査研究所
2010年

前田義明『伏見城の発掘調査』京都市考古資料館文化財講座資料 2010年

モンベティ恭代『新発見！伏見城城下町「正宗」の武家屋敷』京都市考古資料館文化財講座資料 2013年

仁木宏・福島克彦『近畿の名城を歩く 滋賀・京都・奈良編』吉川弘文館 2015年

松尾信裕『豊臣時代の伏見城下町と大阪城下町』2015年

足利健亮『読みなおす日本史 地理から見た信長・秀吉・家康の戦略』（株）吉川弘文館 2016年

・周辺の調査については、次の文献を参考にした。

鈴木重治『伏見城豊後橋北詰の調査』伏見城研究会 1975年

梶川敏夫『平成7年度京都市内遺跡試掘調査概報』京都市埋蔵文化財センター 1996年

『昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2011年

『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1982年

『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1988年

星野猷二・三木義則『器瓦録想 其二 伏見城』伏見城研究会 2006年

山本雅和ほか「伏見城跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2007-15（財）京都市埋蔵文化財研究所 2008年

近藤章子ほか「伏見城跡・桃陵遺跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2015-2（公財）京都市埋蔵文化財研究所
2015年

山本大輝「伏見城跡・桃山古墳群」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2015-10（公財）京都市埋蔵文化財研究所
2016年

・伏見城関連年表については、次の文献を参考にした。

鈴木重治『伏見城豊後橋北詰の調査』伏見城研究会 1975年

星野猷二・三木義則『器瓦録想 其二 伏見城』伏見城研究会 2006年

足利健亮『地理から見た信長・秀吉・家康の戦略』吉川弘文館 2016年

『「世界遺産・二条城」の概要』京都市元離宮二条城事務所 2016年

江谷寛ほか『淀城跡（天守台跡）』伏見城研究会 2017年

第3章 遺構

第1節 基本層序と遺構面

1. 基本層序

調査地全体（図2）の傾斜は、調査地東側の木幡山から西への傾斜が顕著で、東から西への落差が標高72.1～79.4m余りの約7.3m、傾斜が約10～70°の急傾斜地である。上段の桃山町下野の平地から西への傾斜を詳細にみると、大きく三段に落ちているのが分かる。住宅の建つ上段の平地の傾斜は約2°と西側に緩やかに下がり、住宅を過ぎると1.3m余りを約1.3m下る約45°の急傾斜となり、次の中段11.4m余りは約2.5m下る傾斜10～12°とやや緩やかになり、下段の住宅地である桃山町三河までは、再び1.8mを約2.1m下る傾斜48～70°という急傾斜か崖面となっている。これらは、最下段の土取りとみられる崖面傾斜を除いて、中段の城割後の崩落幅が、石垣の解体幅にしては東西に幅広く、さらに南北に長い範囲で同様に確認できる状態である。また、この傾斜地での土地利用は、近年まで竹林や雑木林であり、崩落を保持するだけに使われており、極めて利用頻度の低い土地であったとみることができる。

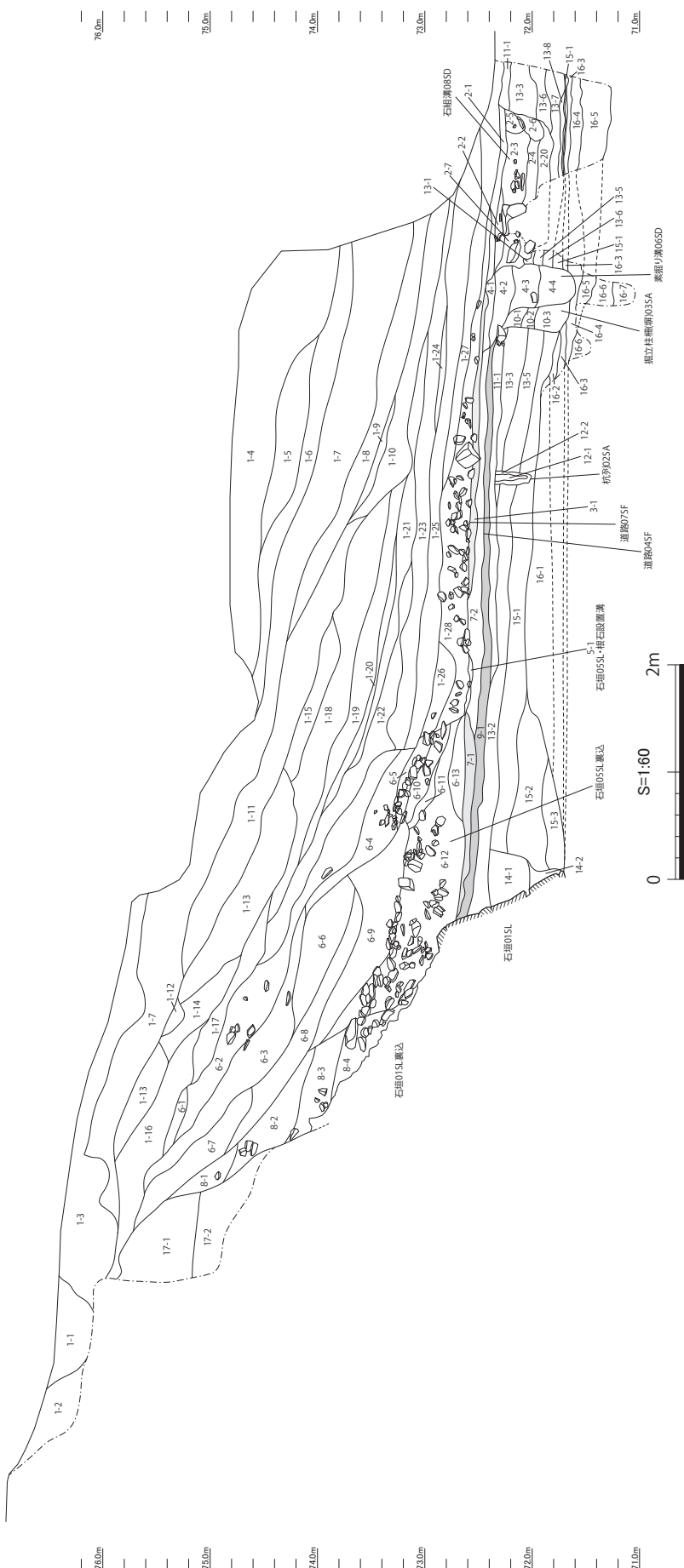
調査地における南北の傾斜は東西のような落差は余りなく、調査地下段の南端では標高72.5m余り、北端では標高72.4m余りで、大きな落差はみられない。しかし、前節で示したように埋谷暖傾斜地内である調査地から、北東側の桓武天皇陵とされる標高74m余りの平地への高まりは明らかであり、陵墓造成時の地形変化が大きいとはいえ、次第に北側へ上がっているようである。

基本層序は、調査地内の東西を中心に、1区・2区断割トレンチの南壁断面（以下、「中央壁断面」という。）、3区の北壁断面、4区の南壁断面の3面の壁面図（図9～11）から、1～17層に大別した。各層の概要は、下記の通りである。なお、各壁面図の1層は、層数が多いこと、壁面間の連続性が乏しいため、各壁面図内での層名とし、調査区全体を統合した同一の層名とはなっていない。

1層は、江戸時代前期の城割後～現代までの崩落層である。中央壁では28層に分層できた。途中で何度も畑地化を試みた形跡が確認できる。北壁では15層に、南壁でも15層に分層できた。北壁では、比較的早くに石組溝08SD等の上層が壊されていたことが判明する。

2層は、石組溝08SDに係わる堆積物である。溝内の堆積物を2-1～4層に、石組東西両側壁の抜取穴堆積物や構築に係わる埋土を2-5～16層に、溝構築時の貼床層を2-20層とした。

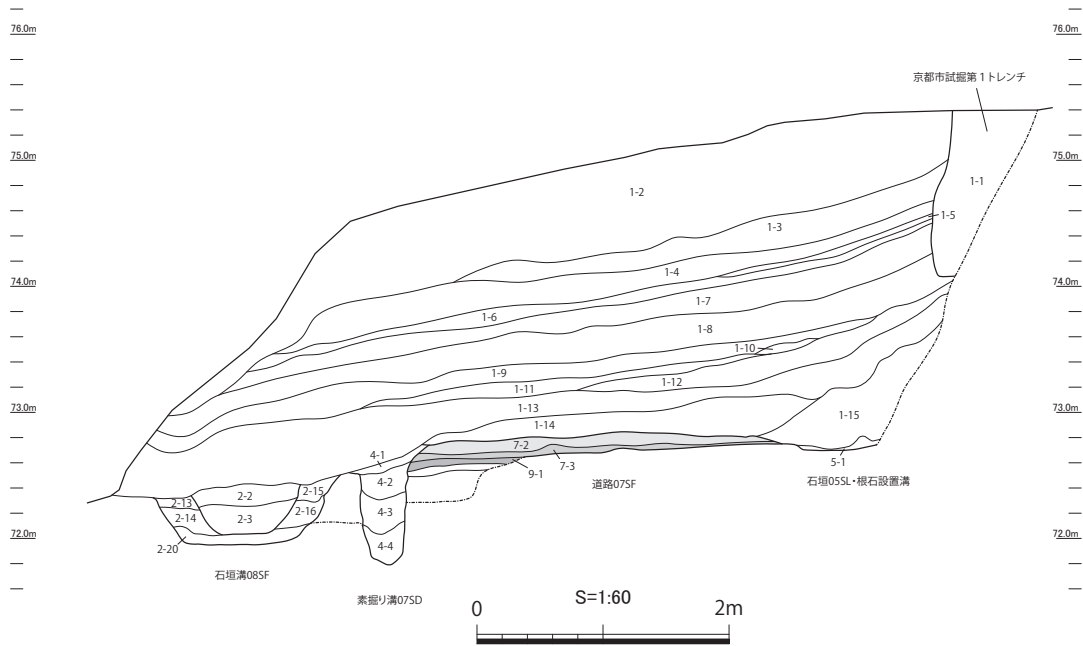
3層は、3-1層のみで、石垣05SLを構築し、素掘り溝06SDを埋めて新たに設けた石組溝08SDを作った時の、道路07SFの路面整地層である。層の締めりは、小礫を多く含んで強い。中央壁でしか確認できていない。



- | | | | | |
|-----|---------------|-----|--------------|---------------------------------------------|
| 1-1 | 75YR3/2黒褐色 | 7-1 | 2.5Y6/3にぶい黄 | 締まり強い、φ~10mmの小礫を含む |
| 1-2 | 75YR3/3暗褐色 | 7-2 | 10Y8/2灰白色 | 黄灰色(2.5Y6/1)と黄色(5Y7/6)のシルト質土をまじらに含む |
| 1-3 | 10YR3/3暗褐色 | | | 締まり強い、粒子粗い、φ~50mmの礫を中量含む |
| 1-4 | 10YR5/3にぶい黄褐色 | | | 締まり弱い、粒子粗い、φ~10mmの礫を少量含む |
| 1-5 | 10YR5/2灰黄褐色 | | | 締まり強い、粒子粗い、φ~5mmの礫を中量含む |
| 1-6 | 5YR4/3にぶい赤褐色 | | | 締まり強い、粒子粗い、φ~1mmの赤土粒少量含む/盛土 |
| 1-7 | 10YR3/3暗褐色 | 8-1 | 5YR5/4にぶい赤褐色 | φ~40mmの礫少量含む |
| 1-8 | 10YR3/3暗褐色 | 8-2 | 5YR4/2灰褐色 | φ~10mmの赤土ブロック少量含む φ~30mmの礫中量含む |
| | | | | 締まり強い、粒子粗い、φ~1mmの赤土粒少量含む φ~20mmの礫中量含む |
| | | | | 締まり強い、φ~10mmの小礫を含む |
| | | | | 黄灰色(2.5Y6/1)と黄色(5Y7/6)のシルト質土をまじらに含む |
| | | | | 締まり強い、褐色(7.5YR6/8)と暗褐色(7.5YR3/4)の層が全体的に含まれる |
| | | | | 灰白色(7.5YR8/1)の砂質土層が所々に含まれる |
| | | | | 明オリーブ灰色(5GY7/1)のシルト質層が所々に含まれる |
| | | | | 瓦片少量含む φ~10~40mmの礫を多量含む |

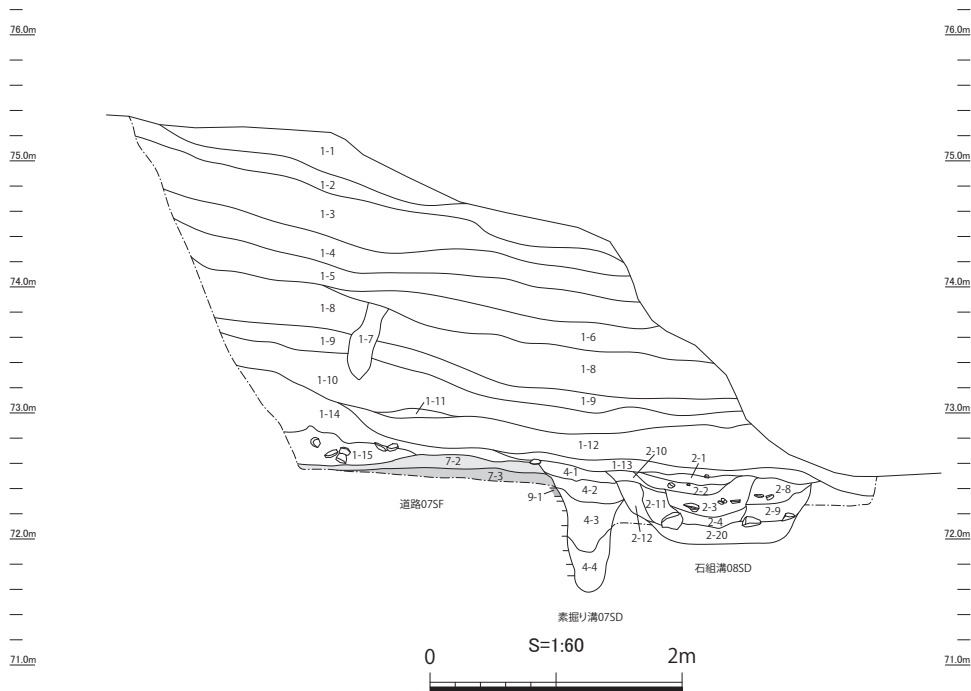
1-9	5YR4/4にぶい赤褐色	縮まり強い、粒子粗い、φ~10mmの礫を中量含む	8-3	7.5YR4/4暗褐色	縮まり強い、粒子粗い、φ~100mmの礫を含む
1-10	5YR3/4暗赤褐色	縮まりやや強い、粒子粗い、φ~20mmの礫少量含む	8-4	5YR4/6赤褐色	縮まり強い、粒子粗い、φ~300mmの大型の礫を多量に含む
1-11	10YR4/1にぶい赤褐色	縮まりやや弱い、粒子粗い、φ~30mmの礫中量含む	9-1	10R3/2暗赤褐色	縮まり強い、オリープ灰色(5GY6/1)の層をまだらに含む 瓦片少量含む φ~10~40mmの礫を多量含む / 凝土
1-12	5YR3/3暗褐色	縮まり強い、粒子粗い、赤土粒極微量含む φ~10mmの礫を中量含む	10-1	2.5Y5/2暗灰黄色	縮まり強い、粒子細かい、粘質ブロックまだらに含まれる φ~5mmの小礫を極微量含む 酸化鉄分を微量含む
1-13	5YR3/2暗赤褐色	縮まりやや強い、粒子粗い、φ~1mmの赤土粒多量含む φ~40mmの礫を少量含む	10-2	2.5Y5/2暗灰黄色	縮まり強い、粒子やや細かい、φ~0.5mmの砂粒を全体的に含む
1-14	5YR3/2暗赤褐色	縮まり強い、粒子粗い、φ~1mmの赤土粒多量含む φ~20mmの礫を少量含む	10-3	2.5Y5/2暗灰黄色	φ~4~5mmの小礫を極微量含む 瓦片を含む 縮まり強い、粘性強い、粒子やや細かい、φ~5mmの砂粒、φ~30mmの礫を極微量含む 粘質土ブロックを含む 酸化鉄分を微量含む
1-15	10YR3/3暗褐色	縮まり強い、粒子粗い、φ~40mmの礫中量含む / 凝土	11-1	7.5YR5/2灰褐色	縮まり強い、明オリープ灰色(2.5GY7/1)のシルト質層をまだらに含む 瓦片、φ~10~20mmの礫を少量含む
1-16	10YR3/3暗褐色	縮まり強い、粒子粗い、φ~1mmの赤土粒、φ~20mmの礫少量含む	12-1	5YR4/4にぶい赤褐色	縮まり強い、明赤褐色のシルト質土を少量含む
1-17	10YR3/3暗褐色	縮まり強い、粒子粗い、φ~1mmの赤土粒、φ~20mmの礫少量含む	12-2	5YR4/4にぶい赤褐色	縮まり強い、明赤褐色のシルト質土を少量含む φ~5mmの小礫を少量含む
1-18	10YR3/3暗褐色	縮まりやや弱い、粒子粗い、φ~1mmの赤土粒極微量含む φ~30mmの礫少量含む	13-3	5YR5/4にぶい赤褐色	縮まり強い、明赤褐色(5YR5/6)と淺黄褐色(10YR8/4)と 明黄褐色(10YR7/6)のシルト質土をまだらに含む φ~10~20mmの礫を少量含む
1-19	5YR3/3暗赤褐色	縮まり強い、粒子粗い、φ~30mmの赤土粒、φ~20mmの礫少量含む	13-5	5YR5/8明赤褐色	φ~5~10mmの小礫を含む 縮まりやや強い、明黄褐色(10YR6/8)と淺黄褐色(10YR8/4)のシルト質層をまだらに含む
1-20	10YR3/3暗赤褐色	縮まり強い、粒子粗い、φ~20mmの礫、瓦片を微量含む	13-6	2.5Y6/4にぶい黄色	φ~5~10mmの小礫を含む 縮まり強い、粒子粗い、φ~3mmの極小礫微量含む 酸化鉄がまだらに付着する
1-21	5YR4/4にぶい赤褐色	縮まりやや弱い、粒子粗い、φ~1mmの赤土粒、φ~10mmの礫少量含む	13-7	5Y6/1灰色	縮まり強い、粘性強い、粒子粗い、φ~1mmの砂粒を少量含む φ~5mmの小礫を含む 酸化鉄が全体的に付着している / シルト質層
1-22	10YR3/3暗褐色	縮まりやや弱い、粒子粗い、φ~1mmの赤土粒微量含む φ~30mmの礫少量含む	13-8	2.5Y5/2暗灰黄色	縮まり強い、粘性強い、粒子やや細かい、φ~1~2mmの砂粒を少量含む
1-23	10YR3/3暗褐色	縮まり強い、粒子粗い、φ~1mmの赤土粒、φ~20mmの礫少量含む	14-1	10YR5/3にぶい黄褐色	縮まり強い、粒子極粗い、φ~2mmの極小礫、φ~30mmの礫を中量含む φ~15mmの灰白色粘土ブロックを少量含む
1-24	5YR4/4にぶい赤褐色	縮まりやや弱い、粒子粗い、φ~30mmの赤土粒、φ~20mmの礫少量含む / 上位層やや暗み帯びる	14-2	10YR5/2灰黄褐色	縮まり強い、粒子粗い、φ~1mmの砂粒を中量含む φ~5mmの極小礫、φ~20mmの礫を微量含む にぶい赤褐色土ブロック(φ~10mm、5YR5/4)を微量含む
1-25	10YR3/3暗赤褐色	縮まり強い、粒子粗い、φ~100mmの礫を中量含む	15-1	7.5YR4/2灰褐色	縮まり強い、φ~5~10mmの小礫が少量含まれる
1-26	5YR3/6暗赤褐色	縮まり弱い、粒子粗い、赤土主体 φ~100mmの裏込めの石を中~多含む / 裏込めの崩落土が	15-2	5YR4/3にぶい赤褐色	縮まり強い、粒子極粗い、φ~2mmの極小礫、φ~20mmの礫を多量含む φ~10mmの灰黄褐色土ブロックを中量含む
1-27	5YR4/2灰褐色	縮まり強い、粒子粗い、φ~100mmの礫を中量含む	15-3	2.5YR4/6赤褐色	縮まり強い、粒子やや粗い、やや砂質、φ~15mmの小礫、 φ~50mmの黄褐色粘土ブロック、φ~30mmの灰白色粘土ブロック(5YR8/1)、 灰白色シルト質土ブロック(5Y8/1)を少量含む
1-28	10YR3/2黒褐色	縮まり弱い、粒子粗い、φ~100mmの礫を多量含む 瓦片少量含む / 裏込め崩落の石含有層	16-1	5GY6/1オリープ灰色	縮まりやや弱い、粒子粗い、砂層(φ~0.5mmの砂粒主体)上面が硬化する オリープ黒色(7.5Y3/2)の粘質土ブロックを微量含む 酸化鉄分がまだらに付着する
2-1	5YR5/1灰白色	縮まり極強い、粘性極強い、粒子極細かい、φ~3~7mmの小礫を極少量含む 酸化鉄分を少量含む	16-2	7.5YR4/2灰褐色	縮まりやや強い、粒子細かい、粘土質(φ~0.5mmの砂粒を中量含む) φ~10mmの小礫を極微量含む
2-2	5YR5/3にぶい赤褐色	縮まり強い、粘性強い、粒子やや粗い、瓦大片を含む φ~1mmの砂粒が微量含まれる	16-3	7.5Y7/2灰白色	縮まり強い、粒子細かい、粘性強い、φ~5mmの砂粒を少量含む φ~5mmの小礫を微量含む 上面が委色(酸化鉄分付着) / 粘性あり やや赤み強い、縮まり強い、粒子細かい、粘性やや強い、φ~1mmの砂粒を含む
2-3	5YR5/6明赤褐色	縮まり強い、粘性強い、粒子粗い、φ~5mmの小礫を極微量含む	16-4	7.5YR4/2灰褐色	φ~5mmの小礫を極微量含む 縮まりやや強い、粘性やや弱い、粒子やや細かい、φ~1mmの砂粒を含む
2-4	5YR5/1褐灰色	縮まり強い、粘性強い、粒子粗い、φ~2mmの砂粒、φ~5mmの礫を少量含む	16-5	5YR6/2灰褐色	縮まりやや強い、粘性やや弱い、粒子やや粗い、φ~1mmの砂粒を少量含む 灰褐色(5YR4/2)のシルト質土ブロックあり φ~1mmの砂粒、φ~5mmの小礫を微量含む
2-5	10YR6/3にぶい黄褐色	縮まり強い、粘性強い、粒子やや細かい、φ~1mmの砂粒を少量含む	16-6	10R4/2灰赤色	縮まり強い、粘性強い、粒子やや粗い、φ~1mmの砂粒を全体的に含む φ~5mmの小礫を極微量含む
2-6	10YR6/2灰黄褐色	縮まり強い、粘性強い、粒子粗い、φ~60mmの礫を含む 瓦片含む	16-7	10YR4/2灰黄褐色	縮まりやや強い、粘性やや弱い、粒子粗い、φ~1mmの砂粒を含む φ~5mmの小礫を極微量含む
2-7	7.5YR4/3暗色	縮まり強い、粒子粗い、φ~100mmの礫を少量含む	17-1	5YR5/6明赤褐色	縮まり強い、粒子細かい、
2-20	5Y6/3オリープ黄色	縮まり強い、粘性強い、粒子やや細かい、褐色(7.5YR4/3)の縮まりやや強い層をまだらに含む φ~3~7mmの小礫を微量含む 酸化鉄が少量付着	17-2	5YR4/6赤褐色	縮まり強い、粒子細かい、
3-1	7.5Y8/2灰白色	縮まり強い、φ~10mmの小礫を多く含む 瓦片を少量含む			
4-1	7.5YR5/2灰褐色	縮まり弱い、粘性やや強い、粒子やや細かい、φ~3mmの小礫を含む 瓦片、炭化物をまだらに含む			
4-2	7.5YR4/3暗色	縮まり強い、粘性やや強い、粒子やや細かい、φ~2mmの砂粒を微量含む φ~10~12mmの小礫を微量含む 瓦片を微量含む			
4-3	10YR5/2灰黄褐色	炭化物をまだらに含む 灰白色シルト質土(5GY8/1)縮少量まだらに含む			
4-4	7.5YR5/1褐灰色	縮まり強い、粒子やや粗い、灰黄色(2.5Y7/2)の粘質土ブロックを微量含む φ~100mmの礫を1つ含む、φ~5~7mmの小礫を微量含む 酸化鉄分を微量含む			
5-1	2.5Y6/4にぶい黄色	縮まり強い、粘性強い、粒子粗い、φ~2mmの砂粒を全体的に含む φ~5~6mmの小礫を極微量含む オリープ灰色(5GY6/1)の粘質土を 瓦片を極微量含む 酸化鉄分をまだらに帯びる 一部に炭化物を含む			
6-1	10YR3/3暗褐色	縮まり強い、φ~180mmの礫を含む 瓦片、炭を含む			
6-2	10YR3/2暗褐色	縮まり強い、粒子粗い、φ~1mmの赤土粒、φ~20mmの礫少量含む			
6-3	5YR3/4暗褐色	縮まり弱い、粒子粗い、φ~10mmの小礫を少量含む / 裏込め2層の上位層			
6-4	5YR3/3暗赤褐色	縮まり強い、φ~1mm明赤褐色(5YR5/8)のシルト質土を含む φ~8mmの小礫を少量含む			
6-5	5YR4/2灰褐色	縮まり強い、全体的に大型の礫を含む(φ最大180mm)			
6-6	5YR6/6褐色	縮まりやや強い、粒子粗い、φ~10mmの礫を含む			
6-7	5YR4/8赤褐色	縮まりやや強い、φ~5~7mmの小礫を少量含む 明赤褐色(5YR5/8)のシルト質土をまだらに含む 灰白色(5YR7/1)のシルト質土をわずかに含む			
6-8	5YR6/8褐色	縮まり強い、φ~80mmの大きな割石を含む			
6-9	5YR5/6明赤褐色	縮まりやや強い、φ~5mmの小礫を少量含む φ~20mmの礫を極少量含む			
6-10	7.5YR4/2灰褐色	縮まり強い、φ~200mmの大型の礫を多量に含む			
6-11	5YR5/6明赤褐色	縮まり強い、φ~3mmの小礫を多量に含む			
6-12	5YR5/4にぶい赤褐色	縮まり強い、φ~180mmの大型の礫を多量に含む			
6-13	2.5YR5/6明赤褐色	縮まり強い、φ~10mmの小礫を多量に含む			

図 9 中央壁断面図 (1 : 60)



1-1	7.5YR4/3褐色	締まり弱い、φ~50mmの礫中量含む 京都市試掘第1トレンチ
1-2	7.5YR3/4暗褐色	締まり極強い、粒子粗い、ガラ・小礫等を多く含む 表土盛土層
1-3	5YR4/6赤褐色	締まり強い、粒子粗い、φ~30mmの礫中量含む 炭化物少量含む 盛土
1-4	5YR4/6赤褐色	締まり強い、粒子やや粗い、φ~30mmの礫少量含む 暗褐色土BL(7.5YR3/3)炭化物少量含む
1-5	7.5YR3/3暗褐色	締まり弱い、粒子粗い、φ~5mmの小礫少量含む φ~20mmの礫微量含む
1-6	5YR4/6赤褐色	締まりやや弱い、粒子粗い、暗褐色土(7.5YR3/3)が全体に中量混じる φ~30mmの礫微量含む ブロック土主体
1-7	5YR4/4にぶい赤褐色	締まりやや強い、粒子粗い、φ~40mmの礫中量含む
1-8	5YR4/6赤褐色	締まりやや弱い、粒子やや粗い φ~5mmの小礫、φ~30mmの礫少量含む φ~15mmの炭化物微量含む やや砂質
1-9	7.5YR3/3暗褐色	締まり弱い、粒子粗い、φ~5mmの小礫、φ~20mmの礫中量含む 赤褐色土(5YR4/6)が帯状に含まれる ブロック土主体
1-10	5YR5/6明赤褐色	締まりやや強い、粒子粗い、φ~10mmの小礫少量含む
1-11	5YR4/6赤褐色	締まりやや強い、粒子粗い、φ~20mmの礫少量含む 炭化物が帯状に含まれる ブロック土主体
1-12	5YR4/6赤褐色	締まりやや強い、粒子やや粗い、φ~30mmの礫微量含む φ~5mmの小礫中量含む 炭化物少量含む やや砂質
1-13	5YR4/6赤褐色	締まり強い、粒子粗い、φ~3mmの極小礫中量含む φ~50mmの礫微量含む
1-14	7.5YR4/2灰褐色	締まり弱い、粒子極粗い、φ~100mmの礫中量含む
1-15	7.5YR3/3暗褐色	締まり極弱い、粒子極粗い、φ~100mmの礫を中量含む にぶい赤褐色土BL(φ~50mm、5YR4/4)を中量含む(スノにかけて少~中)/裏込め層 崩落土
2-2	10YR4/3にぶい黄褐色	締まりやや強い、粘性やや弱い、粒子やや粗い、φ~3~7mmの小礫を含む φ~10mmの礫を極微量含む 炭化物を微量含む
2-3	7.5YR4/4褐色	締まりやや強い、粘性やや弱い、粒子やや粗い、φ~3~7mmの小礫を含む 炭化物を上層(21)よりやや多めに含む 灰白色(7.5Y7/2)のシルト質土ブロックを極微量含む
2-13	5YR4/4にぶい赤褐色	締まりやや強い、粒子やや粗い、φ~3~5mmの小礫を極微量含む 灰褐色土(5YR4/2)をまだらに含む
2-14	7.5YR5/4にぶい褐色	締まり強い、粘性やや強い、粒子やや細かい、φ~8mmの礫を含む 炭化物と瓦片を微量に含む
2-15	7.5YR4/6褐色	締まり強い、粘性やや弱い、粒子やや粗い、φ~1mmの砂粒を微量含む φ~3mmの小礫を極微量含む 緑灰色(10G6/1)のシルト質土ブロックを極微量含む 酸化鉄が極微量付着
2-16	7.5YR4/6褐色	締まり強い、粘性やや強い、粒子やや細かい、φ~1mmの砂粒を微量含む φ~5~8mmの小礫を極微量含む 炭化物を微量含む 瓦片を極微量含む
2-20	5YR4/4にぶい赤褐色	締まり強い、粒子やや粗い、φ~1mmの砂粒、φ~3~5mmの小礫を微量含む 酸化鉄が付着しているブロックあり 炭化物を極微量含む
4-1	7.5YR5/2灰褐色	締まり強い、粘性強い、粒子やや細かい、φ~10mmの小礫を含む 瓦片と炭化物をまだらに含む
4-2	7.5YR4/3褐色	締まり強い、粘性やや強い、粒子やや細かい、φ~2mmの砂粒を微量含む φ~10~12mmの小礫を微量含む 瓦片を微量含む 炭化物をまだらに含む 灰白色シルト質土(5GY8/1)極微量まだらに含む
4-3	5YR4/3にぶい赤褐色	締まり強い、粘性やや強い、粒子やや細かい、φ~2mmの砂粒を微量含む φ~10~20mmの小礫を微量含む 炭化物をまだらに含む 明オリブ灰(5GY7/1)と明黄褐色(10YR7/6)のシルト質土を極微量まだらに含む
4-4	10YR3/4暗褐色	締まり強い、粘性やや強い、粒子やや細かい、φ~2mmの砂粒を微量含む φ~10~50mmの礫を微量含む 炭化物を微量含む 酸化鉄を極微量含む
5-1	2.5Y7/2灰黄色	締まりやや強い、粒子粗い、φ~0.5mmの砂粒中量含む φ~10mmの小礫微量含む / 下層(整地層)の主体土と裏込め層主体土の混土
7-2	5YR4/6赤褐色	締まり強い、粒子粗い、φ~3mmの極小礫中量含む φ~50mmの礫微量含む
7-3	10YR5/4にぶい黄褐色	締まり強い、粒子やや粗い、φ~3~10mmの小礫を少量含む φ~1mmの砂粒を極微量含む 炭化物を微量含む 灰白色(5GY8/1)のシルト質土ブロックを極微量含む
9-1	10YR4/2灰黄褐色	締まり極強い、粒子やや粗い、φ~1mmの砂粒を微量含む 焼土ブロックと炭化物を中量含む

図 10 北壁断面図 (1 : 60)



1-1	5YR5/6明赤褐色	締まりやや強い、粒子粗い、礫・瓦片多い 盛土
1-2	7.5YR3/3暗褐色	締まり強い、粒子粗い、小礫中量 表土
1-3	7.5YR3/4暗褐色	締まり弱い、粒子粗い、 $\phi \sim 20\text{mm}$ の礫中量 明赤褐色土BL ($\phi \sim 30\text{mm}$, 5YR5/6) 少量含む
1-4	7.5YR3/3暗褐色	締まりやや弱い、粒子粗い、 $\phi \sim 5\text{mm}$ の小礫中量 $\phi \sim 20\text{mm}$ の礫少量 $\phi \sim 5\text{mm}$ の焼土BL微量 明赤褐色土(5YR5/6) 微量含む
1-5	7.5YR3/3暗褐色	締まりやや弱い、粒子粗い、 $\phi \sim 5\text{mm}$ の小礫多量 $\phi \sim 30\text{mm}$ の礫中量 明赤褐色土BL ($\phi \sim 5\text{mm}$, 5YR5/6) 少量含む
1-6	7.5YR3/3暗褐色	締まり弱い、粒子粗い、 $\phi \sim 20\text{mm}$ の礫多量 明赤褐色土BL ($\phi \sim 30\text{mm}$, 5YR5/6) 微量含む
1-7	7.5YR4/2灰褐色	締まり弱い、粒子粗い、 $\phi \sim 20\text{mm}$ の礫を含む
1-8	5YR4/6赤褐色	締まりやや強い、粒子粗い、 $\phi \sim 40\text{mm}$ の礫多量含む 暗褐色土(7.5YR3/3)がまだらに中量混入する / ブロック土主体
1-9	5YR4/3にぶい赤褐色	締まりやや強い、粒子粗い、 $\phi \sim 20\text{mm}$ の礫中量含む / ブロック土主体
1-10	7.5YR3/3暗褐色	$\phi \sim 10\text{mm}$ の小礫中量、 $\phi \sim 30\text{mm}$ の礫少量含む 赤褐色土BL ($\phi \sim 20\text{mm}$, 5YR4/6) 微量 瓦片を極微量含む
1-11	7.5YR3/3暗褐色	締まり強い、粒子粗い、 $\phi \sim 10\text{mm}$ の章礫多量 暗褐色土BL ($\phi \sim 10\text{mm}$, 5YR3/6) 中量含む / ブロック土主体
1-12	10YR3/3暗褐色	$\phi \sim 40\text{mm}$ の礫少量、 $\phi \sim 5\text{mm}$ の焼土粒微量 赤褐色土BL ($\phi \sim 15\text{mm}$, 5YR4/6) 少量 瓦片を少量含む
1-13	5YR4/6赤褐色	締まり強い、粒子粗い、 $\phi \sim 3\text{mm}$ の極小礫中量含む $\phi \sim 10\text{mm}$ の小礫少量 $\phi \sim 3\text{mm}$ の焼土粒極微量含む
1-14	7.5YR3/3暗褐色	締まりやや弱い、粒子粗い、 $\phi \sim 100\text{mm}$ の礫中量 瓦片を微量含む / 裏込め崩落土
1-15	5YR4/4にぶい赤褐色	締まり強い、粒子極粗い、 $\phi \sim 100\text{mm}$ の礫中量 $\phi \sim 5\text{mm}$ の焼土粒、砂粒を中量含む 瓦片を中量含む 暗褐色土(7.5YR3/3)を中量含む
2-1	2.5Y6/2灰黄色	締まり強い、粒子やや粗い、 $\phi \sim 50\text{mm}$ の礫少量 $\phi \sim 2\text{mm}$ の砂粒を多量含む / 砂質土
2-2	2.5Y8/3淡黄色	締まり強い、粒子粗い、 $\phi \sim 5\text{mm}$ の極小礫中量含む $\phi \sim 10\text{mm}$ の小礫少量含む 瓦片少量含む 黄褐色シルトBL ($\phi \sim 10\text{mm}$, 10YR8/6) 少量 / 砂質土
2-3	10YR5/2灰黄褐色	締まりやや強い、粒子極粗い、 $\phi \sim 50\text{mm}$ の礫、瓦片を多量含む $\phi \sim 20\text{mm}$ の焼土BL微量含む
2-4	10YR4/2灰黄褐色	締まり強い、粒子粗い、灰白色シルトBL ($\phi \sim 10\text{mm}$, 2.5Y7/1) 微量含む 炭化物極微量含む $\phi \sim 5\text{mm}$ の極小礫中量含む
2-8	2.5Y7/1灰白色	締まり強い、粒子粗い、 $\phi \sim 3\text{mm}$ の極小礫を少量含む 灰白色シルトBL ($\phi \sim 10\text{mm}$, 2.5Y8/1) を極微量含む 炭化物微量含む 溝掘り方か / 砂質土
2-9		
2-10	2.5Y7/2灰黄色	締まり強い、粒子粗い、 $\phi \sim 15\text{mm}$ の礫少量含む 瓦片を微量含む / 砂質土
2-11	7.5YR4/3褐色	締まり強い、粘性強い、粒子やや細かい、 $\phi \sim 2\text{mm}$ の砂粒を微量含む $\phi \sim 7 \sim 80\text{mm}$ の礫を含む 灰白色シルト質土(10Y7/1) 微量含む 瓦片を微量含む 酸化鉄を極微量含む
2-12	5YR4/4にぶい赤褐色	締まり強い、粒子やや細かい、 $\phi \sim 2\text{mm}$ の砂粒を微量含む $\phi \sim 7 \sim 12\text{mm}$ の小礫を微量含む 灰白色(7.5Y8/2)・灰色(10Y6/1)のシルト質土をまだらに含む 炭化物を極微量含む
2-20	2.5Y6/2灰黄色	締まり強い、粒子細かい、 $\phi \sim 0.5\text{mm}$ の砂粒極微量含む まだらに酸化鉄分が付着する / 粘質土
4-1	7.5YR5/2灰褐色	締まり弱い、粘性やや強い、粒子やや細かい、 $\phi \sim 3\text{mm}$ の小礫を含む 瓦片、炭化物をまだらに含む
4-2	7.5YR4/3褐色	締まり強い、粘性やや強い、粒子やや細かい、 $\phi \sim 2\text{mm}$ の砂粒を微量含む $\phi \sim 10 \sim 12\text{mm}$ の小礫を微量含む 瓦片を微量含む 炭化物をまだらに含む 灰白色シルト質土(5GY8/1)極微量まだらに含む
4-3	5YR4/3にぶい赤褐色	締まり強い、粘性やや強い、粒子やや細かい、 $\phi \sim 2\text{mm}$ の砂粒を微量含む $\phi \sim 10 \sim 20\text{mm}$ の小礫を微量含む 炭化物をまだらに含む 明オーリーブ灰(5GY7/1)と明黄褐色(10YR7/6)のシルト質土を極微量まだらに含む
4-4	10YR3/4暗褐色	締まり強い、粘性やや強い、粒子やや細かい、 $\phi \sim 2\text{mm}$ の砂粒を微量含む $\phi \sim 10 \sim 50\text{mm}$ の礫を微量含む 炭化物を微量含む 酸化鉄を極微量含む
7-2	5YR2/4暗極赤褐色	締まり極強い、粒子粗い、 $\phi \sim 5\text{mm}$ の焼土BL中量、炭化物少量含む $\phi \sim 30\text{mm}$ の礫微量 淡黄色砂質土(2.5Y8/3) 少量含む
7-3	2.5Y8/2灰白色	締まり極強い、粒子極粗い、 $\phi \sim 10\text{mm}$ の小礫微量含む 赤褐色土BL ($\phi \sim 10\text{mm}$, 5YR4/6)、黄褐色粘土BL ($\phi \sim 10\text{mm}$, 7.5YR7/8) 微量含む 炭化物粒微量含む 瓦小片中量含む / 砂質土
9-1	10R3/2暗赤褐色	締まり強い、オーリーブ灰色(5GY6/1)の層をまだらに含む 瓦片少量含む $\phi \sim 10 \sim 40\text{mm}$ の礫を多量含む / 焼土

図 11 南壁断面図 (1 : 60)

4層は、素掘り溝 06SD の堆積物である。溝内の堆積物は 4-1 ～ 4 層で、4-1 には多量の瓦が含まれていた。

5層は、石垣は残存してはいなかったが、その石垣 05SL を設置した根石設置溝の堆積物である。溝内には飼石（胴飼石・鱸介石・迫飼石・尻飼石等）や栗石などの石材が残されており、僅かに瓦片や炭化物を含んでいる。

6層は、石垣 05SL の裏込層で、中央壁で確認した。6層にはいずれも礫を多く含んでいるが、上段の 6-2 層と下段の 6-4・5 層には特に栗石を多量に含んでいた。層厚は、石垣 01SL や石垣 01SL の裏込層まで約 1.7 ～ 2.3 m あり、さらに上部では石垣 01SL の抜取部分も含めた 3 m 余りの幅が存在したものと考えられる。石材鑑定に用いたのは、下段の 6-4・5 層中の裏込栗石（A）である。

7層は、石垣 05SL を構築する際の整地層で、小礫を多く含んで、層の締まりは極めて強く、瓦片を僅かに含んでいる。

8層は、石垣 01SL の裏込層で、中央壁で確認した。8層ではいずれの層にも大型礫を多く含んでいるが、8-4 層では最大 30cm 余りの割礫が多量に含まれていた。層厚は、背面の 17 層盛土層までの 0.9 ～ 1.0 m であったと推測される。石材鑑定に用いたのは、8-4 層中の裏込栗石（B）である。

9層は、9-1 層のみで、小礫を多く含む締まりの強い道路 04SF の整地層である。11 層と 13 層の盛土層の最終整地層である。この層の上面（路面）は、一面に焼けて橙色～赤橙色に変色し、大きな炭化物の塊や薄い炭化物の層として残存していた。赤変は小礫の多い層の内部にも達し、層全体が暗赤褐色化していた。瓦を僅かに含んでいる。

10層は、図 15 に示す 9 層に覆われる掘立柱柵（塀）03SA の掘方や柱抜取穴の埋土層である。瓦片を僅かに含むものがある。層名は掘立柱柵（塀）03SA 壁面図の各柱穴に記した。

11層は、11-1 層のみで、杭列 02SA の施工後に盛土成形された整地層で、13 層との一連の盛土層と考えられる。

12層は、中央壁と断割トレンチ内 13-3 層床面で検出した、2 本の杭跡に堆積した層である。

13層は、石垣 01SL の構築後に盛土された整地層で、15 層上に西側傾斜で盛土を重ねる 18 層を確認した。この 13 層で石垣 01SL の下から 3 段目までが、埋められている。道路 04SF は、13 層と 11 層によって、最終的には 9-1 層の整地層で完成をみることとなる。

14層は、石垣 01SL の最下段 2 段の根石を設置するにあたり、15 層の硬い基礎地業的な盛土層を再び掘り込み、2 層で埋める埋土層である。

15層は、石垣 01SL 設置のための基礎地業的な小礫層を多く含む盛土層で、締まりの強い 3 層からなる。下層の 16 層が東下がりを作る大きな堀込を埋めるものである。

16層は、埋谷暖傾斜地を横断するように盛土してダム状に閉塞する盛土工事の、最終段階の盛土層と考えている。盛土層の中心部はさらに東側に存在する「治部池」西側の石垣 01SL 上の曲輪本体と考えられる。ここでは、細砂と小礫を含む層を交互に固く締めた 7 層を確認した。

17層は、石垣01SLの構築に伴い裏込背後の斜面を切った盛土層で、地山層ではない。2層を確認した。地山層は、中期更新世大阪層群最終の深草層の海生粘土層を挟む礫・砂・泥からなる堆積層である。試掘調査6トレンチ東側において、褐色泥砂（10YR4/6）とその下層からにぶい黄橙色粘質土（10YR6/4）が検出されているので、これらが地山層である可能性は残る。

2. 遺構面

遺構は、石垣01SL構築以降で9-1層の整地以前と以後、石垣05SL構築以降で3-1層の整地以前と以後、さらにそれ以降の時期の主に5遺構面である。

今回の調査は、3-1層や7-2層上面の石垣01SLに伴う遺構については調査を全て終了できたが、9-1層上面の調査は、石垣01SL前面の一部で調査を行えたのみで、掘立柱柵（塀）03SAも素掘り溝06SDの東側壁面で確認したもので、平面調査では確認できていない。

第2節 遺 構

1. 遺構の概要

遺構数は、戦国時代から江戸時代前期の9（図12）遺構を検出した。遺構の性格は、石垣、石垣痕跡、石垣に伴う裏込と根石設置溝、杭列、掘立柱柵（塀）、道路（街区道路）、素掘り溝、石組溝、石組暗渠排水溝である。

ここでは、前節で先述した時期の古いものから順に記述する。

2. 遺 構

石垣01SL

石垣01SLは、解体移設されてその一部しか残されてはいなかったが比熱した築石、深い3段もの根石と裏込栗石層（図9・13・14・46、表5）を確認した。なお、石垣01SLは現地保存されたため、石垣自体の解体調査は実施していない。

検出規模は、1区南側の石垣05SL裏込栗石層の下層で検出したもので、延長は約4.5mで、根石底からの残存高は約1.6mである。石垣の傾斜角度は、約65°である。方位は、座標北から東へ7°43′で、石垣05SL等と同じである。

その構築方法は、図9から明らかなように、16層の盛土が完了（最上部が16-1層）した段階で、根石を据え置く部分を石垣前面では約1.5m余り、約0.4m掘り込んで溝状に下げ、この部分を中心に15層1～3層にわたり固く盛り上げたあと、15-1層上面から根石設置溝を再び幅0.55m以上、深さ0.7m余り下げ、この溝底に根石の1段目を設置している。根石1段目は、石面の長軸を横に向けて平置きに2石を置いた後、三角形の小型の石材を1石置いていて、全て平石を連ねて置くのではなく、わざとバランスを崩して滑りを防止しているようにみえる。このため天端は綺麗に平面とはなっていない。根石2段目は、1段目天端に合わせる様に下が平らな

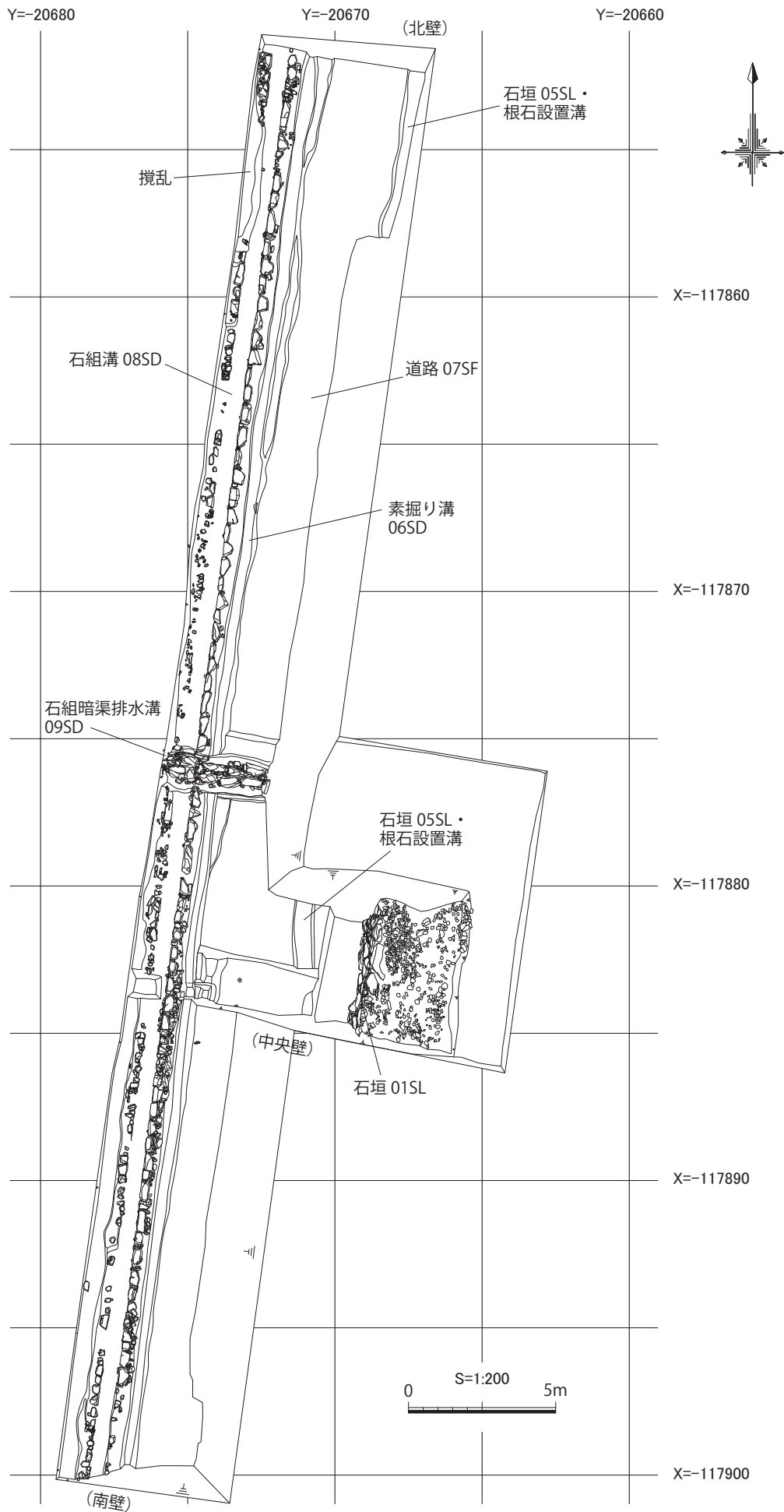


図 12 遺構全体図 (1:200)

面を向けて三角形の割石や1段目よりも小振りな石材を落とし込んで石面を作っている。根石3段目は、2段目との境が不明瞭で、2段目と3段目で一つの石面を作っているように感じられる。この段階で高さ1.3mの高さまで根石が積まれたことになる。おそらくこの段階で、根石設置溝は14-1・2層で埋められたと考えられる。その後石垣の構築は、13層の盛土をさらに行って根石3段目までを埋め、この上面で作業を実施したと考えることができる。

築石はここからで、今回の検出範囲では3石しか、残されてはいなかった。この築石は、根石の石材よりも大きなものが使われており、見栄えを重視したものとみられる。これらの石材は、9-1層の整地層との境である標高72.67mから上部(図14)が、火災により被熱しており、赤く変色し、石爆ぜ(巻頭図版4)が起きていた。おそらく、被熱で弱くなっていたことと、見た目もよくなかったため、これらの石材は残されたものと推測される。

石垣の構築終了後に、11-1層で整地が行われ、掘立柱柵(塀)03SAが設置されたものと考えられる。

石垣01SLの石材の種類は、主要な石材64石中では、チャート4石(6.3%)、頁岩～粘板岩13石(20.3%)、砂岩21石(32.8%)、ホルンフェルス20石(31.3%)、花崗岩3石(4.7%)、石英斑岩2石(3.1%)、花崗岩質アプライト1石(1.6%)であった。砂岩、ホルンフェルスがほぼ同数で、次いで頁岩～粘板岩で、この3種類で8割を占める。石材の詳細は、第5章第1節で述べる。

裏込は、石垣01SLの石垣抜取部背面から17層面までの、上ほど広い0.9～1.3m余りの厚みである。石垣背後の切土の状況は不明であるが、64°余りの傾斜で、16層を切っている。この16層切面を図19でみるかぎり、セットバック工法は確認できない。裏込の8-1～4層は、栗石の量も多く大型礫を多く含んでいるが、特に下層の8-4層と栗石崩落層の6-12層では、最大30cm余りの割礫が多量に含まれ、栗石のみの単純栗石層であった。8-4層の石材の種類(B)は、チャート28.6%、頁岩～粘板岩28.6%、砂岩42.9%であった。ほぼ砂岩で占められ、次いでチャートと頁岩～粘板岩の3種類であった。石垣01SLや石組溝08SDとは異なり、ホルンフェルスや石英斑岩が見られない。採取地にて選別を行っていたのかもしれない。

この石垣01SLの石垣の特徴は、根石が3段も積まれていること、石材に花崗岩を主体に使用していないこと、石垣の石面が自然石面と粗割りされた割石面が混在するものであること、矢穴痕が存在してもよいが今回の調査地では確認できなかったこと(図46の⑮の下面、⑯の上面に可能性のある痕跡があるが不詳)、石積みに落とし込みが使われていること等があげられる。

石垣01SLの構築時期は、伏見城第Ⅲ期でも最も早い時期、慶長元年(1596)に限りなく近い時期で、慶長2年の築城完成までの間である可能性が高いと考えられる。

杭列02SA

杭列02SAは、2区の断割トレンチで13-1層から打ち込まれているのを検出したもので、石垣01SLか道路の構築に関係すると思われる杭列(図9・13)である。

検出規模は、断割トレンチ中央壁の壁面(図9)の1個の柱穴と、この柱穴の約0.9m北側

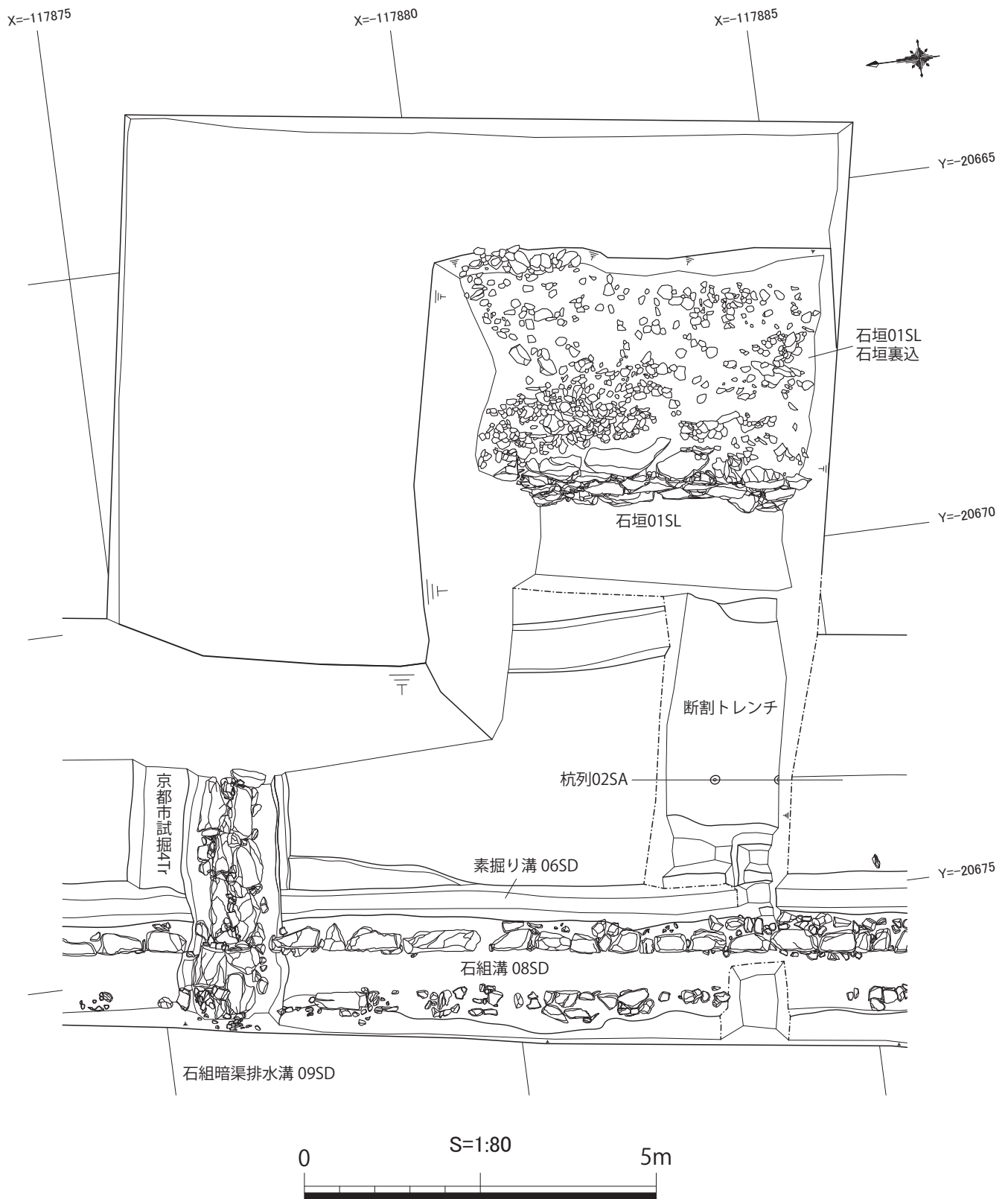


図13 石垣01SL・杭列02SA平面図(1:80)

の 15-1 層上で検出した 1 個の柱穴の 2 個である。杭は、石垣 01SL の根石設置をほぼ終了した 13-1 層から打ち込まれていて、直径 13cm 余りの先端部のみを尖らせたもので、真直ぐに深さ 34cm まで打ち込まれていた。杭の中心から石垣地覆部までの距離は、約 4.2 m (14 尺) である。杭列の方向は、石垣 01SL と並行する。杭は断面の形状から、抜かれた形跡がある。杭の上部には整地層である 11-1 層が上に被せられ、さらに 9-1 層が被せられてその姿は全く見えない。

道路中心を示す作業用の杭であるならば、半間間隔で杭を打つ必要があるのか、石垣 01SL に係わる作業用の杭であれば、根石設置時からあってもよいのに、築石を組む段階から必要とされたのか、石垣の際から約 4.2 m も離れているなど、疑問が残るところであり、結局のところその意味はよく分からない。

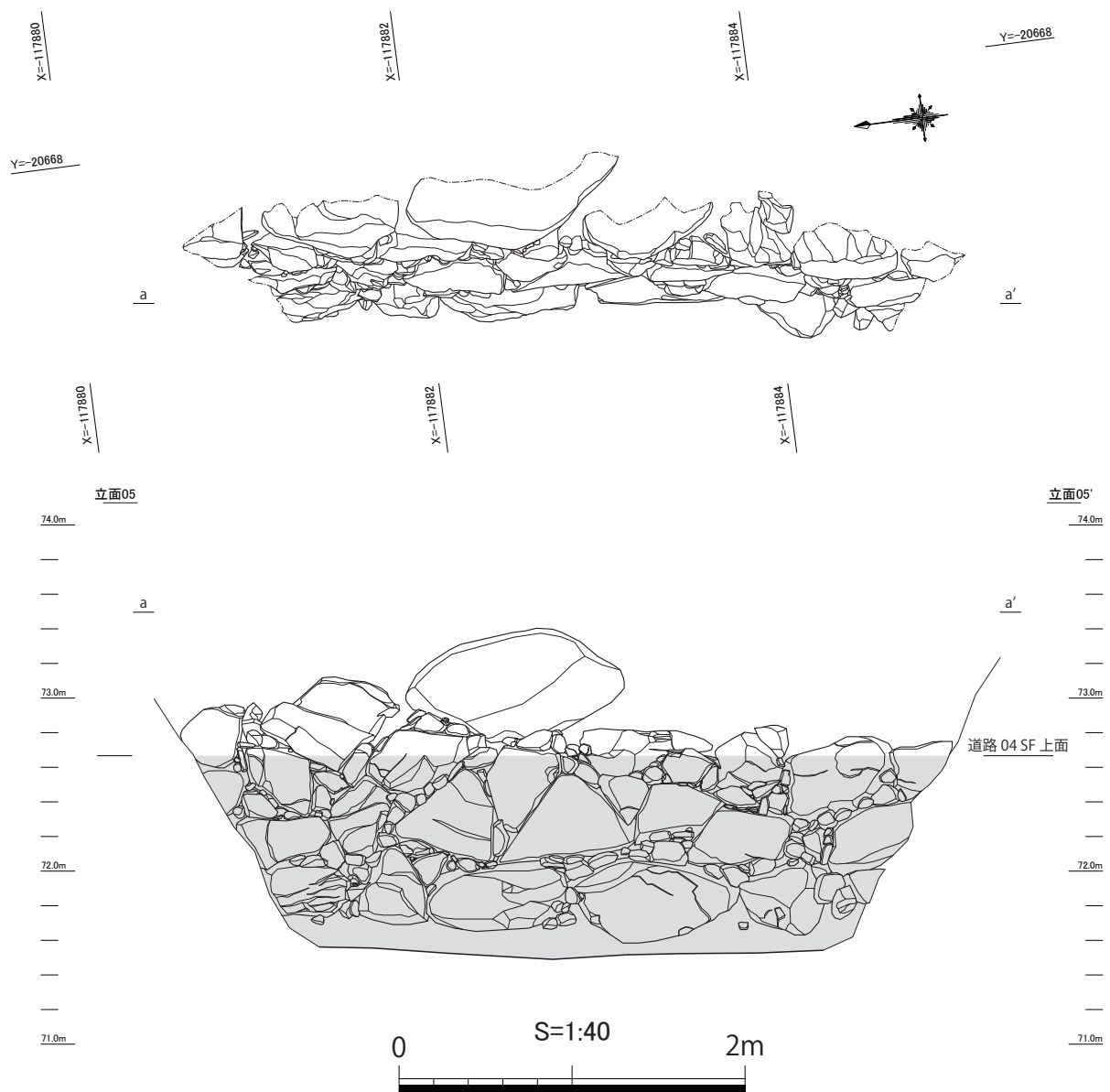


図 14 石垣 01SL 平面図・立面図 (1 : 40)

杭列 02SA の存在した時期は、石垣 01SL 構築中であり、完成後の道路整地層で姿を消す。伏見城第Ⅲ期でも最も早い時期、慶長元年（1596）に限りなく近い時期で、慶長 2 年の築城完成までの間である可能性が高いと考えられる。

掘立柱柵（塀）03SA

掘立柱柵（塀）03SA は、平面調査で検出し調査したものではなく、調査の最終段階で素掘り溝 06SD の東側掘削面にその存在を確認した遺構である。柱穴の残欠が壁面に残っている状況であったため、平面検出ではなく東側掘削面を図化し対応した。このような経緯で発見されたため、十分な調査が行えていない。

掘立柱柵（塀）03SA は、掘立柱の柱穴 29 個以上からなる、南北方向の柵ではなく塀跡（図 9・15）と考える。

柱穴は整地層である 11-1 層から切り込まれているが、さらに上層の整地層である 9-1 層に完全に被い尽くされている。端的に言うならば、掘立柱柵（塀）03SA を撤去して更地とするために、9-1 層による整地が行われたともいえる。その後、石垣 05SL 期に、大部分を漏斗状断面の素掘り溝 06SD に大きく壊されたようである。このため素掘り溝 06SD の東側掘削面壁面に残された掘立柱柵（塀）03SA は、既に遺構の中心から外れて掘立柱の柱穴が残されている状態であることが壁面図（図 15）からも理解される。

検出規模は、南北が延長約 46.0 m であるが、それ以上に南にも北にも延びるものと考えられる。塀の中心から石垣地覆部までの距離は、5.7 ～ 5.8 m（19 尺）余りと考えられる。塀の方向は、石垣 01SL と並行するものと推測される。柱穴の大きさは、残りの良いもので直径 30cm 前後である。柱は直径 20cm 前後の、円柱である。掘り込み深度は、最も深い 16SP で 13 層上面から 0.67 m あるが、他の柱穴は 0.5 ～ 0.6 m 前後である。根石を据えるものは、02SP、09SP、11SP の 3 柱穴である。各柱穴の柱間は、北より 1.66 m + 1.66 m + 2.1 m + 1.66 m + 1.21 m + 1.66 m + 1.21 m + 2.63 m + 1.8 m + 2.0 m + 2.0 m + 2.0 m + 2.0 m + 2.0 m + 2.0 m + 1.36 m + 1.66 m + 1.36 m + 1.36 m + 1.36 m + 1.51 m + 1.51 m + 1.21 m + 1.66 m + 1.21 m + 1.51 m + 1.36 m である。すべてが同じではなく、ばらつきが見られる。しかし、同じ柱間のグループがあり、北側の 01SP ～ 08SP までの 1.66 m（5 尺 5 寸）間の区間、10SP ～ 16SP までの 2.0 m（6 尺 6 寸）間の区間、16SP ～ 22SP までの 1.36 m（4 尺 5 寸）間の区間、22SP ～ 29SP までの 1.51 m（5 尺）間の区間と把握される。しかし、これにどの様な意味があるのか、この柱間のばらつきは一体何故生じているのかは不明である。柱穴の埋土に、焼土や炭は入らない。柱穴の形状や堆積物の観察から、柱は抜き取られた形跡がある。これらの柱穴群で特徴的な柱穴が、09SP である。柱穴の直径は、0.37 m と大きく、深さは 0.5 m、一辺 30cm 余りの大きな根石を据える。その北側の柱間は、今回検出中では一番広く 2.63 m あり、南側は 1.8 m と狭い。この柱穴のみに沈下を防ぐ工夫を行ったのは、北側の広い柱間との関係であろうか不明である。

この曖昧な柱間の掘立柱で考えられる構造物は、柵としか考えられない。しかし、大名屋敷の外郭とはいえ柵が必要かと考えると、躊躇せざるを得ない。この掘立柱柵（塀）03SA は、可成

り無理な点はあるが、台木（地覆）のある板塀か土塀で、柱穴は親柱ではなく、固定のための控えの柱列ではないかと想像しておく。

掘立柱柵（塀）03SAの存在した時期は、石垣01SL構築以降であり、慶長元年（1596）から慶長2年の築城完成には存在していたものと考えられる。しかし、慶長五年（1600）の「伏見城の戦い」以前に9-1層で整地され存在していないことから、伏見城第Ⅲ期でも遅い時期の可能性が高いと考えられる。

道路04SF

道路04SFは、石垣01SLと西側の大名屋敷（排水溝）との間の、11-1層（下層）と9-1層（上層）で硬く叩き締められた整地層の上面に作られた南北路（図9）である。

検出規模は、南北が延長約48.4m、東西の幅が石垣01SL西端から素掘り溝06SDに壊される東端までの間の5.3～5.8mである。おそらく路面の幅は、さらに広がったものと思われる。路面の傾斜は、東西が東側上がりの2～3°、南北が北上がりの1°以内で、道路05SFと変わらない。ただ、石垣に接する部分では、急に路面が石垣側に上がっている。

上層の9-1層上面の路面は、場所により多少異なるが、火災により焼けて橙色に変色し、炭化物の破片も多くみられた。何も燃えるものがない路面が、相当な高温で焼かれたことが推測される。

道路04SF下層の構築時期は、石垣01SL構築後直ぐに行われたと考えられるので、伏見城第Ⅲ期でも最も早い時期、慶長元年（1596）に限りなく近い時期で、慶長2年の築城完成までの間である可能性が高いと考えられる。上層については、何時かは限定できないが、慶長五年（1600）の「伏見城の戦い」以前であることは明らかであろう。

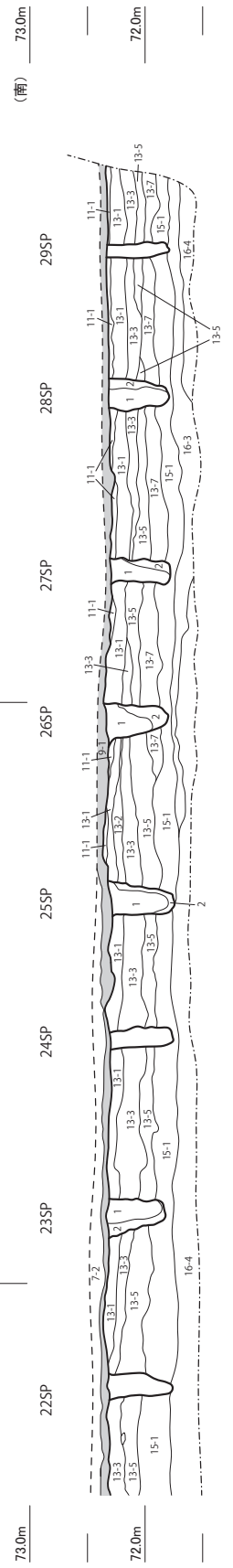
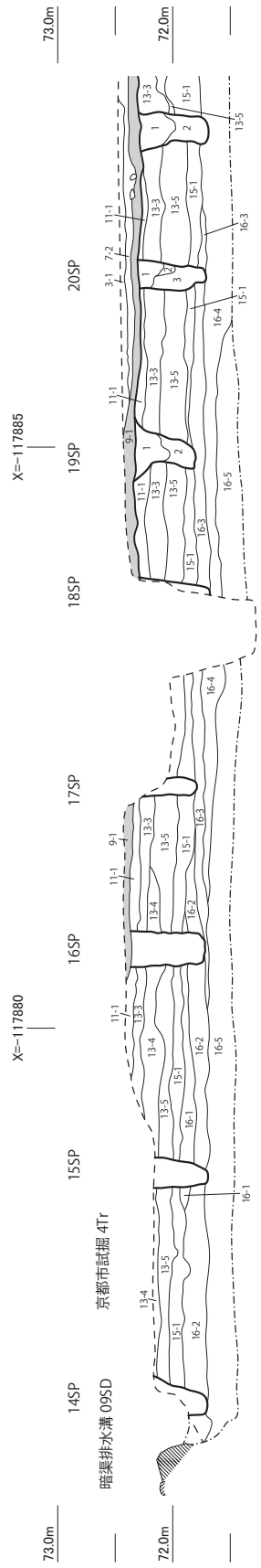
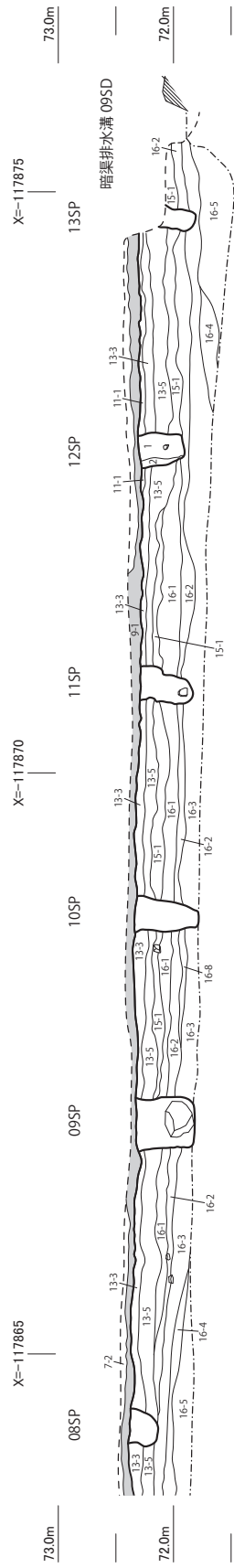
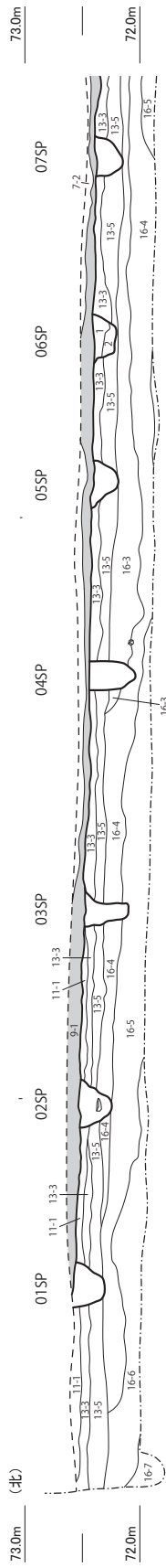
石垣05SL

石垣05SLは、解体移設されたと考えられるため、石垣自体は残存していなかったが、根石を設置する根石設置溝と裏込栗石層（図9・16）を確認した。

根石設置溝は、石垣基底部の根石（1石目基礎石）の据え付け溝である。7層の硬く締まった層を掘り込んだ根石設置溝の規模は、東西の幅約0.84～0.93m（3尺）、南北は3区と2区で検出しているため延長約32.3m、深さは0.1～0.15mを測る西側にやや深い浅い皿状の溝である。2区では石組溝08SDに並行しておらず、揺らぎがみられるが、3区では直線的となっている。埋土は5-1層のみで、基礎の栗石、少し大きめの尻飼石（介石）、瓦等が出土した。

その設置方法は、福知山城等で明らかになったように、根石設置溝の底に栗石を入れるか直に溝底の西側内側に石面を合わせて置き、石尻を奥の溝上に置いて尻飼石で勾配を調整し、築石と間石、尻飼石で固定と勾配調整を行いながら上に積んでいく。このためには、栗石での裏込が必然である。石垣は、雨水を石垣の前面より排水するのではなく、石垣の裏で裏面排水するからこそ石垣は持ちこたえているのであって、そうでないと石垣は石垣上面の雨水で崩壊することになる。

裏込は、石垣01SLの石垣抜取部背面から石垣05SLの石垣抜取部背面までの、上ほど広い



01SP	7.5YR4/3褐色	01SP	23SP-1	10YR5/3 にぶい黄褐色	締まり強い、粘性やや強い、粒子粗い、φ～50mmの礫を少量含む
02SP-1	7.5YR4/4褐色	02SP-1	23SP-2	10YR5/3 にぶい黄褐色	各粘土ブロック(φ～10mm)を中量含む
02SP-2	7.5YR5/6明褐色	02SP-2	24SP	10YR3/3 暗褐色	締まり強い、粒子粗い、φ～8mmの小礫を微量含む
03SP	7.5YR4/4褐色	03SP	25SP-1	10YR3/3 暗褐色	明赤褐色砂質土を少量含む 炭化物を微量含む
04SP	7.5YR4/3褐色	04SP	25SP-2	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土ブロック(φ～10mm)を少量含む 炭化物を微量含む
05SP	10YR4/3 にぶい黄褐色	05SP	26SP-1	10YR5/3 にぶい黄褐色	締まり強い、粒子粗い、φ～8mmの礫を少量含む 砂粒、瓦片を少量含む
06SP-1	10YR6/3 にぶい黄褐色	06SP-1	26SP-2	10YR4/3 にぶい黄褐色	各粘土ブロック(φ～10mm)を中量含む 瓦片を極微量含む
06SP-2	10YR4/6褐色	06SP-2	27SP-1	10YR3/3 暗褐色	にぶい赤褐色砂質土を少量含む
07SP	5YR4/3 にぶい赤褐色	07SP	27SP-2	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土ブロック(φ～10mm)を中量含む 瓦片を少量含む
08SP	5YR4/3 にぶい赤褐色	08SP	28SP-1	10YR4/3 にぶい黄褐色	締まり強い、粒子粗い、φ～8mmの礫を微量含む φ～1mmの砂粒を少量含む
09SP	5YR6/4 にぶい橙褐色	09SP	28SP-2	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土ブロック(φ～10mm)を少量含む 煉土粒(φ～10mm)を極微量含む
10SP	7.5YR4/6褐色	10SP	29SP	10YR4/3 にぶい黄褐色	締まり強い、粒子粗い、φ～10mm)を少量含む 瓦片を微量含む
11SP	10YR5/3 にぶい黄褐色	11SP	3-1	7.5YR/2灰白色	締まり強い、φ～10mmの小礫を多く含む 瓦片を少量含む
12SP-1	10YR6/4 にぶい黄褐色	12SP-1	7-2	10YR/2灰白色	締まり強い、褐色(7.5YR6/8)と暗褐色(7.5YR3/4)の層が全体的に含まれる
12SP-2	10YR5/4 にぶい黄褐色	12SP-2	9-1	10R3/2暗赤褐色	灰白色(7.5YR8/1)の砂質土層が所々に含まれる
13SP	10YR4/3 にぶい黄褐色	13SP	11-1	7.5YR5/2灰褐色	明オレンジ灰色(5GY7/1)のシルト質層が所々に含まれる
14SP	10YR5/3 にぶい黄褐色	14SP	13-1	5YR5/4 にぶい赤褐色	瓦片少量含む φ～10～40mmの礫を多量含む
15SP	10YR5/3 にぶい黄褐色	15SP	13-2	10YR5/3 にぶい黄褐色	φ～30mmの礫を中量含む 淡黄色粘土ブロック(φ～10mm)を多量含む
16SP	10YR5/3 にぶい黄褐色	16SP	13-3	5YR5/4 にぶい赤褐色	締まり強い、粒子粗い、φ～8mmの煉土粒を極微量含む
17SP	10YR5/3 にぶい黄褐色	17SP	13-4	5YR5/6明赤褐色	締まり強い、明赤褐色(5YR5/6)と淡黄褐色(10YR8/4)と
18SP	10YR5/3 にぶい黄褐色	18SP	13-5	5YR5/8明赤褐色	明黄褐色(10YR7/6)のシルト質土をまだらに含む φ～10～20mmの礫を少量含む
19SP-1	10YR5/3 にぶい黄褐色	19SP-1	13-7	5Y6/1灰色	φ～0.5mmの粒を中量含む 淡黄色粘土ブロック(2.5Y8/4)を微量含む/やや粘質
19SP-2	10YR5/3 にぶい黄褐色	19SP-2	15-1	7.5YR4/2灰褐色	締まり強い、明黄褐色(10YR6/8)と淡黄褐色(10YR8/4)のシルト質層をまだらに含む φ～5～10mmの小礫を含む
20SP-1	10YR3/3 暗褐色	20SP-1	16-1	5GY6/1オレンジ灰色	締まり強い、φ～5～10mmの小礫が少量含まれる
20SP-2	10YR5/3 にぶい黄褐色	20SP-2	16-2	7.5YR4/2灰褐色	締まりやや強い、粒子粗い、砂層(φ～0.5mmの砂粒主成分)上面が硬化する
20SP-3	10YR5/3 にぶい黄褐色	20SP-3	16-3	7.5Y7/2灰白色	締まりやや強い、粒子細かい、粘土質(φ～0.5mmの砂粒を中量含む)
21SP-1	10YR3/3 暗褐色	21SP-1	16-4	7.5YR4/2灰褐色	締まり強い、粒子細かい、粘性強い、φ～1mmの砂粒を少量含む
21SP-2	10YR5/3 にぶい黄褐色	21SP-2	16-5	5YR6/2灰褐色	φ～5mmの小礫を微量含む 上面が変色(酸化鉄付着)/粘性あり
22SP	10YR5/3 にぶい黄褐色	22SP	16-6	10R4/2灰赤色	φ～1mmの砂粒、φ～5mmの小礫を微量含む
			16-7	10YR4/2 灰黄褐色	締まり強い、粘性強い、粒子やや粗い、φ～1mmの砂粒を全体的に含む
					φ～5mmの小礫を極微量含む
					締まりやや強い、粘性やや強い、粒子細かい、φ～1mmの砂粒を全体的に含む
					φ～5mmの小礫を極微量含む

図 15 掘立柱柵 (塀) 03SA 壁面図 (1 : 60)

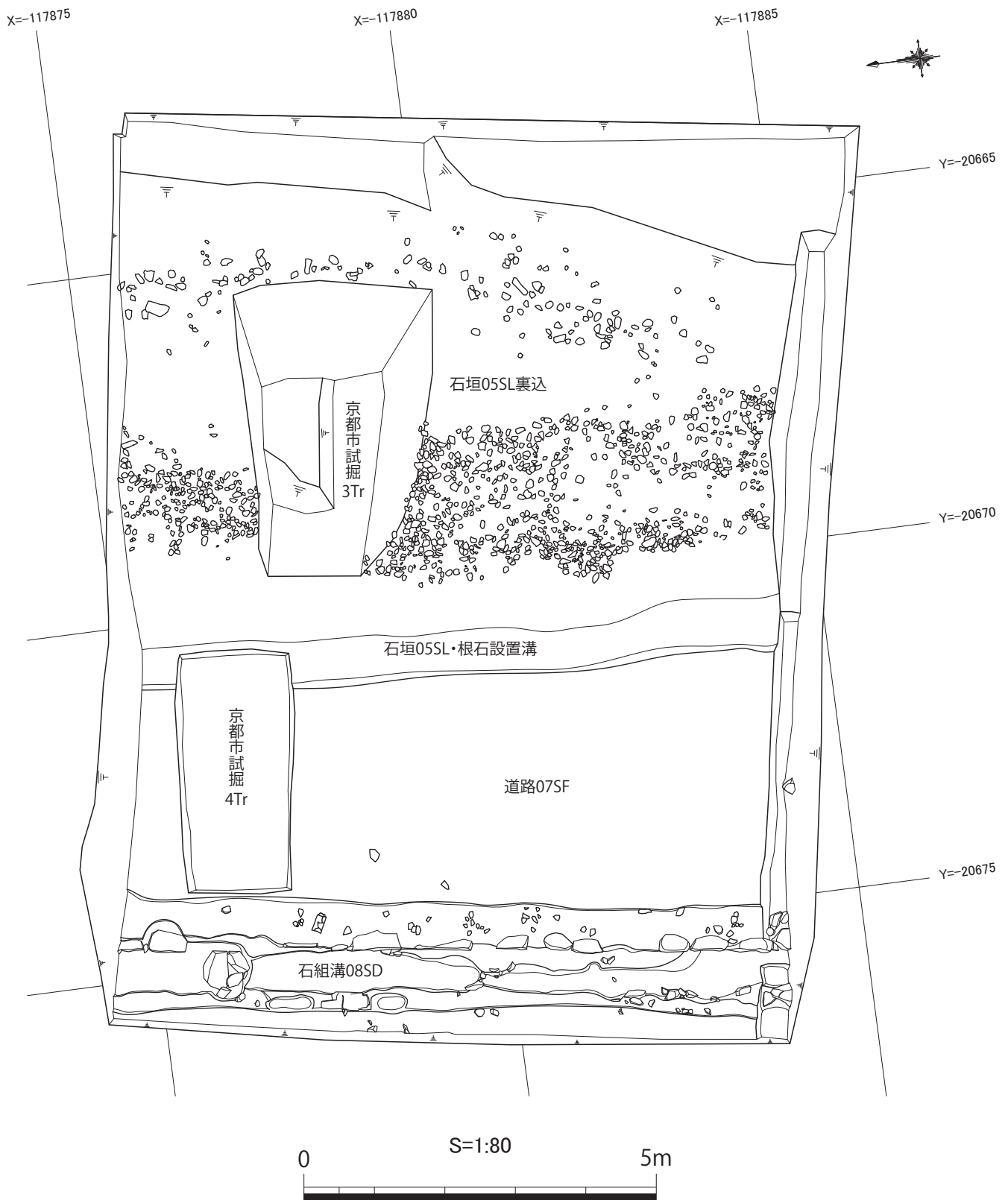


图 16 石垣 05SL 平面图 (1 : 80)

3.2～4.6 mもの厚い幅を行っている。この裏込は、大きくは前後を分けて行っていることが、図9の中央壁面図より推測される。石垣01SLの築石を抜き取った後の裏込崩落面8層上面（西面）から6-6～13層は、単に土を落とし込んで裏込としていた層であるが、その上部に積まれた6-1～5層は栗石の量も多く、まさしく裏込層であった。特に下層の6-4・5層と上層の6-2層は、栗石のみの単純栗石層であった。6-4・5層の栗石の石材種類（A）は、チャート32.4%、頁岩～粘板岩29.4%、砂岩29.4%、花崗岩2.9%、脈石英5.9%であった。ほぼ、チャート、頁岩～粘板岩、砂岩の3種類とみて間違いはない。石垣01SLや石組溝08SDとは異なり、ホルンフェルスや石英斑岩が見られない。採取地にて選別を行っていたのか、サンプリングの問題かは不明である。

石垣05SLの石材抜取後の背後の面が、根石設置溝の上に6層の面として残されている。この斜面の角度は、約67°である。おそらくこの角度が、石垣05SLの傾斜角度に近いものと考えられる。ある程度石垣を積み上げて犬走を設け、さらに石垣を積むセットバック工法の石垣であったかどうかは、1・2区の平面調査でも中央壁面でも分からなかった。

石垣05SLの構築時期は、城下町から最も見栄えのする石垣であること、石垣上段の徳川一門の大名屋敷建設にも係わることであり、伏見城第IV a期の再建伏見城でも最も早い時期、慶長6年（1601）に限りなく近い時期である可能性が高いと考えられる。

素掘り溝06SD

素掘り溝06SDは、西隣の石組溝08SDと並行し先行する排水溝で、最終は道路07SFの盛土整地層（3-1層）に埋められて廃絶する、南北方向の素掘り溝（図9・17～20）である。

検出規模は、南北が延長約48.6 mで、断面が漏斗状の上部からV字状に掘りこまれた非常に深い溝で、上幅約0.66～0.87 m、尖り気味の下幅は0.2～0.3 m、深さ0.84～1.03 mを測る。雨水は南流する。石垣05SL・根石設置溝の西端から素掘り溝06SDの中心までの距離は、約3.3 m（10尺）である。方角は、石垣05SLと同じである。

堆積層は4-1～4層に分かれ、上層の4-1・2層からは多量の瓦が出土し、下層の4-3・4層からもごく少量の瓦を出土した。水が流れたような堆積構造は、確認できなかった。この出土瓦は、石垣05SL期のものではなく、石垣01SL期の周辺にあった瓦を処分したものである可能性が高い。そのため、埋め戻し時に上層に放り込まれて、処分されたのではないであろうか。

素掘り溝06SDは、極めて幅が狭く深い溝である。その意味は簡単には推し測れないが、石組溝08SDが未完成で、石垣05SLの構築時などで道路07SFの道幅を確保しつつ、雨水排水を行う必要があったためではないだろうか。石組溝08SDを設置するまでの間、設けられていた仮設の溝であったため、このような形状になったのではないかと推測しておきたい。そのように考えるならば、その施工時期は伏見城第IV a期の再建伏見城でも早い時期で、石垣05SL設置後で、石組溝08SDが設置されるまでの期間と考えられる。実年代でいうならば、慶長6年（1601）から遅くとも朝鮮使節団を迎え秀忠が征夷大軍宣下を受けた慶長10年（1605）以前である可能性が高い。

石組溝 08SD 東側立面図

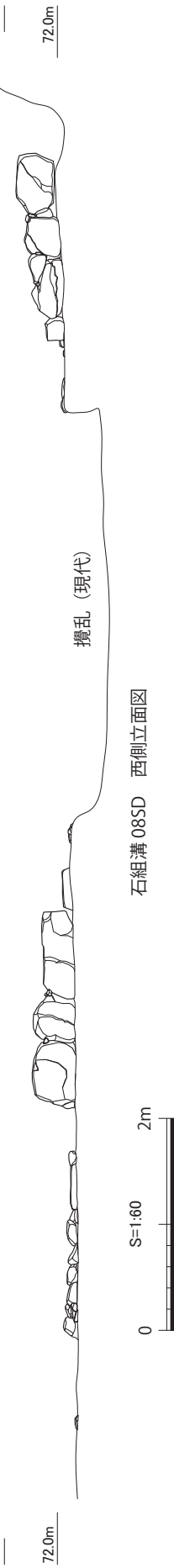
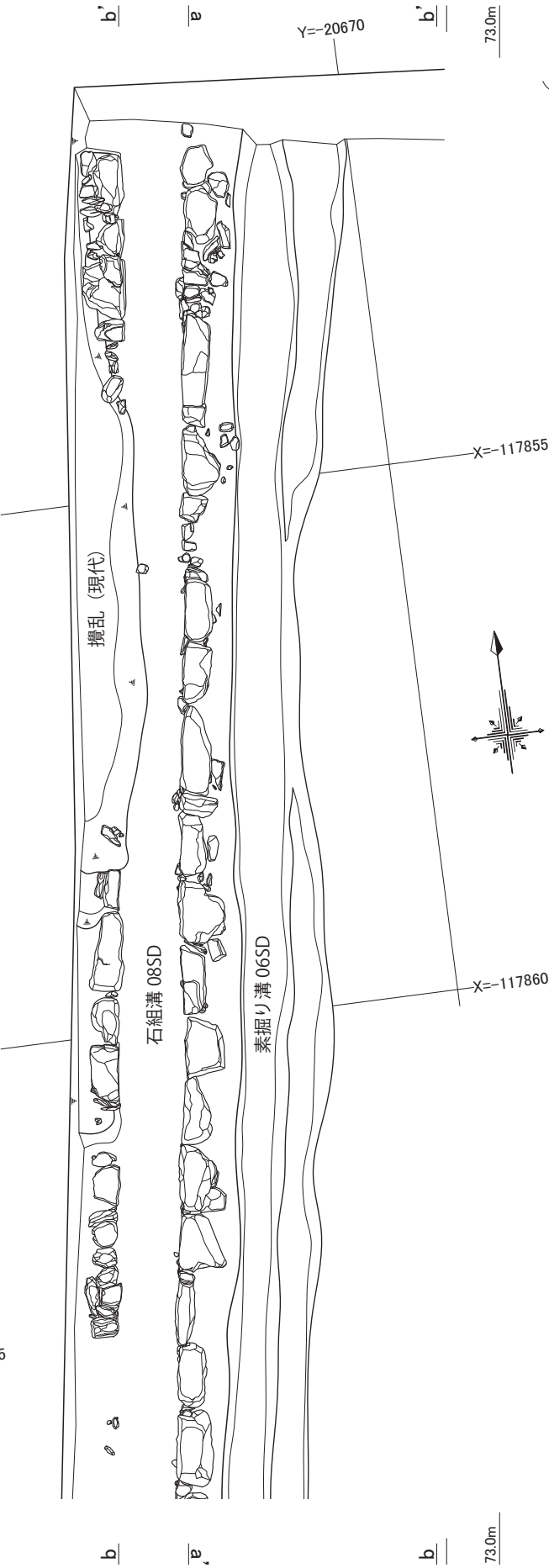
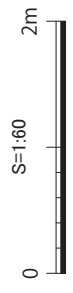
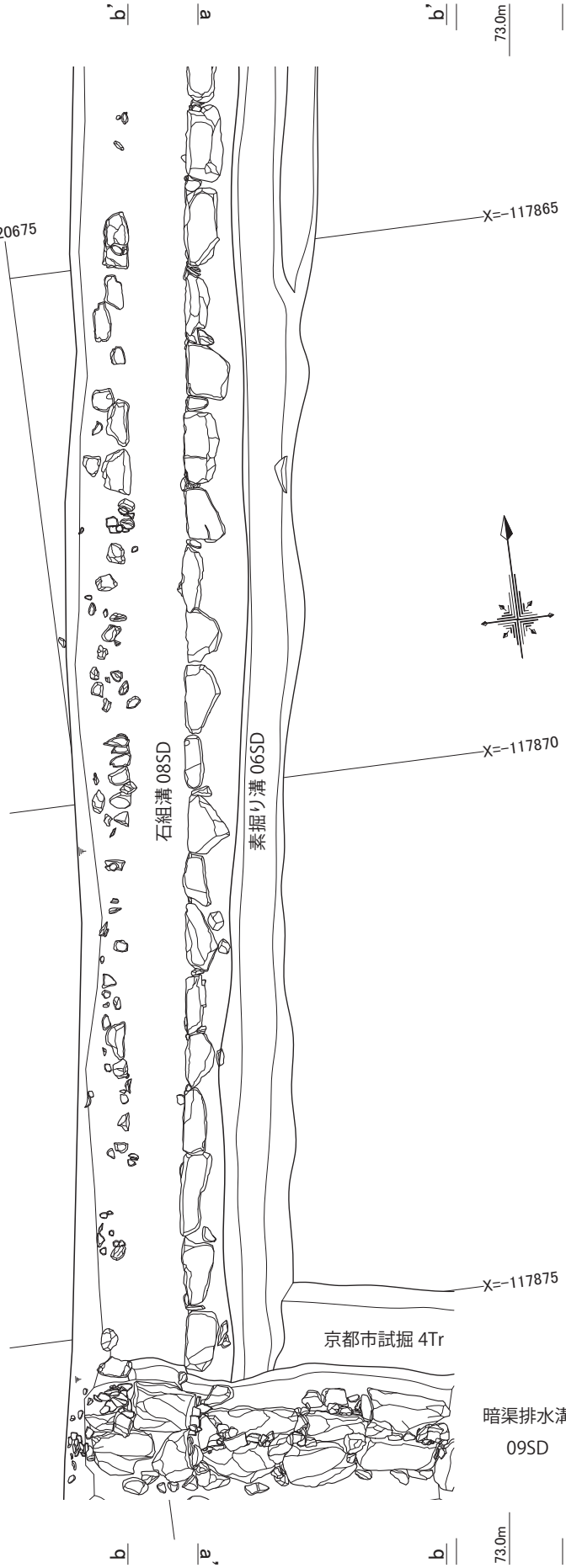
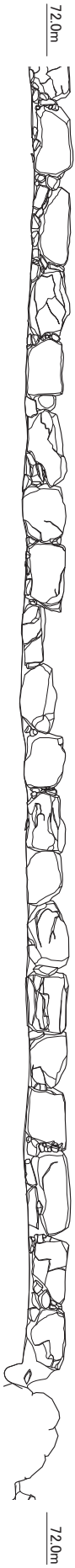


図 17 素掘り溝 06SD・石組溝 08SD 平面図・立面図 1 (9:1)

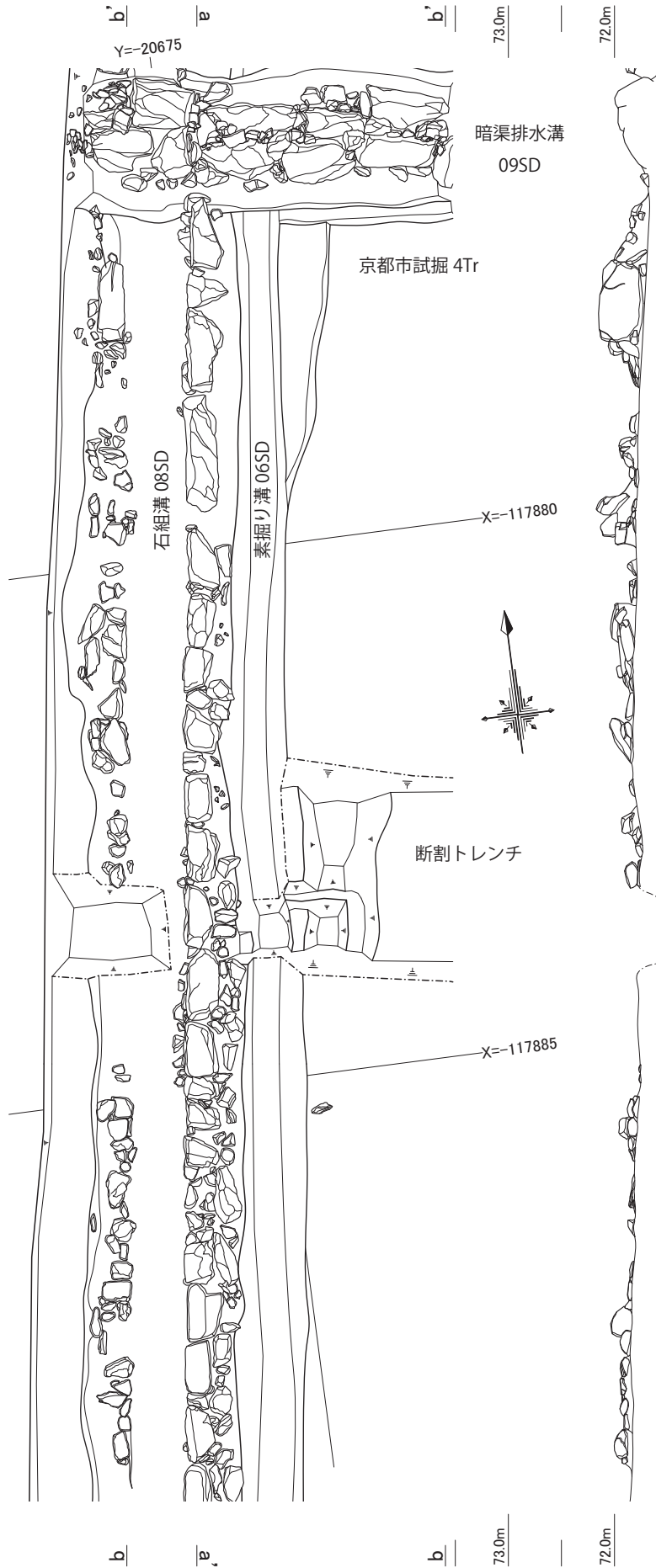
石組溝 08SD 東側立面図



石組溝 08SD 西側立面図

図 18 素掘り溝 06SD・石組溝 08SD 平面図・立面図 2 (1 : 60)

石組溝 08SD 東側立面図

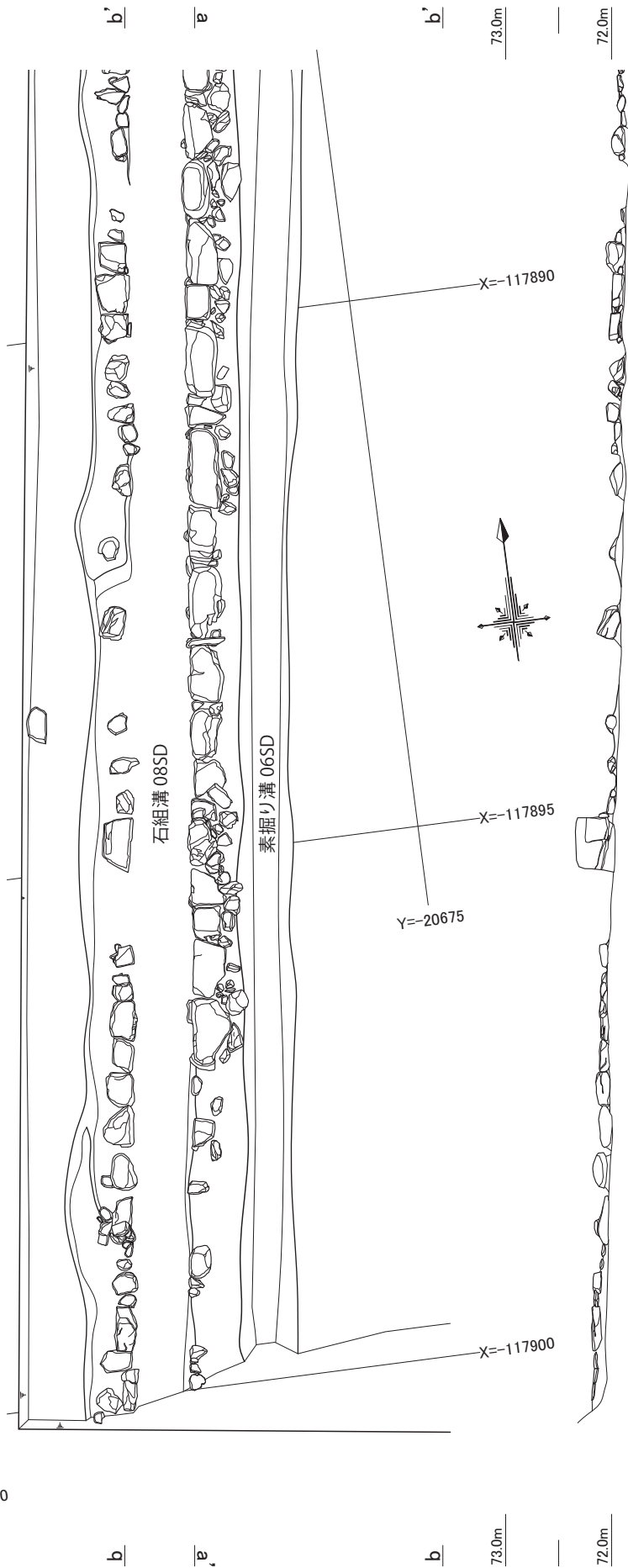
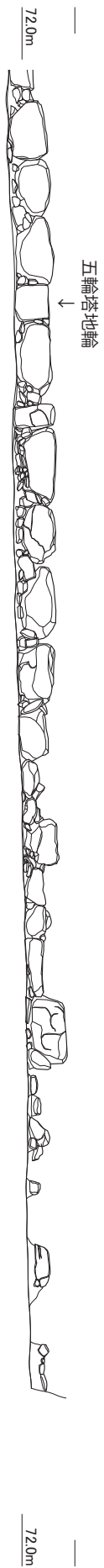


石組溝 08SD 西側立面図



図 19 素掘り溝 06SD・石組溝 08SD 平面図・立面図 3 (1 : 60)

石組溝 08SD 東側立面図



石組溝 08SD 西側立面図

図 20 素掘り溝 06SD・石組溝 08SD 平面図・立面図 4 (1 : 60)

道路 07SF

道路 07SF は、石垣 05SL（根石設置溝）と石組溝 08SD の間の、7 層や 3-1 層で硬く叩き締められた整地層の上面に作られた南北路（図 9・17～20）である。

検出規模は、南北が延長約 48.4 m、東西の幅が石垣 05SL（根石設置溝）西端と石組溝 08SD 東側壁内角までの間の 3.7～4.2 m（平均値約 3.9 m）である。路面の傾斜は、東西が東側上がりの 2～3°で、南北が北上がりの 1°以内である。

最終の 3-1 層での整地が行われたのは、石組溝 08SD 完成後、直ぐに行われたであろうと考えられる。

石組溝 08SD

石組溝 08SD は、両側壁を石組みとする 2 面側溝の排水溝（図 9・17～20）である。溝底の高さは約 72.05 m と余り変わらないが、僅かに南に下がっており南流していたものと思われる。石組溝 08SD は、2 区で石組暗渠排水溝 09SD に切られ、3 区では後世（現代）の土取りで攪乱されている。

検出規模は、南北が延長約 49.2 m で、溝の内幅約 0.6 m（2 尺）、深さ 0.33～0.4 m を測る。方角は、座標北より東に 7°43′ 傾くもので、石垣 01SL や石垣 05SL と同じである。石垣 05SL・根石設置溝の西端から石組溝 08SD 東側壁角までの距離は、3.7～4.1 m（平均値約 3.9 m、13 尺）で、この間が道路 07SF である。

その構造は、底辺 0.8～0.9 m、上辺 1.5～1.6 m、深さ 0.5～0.6 m の逆台形の溝を掘り、この溝底に、厚さ 0.7～0.18 m の粘質土（2-20 層）を貼り床とし、その上に内幅約 0.6 m で上面平らに 1 石又は 2 石で側壁を立ち上げるものである。側壁間の隙間や側壁裏には、高さや傾き調整、固定するための石塊が多数使われていた。側壁は、当初より東側壁に大きな石材を使用しており、そのためか東側壁の方が後代の石の抜取りが少なく残りは良い。これは、西側（大名屋敷側）から見られることを意識して東側壁に大きな石を使用するという、意図的な施工が成されたことを示すものと考えられる。石材の種類は、東側壁も西側壁の両側壁共の主要な石材 227 石中では、チャート 72 石（31.7%）、頁岩～粘板岩 36 石（15.9%）、砂岩 29 石（12.8%）、ホルンフェルス 60 石（26.4%）、花崗岩 16 石（7.0%）、石英斑岩 11 石（4.8%）、玢岩 1 石（0.4%）であった。チャートとホルンフェルスで過半数を占め、頁岩～粘板岩、砂岩がこれに続く。これらの石材中には、4 区 6 グリット東側壁の五輪塔の地輪と思われる方形の花崗岩 1 石（写真図版 21－5・6）と、3 区 24 グリット東側壁の矢穴痕のある花崗岩 1 石（写真図版 21－1～4）が含まれている。石材の形状や大きさ、岩種から石垣 01SL の石材を、再利用した可能性が考えられる。

堆積層は 4 層で、特に 2-1～3 層には多量の瓦が含まれていた。この瓦は、先行遺構である素掘り溝 06SD から流入したものと、西側の大名屋敷の瓦、特に東側の塀の廃棄された瓦を中心とするものと考えられる。瓦以外の出土遺物についても、この溝内から出土したものが多く、向付、天目茶碗、皿、大皿、鉢、坏、碗等の食器と共に、搗鉢、羽釜といった調理具や食材であ

る巻貝（アカニシ）が出土しており、西側の大名屋敷の厨が調査地に近いところにあった可能性を高くしている。

石組溝 08SD は、石垣 05SL、道路 07SL とセットとなる遺構である。石垣 05SL の施工後、素掘り溝 06SD が一時的に機能していたようであるが、直ぐに正式な道路街区の施設として石組溝 08SD は整備されたようである。その施工は、高さ合わせ等に、極めて手慣れた石組みが看取される。また、4区6・7グリット貼り床（図9～11の2～20層）上には焚火跡（写真図版21-7・8）が残されており、冬季の施工であった可能性を示すものと推測される。これらのことから施工時期は、第5章第1節でも検討しているように、伏見城第IV a期の再建伏見城でも早い時期で、遅くとも朝鮮使節団を迎え徳川秀忠が征夷大将軍宣下を受けた慶長10年（1605）以前である可能性が高い。

今日までの伏見城の城下町発掘調査で確認されている石組溝の多く（2面石組溝や3面石組溝等の違いはみられる）が、この時期の街区割に伴う遺構であるとみられる。

石組暗渠排水溝 09SD

石組暗渠排水溝 09SD は、合掌石組みの暗渠排水溝（図21）である。道路 07SF と石組溝 08SD を東西に壊して設けられており、溝底の傾斜から西側に排水していたことが分かる。東端は検出していないが、石垣 05SL 根石設置溝から始まるようで、西側の大名屋敷跡近くまで延びるようである。

検出規模は、本体である石組みが、東西の延長が約 3.7 m、南北の幅が 0.6～0.95 m、高さが 0.4～0.58 m の規模である。

その構造は、南北の掘方幅が 1.36～1.6 m、深さ 0.45～0.65 m の底の平らな掘方に、長さ 0.4～0.9 m、厚さ 0.1～0.4 m のほぼ同じ大きさの 2 石の板石を、掘方内に直接東西に置いて、南北から山形に合掌させ繋げるものである。石材の隙間や上部には、石塊で隙間なく塞がれ、上部は瓦が多く敷かれていた。石材の種類は、主要な石材 25 石中では、チャート 6 石（24.0%）、頁岩～粘板岩 13 石（52.0%）、砂岩 2 石（8.0%）、ホルンフェルス 3 石（12.0%）、花崗岩 1 石（4.0%）であった。頁岩～粘板岩で過半数を越え、次いでチャート、ホルンフェルスと続く。石材の形状や大きさ、石材の種類から石組溝 08SD の石材を、再利用したものと考えられる。

暗渠内には底辺 0.4～0.5 m、高さ 0.3～0.4 m の三角形の空間ができており、2 層の堆積層がみられ、頂部には未だに僅かな空間が残っていた。暗渠の埋め戻しは 4 層以上で行われ、特に最上部は締まりの強い礫を多く含む層で行われ、路面の復原を意識していたものとみられる。

この暗渠排水溝 09SD は、西側の大名屋敷は勿論であるが、石組溝 08SD 廃絶後の遺構である。石垣 05SL については解体前か解体後であるか不明ではあるが、石垣が解体されていたならば入るであろう花崗岩の割れ石（木っ端）が全く入っていないこと、解体以前で石垣下の雨水を西側に排水し、道路 07SF がいまだに利用されていた時期と考えることができる。道路 07SF が利用されていないのであれば、暗渠にする意味がないことはいままでのことから施工時期は、伏見城第IV a期末か第IV b期の元和期と考えることができる。



- | | | |
|---|---------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1 | 10YR5/3にぶい黄褐色 | 締まり強い、粒子細かい、 $\phi \sim 1\text{mm}$ の砂粒を少量含む $\phi 5 \sim 20\text{mm}$ の礫を含む |
| 2 | 10YR5/4にぶい黄褐色 | 締まり極強、粒子細かい、 $\phi \sim 1\text{mm}$ の砂粒を含む $\phi 5 \sim 7\text{mm}$ の礫を含む
明赤褐(5YR5/8)の酸化鉄を全体的に含む |
| 3 | 10YR4/4褐色 | 締まり強い、粒子細かい、 $\phi \sim 1\text{mm}$ の砂粒を極微量含む $\phi 5 \sim 9\text{mm}$ の礫を少量含む
明オリーブ灰(5GY7/1)のシルト質土ブロックを微量含む 明赤褐色(5YR5/8)の酸化鉄を微量含む |
| 4 | 7.5YR3/3暗褐色 | 締まり強い、粘性強い、粒子細かい、 $\phi \sim 2\text{mm}$ の砂粒を極微量含む
灰白色(7.5YR8/1)のシルト質土ブロックを微量含む $\phi \sim 8\text{mm}$ の礫を極微量含む |
| 5 | 10YR4/3にぶい黄褐色 | 締まり弱い、粒子粗い、 $\phi \sim 20\text{mm}$ の礫を多量に含む $\phi \sim 1\text{mm}$ の砂粒を中量含む 堆積土 |
| 6 | 10YR3/3暗褐色粘土 | 締まり強い、粒子細かい、4層に類似 |

図 21 石組暗渠排水溝 09SD 平面図・断面図 (1:40)

第4章 遺物

第1節 遺物の概要

今回出土した遺物は、コンテナパット（P27）に32箱（表3）であった。土師器、輸入陶磁器、国産陶器、鉄製品、銭貨、瓦などである。遺物の時期は、戦国時代から江戸時代中期の間のものである。

以下には、遺構毎に出土遺物を記述する。

表3 出土遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
戦国時代～江戸時代中期	土師器、輸入陶磁器、国産陶磁器、鉄製品、銭貨、瓦	32	土師器4点、輸入陶磁器6点、国産陶磁器36点、鏝1点、刀子1点、釘2点、銭2点、瓦149点（コンテナ6箱）	0	26
合計		32箱	201点（コンテナ6箱）	0箱	26箱

第2節 土器

土器は、瓦に比べると非常に少なく、実測可能な破片は全て実測した（図22・23、表6）。

1-1～11層

1は瀬戸・美濃系の菊皿である。口縁部は短く「く」の字に立ち上がり、端部は輪花状を呈する。見込みには拭き取りによると思われる釉ハギが見られる。高台部は露胎で底部には重ね焼きの痕跡が看守される。内外面には灰釉が掛かる。時期は京Ⅻ期新、17世紀中葉に属する。

試掘3トレンチ埋土層

2、3は試掘3トレンチからの出土である。2は瀬戸・美濃系の鉢である。見込みには重ね焼きの為の胎土目の痕跡が看守される。高台部は削り出しで露胎である。内外面には灰釉が掛かる。時期は大窯4後期16世紀末～17世紀初頭に属する。

3は瀬戸・美濃系（志野）の碗である。口縁部は内湾気味に立ち上がる。内外面には長石釉を掛ける。外面下半は露胎である。時期は大窯第4段階末期、17世紀初頭に属する。

1-12～15層

4は京焼の碗である。内外面には施釉する。高台には回転ヘラ削りを行い、露胎である。時期は京ⅩⅢ期中、17世紀末～18世紀初頭に属する。

攪乱

5は軟質施釉陶器の碗である。内外面には緑釉が掛かる。高台部には回転ヘラ削りを行う。時期は大阪城跡の類例から17世紀中葉～後半に属する可能性がある。

6は焼締陶器（信楽）の挿鉢である。内面には6条を単位とするすり目が施される。また、使

用痕が確認される。時期は形態からみて 2 期新段階新相、16 世紀末～17 世紀初頭に属する。

試掘 2 トレンチ埋土層

7 は肥前系染付磁器の碗である。口縁部は内湾気味に立ち上がる。内外面には施釉する。外面には草花紋を施す。所謂「くらわんか手」である。時期は 18 世紀初頭を中心とすると考えられる。

1-28 層

8 は瀬戸・美濃系の天目茶碗である。内面には黒色に施釉される。高台には回転ヘラ削りを施し、露胎である。時期は連房 I 期、17 世紀前半中葉に属する。

1-16～27 層

9 は中国製の白磁皿である。見込みには蛇の目釉ハギが看守される。内外面には施釉される。高台部には回転ヘラ削りを行う。露胎で砂目が残る。時期は京Ⅻ期古、16 世紀末～17 世紀初頭に属する。

10 は肥前系染付磁器の皿である。内外面には施釉し、高台は露胎である。時期はⅡ-1 期、1610～1630 年に属する。

11 は華南三彩の壺である。内外面には施釉されるが、外面にはつる草紋が線刻され、草は黄色で、その周囲は緑色で彩色される。断面からみて壺の胴部の一部の可能性が考えられる。時期は明末（17 世紀前葉）に属する。

12 は焼締陶器（丹波）の播鉢である。内面には 4 条を単位とするすり目が施される。時期は形態からみてⅡ型式、17 世紀前半に属する可能性が考えられる。

石組溝 O8SD

13 は土師器の羽釜である。胴部から口縁部が「く」の字に折れ曲がり、端部は上方に摘み上げる。内外面にヨコナデを施す。時期は京Ⅻ期古、16 世紀末～17 世紀初頭に属する。

14 は土師器の皿である。口縁部にはヨコナデを施す。形態から見て時期は京Ⅻ期中、17 世紀

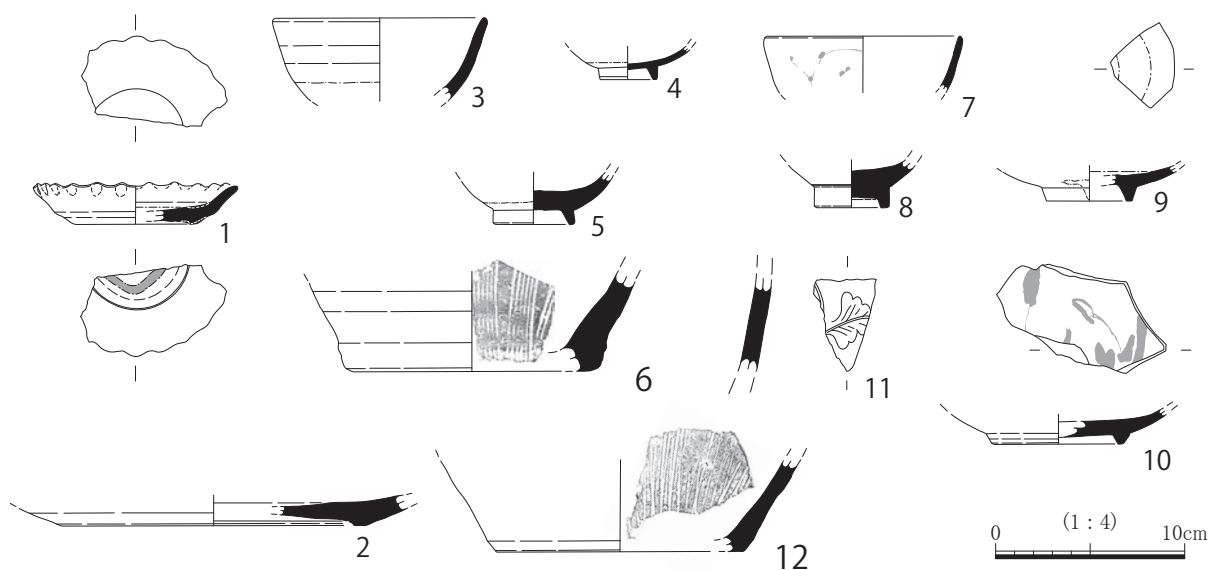


図 22 土器（表土層（1・4・8～12）、攪乱（5・6）、試掘トレンチ埋土層（2・3・7））

前半中葉に属する。

15 は中国製の染付碗である。漳州窯系と思われる。時期は明末清初、16 世紀末～17 世紀初頭に属すると考えられる。

16 は瀬戸・美濃系の皿である。口縁部は内湾気味に立ち上がる。内面に稜を持つ。内外面には灰釉を施す。時期は京Ⅻ期中、17 世紀前半中葉に属する。

18 は肥前系陶器(唐津)の向付である。平坦な底部から体部が立ち上がる。内外面に施釉する。高台には回転ヘラ削りを施し、露胎である。時期はⅡ期、1610～1650 年に属する。

19 は肥前系陶器(唐津)の碗である。内外面には施釉する。高台には回転ヘラ削りを施し、露胎である。時期はⅡ期、1610～1650 年に属する。

20 は肥前系陶器(唐津)の向付である。体部は短く立ち上がり、外反して口縁部へと続く。内外面に施釉し、内面に図柄を施す。高台には回転ヘラ削りを施し、露胎である。また、一部に胎土目が残る。時期はⅠ-2 期、1594～1610 年に属する。

17、21 は焼締陶器(信楽)の摺鉢である。17 は口縁部には 6 条を一単位とするすり目が看守され、端部は面を持つ。時期は形態からみて 3 期古段階、17 世紀前半に属する。21 は口縁部である。6 条を一単位とするすり目が施される。端部は内面に稜を持ち、面取りする。時期は形態から 3 期古段階、17 世紀前半に属する。

22、23、24 は焼締陶器(丹波)の播鉢である。22・23 の内面にはヘラですり目が施される。時期はすり目がヘラであることから見てⅠ類に属し、16 世紀後葉～17 世紀後葉までの幅を持つ。24 は底部である。恐らく 3 条を一単位とするすり目が施されるが、使用によって摩滅している。時期は形態からみて 2 期新段階新相、16 世紀末～17 世紀初頭に属すると考えられる。

25 は土師器の皿である。全体的に薄く、口縁端部はとがり気味である。時期は形態からみて京Ⅻ期古(新相)、16 世紀末～17 世紀初頭に属する。

26 は土師器皿である。口縁端部は丸く収める。時期は形態からみて京Ⅻ期中、17 世紀前半中葉に属する。

27 は瀬戸・美濃系の天目茶碗口縁部である。口縁部は短く立ち上がり、端部はやや丸く収める。内外面には褐釉を掛ける。外面下半は露胎である。時期は大窯 4 後半、16 世紀末に属する。

28 は瀬戸・美濃系の天目茶碗高台部である。内面は黒色に施釉する。高台には回転ヘラ削りを施し、露胎である。時期は大窯第 4 段階後半、16 世紀末に属する。

29 は中国製染付皿である。内外面は施釉し、内面には紋様が施される。高台は露胎である。全体的に造りが薄手であることからみて景德鎮窯系の可能性が考えられる。時期は明末清初、16 世紀末～17 世紀初頭に属すると考えられる。

30 は焼締陶器(備前)の播鉢である。内面には 5 条を一単位とするすり目を施す。時期は形態からみて東 3 号窯跡に類例が見られることから、16 世紀後半後葉に属すると考えられる。

31、32、33 は焼締陶器(信楽)の播鉢である。31 は 6 条を一単位とするすり目を施す。時期は形態からみて 2 期新段階新相、16 世紀末～17 世紀初頭に属すると考えられる。32 は内面

に6条を一単位とするすり目が施される。また、輪積の痕跡が看守される。時期は形態からみて2期新段階新相、16世紀末～17世紀初頭に属すると考えられる。33は内面に4条を一単位とするすり目を施すが、使用痕の為の摩滅している。時期は形態からみて2期新段階新相、16世紀末～17世紀初頭に属すると考えられる。

34は肥前系陶器(唐津)の皿である。口縁部は短く「く」の字に外反して、端部はつまみ上げる。内外面に施釉し、外面下半は露胎である。内面には紋様が施される。時期はI-2期、1594～1610年に属する。

35は瀬戸・美濃系の天目茶碗である。体部は内湾気味に立ち上がり、短く口縁部へと続く。内外面に褐釉を掛ける。時期は大窯第4段階後半、16世紀末に属する。

36は中国製染付の碗である。内外面は施釉し、それぞれ二重の圏線が巡る。形態及び呉須からみて漳州窯系の可能性が考えられる。時期は明末清初、16世紀末～17世紀初頭に属する。

37は焼締陶器(備前)の盤である。内外面に回転ナデを施す。時期は形態からみて東3号窯跡に類例が存在することから16世紀後半後葉に属すると考えられる。

38は焼締陶器(備前)の壺である。肩の張った体部から細い首部が伸びる。時期は形態からみて東3号窯跡に類例が存在することから、16世紀後半後葉に属すると考えられる。

39は瀬戸・美濃系(志野)の向付である。内外面に施釉し、底部には回転ヘラ削りを施す。時期は大窯後期、16世紀末～17世紀初頭に属する。

40は中国製陶胎染付である。形態から見て皿の可能性もある。内外面に施釉し紋様が施される。時期は京XII期古、16世紀末～17世紀初頭に属すると考えられる。

41は焼締陶器(信楽)の播鉢である。内面には6条を一単位とするすり目が施されるが、使用痕によって摩滅している。時期は形態からみて2期新段階新相、16世紀末～17世紀初頭に属すると考えられる。

42は瀬戸・美濃系陶器の鉢である。内外面に施釉する。見込みには胎土目が残る。時期は連房I期、17世紀前半中葉に属する。

43は焼締陶器(信楽)の播鉢である。口縁部は端部を丸く収める。内面には6条を一単位とするすり目を施す。時期は形態からみて3期古段階、17世紀前半に属する。

素掘り溝 06SD

44は瀬戸・美濃系の大皿である。口縁部は短く折れ曲がり、端部を丸く収める。内外面に回転ナデを施し、灰釉を掛ける。時期は大窯第4段階後半、16世紀末に属する。

45は焼締陶器(信楽)の播鉢である。比較的口縁部に近い体部の一部の可能性がある。内面には5条を一単位とするすり目が施される。時期は形態からみて2期新段階新相、もしくは3期古段階、16世紀末～17世紀前半に属すると考えられる。

石組暗渠排水溝 09SD

46は焼締陶器(信楽)の播鉢である。6条を一単位とするすり目を施すが、使用痕によって摩滅している。時期は2期新段階新相、16世紀末～17世紀初頭に属すると考えられる。

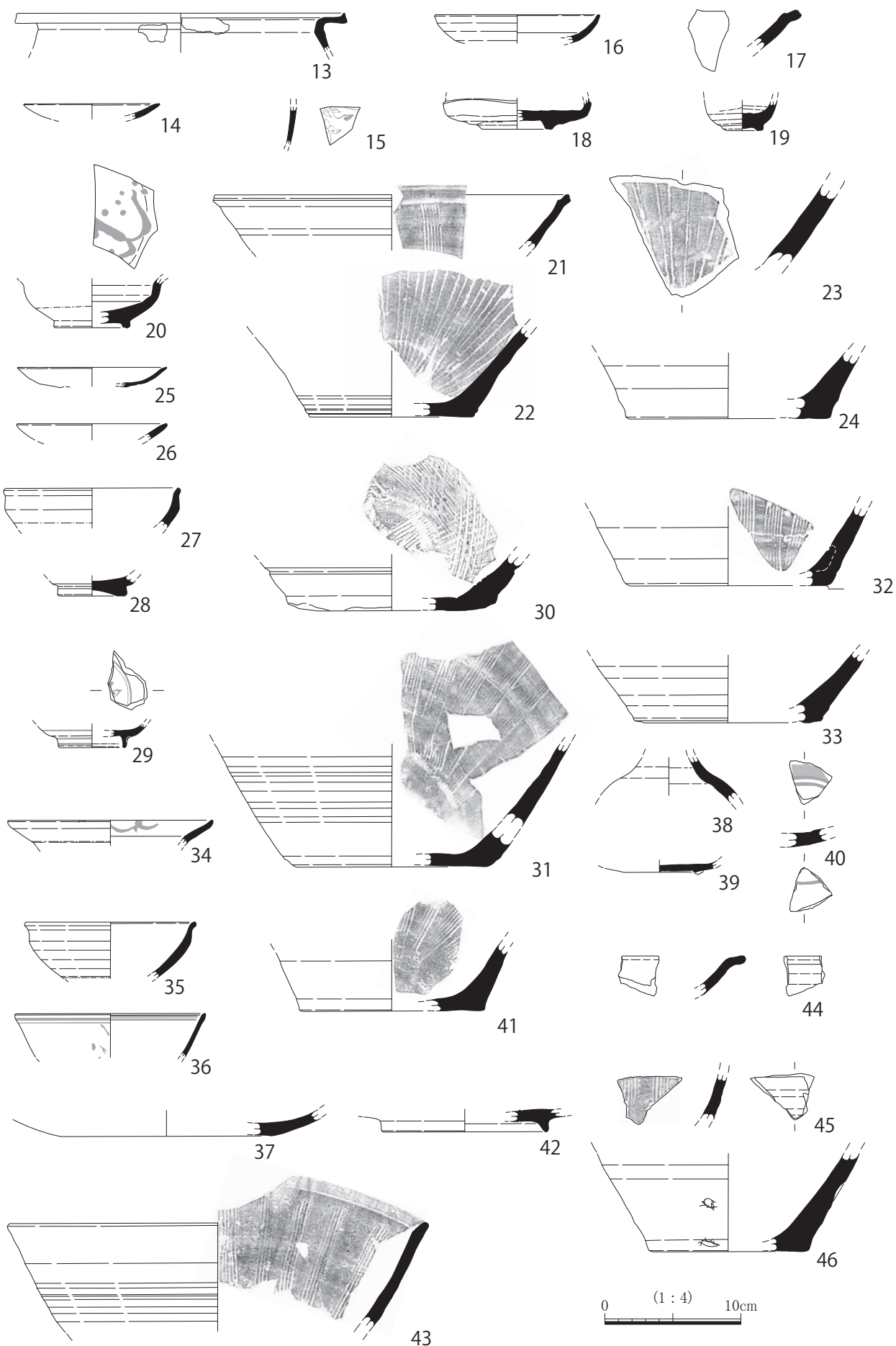


図 23 土器 (石組溝 08SD (13 ~ 43)、素掘り溝 06SD (44・45)、石組暗渠排水溝 09SD (46))

第3節 金属製品

鉄製品には鉄鍬らしきもの1点、鉄製刀子が1点、鉄釘が2点あり、銅製品には銅銭が2点ある（(図24、表7・8)）。

1. 鉄製品

6-4・5層

47は鍬の可能性はある。現状は折れ曲がっており、断面形は四角を呈する部分と、断面が円形の部分があり、両先端である鍬身と茎先端は失われている。

48は刀子の一部の可能性はある。一辺に刃部を作る。

6-12層

49は釘である。両端を欠損する。断面形は四角を呈する。

石垣05SL・根石設置溝

50は釘である。断面形は四角を呈し、先端は尖る。頂部は欠損する。

2. 銭貨

銭貨は2点出土した。

6-12層

51は宋銭で「元豊通寶」である。初鑄は1078年である。

3-1層

52は宋銭で「天聖元寶」である。初鑄は1023年である。

<引用参考文献>

- 小森俊寛『京から出土する土器の編年的研究』京都編集工房 2005年
加納敬二・上村和直『平安京左京北辺四坊八町』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2004年
畑中英二「生産⑤『信楽』近世の信楽焼』『江戸時代のやきもの』（財）瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター 2006年
石井啓「生産⑦『備前』』『江戸時代のやきもの』（財）瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター 2006年
長谷川真「生産⑥『丹波』近世丹波焼の諸相』『江戸時代のやきもの』（財）瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター 2006年
森村健一「流通④『関西』江戸時代のやきもの』『江戸時代のやきもの』（財）瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター 2006年
『江戸時代の美濃窯』（財）瀬戸市埋蔵文化財センター 2003年
藤澤良祐「第6章 小結』『大萱窯跡群 牟田洞窯跡』愛知学院大学文学部歴史学科 2016年
藤澤良祐「付編1 連房式登窯導入期における天目茶碗について』『大萱窯跡群 弥七田窯跡群』愛知学院大学 2017年
『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会 2000年
『枚方宿の陶磁器』枚方市教育委員会・（財）枚方市文化財研究調査会 2001年
『軟質施釉陶器の成立と展開』関西陶磁史研究会 2004年

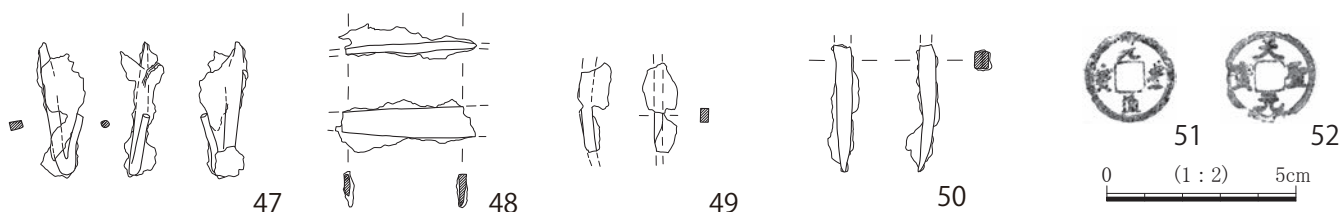


図24 金属製品（鉄製品（47～50）、銭貨（51・52））

第4節 瓦

瓦類は、素掘り溝 06SD 上層や石組溝 08SD 等を中心に大量に出土した。しかし、その量の多さから十分な整理が実施できていないのが実情である。特に雑巾瓦と称せられる平瓦や丸瓦の類は、不要となったものを、限られた場所に埋める必要があったためか、小さく破砕しているため、完形品の 1/6 以下の破片が極めて多く、接合は短時間の整理作業では不可能であった。ここでは、軒瓦と飾り瓦、鬼瓦かと思われるものはその全てを掲載し、平瓦と丸瓦については、出土時点で完形に近かったものを極一部掲載しその責を果たしたい。

また、同範の確認については、範詰めの際の当たりなどによっても差異が大きく生じている。さらに、同一範でも範の部分によっても歪みが必然的にあり、破片による復元値は大きく差異が生じる。さらに、他の出土例との拓本による照合は、紙の伸縮や採拓テクニック等により無理がある。よって、ある程度便宜的に分類したものであることをお断りしておく。

1. 軒丸瓦

軒丸瓦の文様は、紋所文と三巴文の 2 種である。なお、巴の巻方向は、京都市内での報告例から、尾から頭の方で記載する。紋所文には 2 類あり、桐文（1 類）は A のみの 1 種類、菊文（2 類）は A～C の 3 種類である。三巴文は、左巻き（3 類）と右巻き（4・5 類）で大別し、圏線の有るもの（4 類）と無いもの（5 類）、圏線に巴の尾部が付くか付かないか、さらに珠文は全てにあるので、珠文の大小と数で細分する。

軒丸瓦は、型式不明な破片も含めて総数 88 点である。

(1) 桐文（1 類 A） 53～63（図 25・26）

五三の桐文である。中央に五個の蕾状の花を、両端に三個の同様な蕾状の花を配する。下にひろがる三枚の葉には、葉脈を表現する。瓦当径は、復元値で 14.8cm である。11 点（53～63）が出土した。

丸瓦との接合方法の分かるものは無い。どの点もよく燻焼され、銀化しているものがある。瓦当周縁側面を横ナデした後に、周縁上を丁寧にナデる。瓦当面上に離れ砂の確認できない 54～56・61・63 と、確認できる 53・57～60・62 がある。瓦当裏面は右下がりに斜めにナデた後、丸瓦接合部を指オサエの後に円弧にナデ、下半の顎部裏側を際立たせるかのように強く円弧に横ナデする。丸瓦凹面にはコビキ B が残る（54・55・56）。丸瓦凸面は縦板ナデとし、さらに瓦当周縁側面部のみ横ナデする。瓦当面に漆（生漆）の痕跡を残すものが 1 点（54）ある。

出土地点は、石垣 05SL・根石設置溝から 62・63 が、素掘り溝 06SD から 55～57・59 が、石組溝 08SD から 58・60・61 が、素掘り溝 06SD と石組溝 08SD を壊す石組暗渠排水溝 09SD 掘方から 53・54 が出土した。

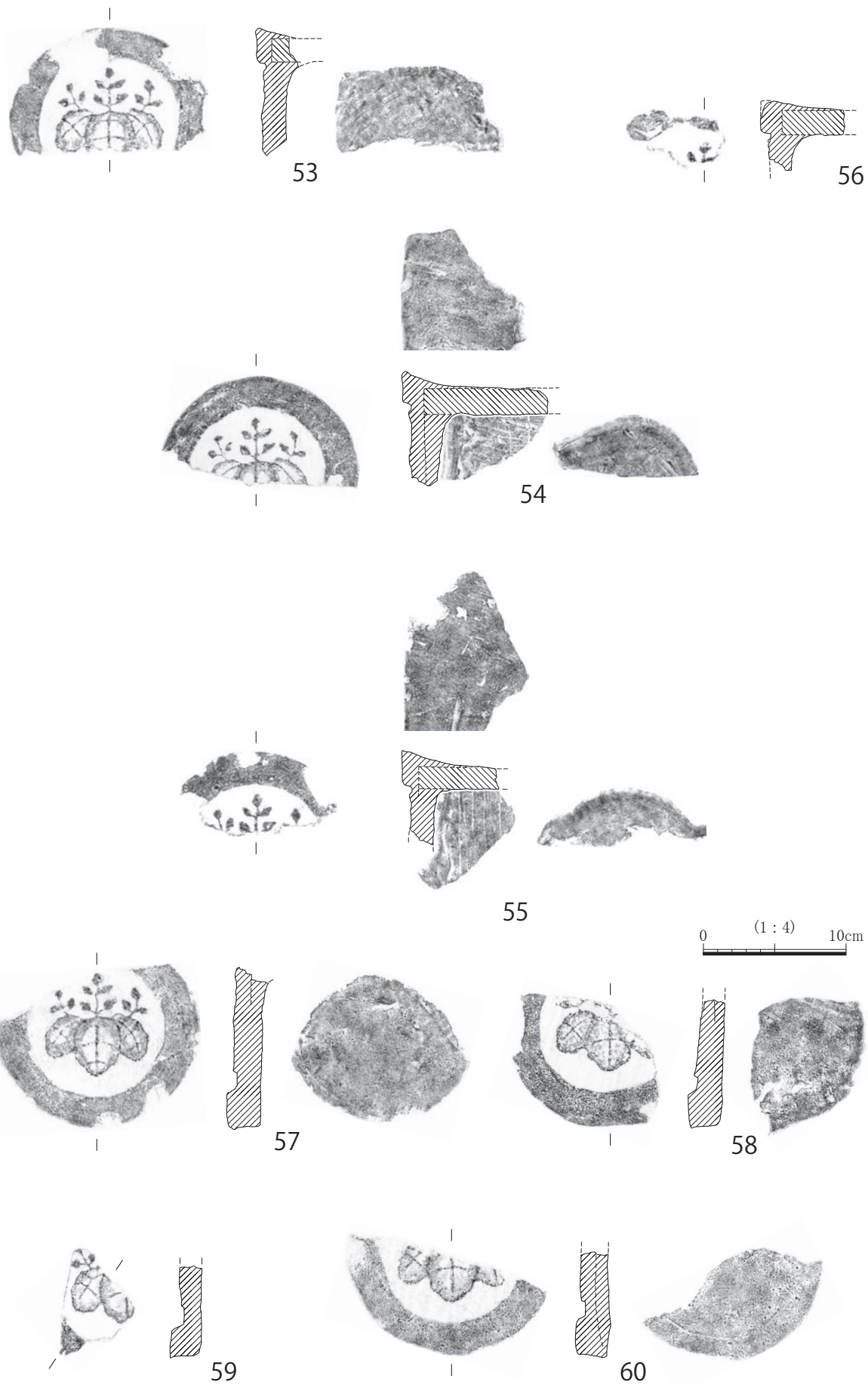


図25 軒丸瓦（桐文1類Aの1）

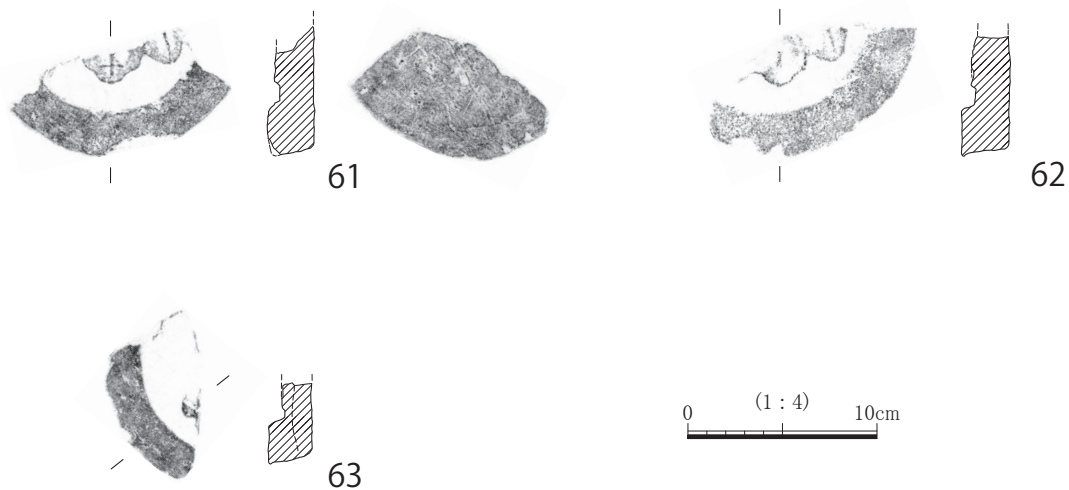


図26 軒丸瓦（桐文1類Aの2）

(2) 菊文（2類A～C） 64～66（図27）

A～Cの3種類を確認した。

菊文2類A 64

Aは他例から八弁の花弁と、その間に八弁の間弁を二重に、中央に小さな中房を表現し、周縁を備えるものである。Aは三例中では最も範のレリーフ表現が豊かで、花弁先端が丸く間弁の始まりとなっている。瓦当径の復元値が12.2cmの小型品である。1点（64）が出土した。

桐文1類と同じ調整手法で、瓦当周縁側面を横ナデした後に、周縁上を丁寧に横ナデしており、瓦当面上に離れ砂を用いる。瓦当裏面は右下がりに斜めにナデた後、丸瓦接合部を指オサエの後に円弧にナデ、下半の顎部裏側を際立たせるかのように強く円弧に横ナデする。

出土地点は、試掘5Tr.埋土から出土した。

菊文2類B 65

BもA同様に他例から八弁の花弁と、その間に八弁の間弁を二重に、中央に小さな中房を突出して表現し、周縁を備えるものである。Bは丸い花弁先端が間弁の始まりよりも内側にあり、間弁と周縁の間が開く。瓦当径の復元値が14.6cmの中型品である。1点（65）が出土した。

他の瓦当の調整手法は、Aと同じである。丸瓦凸面は縦板ナデとし、さらに瓦当周縁側面部のみ横ナデする。

出土地点は、石組溝08SDから出土した。

菊文2類C 66

CもA・Bと同様に他例から八弁の花弁と、その間に八弁の間弁を二重に、中央に少し大きめの中房を突出して表現し、広い周縁を備えるものである。CもB同様に丸い花弁先端が間弁の始まりよりも内側にあり、間弁と周縁の間が開く。瓦当径の復元値が16.0cmの大型品である。1点（66）が出土した。

他の瓦当の調整手法は、A・Bと同じである。丸瓦凹面にはコビキBが残る。丸瓦凸面は縦板

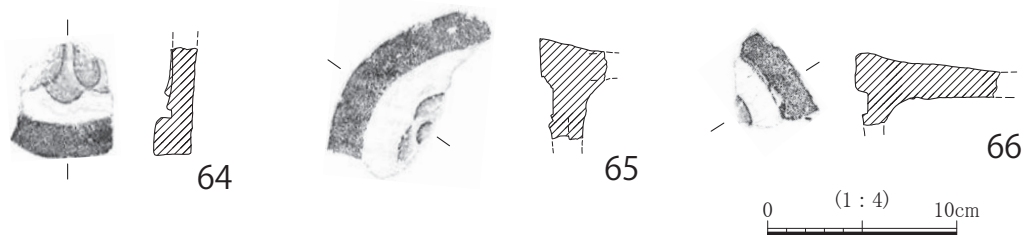


図 27 軒丸瓦（菊文 2 類 A～C）

ナデとする。

出土地点は、素掘り溝 06SD から出土した。

(3) 左巻三巴文（3 類 A・B） 67～72（図 28）

左巻連珠三巴文圏線無しで、A・B の 2 種類を確認した。

左巻三巴文 3 類 A 67

A は左巻きの三巴文で、圏線無し、珠文の有るものである。左巻きは右巻きに比べると、全体数の中では少ない。瓦当径は、復元値で 14.4cm である。珠文の復元数は 12 個である。1 点（67）が出土した。

瓦当径の復元値は下記の 3 類 B と変わるところが無いが、文様区径や巴の尾が長く形状が異なる。瓦当厚が 2.0cm と薄い。瓦当周縁側面を横ナデするが、周縁上は未調整である。離れ砂がみられる。瓦当裏面は右下がりに斜めにナデた後、丸瓦接合部を指オサエの後に円弧にナデ、下半の顎部裏側を際立たせるかのように強く円弧に横ナデする。

出土地点は、石組溝 08SD から出土した。

左巻三巴文 3 類 B 68～72

B は左巻きの三巴文で、圏線無し、珠文の有るものである。瓦当径は、復元値で 14.6cm と 3 類 A と変わらない。珠文の復元数は 12 個である。5 点（68～72）が出土した。

瓦当厚が 1.6～2.0cm と薄い。瓦当周縁側面を横ナデするが、周縁上は未調整である。離れ砂がみられる。瓦当裏面は右下がりに斜めにナデた後、丸瓦接合部を指オサエの後に円弧にナデ、下半の顎部裏側を際立たせるかのように強く円弧に横ナデする。丸瓦接合法は、69 で B1 の、72 で B2 の丸瓦にカキメを入れて行う接合法をとっている。丸瓦が一部残る 68 は、弦幅 13.0cm、弧深 4.0cm、丸瓦厚 1.7cm で、凹面にはコビキ B が残る。凸面は縦板ナデとする。面取りは 2 面成形である。

出土地点は、素掘り溝 06SD から 71 が、石組溝 08SD から 68～70・72 が出土した。

(4) 右巻三巴文（4 類 A～E） 73～80（図 29）

右巻連珠三巴文圏線有り、A・B は珠文数の多いもの、C～E には小型品と大型品を含むものである。

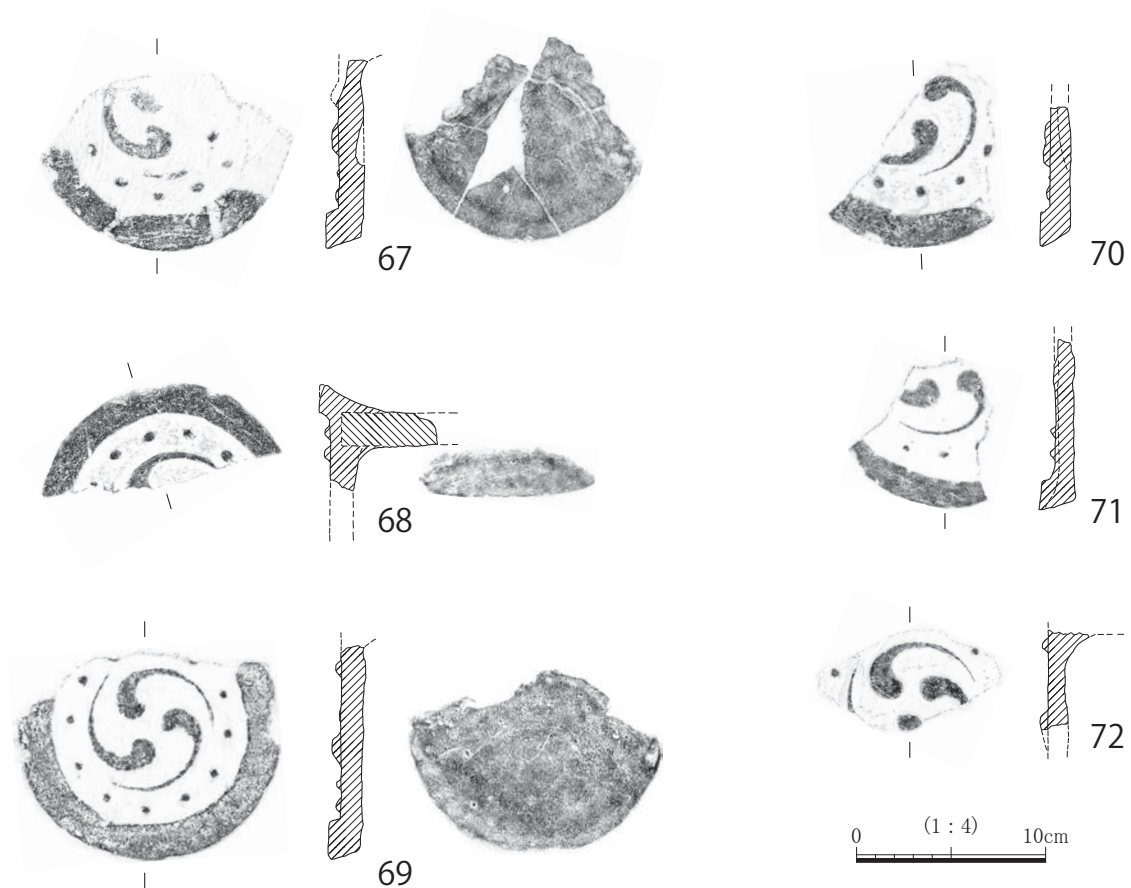


図 28 軒丸瓦 (左巻三巴文 3 類 A・B)

右巻三巴文 4 類 A 73

A は右巻きの三巴文で、圏線有り、珠文の有るものである。瓦当径は、不明であるが推測を大きくした復元値で 14.0cm 前後である。珠文の復元数は 19 個である。1 点 (73) が出土した。また、73 は金箔瓦である。

瓦当厚が復元値 1.8cm で薄い。焼成は硬質で、燻焼が見られない。文様の突出度が高く、巴の尾が細く長く圏線に接する。端正な彫りである。瓦当面に離れ砂はみられない。周縁は残存しない。瓦当裏面は右下がりに斜めにナデた後、丸瓦接合部を指オサエの後に円弧にナデる。

出土地点は、石垣 05SL・根石設置溝から出土した。

右巻三巴文 4 類 B 74

B は右巻きの三巴文で、圏線有り、珠文数の多いものである。瓦当径は、復元値で 14.2cm である。珠文の復元数は 25 個である。1 点 (74) が出土した。

瓦当厚が復元値 1.6cm で薄い。巴の尾が細く長く圏線に接する。瓦当周縁側面を横ナデするが、周縁上は未調整である。離れ砂がみられる。瓦当裏面は右下がりに斜めにナデた後、丸瓦接合部を指オサエの後に円弧にナデ、下半の顎部裏側を際立たせるかのように強く円弧に横ナデする。

出土地点は、石組溝 08SD から出土した。

右巻三巴文4類 C 75～77

Cは右巻きの三巴文で、圏線有り、珠文数の多いものである。瓦当径は、復元値で16.4～16.6cmと大型品である。珠文の復元数は19個である。3点（75～77）が出土した。

瓦当厚は復元値2.2cmである。巴の尾は圏線に接する。瓦当周縁側面を横ナデするが、周縁上は未調整である。離れ砂がみられる。瓦当裏面は右下がり斜めにナデる。瓦当裏面は丸瓦接合部を指オサエの後に円弧にナデ、下半の顎部裏側を際立たせるかのように強く円弧に横ナデするのは、他の例と変わらない。丸瓦が一部残る75は、弦幅13.3cm、弧深4.6cm、丸瓦厚1.5cmで、凹面にはコビキBが残る。凸面は縦板ナデとする。

出土地点は、石垣05SL・裏込（6-4・5層）から76が、石組溝08SDから75・77が出土した。

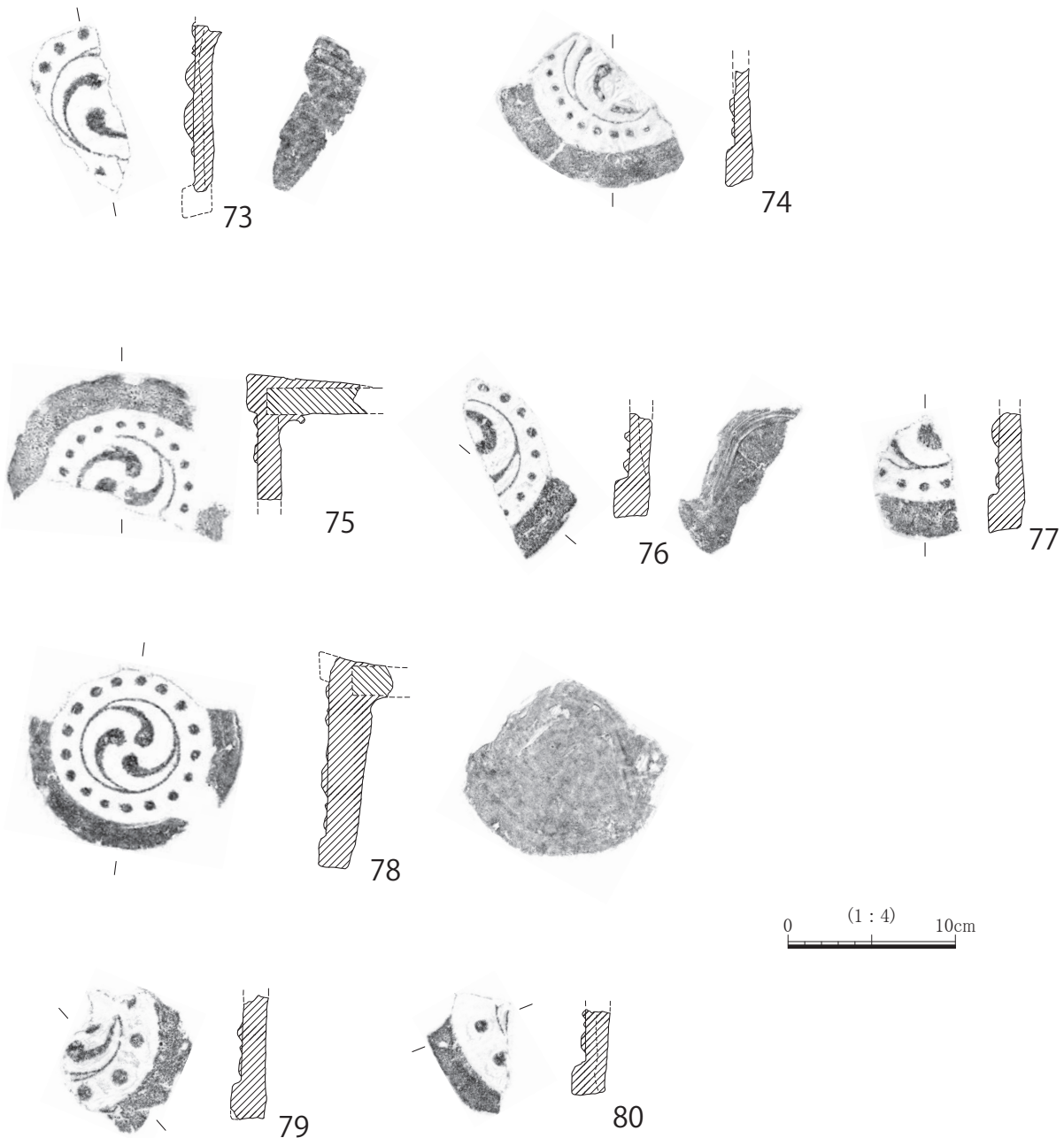


図29 軒丸瓦（右巻三巴文4類A～E）

右巻三巴文 4 類 D 78

D は右巻きの三巴文で、圏線有り、珠文数の多いものである。瓦当径は、12.7cm で、小型品である。珠文数は 17 個である。1 点 (78) が出土した。

瓦当厚は顎下部厚が 2.2cm であるが、顎上部厚は 3.2cm と厚い。巴の尾は圏線に接する。瓦当周縁側面を横ナデするが、周縁上は未調整である。離れ砂がみられる。瓦当裏面は右下がりに斜めに板ナデした後、丸瓦接合部を指オサエの後に円弧にナデ、下半の顎部裏側を際立たせるかのように強く円弧に横ナデする。丸瓦痕跡が残り弦幅 12.7cm、弧深 5.5cm、丸瓦厚 1.7cm である。

出土地点は、石組溝 08SD から出土した。

右巻三巴文 4 類 E 79・80

E は右巻きの三巴文で、圏線有り、珠文数の少ないものである。瓦当径は、復元値で 14.8 ～ 15.0cm である。珠文数は、復元値で 11 個である。2 点 (79・80) が出土した。

瓦当厚は 2.0 ～ 2.1cm である。巴の尾は圏線に接する。瓦当周縁側面を横ナデするが、周縁上は未調整である。離れ砂がみられる。瓦当裏面は右下がりに斜めに板ナデした後、丸瓦接合部を指オサエの後に円弧にナデ、下半の顎部裏側を際立たせるかのように強く円弧に横ナデする。

出土地点は、素掘り溝 06SD から 79・80 が出土した。

(5) 右巻三巴文 (5 類 A ～ L) 81 ～ 107 (図 30 ～ 33)

右巻連珠三巴文圏線無しで、A ～ C は珠文数の多いもの、D ～ L には大型品を含むものである。

右巻三巴文 5 類 A 81

A は右巻きの三巴文で、圏線無し、珠文の有るものである。瓦当径は 16.4cm で大型品である。珠文の復元数は 17 個である。1 点 (81) が出土した。また、81 は金箔瓦である。

瓦当厚は 3.0cm と厚い。巴の尾は細く長い。巴の彫りも立体感がある。瓦当周縁側面を横ナデし、周縁上も丁寧に横ナデする。離れ砂はみられない。瓦当裏面は三角形で、板ナデした後、丸瓦接合部をナデる。裏面が三角形になっているのは、丸瓦が厚いこと、ナデに用いる工具の形状からか。丸瓦接合法は、丸瓦広端面にキザミを入れる B1 である。丸瓦痕跡が残り弦幅 15.6cm、弧深 5.0cm で、丸瓦厚も 2.3cm と厚い。また、丸瓦幅と瓦当径を合わせるために、側縁をケズっている。

出土地点は、石組溝 08SD から出土した。

右巻三巴文 5 類 B 82

B は右巻きの三巴文で、圏線無し、珠文の有るものである。瓦当径は復元値が 14.0cm で、中型品である。珠文の復元数は 23 個である。1 点 (82) が出土した。

瓦当厚は 1.7cm と薄い。巴の尾は細く長い。瓦当周縁側面を横ナデし、周縁上も丁寧に横ナデし一部をケズル。離れ砂がみられる。瓦当裏面は右下がりに斜めにナデした後、丸瓦接合部を指オサエの後に円弧にナデ、下半の顎部裏側を際立たせるかのように強く円弧に横ナデする。

出土地点は、石組溝 08SD から出土した。

右巻三巴文5類 C 83

Cは右巻きの三巴文で、圏線無し、珠文の有るものである。瓦当径は復元値が17.0cmで、大型品である。珠文の復元数は23個である。1点(83)が出土した。

瓦当厚は2.3cmである。巴の尾は長い。瓦当周縁側面を横ナデし、周縁上も横ナデする。離れ砂がみられる。瓦当裏面は右下がりに斜めにナデた後、下半の顎部裏側を際立たせるかのように強く円弧に横ナデする。

出土地点は、石組溝08SDから出土した。

右巻三巴文5類 D 84・85

Dは右巻きの三巴文で、圏線無し、珠文の有るものである。瓦当径は14.4～14.8cmで、中型品である。珠文の復元数は11個である。2点(84・85)が出土した。

瓦当厚は2.4cm余り。巴に立体感はあるが、巴幅が細い。瓦当周縁側面を横ナデし、周縁上も横ナデする。離れ砂がみられる。瓦当裏面は右下がりに斜めにナデた後、丸瓦接合部を指オサエの後に円弧にナデ、下半の顎部裏側を際立たせるかのように強く円弧にナデる。丸瓦の一部が残る84は、弦幅14.8cm、弧深5.7cmで、丸瓦厚は1.8cmで、凹面にはコビキBが残る。凸面は縦板ナデとする。側面は2面成形とする。

出土地点は、石組溝08SDから84・85が出土した。

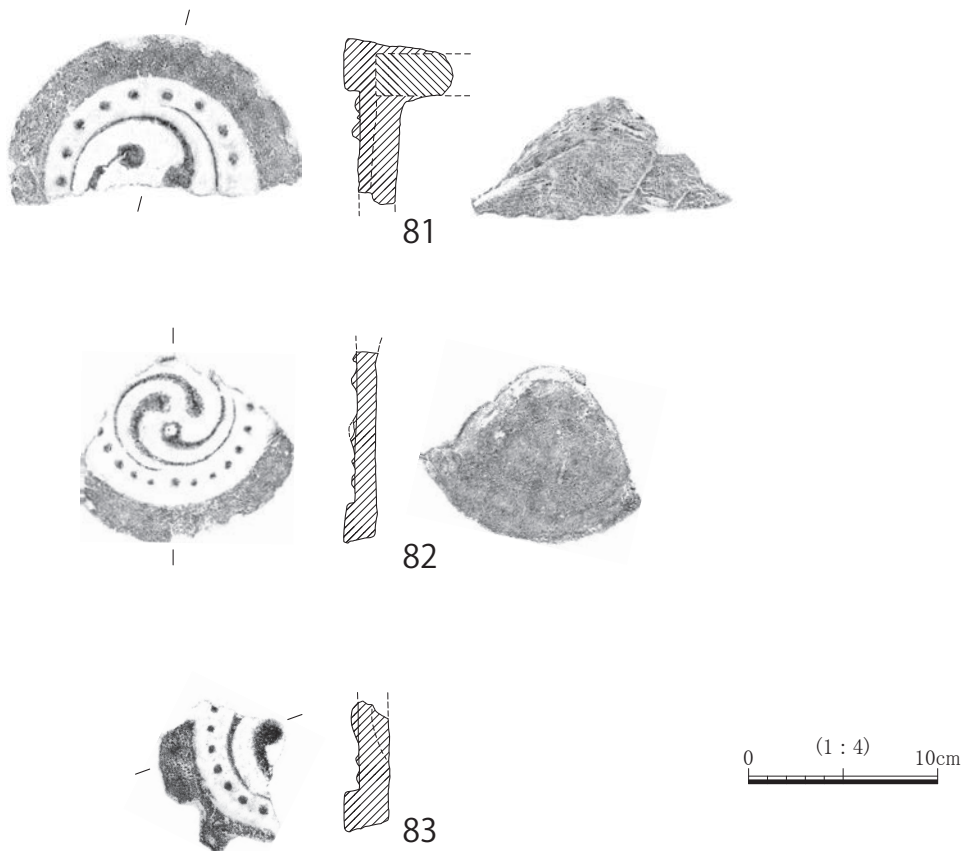


図30 軒丸瓦(右巻三巴文5類A～C)

右巻三巴文 5 類 E 86～98

E は右巻きの三巴文で、圏線無し、珠文の有るものである。瓦当径は 14.0～15.0cm であるが、完形品 86 では 14.2cm で、全長は復元値が 26.1cm である。中型品である。珠文は 11 個である。13 点 (86～98) が出土した。5 類 E が、軒丸瓦では最も出土量が多い。

瓦当厚は 1.6～2.5cm であるが、完形品 86 では 2.0cm である。巴の立体感はやや薄れ、高さも無く、幅が広がって台形状となってきた。瓦当周縁側面を横ナデし、周縁上は未調整とする。離れ砂がみられる。瓦当裏面は右下がりに斜めにナデた後、丸瓦接合部を指オサエの後に円弧にナデ、下半の顎部裏側を際立たせるかのように強く円弧にナデる。丸瓦接合法は 87 から、丸瓦広端面にキザミを入れる B1 である。

丸瓦の一部が残る 89 は、弦幅 13.2cm、弧深 4.3cm で、丸瓦厚は 1.8cm である。丸瓦の一部が残る 88 は、弦幅 14.0cm、弧深 4.5cm、丸瓦厚は 1.8cm で、凹面全面にコビキ B と荒いゴザ状圧痕が残る。凸面は縦板ナデとする。側面は 2 面成形とする。丸瓦が残る 86 は、弦幅 13.6cm、弧深 4.3cm、丸瓦厚は 1.7cm で、凹面にはコビキ B と玉縁に近い方に荒いゴザ状圧痕が残る。凸面は縦板ナデとする。側面は 2 面成形とする。体部に釘穴 1 孔を残す。丸瓦がほぼ完存する 87 から、丸瓦の元の大きさを復元することができる。玉縁の一部を失うが丸瓦計測値は、全長復元値は 24.6cm (8 寸)、体部長 21.5cm (7 寸)、玉縁長 b が 3.1cm (1 寸)、高さ 6.3cm (2 寸)、弦幅 12.1cm (4 寸)、弧深 4.8cm (1 寸 5 分)、丸瓦厚は 1.5cm (5 分) である。凹面には全面にコビキ B と荒いゴザ状圧痕が残る。凸面は縦板ナデとする。側面面取りは、2 面成形とする。釘穴距離約 5.6cm に、方形釘穴 1 孔 (1.4 × 1.2cm) を穿つ。

出土地点は、素掘り溝 06SD から 89 が、石組溝 08SD から 86～88・90～95・97 が、道路 07SL 整地層 (3-1 層) から 96 が、試掘 5Tr. 埋土層 (素掘り溝 06SD・石組溝 08SD カ) から 98 が出土した。

右巻三巴文 5 類 F 99

F は右巻きの三巴文で、圏線無し、珠文の有るものである。瓦当径の復元値は 14.4cm で、全長は 26.2cm である。中型品である。珠文の復元数は 11 個である。1 点 (99) が出土した。

瓦当厚は復元値 2.2cm である。E と同様で巴の立体感はやや薄れ、幅が広がって台形状となっている。瓦当周縁側面を横ナデし、周縁上は未調整とする。離れ砂がみられる。瓦当裏面は右下がりに斜めにナデた後、丸瓦接合部を指オサエの後に円弧にナデ、下半の顎部裏側を際立たせるかのように強く円弧にナデる。丸瓦接合法は不明である。丸瓦がほぼ完存するため、ここでも丸瓦の元の大きさを復元することができる。丸瓦計測値は、全長は約 24.7cm (8 寸)、体部長 21.0cm (7 寸)、玉縁長 b が 3.7cm (1 寸)、高さ 6.3cm (2 寸 1 分)、弦幅 12.6cm (4 寸 2 分)、弧深 4.8cm (16 分)、丸瓦厚は 1.7cm (5 分) である。凹面には全面にコビキ B と細い内叩き、玉縁部に荒いゴザ状圧痕が残る。凸面は縦板ナデとする。側面面取りは、2 面成形とする。釘穴距離約 5.4cm に、方形釘穴 1 孔 (1.2 × 0.9cm) を穿つ。

出土地点は、石組溝 08SD から出土した。

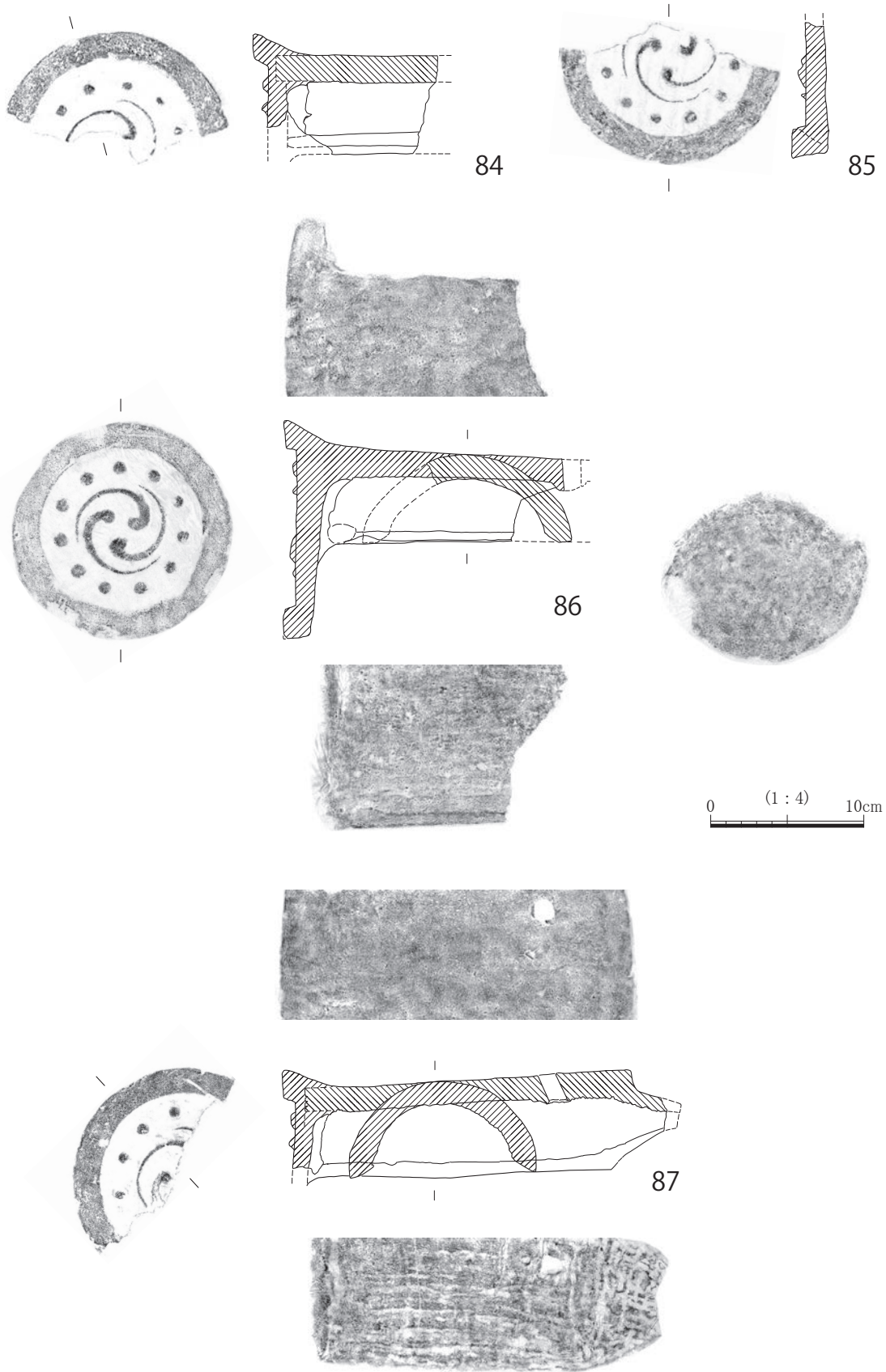


图 31 軒丸瓦 (右卷三巴文 5 類 D・E)

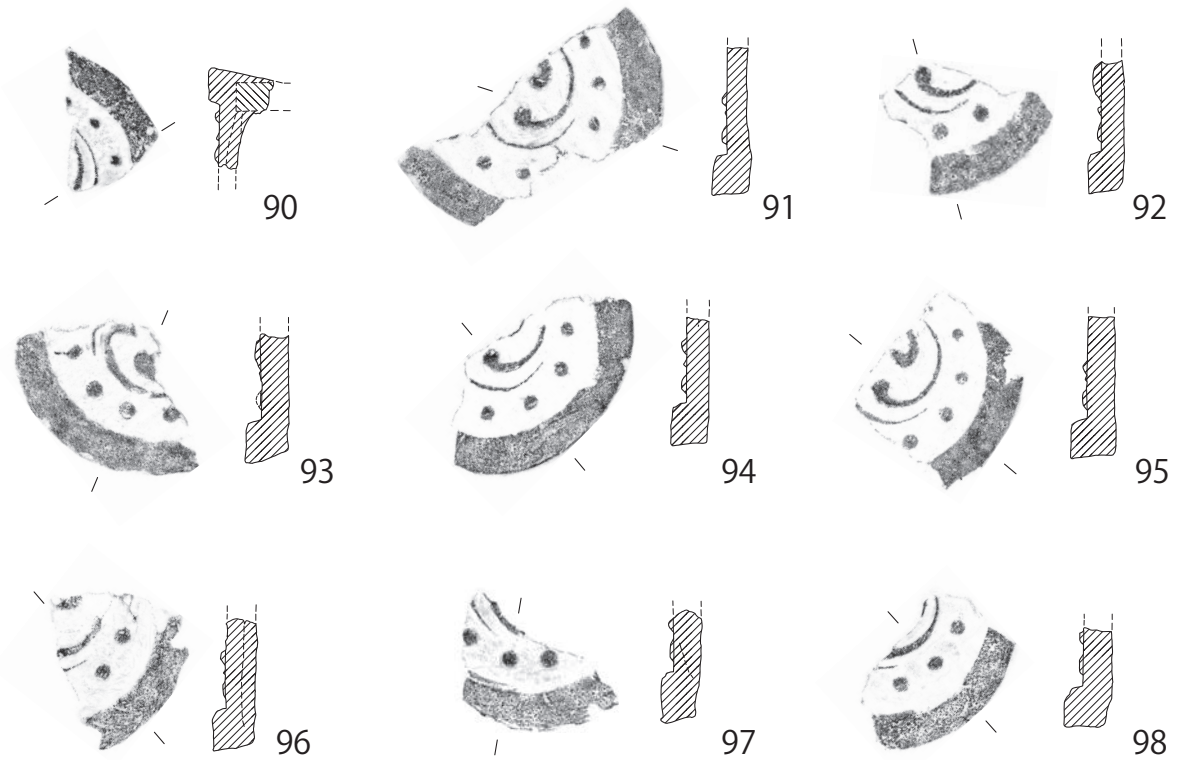
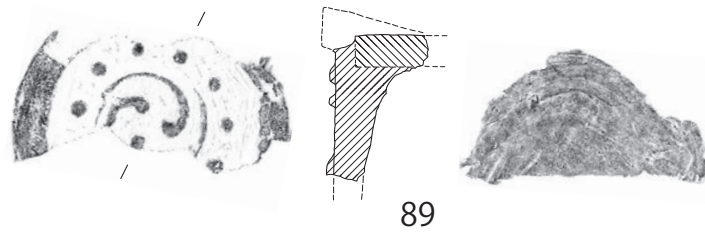
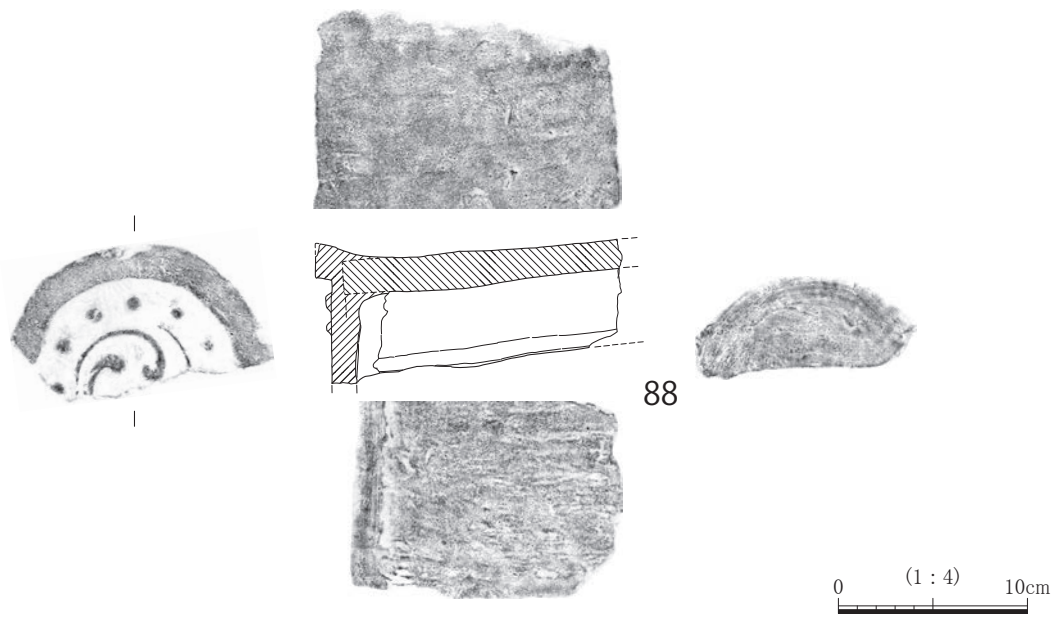


图 32 軒丸瓦 (右卷三巴文 5 類 E)

右巻三巴文 5 類 G 100

G は右巻きの三巴文で、圏線無し、珠文の有るものである。瓦当径の復元値は 14.4cm で、中型品である。珠文は小さく復元数は 12 個である。1 点 (100) が出土した。

瓦当厚は 2.2cm である。巴幅が広がって台形状となっており、尾の先端が珠文側に広がる。瓦当周縁側面を横ナデし、周縁上は未調整とする。離れ砂がみられる。瓦当裏面は右下がりに斜めにナデた後、丸瓦接合部を指オサエの後に円弧にナデる。丸瓦の一部が残る 100 には、凹面にはコビキ B が残る。凸面は縦板ナデとする。

出土地点は、石組暗渠排水溝 09SD から出土した。

右巻三巴文 5 類 H 101

H は右巻きの三巴文で、圏線無し、珠文の有るものである。瓦当径の復元値は 15.0cm で、中型品である。珠文の復元数は 12 個である。1 点 (101) が出土した。

瓦当厚は 2.5cm である。巴幅が広がって台形状となっている。瓦当周縁側面を横ナデし、周縁上は未調整とする。離れ砂がみられる。瓦当裏面は右下がりに斜めにナデた後、丸瓦接合部を指オサエの後に円弧にナデる。丸瓦の凹面にはコビキ B が残る。凸面は縦板ナデとする。

出土地点は、石組溝 08SD から出土した。

右巻三巴文 5 類 I 102

I は右巻きの三巴文で、圏線無し、珠文の有るものである。瓦当径の復元値は 16.6cm で、大型品である。珠文の復元数は 13 個である。1 点 (102) が出土した。

瓦当厚は 2.2cm である。三巴の中央が広がり、尾の先端が短い。瓦当周縁側面を横ナデし、周縁上は未調整とする。離れ砂がみられる。瓦当裏面下半は、顎部裏側を際立たせるかのように強く円弧にナデる。

出土地点は、1 層から出土した。

右巻三巴文 5 類 J 103・104

J は右巻きの三巴文で、圏線無し、珠文の有るものである。瓦当径は 14.0cm で、中型品である。珠文の復元数は 14 個である。2 点 (103・104) が出土した。

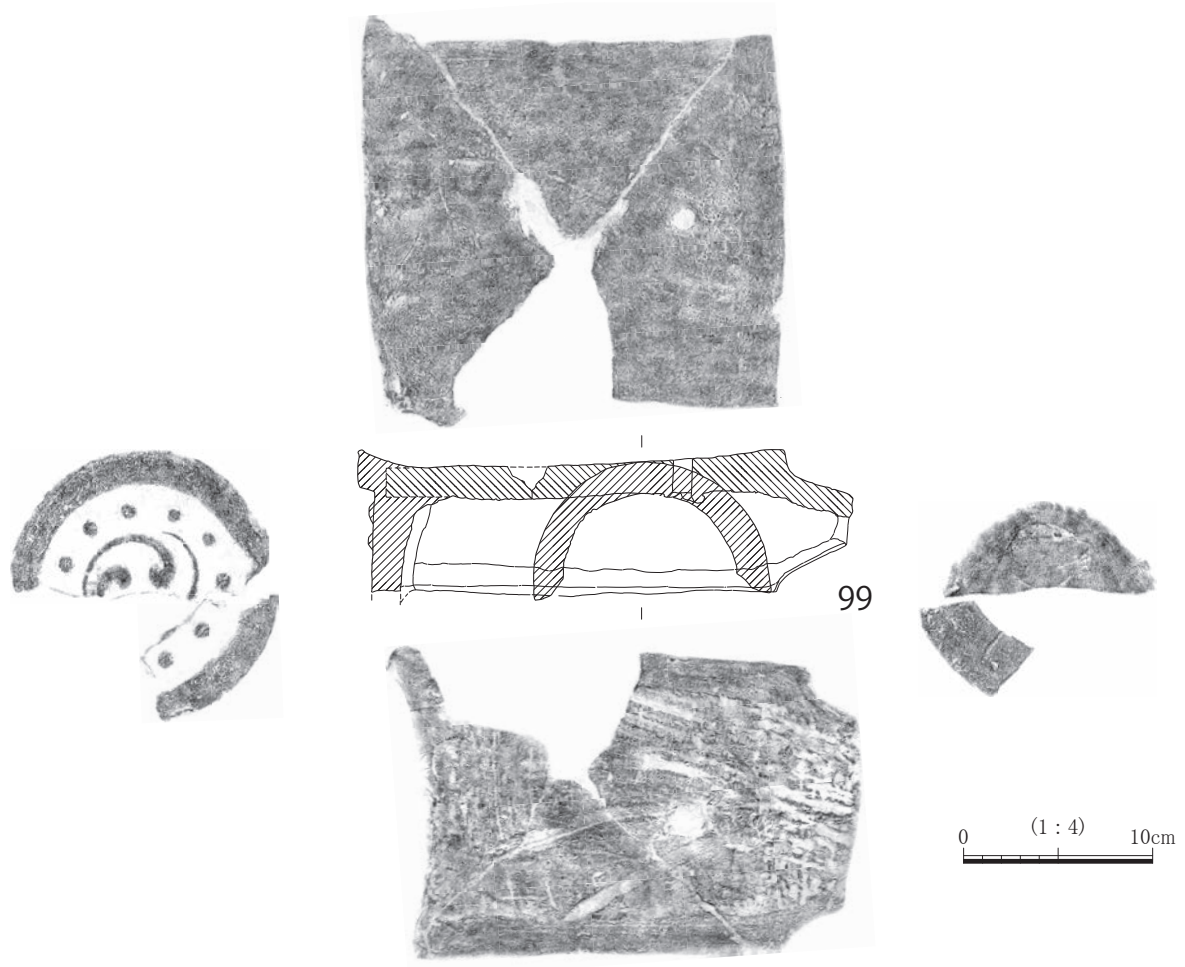
瓦当厚は 1.7cm と薄い。B と同様で巴の尾が細くて長く、巴の立体感も残る。瓦当周縁側面を横ナデし、周縁上も丁寧な横ナデとする。離れ砂がみられる。瓦当裏面は右下がりに斜めにナデた後、丸瓦接合部を指オサエの後に円弧にナデ、下半の顎部裏側を際立たせるかのように強く円弧にナデる。この裏面にコビキ B の痕跡が残る。丸瓦接合法は B1 である。丸瓦の一部が残る 103 には、凹面にコビキ B が、凸面に縦板ナデが残る。

出土地点は、石組溝 08SD から 103・104 が出土した。

右巻三巴文 5 類 K 105

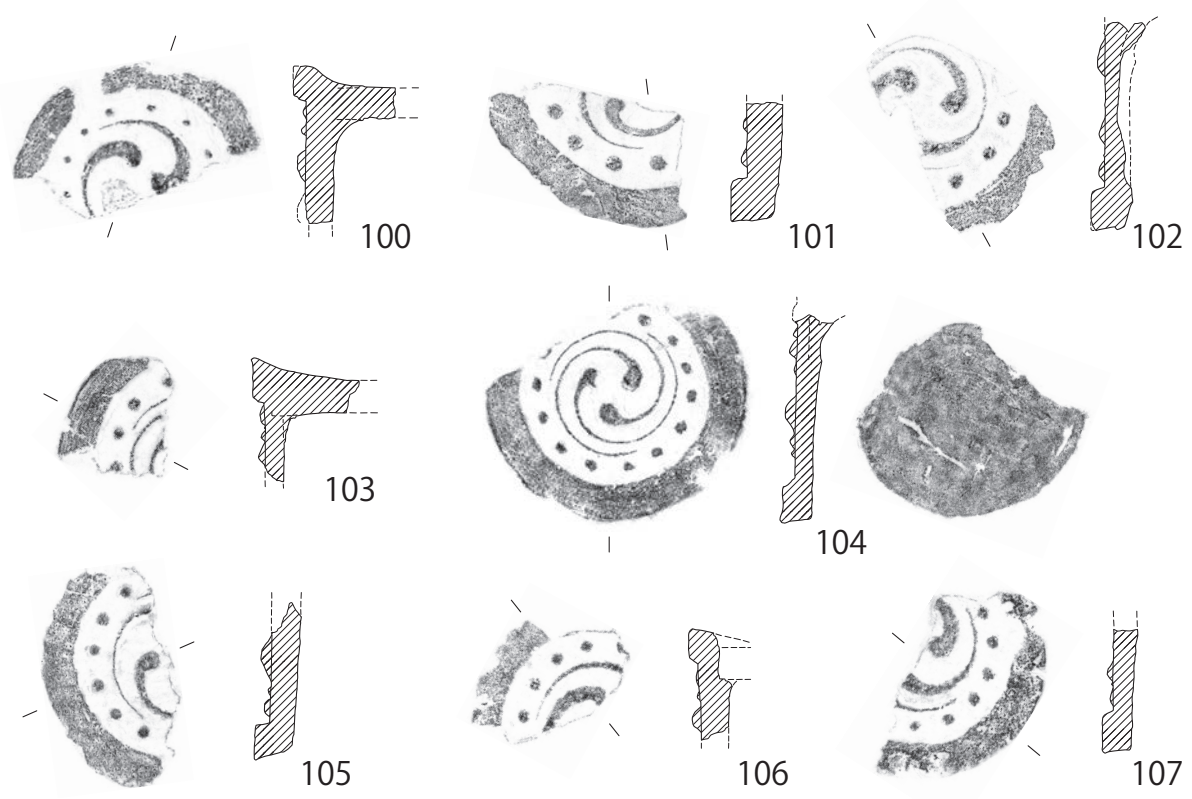
K は右巻きの三巴文で、圏線無し、珠文の有るものである。瓦当径の復元値は 14.4cm で、中型品である。珠文の復元数は 14 個である。1 点 (105) が出土した。

瓦当厚の復元値は 2.2cm である。巴の尾は長くはないが、巴の立体感も残る。瓦当周縁側面を



99

(1:4) 10cm



100

101

102

103

104

105

106

107

图 33 軒丸瓦 (右卷三巴文 5 類 F ~ L)

横ナデし、周縁上も丁寧に横ナデとする。離れ砂がみられる。瓦当裏面は右下がりに斜めにナデた後、丸瓦接合部を指オサエの後に円弧にナデ、下半の顎部裏側を際立たせるかのように強く円弧にナデる。丸瓦接合法は B1 である。

出土地点は、石組溝 08SD から出土した。

右巻三巴文 5 類 L 106・107

L は右巻きの三巴文で、圏線無し、珠文の有るものである。瓦当径の復元値は 14.2cm で、中型品である。珠文の復元数は 14 個である。2 点（106・107）が出土した。

瓦当厚は 1.5 ～ 2.2cm である。K と同様じで巴の尾は長くはないが、巴の立体感が残る。瓦当周縁側面を横ナデし、周縁上も丁寧に横ナデする。離れ砂がみられる。瓦当裏面は右下がりに斜めにナデた後、丸瓦接合部を指オサエの後に円弧にナデ、下半の顎部裏側を際立たせるかのように強く円弧にナデる。

出土地点は、素掘り溝 06SD から 106 が、石組溝 08SD から 107 が出土した。

(6) 型式不明瓦 108 ～ 140 (図 34)

軒丸瓦瓦当部の破片 33 点（108 ～ 140）である。巴文のみのも 2 点（108・109）、巴文と珠文のもの 3 点（110 ～ 112）、珠文のみのも 1 点（113）、珠文と周縁のもの 23 点（114 ～ 136）、周縁のみのも 4 点（137 ～ 140）である。

出土地点は、3 区攪乱、1 層、石垣 05SL・裏込（6-4・5 層）、石垣 05SL・根石設置溝、断割トレンチ、石組暗渠排水溝 09SD、素掘り溝 06SD、石組溝 08SD 等から出土した。

なお、131 は珠文と周縁を残す破片で、瓦当径の復元値 15.4cm、瓦当厚は 1.9cm である。離れ砂は確認できない。瓦当周縁側面を横ナデし、内傾斜の周縁上を丁寧にナデる。瓦当裏面下半は、顎部裏側を際立たせるかのように強く円弧にナデる。周縁と珠文（と巴）に生漆にベニガラを混ぜたと考えられる赤色漆上に金箔を押しした、金箔瓦である。赤色漆を塗布したものは、この 1 点のみである。

出土地点は、石組溝 08SD から出土した。

これらも含め、型式不明瓦については、ここでは敢えて無理に復元値による分類をせずに、報告するに留める。

2. 軒平瓦

軒平瓦の文様は、左右が対称な均整唐草文と思われるものが主で、これに花文（菊文）や巴文があるが、これも左右対称配置である。成形技法は、全て「瓦当貼付式断顎」技法であるが、ここでは、凡例に示す 3 種類の軒平瓦接合方法で分類した。A 技法は、通常の厚みの平瓦の広端面に、平瓦広端部下の凸面顎貼付け範囲にカキメを施し、範に平瓦広端面を押し付け、別粘土を顎部に充填し調整したものである。B 技法は、通常の厚みの平瓦凸面広端部を斜めに切り落とし、カキメを施すなどして、そこに別粘土を充填し調整したものである。C 技法は、厚みを薄くした平瓦



图 34 軒丸瓦 (型式不明)

を上周縁とし、平瓦広端部下の凸面顎貼付け範囲にカキメを施し、範に平瓦広端面を押し付け、別粘土を顎部に充填し調整したものである。

軒平瓦の面取りは、縁が残存するものについては、瓦当部の面取りを周縁上縁上部で行う b である。141 では周縁下縁上（範内側）も面取りを行う。

軒平瓦の顎部裏面と平瓦の接合調整（凡例の付図参照）については、平瓦と瓦当が明確な段となる a 調整が 1 類 A・B、2 類、3 類 B・E 類に、横ナデによるものが 2 類中にも現れ、1 類 C～K、3 類 A・C・D・F～H ではそのほとんどを横ナデ b 調整とする。

軒平瓦は、型式不明な破片も含めて総数 41 点である。

(1) 顎貼付け A 技法 141～168 (図 35・36)

唐草文 1 類 A 141・142

A は唐草文で、瓦当厚 5.2～5.4cm、文様区高 3.6cm、平瓦厚 2.0～2.2cm である。2 点（141・142）が出土した。

中心飾りは不明である。第一唐草が中心飾りの下から、第二唐草が上から、子葉を下から配すもので、唐草二転で構成される。唐草は単線で、幅は細く突出し、巻き込み部で幅が広くならないもので、巻き込みもそれほど深くない。子葉は単線で、上端で外反する。離れ砂がみられる。周縁下縁の上と顎裏側下を面取りする。軒平瓦と平瓦の接合調整については a である。側面は 1 面成形である。重い瓦である。大型瓦に相当する。

出土地点は、1 層から 142 が、石垣 05SL 裏込栗石層である 6-3 層から 141 が出土した。

唐草文 1 類 B 143

B は唐草文で、瓦当厚 4.3cm、文様区高 3.1cm、平瓦厚 2.0cm である。1 点（143）が出土した。金箔瓦である。

中心飾りは不明である。第一唐草は中心飾りの下から、第二唐草は上から配すもので、唐草二転で構成される。唐草は単線であるが、彫は綺麗で突出し、巻き込みの先端が丸みを帯び膨らむ、巻き込みは深くない。周縁上面をナデる。面取りも、離れ砂もみられない。軒平瓦と平瓦の接合調整については a である。

出土地点は、石組溝 08SD から出土した。

唐草文 1 類 C 144～148

C は唐草文で、完形品である 144 から上弦幅 20.3cm、下弦幅 20.3cm、弧深 2.5cm、瓦当厚 3.3cm、文様区幅 17.7cm、文様区高 2.5cm、平瓦厚 1.0cm である。5 点（144～148）が出土した。今回最も多く出土している種類である。

中心飾りは、点珠と三葉からなる。第一唐草は中心飾りの下から、第二唐草は上から配すもので、唐草二転で構成される。唐草は単線であるが、巻き込みの先端が若干丸みを帯びて、巻き込みは深くない。第二唐草と左右の脇周縁の間が空く。離れ砂がみられる。144 は面取りがみられないが、他の 146～148 は周縁上縁上に面取りがみられる。側面は 2 面成形である。

出土地点は、素掘り溝 06SD から 145・148 が、石組溝 08SD から 144・146・147 が出土した。

唐草文 1 類 D 149・150

D は唐草文で、半分以上を残す 149 から復元される数値は、上弦幅 (20.6) cm、下弦幅 (22.0) cm、弧深 2.3cm、瓦当厚 3.2cm、文様区幅 (16.0) cm、文様区高 2.0cm、平瓦厚 1.6cm である。2 点 (149・150) が出土した。

中心飾りは、点珠と三葉からなる。唐草文は下からの重線の 1 反転で、巻き込み先端は丸い。唐草と左右の脇周縁の間が 4.6cm と広く空き、さらに脇周縁幅 2.9cm と広い。離れ砂がみられる。周縁上面を強くナデる。149 は周縁上縁上に面取りがみられる。側面は 2 面成形である。

出土地点は、素掘り溝 06SD から 150 が、石組溝 08SD から 149 が出土した。

唐草文 1 類 E 151

E は中心飾りのみの破片である。瓦当厚 3.9cm、文様区高 2.3cm、平瓦厚 1.5cm である。1 点 (151) が出土した。

中心飾りは、単線の三葉で、中央に三角形の中央葉、上端が外反する脇からなる。唐草文は下から 1 反転するものとみられる。周縁上をナデる。周縁上縁上に面取りがみられる。範の摩滅が激しい。胎土中に黒色粒を含む。同文が多いもので、桃山毛利長門東町、桃山水野左近東町等出土例も多い。

出土地点は、石組溝 08SD から出土した。

唐草文 1 類 F 152

F は唐草文で、半分以上を残す 152 から復元される数値は、上弦幅 (21.2) cm、下弦幅 (22.0) cm、弧深 2.5cm、瓦当厚 3.4cm、文様区幅 (15.0) cm、文様区高 2.0cm、平瓦厚 1.7cm である。1 点 (152) が出土した。

中心飾りは、擬宝珠状の一葉のみである。第一唐草のみの 1 反転で、下からの単線で、巻き込み部で幅が広くなり先端が尖る。唐草文と左右の脇周縁の間が 4.0cm と広く空くばかりでなく、左右の脇周縁も (3.0) cm と広い。離れ砂がみられる。周縁上縁上に面取りがみられる。側面は 2 面成形である。

出土地点は、素掘り溝 06SDSD から出土した。

唐草文 1 類 G 153

G は唐草文で、脇周縁に近い部分を残す破片である。瓦当厚 3.4cm、文様区高 2.3cm、平瓦厚 1.9cm である。1 点 (152) が出土した。

中心飾りは不明で、第二唐草とみられる上からの単線の唐草文がある。巻き込み部で幅が広くならず、巻き込みは深い。唐草文と左右の脇周縁の間が 2.2cm と広く空くばかりでなく、左右の脇周縁も 3.4cm と広い。離れ砂がみられる。周縁上縁上に面取りがみられる。側面は 1 面成形である。

出土地点は、石組溝 08SD から出土した。

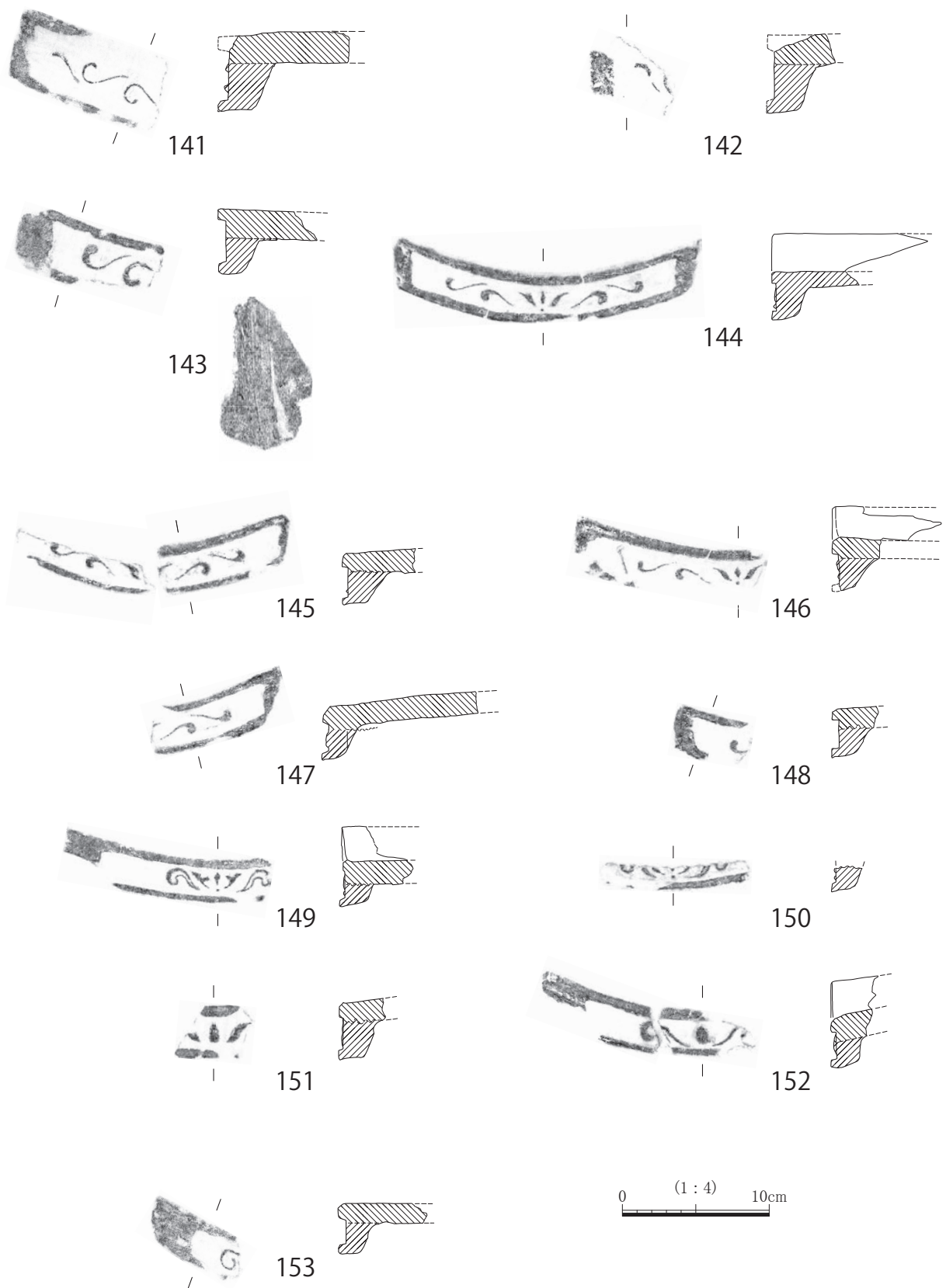


図35 軒平瓦 顎貼付けA技法(唐草文1類A~G)

唐草文 1 類 H 154 ~ 157

Hは唐草文で、瓦当厚 3.4 ~ 3.6cm、文様区高 2.1 ~ 2.3cm、平瓦厚 1.4 ~ 1.7cmである。4点(154 ~ 157)が出土した。2番目の出土量である。

中心飾りは、点珠と三子葉からなる。菱形の中央葉、外反する脇二葉からなる。第一唐草は点珠下から、第二唐草は上から配すもので、唐草二転で構成される。唐草は単線であるが、巻き込みの先端が若干丸みを帯びて膨らみ、巻き込みは深くない。唐草と左右の脇周縁の間が 1.5cm空き、脇周縁幅 3.7cmと広く空く。離れ砂がみられる。周縁上縁上に面取りがみられる。側面は 2面成形である。

出土地点は、石垣 05SL・裏込 (6-4・5層) から 156 が、素掘り溝 06SD から 155 が、石組溝 08SD から 154・155 が出土した。

唐草文 1 類 I 158

Iは唐草文で、瓦当厚 2.9cm、文様区高 1.9cm、平瓦厚 1.5cmである。1点 (158) が出土した。

中心飾りは、不明である。第二唐草とみられるものは下から配し、子葉はない。唐草は単線で巻き込みの先端が若干丸みを帯びて、巻き込みは深くない。唐草文と脇周縁の間が 1.3cm、左右の脇周縁も 3.1cm余りと広い。離れ砂がみられる。周縁上縁上に面取りがみられる。側面は 2面成形である。

出土地点は、石組溝 08SD から出土した。

唐草文 1 類 J 159

Jは中心飾りと唐草文の一部の破片である。瓦当厚 3.3cm、文様区高 2.1cm、平瓦厚 1.4cmである。1点 (159) が出土した。

中心飾りは、三子葉である。左に傾く 2子葉と右に傾く 1子葉からなる。第一唐草とみられるものは下から配す。離れ砂がみられる。周縁上縁上に面取りがみられる。

出土地点は、石組溝 08SD から出土した。

唐草文 1 類 K 160

Kは唐草文で、半分以上を残す 160 から復元される数値は、上弦幅 (19.6) cm、下弦幅 (19.8) cm、弧深 2.0cm、瓦当厚 2.8cm、文様区幅 (14.0) cm、文様区高 1.5cm、平瓦厚 1.5cmである。1点 (160) が出土した。今回の出土品の中では、比較的小型な瓦である。

中心飾りは、欠損し不明な点があるが、下向きの三葉かと思われる。唐草文は、第一唐草は上から、第二唐草は下から、第三唐草は第二唐草の上に配する意匠で、三反転で構成される。唐草は単線であるが、巻き込みの先端は細く、巻き込みは深くない。脇周縁幅 2.7cmである。離れ砂がみられる。周縁上縁上に面取りがみられる。

出土地点は、石組溝 08SD から出土した。

型式不明瓦 1 類 L 161 ~ 168

何れも周縁を含む破片で、161 ~ 163 は側縁の破片、164 ~ 166 は上縁の破片、167・168 は下縁で、8点ある。

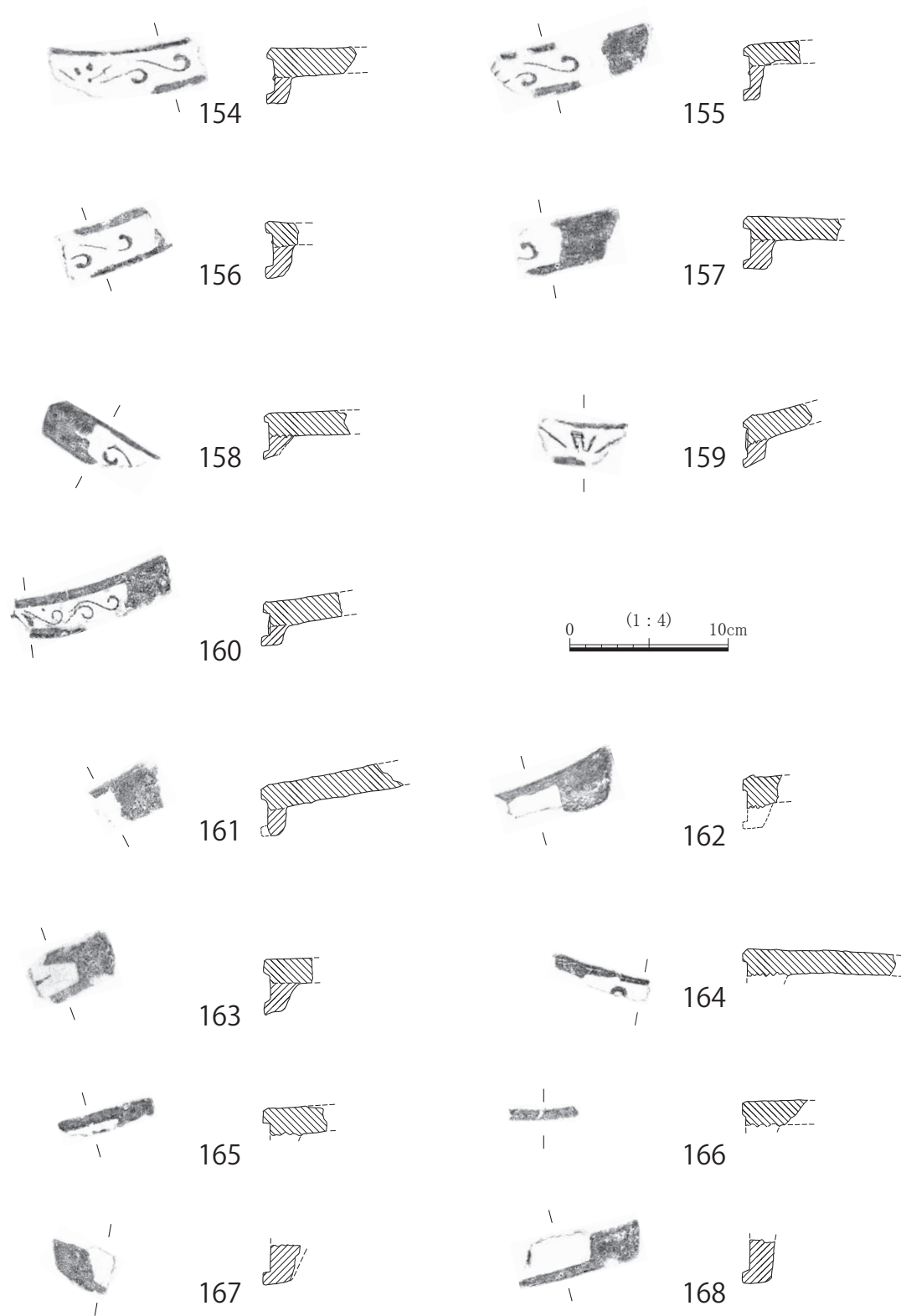


図 36 軒平瓦 顎貼付け A 技法 (唐草文 1 類 H ~ L)

顎の外れ方から顎貼付け A 技法に入れる。

出土地点は、素掘り溝 06SD から 165・167 が、石組溝 08SD から 161～164・166・168 が出土した。

これらも含め、型式不明瓦については、ここでは敢えて無理に復元値による分類をせずに、報告するに留める。

(2) 顎貼付け B 技法 169～172 (図 37)

唐草文 2 類 A 169・170

A は中心飾りと唐草文からなる。上弦幅 (23.0) cm、下弦幅 (22.6) cm、弧深 (2.5) cm、瓦当厚 4.7cm、文様区幅 (16.6) cm、文様区高 (2.9) cm、平瓦厚 1.8cm である。2 点 (169・170) が出土した。

中心飾りは、五三の桐文である。第一唐草は中心飾りの下から、第二唐草は第一唐草の上から配され、二反転する。単線で、巻き込みの先端を僅かに広げる。左の脇周縁は (2.8) cm である。離れ砂がみられる。周縁上縁上の面取りは行わない。側面は 1 面成形である。

出土地点は、石組溝 08SD から 2 点が出土した。

唐草文 2 類 B 171

B は唐草文のみ残る。瓦当厚 (4.8) cm、文様区高 (2.8) cm、平瓦厚 1.6cm である。1 点 (171) が出土した。金箔瓦である。

中心飾りは不明である。三反転する唐草文と考えられ、第一唐草は不明、第二唐草は上から、第三唐草は下から三反転するとみられる。単線で、第二唐草は巻き込みが深いが、第三唐草は巻き込みが浅い。右の脇周縁は (2.0) cm である。離れ砂がみられる。周縁上縁上の面取りは行わない。側面は凹面側も面取りするが、1 面成形である。

出土地点は、石組溝 08SD から出土した。

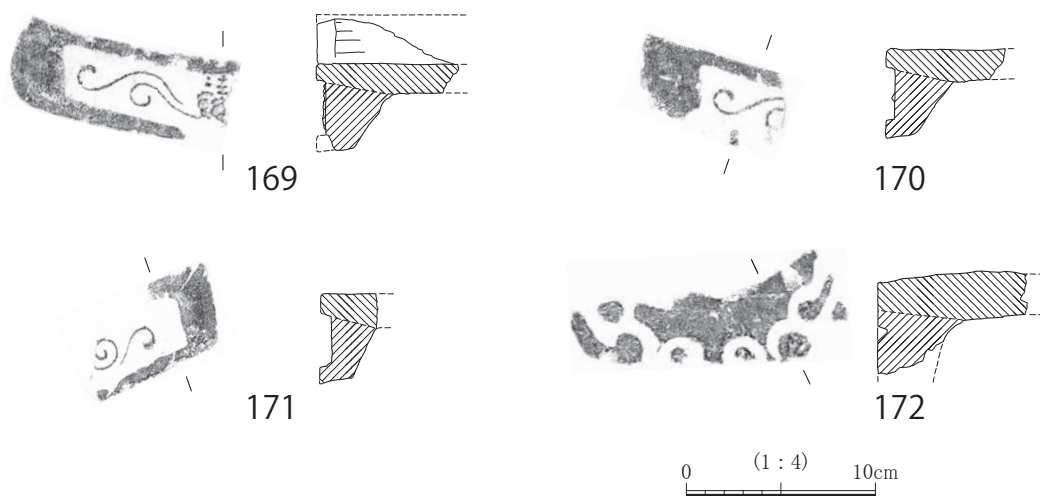


図 37 軒平瓦 顎貼付け B 技法 (唐草文 2 類 A・B、巴文 2 類 C)

巴文 2 類 C 172

C は巴文とも唐草文ともとれるものを配する、滴水瓦である。ここでは、巴文としておく。平瓦厚は 2.4cm と厚い。1 点 (172) が出土した。

中心飾りは、2 個の重線唐草文と巴文が合体した様な、U 字型に連なるものである。脇には、2 個一組の巴文的な文様を左右に配する。レリーフの感覚はなく、瓦の範としては立体感に乏しいが、粗略であるがゆえに力強さがある。元々は重線唐草文から派生した紋様と考えられる。桃山毛利長門東町出土滴水瓦とモチーフがよく似ているが、本例の方が後出的である。離れ砂はみられない。周縁上縁上の面取りは行わない。凸面には、ヘラ状の内叩きの様な圧痕が残る。胎土中に黒色粒が入る。

出土地点は、石組暗渠排水溝 09SD から出土した。

(3) 顎貼付け C 技法 173 ~ 181 (図 38)

花文 3 類 A 173

A は 3 個の花文からなる。上弦幅 (22.2) cm、下弦幅 (21.6) cm、弧深 (2.5) cm、瓦当厚 5.5 cm、文様区幅 (17.2) cm、文様区高 3.1cm、平瓦厚 1.6cm である。1 点 (173) が出土した。

六弁の花文を 3 個配したものである。左の脇周縁は 2.2cm である。離れ砂がみられる。周縁上縁上の面取りを行う。側面は 2 面成形である。桃山毛利長門東町出土瓦に類例がある。

出土地点は、石組溝 08SD から出土した。

唐草文 3 類 B 174

B は中心飾りと唐草文からなる。上弦幅 (20.2) cm、下弦幅 (19.2) cm、弧深 (2.0) cm、瓦当厚 4.9cm、文様区幅 (16.8) cm、文様区高 2.9cm、平瓦厚 1.2cm である。1 点 (174) が出土した。

中心飾りは、中央に子葉状のものが残るのみで、脇は不明であるが、三葉とみられる。唐草は単線で、第一唐草が下から、第二唐草も下で、二反転するものとみられる。左の脇周縁は 2.0cm である。離れ砂がみられる。周縁上縁上の面取りを行う。側面は 1 面成形である。

周縁上縁上の面取りを行う。

出土地点は、石組溝 08SD から出土した。

唐草文 3 類 C 175

C は唐草文のみが残る。瓦当厚 (4.5) cm、文様区高 (2.5) cm、平瓦厚 1.4cm である。1 点 (175) が出土した。

中心飾りは不明である。三反転する唐草文と考えられ、第一唐草は不明、第二唐草は上から、第三唐草は下からで、三反転するとみられる。単線で、巻き込み先端は丸みを持つが、巻き込みは浅い。右の脇周縁は 2.2cm である。離れ砂がみられる。周縁上縁上の面取りを行う。側面は 1 面成形である。

出土地点は、石組溝 08SD から出土した。

唐草文 3 類 D 176

D は唐草文のみが残る。瓦当厚 3.7cm、文様区高 2.3cm、平瓦厚 1.3cm である。1 点 (176) が出土した。

中心飾りは不明である。唐草文は、第一唐草は下から、第二唐草は上からで、二反転するとみられる。単線で、巻き込み先端は丸みをもち、巻き込みは深い。右の脇周縁は 4.0cm である。離れ砂がみられる。周縁上縁上に幅の広い面取りを行う。側面は 1 面成形である。

出土地点は、石組溝 08SD から出土した。

唐草文 3 類 E 177

E は中心飾りと唐草文からなる。瓦当厚 (4.1) cm、文様区高 2.6cm、平瓦厚 (1.2) cm である。1 点 (177) が出土した。

中心飾りは、点珠を欠くもので、中央の三子葉の先端には、逆三角形上の蕾が付き、脇には先端が内湾する子葉が配される。唐草文は単線で、一反転する。第一唐草は下からで、先端が丸みを帯び、巻き込みも深い唐草である。子葉は上からで、厚みを増して外反するものと思われる。

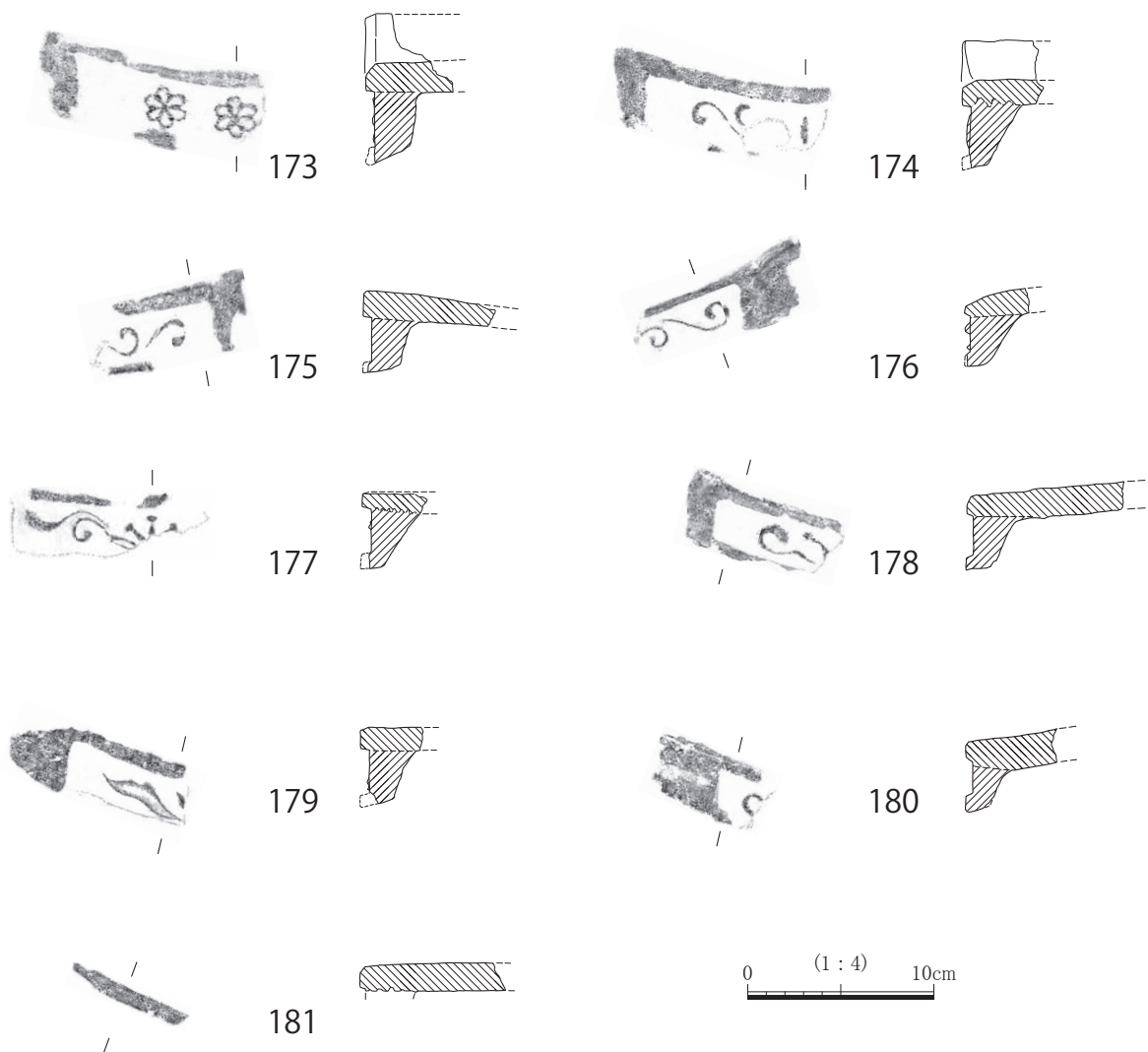


図 38 軒平瓦 顎貼付け C 技法 (花文 3 類 A、唐草文 3 類 B ~ I)

離れ砂がみられる。凹面が欠損しているため周縁上縁上が不明であるが、面取りを行っているものとみられる。桃山水野左近東町出土瓦に類例がある。

出土地点は、素掘り溝 06SD から出土した。

唐草文 3 類 F 178

F は中心飾りと唐草文からなる。瓦当厚 3.9cm、文様区高 2.4cm、平瓦厚 1.5cm である。1 点(178)が出土した。

中心飾りは三子葉と考えられるもので、中央は不明であるが、脇には大きく外反する子葉が配される。唐草文は下からの単線であるが、一度括れて先端は丸みを帯びて巻き込みのない唐草を一反転する。左の脇周縁は 1.8cm である。周縁の上面をナデる。瓦当面にはみられないが、凸凹面には離れ砂がみられる。周縁上縁上を面取りする。桃山毛利長門東町出土瓦に、本例に近いものがある。

出土地点は、石組溝 08SD から出土した。

唐草文 3 類 G 179

G は唐草文のみを残す。瓦当厚 (4.3) cm、文様区高 (2.6) cm、平瓦厚 1.4cm である。1 点 (179) が出土した。

中心飾りは、不明である。唐草文自体は無く、重線の子葉をもつもので、内側が窪み立体感があり、上部に括れがあり外反する。左の脇周縁は (3.0) cm と長い。離れ砂がみられる。周縁上縁上に面取りを行う。豊後橋北詰出土例にモチーフの似たものがある。

出土地点は、石組溝 08SD から出土した。

唐草文 3 類 H 180

H は唐草文のみを残す。瓦当厚 3.8cm、文様区高 2.1cm、平瓦厚 1.8cm である。1 点 (180) が出土した。

中心飾りも、唐草文も明確ではない。左の脇周縁は 3.6cm と長い。離れ砂がみられる。周縁上縁上に面取りを行う。側面は 2 面成形である。

出土地点は、石垣 05SL の裏込栗石層である 6-4・5 層から出土した。

型式不明瓦 3 類 I 181

I は周縁上縁の破片で、割れ方から顎貼付け C 技法に入れるが、型式不明な 1 点 (181) である。

出土地点は、石組溝 08SD から出土した。

3. 丸瓦

丸瓦 (図 39 ~ 42) は、全長の分かるものが 2 点あるのみで、他は全て破片である。いずれも玉縁式丸瓦と思われる。

182 は、丸瓦体部の破片で、丸瓦厚 2.0 ~ 2.4cm と厚い。凸面には、縦板ナデ (磨き) 調整がみられる。凹面には、コビキ A とは異なる左下がりのコビキ B (コビキ AB) と、布の縫い合わせ痕と布圧痕がみられる。側面は 2 面成形である。胎土中に黒色粒を含む。

この手の厚い瓦は、出土した瓦の全体に占める量は極めて少ないが、出土が散見された。

183も体部の破片で、丸瓦厚 1.6～1.7cmと薄い。凸面には、縦板ナデ調整がみられる。凹面には、左下下りのコビキ B（コビキ AB）と、吊り紐痕と布圧痕がみられる。側面は 2 面成形である。胎土中に黒色粒を含む。

184 は全長が残るもので、全長 23.9cm、体部長 20.2cm、玉縁長 b が 3.7cm、体部幅 12.8cm、高さ 6.8cm、丸瓦厚 1.6～2.0cmである。凸面には離れ砂やコビキ B の痕跡がみられ、縦板ナデ調整を主として、端部に横ナデ調整を行う。凹面には離れ砂、コビキ B の痕跡、布圧痕がみられ、玉縁部では内叩き（棒状叩き）がみられ、広端部（木口）を広く面取りし玉縁部を面取りする。側面は 2 面成形である。

185 も全長が残るもので、全長 24.9cm、体部長 21.8cm、玉縁長 b が 3.7cm、体部幅 13.1cm、高さ 5.9cm、丸瓦厚 1.6～1.8cmである。凸面には離れ砂がみられ、縦板ナデ調整を主として、端部に横ナデ調整を行う。凹面には離れ砂、コビキ B の痕跡がみられるが、明確な袋状の痕跡は不明である。広端部（木口）を広く面取りし、玉縁部も面取りする。側面は 2 面成形である。

186 は体部から玉縁部にかけての破片である。玉縁長 b が 4.1cm、体部幅 13.1cm、高さ 6.3cm、丸瓦厚 1.5～1.7cmである。凸面には離れ砂、コビキ B 痕がみられ、縦板ナデ調整を主として、端部に横ナデ調整を行う。凹面には離れ砂、コビキ B の痕跡、玉縁部に荒いゴザ状の圧痕を残し、玉縁部を面取りする。側面は 2 面成形である。胎土中に黒色粒を含む。

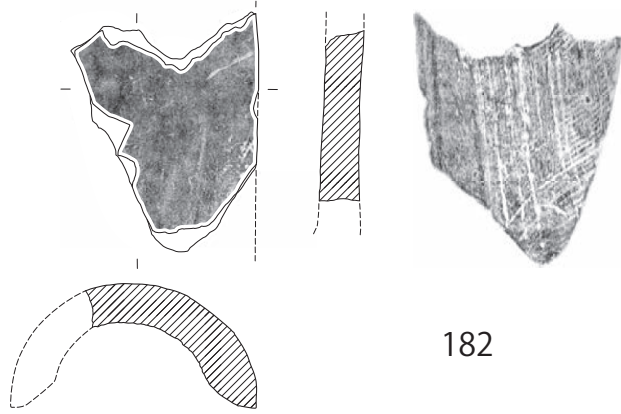
187 は体部から玉縁部にかけての破片である。玉縁長 b が 3.8cm、体部幅 12.5cm、高さ 5.8cm、丸瓦厚 1.6～1.8cmである。凸面には離れ砂がみられ、縦板ナデ調整を主として、端部に横ナデ調整を行う。凹面には離れ砂、コビキ B の痕跡、玉縁部に荒いゴザ状の圧痕を残し、玉縁部を面取りする。側面は 2 面成形である。

188 は体部から玉縁部にかけての破片である。玉縁長 b が 4.1cm、体部幅 13.0cm、高さ 6.6cm、丸瓦厚 1.4～2.4cmである。凸面には離れ砂がみられ、縦板ナデ調整を主として、端部に横ナデ調整を行う。凹面には離れ砂、コビキ B の痕跡、玉縁部に荒いゴザ状の圧痕、内叩き（棒状叩き）がみられ、玉縁部を面取りする。側面は 2 面成形である。胎土中に黒色粒を含む。

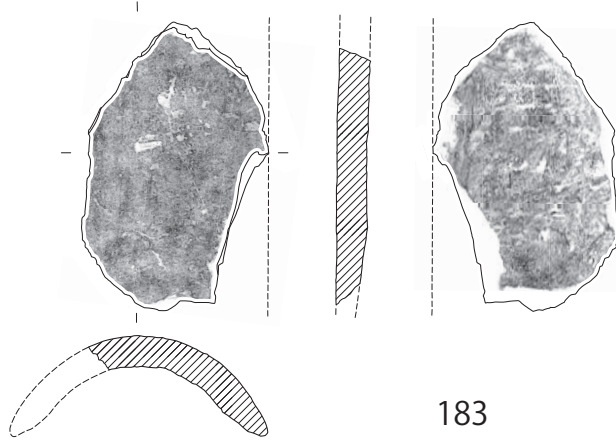
189 は体部から玉縁部にかけての破片である。玉縁長 b が 3.0cm、体部幅 13.0cm、高さ 5.0cm、丸瓦厚 1.0～1.5cmである。凸面には離れ砂がみられ、強い縦板ナデ調整を主として、端部に横ナデ調整を行う。凹面には離れ砂、コビキ B の痕跡、玉縁部に荒いゴザ状の圧痕、内叩き（棒状叩き）とみられる痕跡がみられ、玉縁部を面取りする。側面は 2 面成形である。

190 は体部から玉縁部にかけての破片で、方形の釘穴（12×13mm）を残す。玉縁長 b が 4.1cm、体部幅 12.5cm、高さ 6.2cm、丸瓦厚 1.6～1.8cmである。凸面には離れ砂がみられ、縦板ナデ調整を主として、端部に横ナデ調整を行う。凹面には離れ砂、右下下りのコビキ AB の痕跡、玉縁部に荒いゴザ状の圧痕がみられ、玉縁部を面取りする。側面は 2 面成形である。

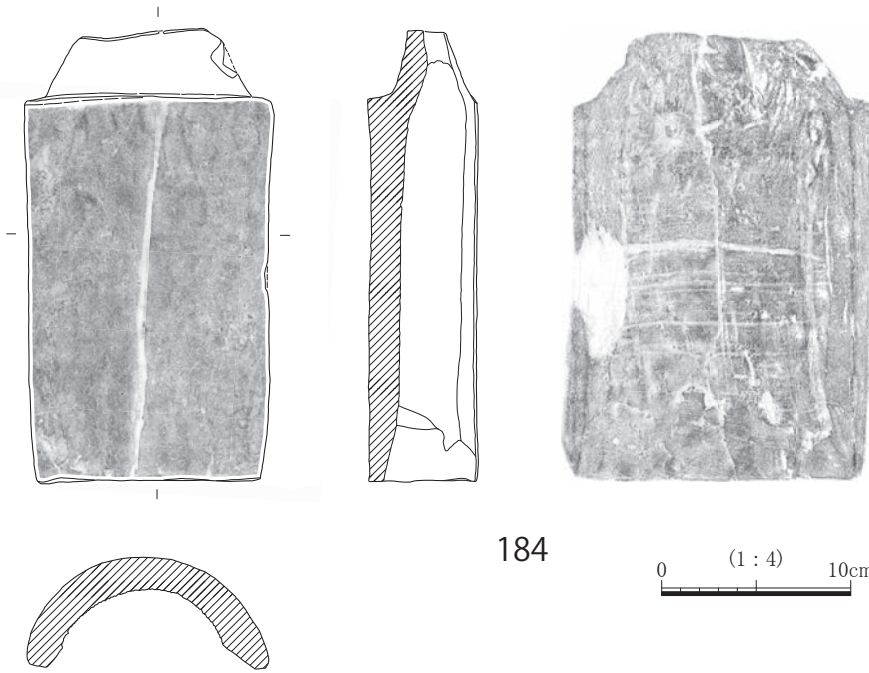
191 は体部から玉縁部にかけての破片で、円形の釘穴（13mm）を残す。玉縁長 b が 4.1cm、体部幅 13.2cm、高さ 6.3cm、丸瓦厚 1.2～1.7cmである。凸面には離れ砂がみられ、縦板ナデ調整



182



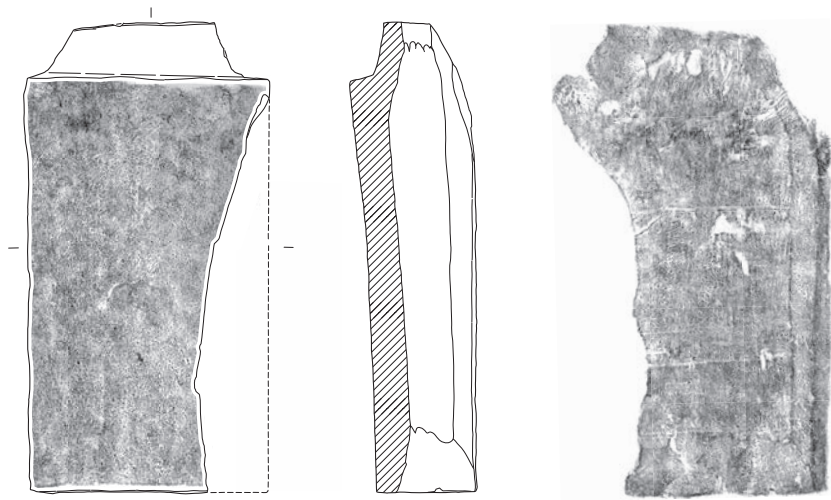
183



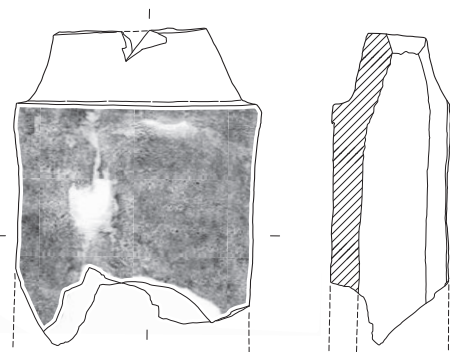
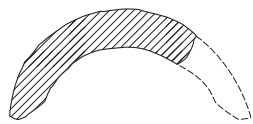
184

0 (1:4) 10cm

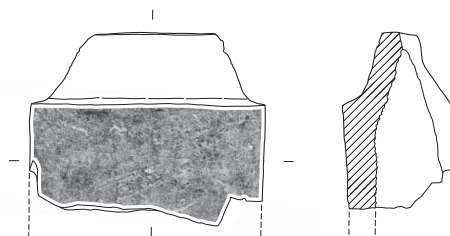
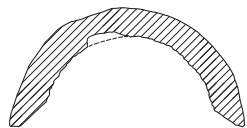
图 39 丸瓦 1



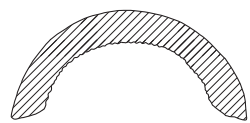
185



186

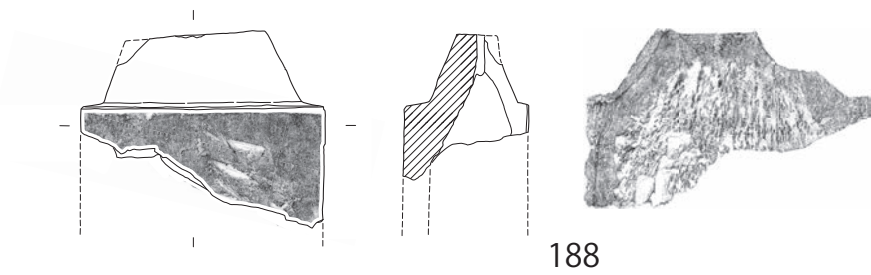


187

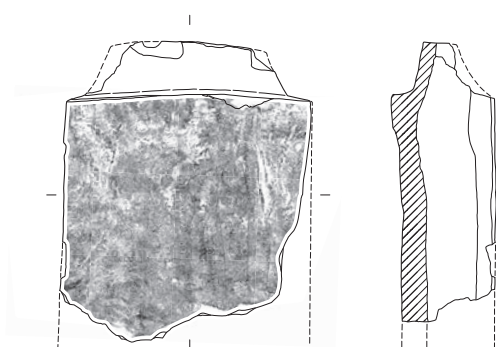
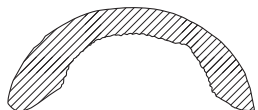


0 (1:4) 10cm

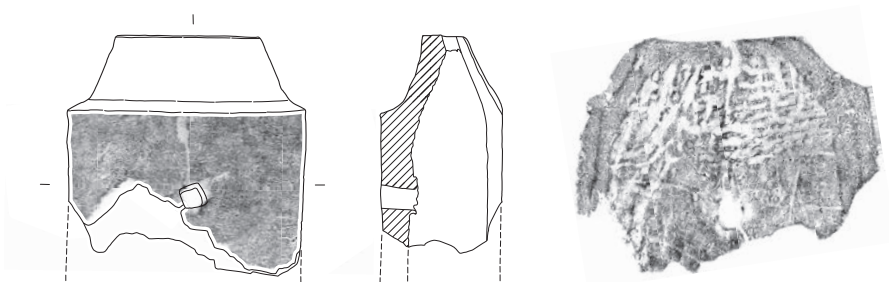
图 40 丸瓦 2



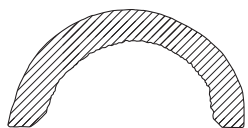
188



189



190



0 (1:4) 10cm

图 41 丸瓦 3

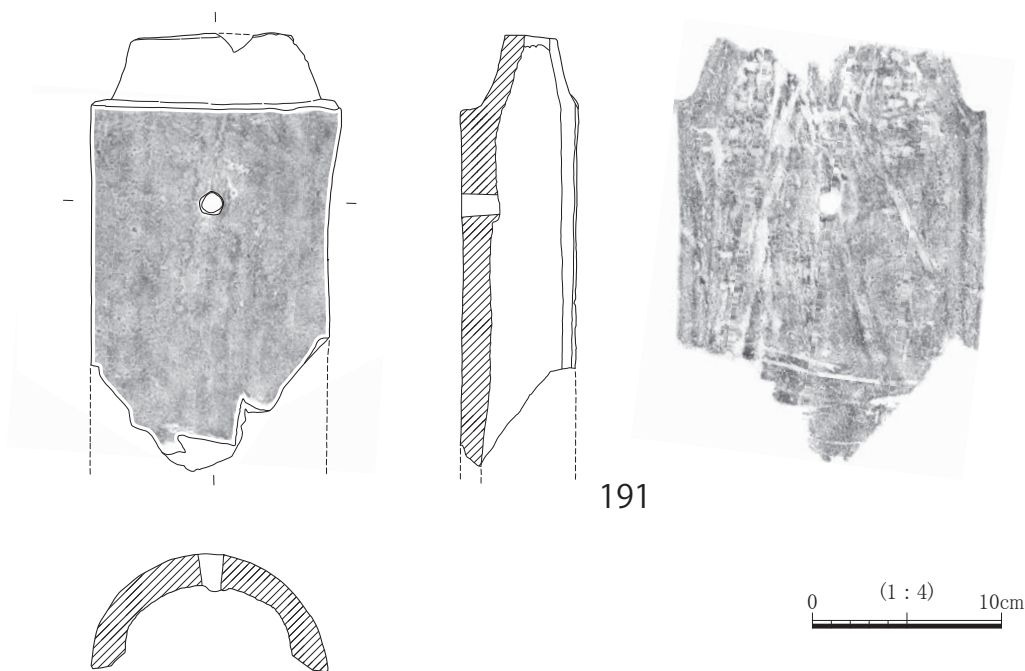


図42 丸瓦4

を主として、端部に横ナデ調整を行う。凹面には離れ砂、右下下りのコビキ AB の痕跡、玉縁部に荒いゴザ状の圧痕と紐痕跡、内叩き（棒状叩き）痕跡がみられ、玉縁部を面取りする。側面は 2 面成形である。胎土中に黒色粒を含む。

4. 平瓦

平瓦（図 43・44）は完形のものではなく、全長の分かるものが 1 点、弦幅の分かるものが 1 点あるのみで、他は全て破片である。

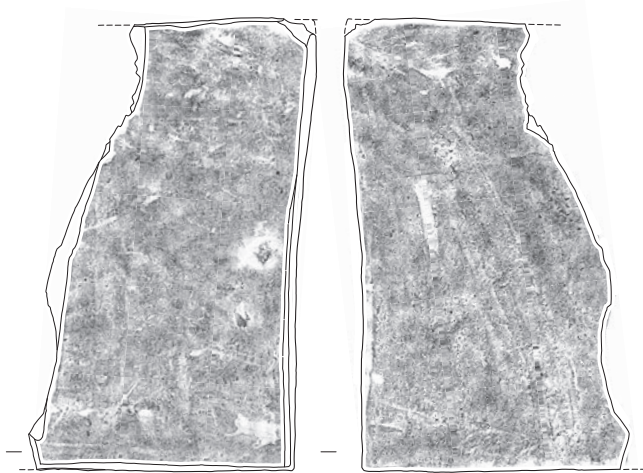
192 は、全長の明らかな個体で、長さ 24.0cm、弧深 2.6cm、平瓦厚 1.4 ～ 1.6cm と薄い。凸面には、離れ砂、縦板ナデ（磨き）調整がみられる。凹面には、離れ砂と右下下りのコビキ B（コビキ AB）がみられる。側面は 1 面成形である。

193・194 は広端部と側面の破片で、平瓦厚 1.3 ～ 1.7cm と薄い。凸面には、離れ砂、縦板ナデ調整と端部の横ナデがみられる。凹面には、離れ砂、横板ナデが、広端部に面取りがみられる。側面は 1 面成形である。

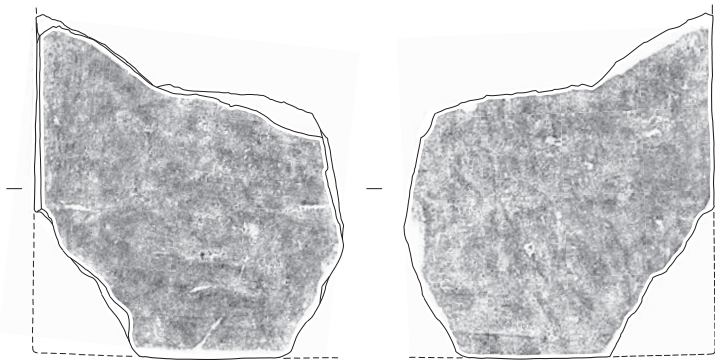
195 は、狭端部の幅の分かる破片で、狭端幅 19.5cm、弧深 2.5cm、平瓦厚 1.3 ～ 1.5cm と薄い。凸面には、離れ砂、縦板ナデ調整と端部の横ナデがみられる。凹面には、離れ砂、横板ナデが、広端部に面取りがみられる。側面は 1 面成形である。

196 は狭端部と側面の破片で、平瓦厚 1.6cm と薄い。凸面には、離れ砂、縦板ナデ調整と端部の横ナデがみられる。凹面には、離れ砂、コビキ B 痕、横板ナデがみられる。側面は 1 面成形である。

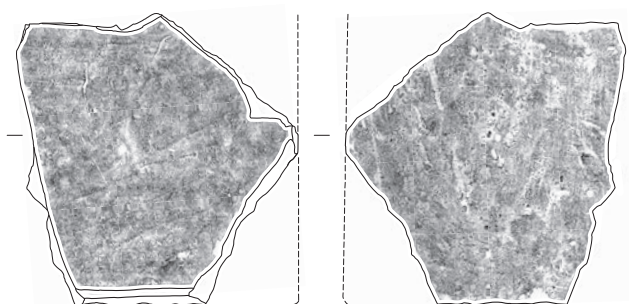
197 は、塀瓦である。出土瓦の中で唯一の塀瓦の破片である。厚さ 2.0cm の一枚板の板瓦に、幅 5.5cm、厚さ 2.1cm の帯状の粘土を半分ずらせてカキメで接合したものである。全体の大きさ



192



193



194

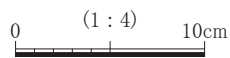


图 43 平瓦 1

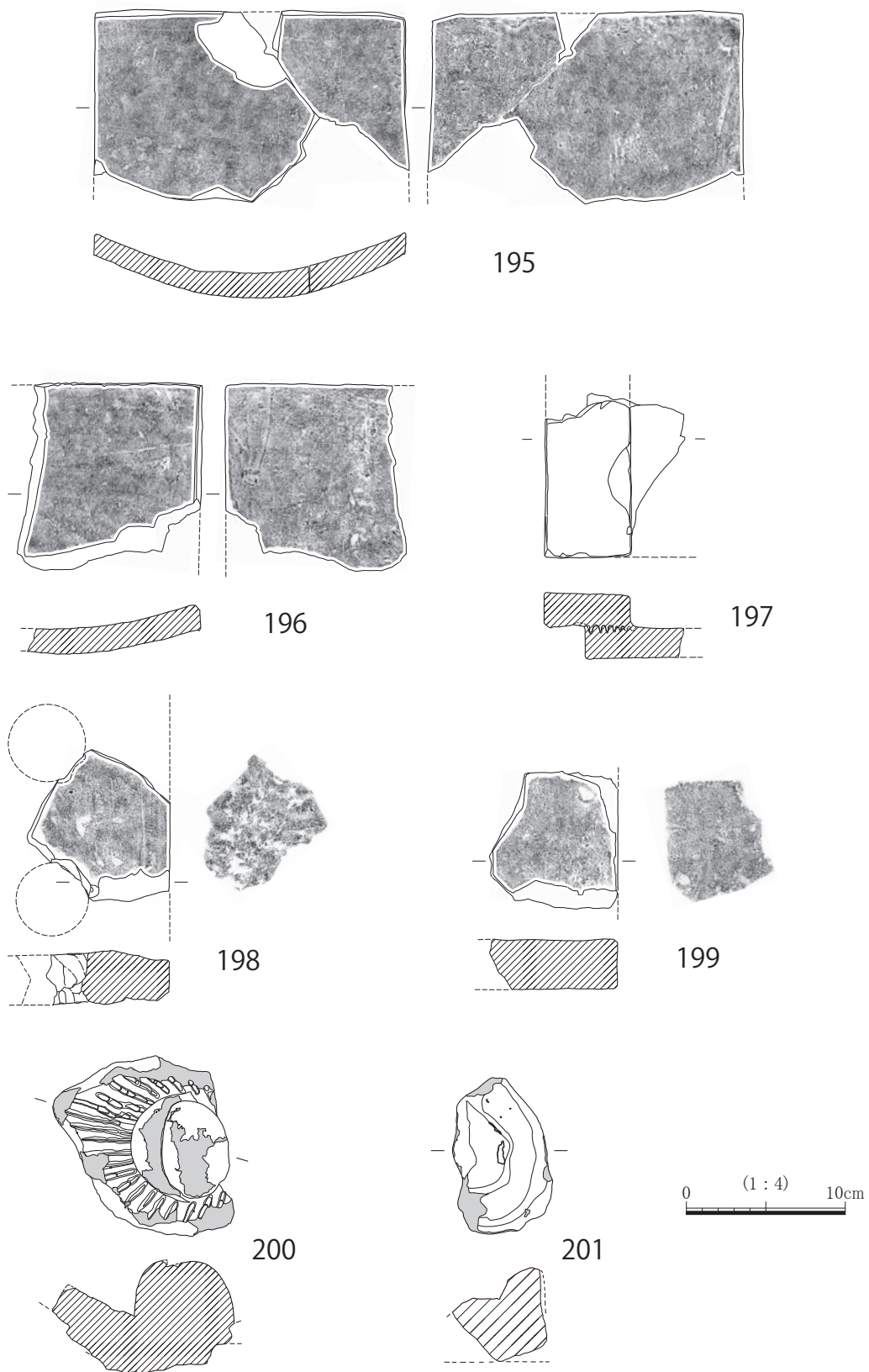


图44 平瓦2 (195~196)·塤瓦 (197)·道具瓦 (198~201)

は不明であるが、他例から幅は 30cm 余り、長さは 42cm 余りと思われる。棧瓦の発生と共に考えだされた、玉縁式よりも簡便な瓦の一種である。棧瓦は城下の大名屋敷跡では出土しているところがあり、伏見城最終段階にこの手の塀瓦が存在したことを示すものであるかは不明である。

出土地点は 1 層からの出土である。

5. 道具瓦

道具瓦（図 44）には、熨斗瓦、海鼠瓦、飾り瓦と思われるものがある。輪違や菊丸瓦などの棟込み瓦は、確認していない。

熨斗瓦は図化してはいないが、半乾燥時に平瓦を縦に半裁したものである。幅は 9.2 ～ 9.7cm である。

198 は、海鼠瓦と考えられるものである。全体の形は不明であるが、瓦に反りが無い厚さ 2.6 ～ 3.3cm の上面と側面を調整する瓦で、2 穴の大きな鼓形の円形の釘穴（直径 2.3 ～ 2.5cm）が特徴である。海鼠壁の建物の側壁材と考えられる。厚みが 3.1 ～ 3.2cm で、特徴がよく似た 199 も、海鼠瓦か飾り瓦の一部である可能性が高いと考える。

200 は、宝珠か何かを表すもので、鬼瓦か飾り瓦の一部と考えられる。

201 は、半円形の耳状の突起を表すもので、鬼瓦か飾り瓦の一部と考えられるものである。

6. 出土瓦の特徴と組み合わせ

(1) 軒平瓦と平瓦

軒平瓦の接合法は、全て「瓦当貼付式断顎」技法であるが、A ～ C の 3 種類の技法が確認された。これらの接合法は、平瓦の製作が古代よりも容易に大量生産が可能な、東洋一が提唱した「凸型成形台積み重ね技法」が主流となる、瓦製作の技術革新の中で生まれてきたものと考えられることができる。

平瓦製作過程は、立方体の粘土塊（タタラ）を、針金を張った弓で瓦一枚分の厚さに切断（コビキ）し、さらにこれを瓦一枚分の粘土板（アラジ）に切断、凸型成形台（アラガタ）に離範材として離れ砂（スナ）や乾燥粘土粉（フリコ）をまいて 4 枚前後の瓦を積み重ね、荒成形して変形しないように密着した状態で縦に床に置き、菰を巻いて半乾燥させる。これがアラジトリといわれる、粘土板の切り取り成形と半乾燥までの工程である。次に、粘土板を回転する凹型調整台（キリカタ）に移し、凹面を無文の叩き板で叩き締め、調整台からはみ出した粘土をキリカタに合わせて切断し成形を終了する。ここで粘土板の表面に水を付けた板（ナゼイタ）や皮（カワ）で撫でて、器面調整を行う。さらに乾燥を行い、再び凹型調整台（キリカタ）の上で歪みを調整し、鋺（コテ）を用いて磨きをかけ、篋（ヘラ）で面取りなどの調整を行う。そして最終の完全乾燥を経て、白く乾燥した焼成前の粘土瓦（シラジ）が完成する。

軒平瓦の接合法は、この完全乾燥前の平瓦と顎部の異なる硬さの粘土を同じ範に打ち込むことができないために生まれた技法である。その接合方法は、厚い瓦の凸面下にカキメを入れて顎を

貼付ける A 技法から、厚い瓦の広端部凸面を斜めに切り落として薄くし、顎を張り付ける B 技法、さらに瓦の厚み自体を軒平瓦の上縁幅まで極端に薄くして、平瓦凸面下にカキメを入れて顎を張り付ける C 技法へと形式的に変化したようにみえる。しかし、異なる接合法が同時併存していた可能性を示すものがある。特に A 技法と B 技法は平瓦厚 2cm 前後の瓦を使う点は同じであり、勝竜寺城（細川藤孝／永禄 11 年（1568）～天正 8 年（1580）、矢部善七郎家定・猪子兵助高就／天正 9 年～天正 10 年（1582）、明智光秀／天正 10 年（1582））出土瓦にそれを見ることが出来る。実態は工房により技法が少しずつ異なり、混在していたものとみられる。これに対し C 技法では、平瓦厚が 1.7cm 前後と 1.2cm 前後に集約される。A 技法や B 技法とは異なり、薄くて小型の瓦である。薄くて小型の短小軽量瓦であれば、早くて大量に生産でき、葺足を短くすることでこれまでと同じ面積を葺けるという経済性、乾燥時間も早く、原料や燃料も節約できることとなる。この傾向は、それを必要とした社会（需要）があったことを示すものである。

今回の調査で出土した軒平瓦で、全長の分かるものは無いが、上弦幅の分かるものが復元も含め 8 例ある。19.6cm、20.2cm、20.3cm、20.6cm、21.0cm、21.2cm、22.2cm、23.0cm である。これは 6 寸 5 分～7 寸 5 分に相当し、江戸時代では 7 寸 5 分と 9 寸に中心があることを考えると小さなものが多い。

平瓦の長さの分かるもの 192 は、24.0cm（8 寸）、上弦幅が 21.2cm（7 寸）である。これは、江戸時代の一般的な「七二の瓦」（8 列×9 枚＝72 枚／坪）の長さ 25.7cm（8 寸 5 分）×上弦幅 22.7cm（7 寸 5 分）よりもやや小振りな小型瓦であることを示す。

軒平瓦も破片が多く文様区幅の分かるものも少ないため、文様区高でみる。もっとも広い文様区高 3.6～3.7cm が、唐草文 1 類 A で、瓦当の接合法、周縁以外の面取り、調整の丁寧さなど、今回の一群では最も古いタイプの瓦で転用されてきたものであるかもしれない。文様区高 2.8～3.1cm が、唐草文 1 類 B の金箔瓦、桐文を中心飾りとする唐草文 2 類 A・B、花文 3 個を配す 3 類 A、唐草文 3 類 B があり、2 類・3 類の古手で中型の瓦はこの中に全て含まれる。文様区高 2.3～2.6cm が、唐草文 1 類 E、唐草文 3 類 C～G で、中心飾り三葉で 1 反転の新しい瓦紋様が多く含まれ、平瓦厚は 1.3～1.5cm である。文様区高 1.5～2.2cm が、最も多数出した唐草文 1 類 C、唐草文 1 類 D・F～K、唐草文 3 類 H で、平瓦厚は 1.4～1.5cm である。

このことから今回の調査で出土した軒平瓦には、中型の軒平瓦も含まれるが、文様区高が 2.2cm 未満（5～7 分）と狭い小型瓦の多いことが指摘できる。

（2）軒丸瓦と丸瓦

軒丸瓦の瓦当径は、大型が 16.0～17.0cm で菊文の 2 類 C、右巻圏線有三巴文 4 類 C、金箔瓦である右巻三巴文 5 類 A、右巻三巴文 5 類 C・I がある。中型が 14.0～15.0cm で桐文 1 類 A、菊文の 2 類 B、左巻三巴文 3 類 A・B、右巻圏線有三巴文 4 類 B・E、右巻三巴文 5 類 B・D～H・J～L がある。小型が 12.0～13.6cm で菊文の 2 類 D、右巻圏線有三巴文 4 類 D、右巻三巴文 5 類 G・L がある

軒丸瓦で全長の分かるものが、復元も含め 2 点ある。87 は右巻三巴文 5 類 E で、全長(26.2)cm(8

寸7分)、体部長22.8cm(7寸6分)、幅12.1cm(4寸)、高さ6.3cm(2寸)である。他の99は右巻三巴文5類Fで、全長26.2cm(8寸7分)、体部長22.5cm(7寸5分)、幅12.6cm(4寸2分)、高さ6.9cm(2寸3分)である。江戸時代では中型の瓦当径15.0cm(5寸)で、全長が22.7cm(7寸5分)で幅15.1cm(5寸)や、全長25.8cm(8寸5分)で幅18.1cm(6寸)が平均的であるので、幅の狭いやや長い軒丸瓦といえる。

丸瓦も全長の分かるものが2点ある。184は全長23.9cm(8寸)、体部幅12.8cm(4寸3分)、高さ6.8cm(2寸3分)である。185は全長24.9cm(8寸3分)、体部幅13.1cm(4寸4分)、高さ5.9cm(2寸)である。ここでも、幅の狭いやや長い丸瓦の存在が指摘できる。

(3) 出土瓦の特徴

今回出土した軒平瓦と平瓦は、中型の軒平瓦も含まれるが、文様区高が2.2cm未満(5～7分)と狭い小型瓦の多いこと。軒平瓦と丸瓦も、中型の軒丸瓦も含むが、幅の狭いやや長い丸瓦の存在が指摘できた。これらは、明確には言い難いが、塀瓦として作られた瓦を主体としているのではないかと推測することができる。このことは、石垣0101SLに近い時期の遺構である掘立柱柵(塀)03SAの性格や、熨斗瓦以外の棟込み瓦の出土が無いことなどが、大型建物の瓦ではないことを示しているように思われる。

(4) 軒瓦の組み合わせ

今回の調査で出土した瓦は、全て1580年代から1620年代までの、短期間に製作されたものである。最終的にどのような経緯で調査地内の遺構に入ったかは、図る由もない。特に軒丸瓦の三巴文は、種類が多く大きな変化を掴み難いため、軒平瓦を中心に推測してみたい。軒瓦の組み合わせの検討は、出土遺構、文様、胎土、出土点数で行う。

出土遺構では、最も古い遺構である石垣01SIにおいて遺構を現状保存したこともあり、裏込の解体を行っていないため、瓦の出土は確認していない。石垣01SLの構築過程で使われたと考えている杭列02SAについても瓦は出土していない。掘立柱柵(塀)03SAとこれを被う道路整地層(5-1層)では、僅かに瓦片を含んでいたが、軒瓦は出土していない。軒瓦が出土しているのは、石垣05SLの根石設置溝埋土層(5-1層)・裏込栗石層(6-3層、6-4・5層)、素掘り溝06SD埋土層(4層)、道路07SF上層整地層(3-1層)、石組溝08SD埋土層(2層)、石組暗渠排水溝09SD、表土層(1層)で、後者ほど新しい。しかし、石垣05SLの根石設置溝埋土層(5-1層)・裏込栗石層(6-3層、6-4・5層)は、石垣05SL構築時ではなく、石垣解体時に上段の曲輪から混入したものである可能性が高く、道路07SF上層整地層(3-1層)で被われる素掘り溝06SD埋土層(4層)が遺構としては最も古い軒瓦を出土している遺構と考えることができる。

軒平瓦では、素掘り溝06SD埋土層(4層)から唐草文1類C(145・148)、唐草文1類D(150)、唐草文1類F(152)、唐草文1類H(155)が、石垣05SLの裏込栗石層(6-3層、6-4・5層)から唐草文1類A(141)、唐草文1類H(156)が、石組溝08SD埋土層(2層)からは唐草文1類B(143)、唐草文1類C(144・146・147)、唐草文1類D(149)、唐草文1類E(151)、唐草文1類G(153)、唐草文1類H(154・157)、唐草文I～K(158～160)が、表土層(1層)

から唐草文 1 類 A (142) が出土している。

軒丸瓦では、素掘り溝 06SD 埋土層 (4 層) から桐文 1 類 A (55 ~ 57・59)、菊文 2 類 C (66)、左巻三巴文 3 類 B (71)、右巻三巴文 4 類 E (79・80)、右巻三巴文 5 類 E (89)、右巻三巴文 5 類 L (106) が、道路 07SF 上層整地層 (3-1 層) から右巻三巴文 5 類 E (96) が、石垣 05SL の根石設置溝埋土層 (5-1 層) から桐文 1 類 A (62・63)、右巻三巴文 4 類 A (73) が、石垣 05SL の裏込栗石層 (6-4・5 層) から右巻三巴文 4 類 C (76) が、石組溝 08SD 埋土層 (2 層) から桐文 1 類 A (58・60・61)、菊文 2 類 B (65)、左巻三巴文 3 類 A (67)、左巻三巴文 3 類 B (68 ~ 70・72)、右巻三巴文 4 類 B (74)、右巻三巴文 4 類 C (75・77)、右巻三巴文 4 類 D (78)、右巻三巴文 5 類 A (81)、右巻三巴文 5 類 B (82)、右巻三巴文 5 類 C (83)、右巻三巴文 5 類 D (84・85)、右巻三巴文 5 類 E (86 ~ 88・90 ~ 95・97)、右巻三巴文 5 類 F (99)、右巻三巴文 5 類 H (101)、右巻三巴文 5 類 J (103・104)、右巻三巴文 5 類 K (105)、右巻三巴文 5 類 L (107) が、石組暗渠排水溝 09SD から桐文 1 類 A (53・54)、右巻三巴文 5 類 G (100) が、表土層 (1 層) から右巻三巴文 5 類 I (102) が出土している。

複数の遺構から出土している場合は、古い遺構の年代観を優先して記述する。

文様は、軒丸瓦では桐文、菊文、左巻きと右巻きの連珠三巴文である。軒平瓦では、中心飾りは異なるが主体は均整唐草文で、他には花文と巴文の滴水瓦がある。

胎土は、石英、長石を大部分が含み、これにチャートや赤色粒 (クサリレキ) を含むかどうかと、砂粒の多い少ない、砂粒の大小等が個体により異なる。これらの胎土観察は、主観が入ることと、その基準が問題となるため重要でありながら判断が難しい。このうち、特異な胎土のものとしては、黒色粒を含む唐草文 1 類 E (151) や、白色粒を含み砂粒が多く重い唐草文 1 類 A (141・142) 等がある。

唐草文 1 類 A (141・142) は、(中心飾 3 葉) 下上 2 反転 + 子葉の唐草文で、石垣 05SL の裏込栗石層 (6-3 層) から出土していて、胎土が特異な個体である。同文の例が大溝城 (織田信澄 / 天正 6 ~ 13 年、文禄 4 年頃廃城) や水口岡山城 (中村一氏 / 天正 13 ~ 18 年、増田長盛 / 天正 18 年 ~ 文禄 4 年、長束正家 / 文禄 4 年 ~ 慶長 5 年) にあり、これとセットになるのが瓦当径約 16.3cm、文様区幅約 12.0cm の右巻連珠三巴文圏線無 (珠文数 12) の大きな軒丸瓦である。長束正家が文禄 4 年 (1595) 頃に廃城となった大溝城の殿舎を解体し、水口岡山城 (西櫓) に使用したことが文献に残り、これを裏付けるように同範瓦 (図 45 上段右) が水口岡山城で出土している。今回出土した軒丸瓦中にはこれに該当する同じ胎土の軒丸瓦はみられず、セットは存在しない。しかし、補完するものとしては右巻三巴文 5 類 I (102) や金箔瓦である右巻三巴文 5 類 A (81) 等があり、前者は珠文数も近く、セットを仮に配置してみた (図 45 上段左)。

唐草文 1 類 B (143) は、(中心飾 3 葉) 下上 2 反転の唐草文で、石組溝 08SD 埋土層 (2 層) から出土している。同文は伏見城 (豊後橋北詰) や聚楽第、大坂城、姫路城、広島城など西日本から東海圏に類例の多いもので、本例は豊後橋北詰例よりも瓦当厚が薄く後出的である。大きな瓦に属し、最も可能性の高いのは 4 類 C (75 ~ 77) の瓦当径約 16.0cm、文様区幅約 12.0cm の

右巻連珠三巴文圏線有（珠文数 19）である。

唐草文 1 類 C（144～148）は、（中心飾 3 葉＋点珠）下上 2 反転の唐草文で、素掘り溝 06SD 埋土層（4 層）から出土している。唐草文 1 類 B の文様区高の低いもので、塀瓦である可能性がある。しかし、文様区は幅も広く脇周縁幅を空けず、唐草文も文様区内で脇を空けることなく全体に配置されており、新しい要素を含まない。セット関係は不明であるが、三巴文であることは疑えない。ここでは、唐草文 1 類 C は調査区内で 5 点と最も多く出土していることから、軒丸瓦についても最も多く 13 点が出土している 5 類 E（86～98）の瓦当径約 14.2cm、文様区幅約 10.4cm の右巻連珠三巴文圏線無（珠文数 11）を仮にセット（図 45 下段右）として推測しておく。

唐草文 1 類 D（149・150）は、中心飾 3 葉＋点珠下 1 反転の複線唐草文で、素掘り溝 06SD 埋土層（4 層）から出土している。瓦当の大きさは唐草文 1 類 C と変わらないが、脇周縁幅が広いこと、文様区内の脇が半分以上空白となっている点などが異なる。最も可能性の高いのは、大きさから 3 類 B（68～72）の瓦当径約 14.6cm、文様区幅約 10.6cm の左巻連珠三巴文圏線有（珠文数 12）である。

唐草文 1 類 E（151）は、中心飾 3 葉の中心飾りのみを残す破片で、石組溝 08SD 埋土層（2 層）から出土している。全体を知る資料は存在しないが、同文は早くには伏見城（豊後橋北詰）で、大坂城、伏見城（毛利長門東町）、佐和山城などにも類例があり、中心飾りが三子葉で上 1 反転する唐草で構成されるものと考えられるものである。セット性の高いのは、佐和山城例から 5 類 L（106・107）の瓦当径約 14.0cm、文様区幅約 10.2cm の右巻連珠三巴文圏線無（珠文数 14）と考える。

唐草文 1 類 H（154～157）は、中心飾 3 葉＋点珠下上 2 反転の唐草文で、素掘り溝 06SD 埋土層（4 層）から出土している。瓦当の大きさは唐草文 1 類 C や 1 類 D と大きく変わらないが、脇周縁幅が広いことなどが異なる。唐草文 1 類 C よりも巻き込みは深い。最も可能性の高いセットは、大きさから 5 類 J（103・104）の瓦当径約 14.0cm、文様区幅約 10.2cm の右巻連珠三巴文圏線無（珠文数 14）か、5 類 K（105）の右巻連珠三巴文圏線無（珠文数 14）とも考えられる。

唐草文 2 類 A（169・170）は、中心飾りが五三桐文で、下下 2 反転の唐草文で構成され、石組溝 08SD 埋土層（2 層）から出土する。瓦当厚約 4.8cm、文様区高約 2.8cm である。この軒丸瓦とのセットは、一般的には三巴文であることが多いが、今回は軒丸瓦にその出土数が 11 点と多い、五三桐文 1 類 A（53～63）とセット（図 45 下段左）としておく。

花文（173）を 3 点配する 3 類 A（173）は、石組溝 08SD 埋土層（2 層）から出土している。同文が伏見城（桃山毛利長門東町）で出土例があるが、セット関係までは把握できない。

唐草文 3 類 E（177）は、中心飾 5 葉＋点珠下 1 反転＋子葉の唐草文で、素掘り溝 06SD 埋土層（4 層）から出土している。同文は伏見城（桃山水野左近東町）に例があるが、三巴文であることは疑えないものの、セット関係までは分からない。

以上の様に、可能性の高いものは 2 例のみで、これとて更なる検討が必要である。

今回は、各型式の系譜関係や既調査地出土や他遺跡との同範関係については、言及できなかった。更なる分析が今後必要である。

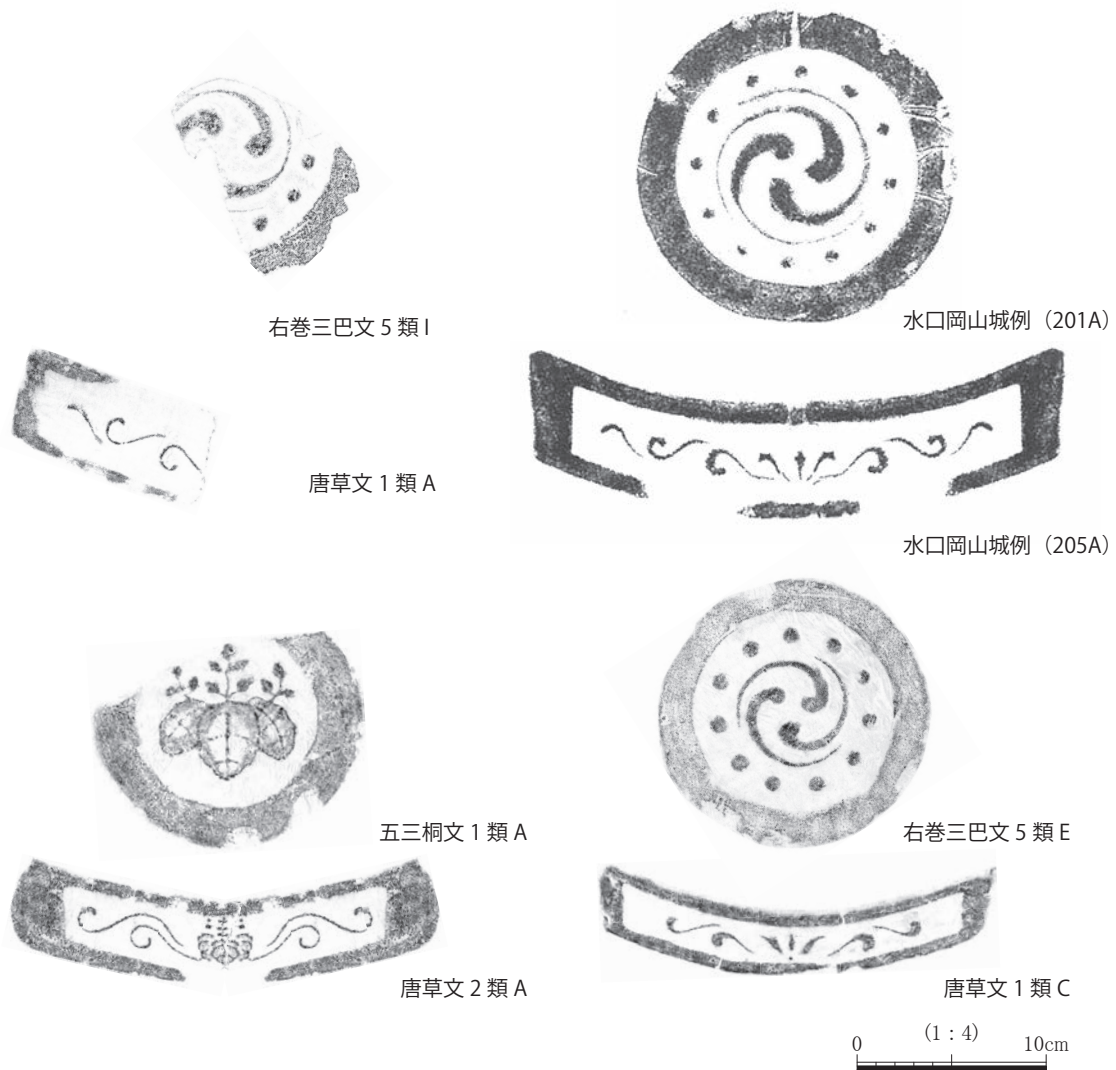


図 45 軒瓦の組み合わせ案

<引用参考文献>

- 岩崎誠「出土遺物」『勝竜寺城発掘調査報告』長岡京市埋蔵文化財調査報告書第6集（財）長岡京市埋蔵文化財センター 1991年
- 江谷寛・三木義則・西野浩二「瓦類」『淀城跡（天主台跡）』伏見城研究会 2017年
- 木戸雅寿「織豊期城郭にみられる桐紋瓦・菊紋瓦について」『織豊城郭』第2号 織豊期城郭研究会 1995年
- 黒田慶一「豊臣氏大坂城の瓦について」『織豊城郭』創刊号 織豊期城郭研究会 1994年
- 黒田慶一「瓦博類」『大坂城址Ⅲ』第144集（財）大阪府文化財センター 2006年
- 小竹森直子「彦根市佐和山城採集の瓦について」『織豊城郭』創刊号 1994年
- 小谷徳彦「瓦が語る水口岡山城の変遷と背景」『織豊期城郭 瓦研究の新視点』織豊期城郭研究会 2017年
- 佐川正敏「平安時代～近世の軒丸瓦」『伊珂留我』法隆寺昭和資材帳調査概報10 法隆寺昭和資材帳編纂所 1987年
- 佐川正敏『昭和資材帳 法隆寺の至宝 瓦』第15巻 法隆寺昭和資材帳編集委員会 1992年
- 織豊期城郭研究会編『織豊期城郭の瓦』織豊期城郭資料集成Ⅰ 1994年
- 鈴木重治『伏見城豊後橋北詰の調査』伏見城研究会 1975年
- 東洋一「北山殿創建平瓦・軒平瓦の製作技法」『特別史跡特別名勝鹿苑寺（金閣寺）庭園』鹿苑寺 1997年
- 東洋一「平瓦製作における中世の技術革新について第1部・第2部」『研究紀要』1・3 京都市埋蔵文化財研究所 1994・1996年
- 長谷川達「伏見城跡」『京都府遺跡調査概報』第8冊（財）京都府埋蔵文化財調査センター 1983年
- 星野猷二「伏見区桃山町下野26～27」『器瓦録想』伏見城研究会 2006年
- 森島康雄「聚楽第跡出土の軒平瓦」『京都府埋蔵文化財情報』第49号（財）京都府埋蔵文化財調査センター 1993年
- 森島康雄「伏見城跡」『織豊期城郭の瓦』織豊期城郭資料集成Ⅰ 織豊期城郭研究会 1994年
- 森田克行「屋瓦」『摂津高槻城』高槻市教育委員会 1984年
- 山口誠司「製作技法からみた織豊期城郭の瓦―伏見城豊後橋北詰出土資料を中心に―」『中世城郭研究』第31号 中世城郭研究会 2017年
- 山口誠司「織豊系城郭への瓦導入の様相」『織豊系城郭とは何か』城郭談話会 中世城郭研究会 2017年
- 山崎信二「近世京都の瓦」『近世瓦の研究』同成社 2008年
- 渡邊誠「江戸時代の瓦類」『平安京土御門烏丸内裏跡―左京一條三坊九町―』平安京跡研究調査報告第10輯（財）古代学協会 1983年

第5章 総括

第1節 調査地内の石材

1. 石垣、石組溝および石組暗渠排水溝等の石材鑑定

今回の調査で検出した各遺構の石材鑑定は、橋本清一氏に依頼して実施した。石材鑑定の対象としたものは、石垣 05SL の裏込栗石 (A)、石垣 01SL とその裏込栗石 (B)、石組溝 08SD の両側壁、石組暗渠排水溝 09SD である。その他に、表土掘削の際に検出した大型の転石 5 石についても鑑定を行った。これらは原位置を留めていないものではあるが、伏見城跡という調査地の環境から、石垣を構成していた石材である可能性が考えられたため鑑定の対象とした。

現地調査は 2017 年 11 月 24 日および 27 日の 2 日間実施し、鑑定した石材の総数は 390 石である。鑑定は、原則として石組を構成する主要なものを選出して実施し、小割の礫については除いた。裏込栗石に関しては、現地で任意の枠 (1m × 1m) を設定し、枠内表面の栗石を採取した上で分類観察した。石材鑑定の成果は、以下の表 4 のとおりである。

本調査地点で検出した石組遺構には、主にチャート、砂岩、頁岩～粘板岩、ホルンフェルス、花崗岩 (花崗岩質アプライト含む)、石英斑岩などの石材が用いられている。中でも多数を占めるのはチャート、砂岩、頁岩～粘板岩、ホルンフェルスといった堆積岩系の石材であり、花崗岩、石英斑岩などの火成岩は合計しても全体の 10% 程度と低い割合を示す。これは各裏込の栗石についても同様である。

以下には、各遺構における使用石材について記述する。

【石垣 SL01】

石垣 SL01 については、主要な 64 石の石材に図 46 のように個々に番号を付し、より詳細な観察を行った (表 5)。

用いられていた石材は、チャート 4 石、頁岩～粘板岩 13 石、砂岩 21 石、ホルンフェルス 20 石、花崗岩 3 石、石英斑岩 (山科音羽川上流域産) 2 石、花崗岩質アプライト 1 石である。この中で、長径が 30cm を超える石材 (図 46 中 1～6、9、12～29、47、49) は石垣本体を構築するいわゆる「築石」、その他は築石間の空隙を埋める「間詰石」である。なお、図 52 中の 1・2 を除く石材は使用段階では整地土に覆われているため、検出した石積みの大部分は土中にあり、「根石」といわれるものに相当するが、ここでは便宜上「築石」の名称を用いて説明する。

築石には明確な矢穴痕は見受けられないものの、大半にハツリ (斫) や人為的な割れの痕跡 (大割) が認められ、円磨度は 0.1～0.4 と低い傾向にあった。しかしながら、これらの多くは半裁した自然石であり、奥行きに乏しく大きさにはばらつきがあった。また、間詰石とみられる石材には、円磨度 0.4～0.7 程度のものが比較的多くみられ、弱風化しているものが散見された。

以上から、本調査地点で確認された石垣 SL01 は、元和期以前の自然石を大割で用いる石垣の

表4 伏見城跡出土石材分類表

石垣01SL

岩石名	チャート	頁岩～粘板岩	砂岩	珪岩	ホルンフェルス	花崗岩	石英斑岩	その他	計
数	4	13	21		20	3	2	1 (花崗岩質 アブライト)	64
割合(%)	6.3%	20.3%	32.8%		31.3%	4.7%	3.1%	1.6%	100.0%

石垣05SL裏込栗石(A)

岩石名	チャート	頁岩～粘板岩	砂岩	珪岩	ホルンフェルス	花崗岩	石英斑岩	その他	計
数	11	10	10			1		2 (脈石英)	34
割合(%)	32.4%	29.4%	29.4%			2.9%		5.9%	100.0%

石垣01SL裏込栗石(B)

岩石名	チャート	頁岩～粘板岩	砂岩	珪岩	ホルンフェルス	花崗岩	石英斑岩	その他	計
数	10	10	15						35
割合(%)	28.6%	28.6%	42.9%						100.0%

石組溝08SD

岩石名	チャート	頁岩～粘板岩	砂岩	珪岩	ホルンフェルス	花崗岩	石英斑岩	その他	計
数	72	36	29	2	60	16	11	1 (珩岩)	227
割合(%)	31.7%	15.9%	12.8%	0.9%	26.4%	7.0%	4.8%	0.4%	100.0%

石組暗渠排水溝09SD

岩石名	チャート	頁岩～粘板岩	砂岩	珪岩	ホルンフェルス	花崗岩	石英斑岩	その他	計
数	6	13	2		3	1			25
割合(%)	24.0%	52.0%	8.0%		12.0%	4.0%			100.0%

調査地全体

岩石名	チャート	頁岩～粘板岩	砂岩	珪岩	ホルンフェルス	花崗岩	石英斑岩	その他	計
石垣01SL	4	13	21		20	3	2	1 (花崗岩質 アブライト)	64
石垣05SL裏込栗石(A)	11	10	10			1		2 (脈石英)	34
石垣01SL裏込栗石(B)	10	10	15						35
石組溝08SD	72	36	29	2	60	16	11	1 (珩岩)	227
石組暗渠排水溝09SD	6	13	2		3	1			25
大型転石	1		1		1	1	1		5
合計	104	82	78	2	84	22	14	4	390
割合(%)	26.7%	21.0%	20.0%	0.5%	21.5%	5.6%	3.6%	1.0%	100.0%

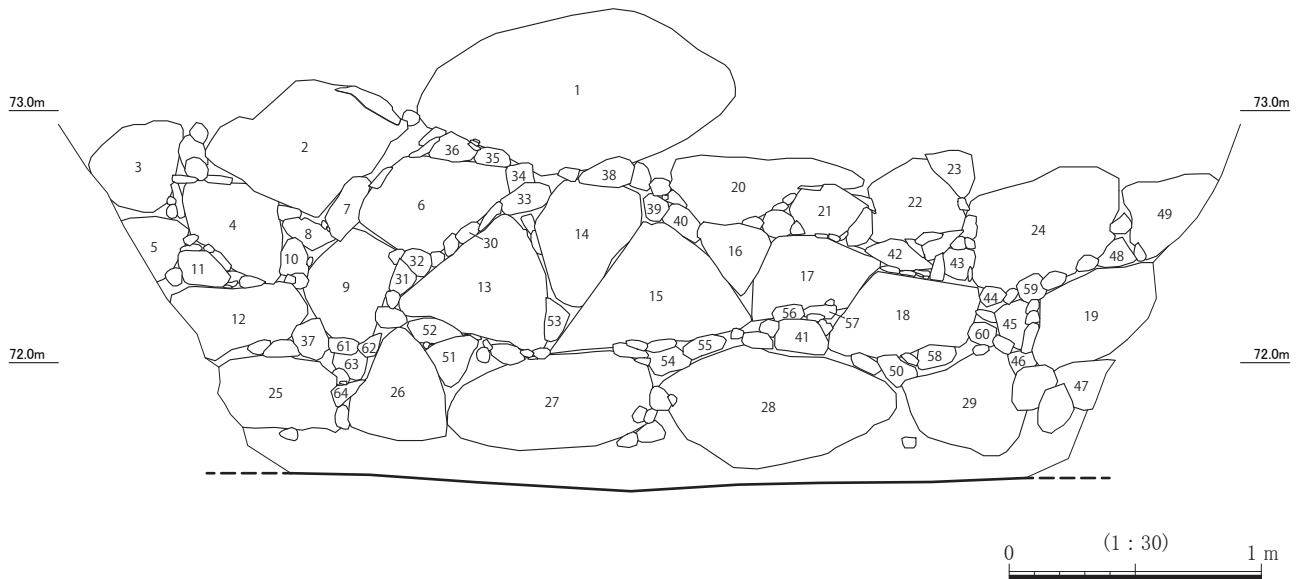


図 46 石垣 01SL 石材番号図

特徴を示しているといえる。

なお、参考として鑑定した原位置を留めていない大型転石は、5石である。それぞれチャート、砂岩、ホルンフェルス（泥質）、花崗岩、石英斑岩であり、石英斑岩は山科音羽川産の可能性はある。

【裏込栗石】

裏込栗石の石材は、既述の石垣を埋封する盛土層の上位で築石等を伴わずに検出された石垣 05SL の裏込栗石（A）と、前述の石垣 01SL 構築に伴う裏込栗石（B）の 2 種類である。

調査の結果、裏込栗石（A）がチャート 11 石、頁岩～粘板岩 10 石、砂岩 10 石、花崗岩 1 石、脈石英 2 石、裏込栗石（B）がチャート 10 石、頁岩～粘板岩 10 石、砂岩 15 石と、構成割合に特筆すべき差異は見受けられなかった。両者ともに円磨度 0.4～0.7 程度に収まる石が大半であった。採取状況にも大きな違いはないものと考えられるが、裏込栗石（A）には火成岩質の石が僅かに含まれ、頁岩～粘板岩のなかにややホルンフェルス化しているものが含まれることから、石材の採取地には若干の違いがあった可能性がある。

【石組溝 08SD】

石組溝 08SD に使用されているのは、図 47・48 に示すチャート 72 石、頁岩～粘板岩 36 石、砂岩 29 石、珪岩 2 石、ホルンフェルス 60 石、花崗岩 16 石、石英斑岩 11 石、玢岩 1 石の合計 227 石の石材である。堆積岩系を主体とする多様な岩石が用いられている点が、既述の石垣 01SL と共通しているものの、花崗岩に五輪塔の地輪と考えられる転用石 1 石（写真図版 21-5・6、縦 31cm×横 31cm×厚 22cm）と、明確な矢穴痕を残すもの 1 石（写真図版 21-1～4、図 50 矢穴石実測図）が含まれているのが特徴的である。

石組溝 08SD は、石垣 SL01 よりも新しい時期の石垣 05SL に伴う遺構と考えられているが、石材構成の大半を占めるのは自然石を主体とする粗割石で、石材構成に大差はない。徳川期の第 IV a 期伏見城であるならば、より花崗岩が多用されているはずであり不可解である。徳川による

伏見城再建に伴って生じた既存石垣 01SL の廃材が、そのまま石組溝 08SD に転用された可能性も考える必要がある。

【石組暗渠排水溝 09SD】

石組暗渠排水溝 09SD に用いられている石材は、チャート 6 石、頁岩～粘板岩 13 石、砂岩 2 石、ホルンフェルス 3 石、花崗岩 1 石であり、他遺構と同じく堆積岩系が大部分を占めている。前述の石組溝 08SD 廃絶後の遺構であるが、使用石材の特徴に大きな違いは見受けられない。こちらについても、周辺遺構、特に石組溝 08SD からの石材転用が考えられる。

2. 石材の産地

石材鑑定において大半を占めたチャート、頁岩～粘板岩、砂岩、ホルンフェルスなどの堆積岩系石材は、いずれも丹波帯に広く分布（図 49）する岩石であり産地の特定は困難である。しかしながら、石英斑岩については、丹波帯のなかでも山科の音羽川上流域産のものが含まれていることから、その他の石材も同様に山科周辺地域産であることが推測される。

山科の石材は一般に『山科石』と呼ばれ、方広寺、二条城といった豊徳期の建造物に使用されている。これらの社寺城郭が伏見城築城の前後に建造されたことから、本調査地における使用石材が山科石主体である可能性は高いと言えよう。なお、小瀬甫庵の『太閤記』には、伏見城

表 5 石垣 01SL 石材分類表

No.	岩石名	大きさ(cm)				円磨度	風化度	備考
		長径	中径	短径	平均			
1	石英斑岩	135	65	45	81.7	0.4	新鮮～弱	山科音羽川産
2	ホルンフェルス	75	60	35	56.7	0.3	新鮮	泥質、半裁
3	ホルンフェルス	40	30	30	33.3	0.2～0.3	新鮮	半裁
4	石英斑岩	55	30	15	33.3	0.2	新鮮	山科音羽川産、半裁
5	斑状黒雲母花崗岩	30	30	15	25.0	0.2～0.3	新鮮	
6	砂岩	55	35	25	38.3	0.5	新鮮	
7	砂岩	25	15	10	16.7	0.5	新鮮～弱	
8	頁岩～粘板岩	20	10	10	13.3	0.2～0.3	新鮮	ハツリ
9	花崗岩質アブライト	45	40	35	40.0	0.2	新鮮～弱	人為的割れ
10	砂岩	20	15	5	13.3	0.5～0.6	新鮮	
11	チャート	23	13	8	14.7	0.4	新鮮	黒色
12	ホルンフェルス	50	30	25	35.0	0.2	新鮮	半裁
13	ホルンフェルス	60	55	50	55.0	0.2	新鮮	半裁
14	ホルンフェルス	50	42	35	42.3	0.2～0.3	新鮮～弱	半裁
15	ホルンフェルス	80	50	40	56.7	0.2	新鮮	半裁
16	ホルンフェルス	35	25	20	26.7	0.1～0.2	新鮮	半裁
17	ホルンフェルス	55	30	30	38.3	0.2～0.3	新鮮	ハツリ
18	ホルンフェルス	65	35	35	45.0	0.2～0.3	新鮮	
19	ホルンフェルス	50	40	35	41.7	0.2	新鮮～弱	ハツリ
20	砂岩	70	35	30	45.0	0.2～0.3	新鮮	人為的割れ
21	ホルンフェルス	30	20	15	21.7	0.2	新鮮	人為的割れ
22	砂岩	50	40	30	40.0	0.2	弱	人為的割れ
23	頁岩～粘板岩	35	20	15	23.3	0.1～0.2	新鮮	
24	頁岩～粘板岩	60	35	25	40.0	0.4	新鮮	
25	頁岩～粘板岩	50	35	30	38.3	0.1～0.2	新鮮	人為的割れ
26	頁岩～粘板岩	50	40	30	40.0	0.1	新鮮	ややホルンフェルス化、人為的割れ
27	ホルンフェルス	75	35	30	46.7	0.1～0.2	新鮮	人為的割れ
28	砂岩	95	50	35	60.0	0.3	新鮮	ハツリ
29	砂岩	70	45	30	48.3	0.4	新鮮	
30	花崗岩	12	7	6	8.3	0.6～0.7	中	黒雲母
31	チャート	11	10	8	9.7	0.4～0.5	新鮮	灰色
32	ホルンフェルス	14	12	10	12.0	0.2～0.3	新鮮	
33	頁岩～粘板岩	20	15	10	15.0	0.2	新鮮	
34	チャート	13	10	8	10.3	0.2	新鮮	灰色
35	砂岩	14	8	8	10.0	0.6	新鮮	
36	頁岩～粘板岩	25	15	12	17.3	0.2	新鮮	
37	頁岩～粘板岩	22	14	11	15.7	0.1～0.2	新鮮	
38	砂岩	20	15	12	15.7	0.6	新鮮	
39	砂岩	20	14	9	14.3	0.6	弱	
40	ホルンフェルス	15	10	10	11.7	0.2	新鮮	
41	砂岩	20	13	10	14.3	0.4～0.5	新鮮	
42	砂岩	25	14	12	17.0	0.5～0.6	新鮮	
43	頁岩～粘板岩	15	14	14	14.3	0.1～0.2	新鮮	
44	砂岩	13	8	8	9.7	0.4	新鮮～弱	
45	チャート	15	10	10	11.7	0.2	新鮮	黒色
46	花崗岩	20	14	9	14.3	0.4～0.5	新鮮	
47	ホルンフェルス	35	25	20	26.7	0.1～0.2	新鮮	半裁、ハツリ
48	砂岩	16	14	12	14.0	0.5～0.6	新鮮	
49	頁岩～粘板岩	52	30	30	37.3	0.2	新鮮	
50	ホルンフェルス	15	15	12	14.0	0.2	弱	
51	砂岩	25	20	18	21.0	0.4	弱	
52	砂岩	25	25	10	20.0	0.3～0.4	新鮮	
53	頁岩～粘板岩	20	15	10	15.0	0.3	新鮮	
54	頁岩～粘板岩	17	13	8	12.7	0.4	新鮮	
55	ホルンフェルス	15	10	7	10.7	0.6～0.7	弱	
56	砂岩	12	10	7	9.7	0.2	新鮮	
57	ホルンフェルス	13	10	5	9.3	0.4	弱	
58	砂岩	13	6	6	8.3	0.7	弱	
59	砂岩	10	10	8	9.3	0.6～0.7	弱	
60	砂岩	18	11	7	12.0	0.5	弱	
61	ホルンフェルス	11	7	6	8.0	0.1～0.2	弱	
62	砂岩	10	6	5	7.0	0.5～0.6	新鮮	
63	頁岩～粘板岩	15	10	10	11.7	0.1～0.2	弱	
64	ホルンフェルス	15	10	10	11.7	0.1～0.2	新鮮	

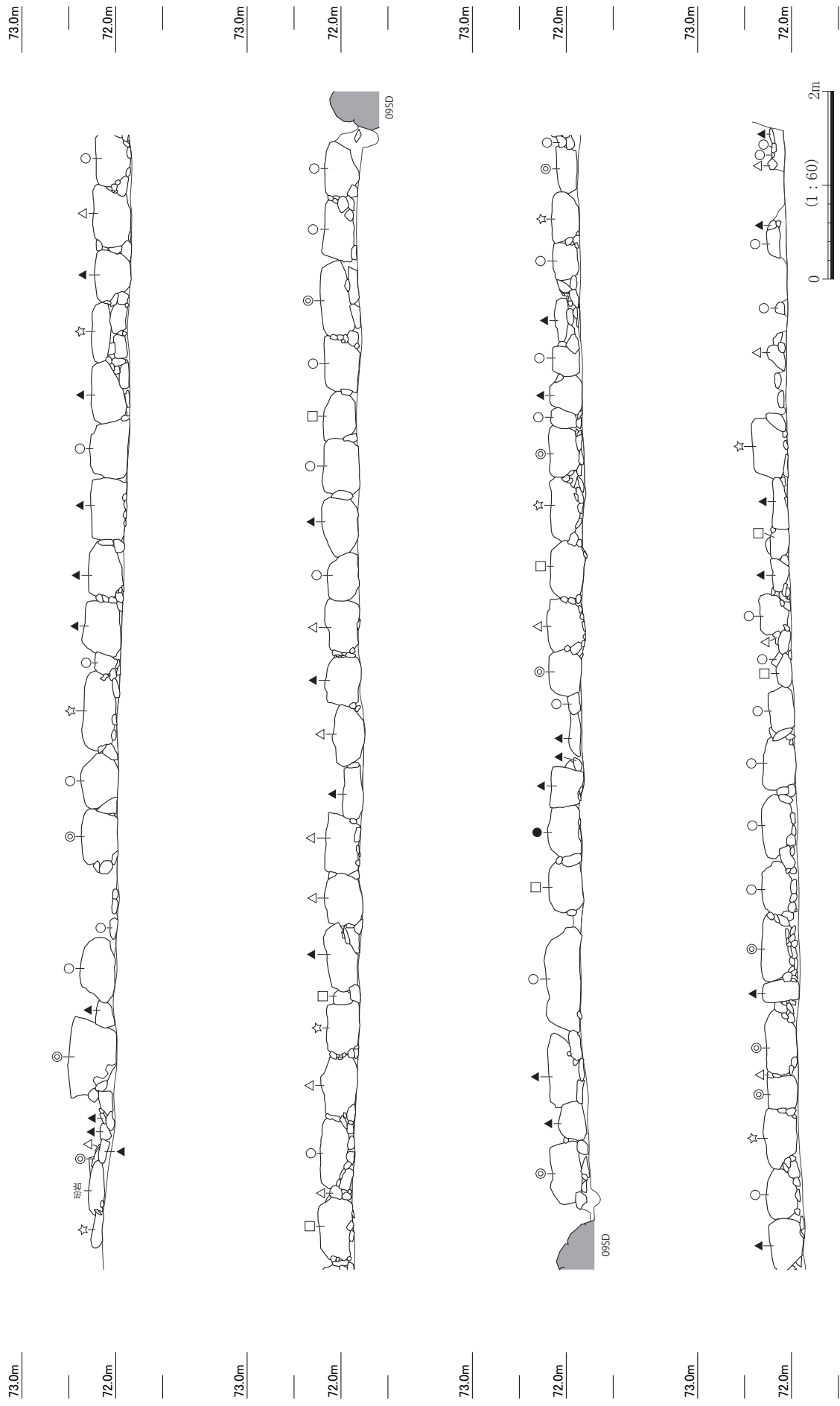
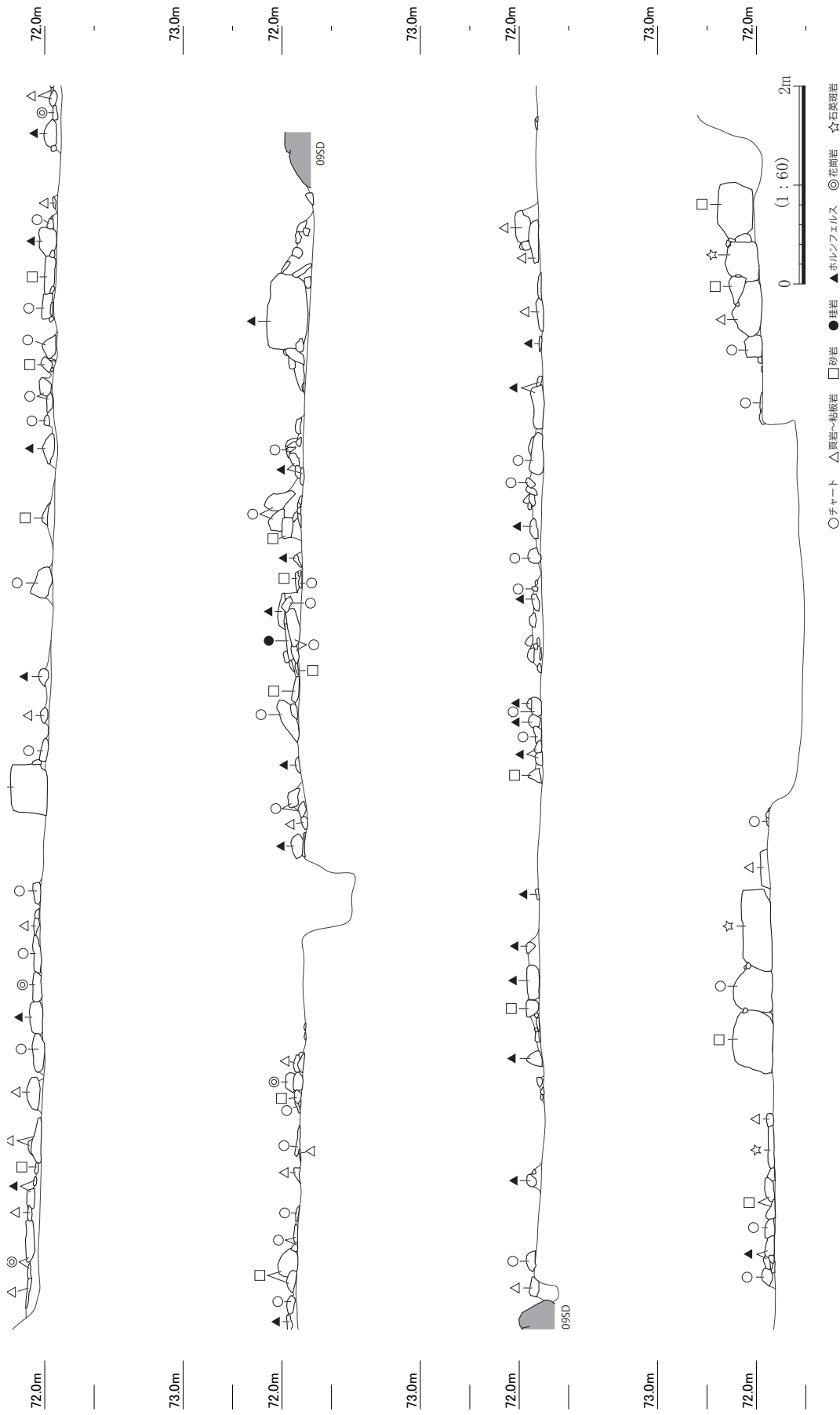


図 47 石組溝 085D 東側壁石材種別立面図（上段から北→南）



石組溝 08SD 立面図 (内面西側)

図 48 石組溝 08SD 西側壁石材種別立面図 (上段から南→北)

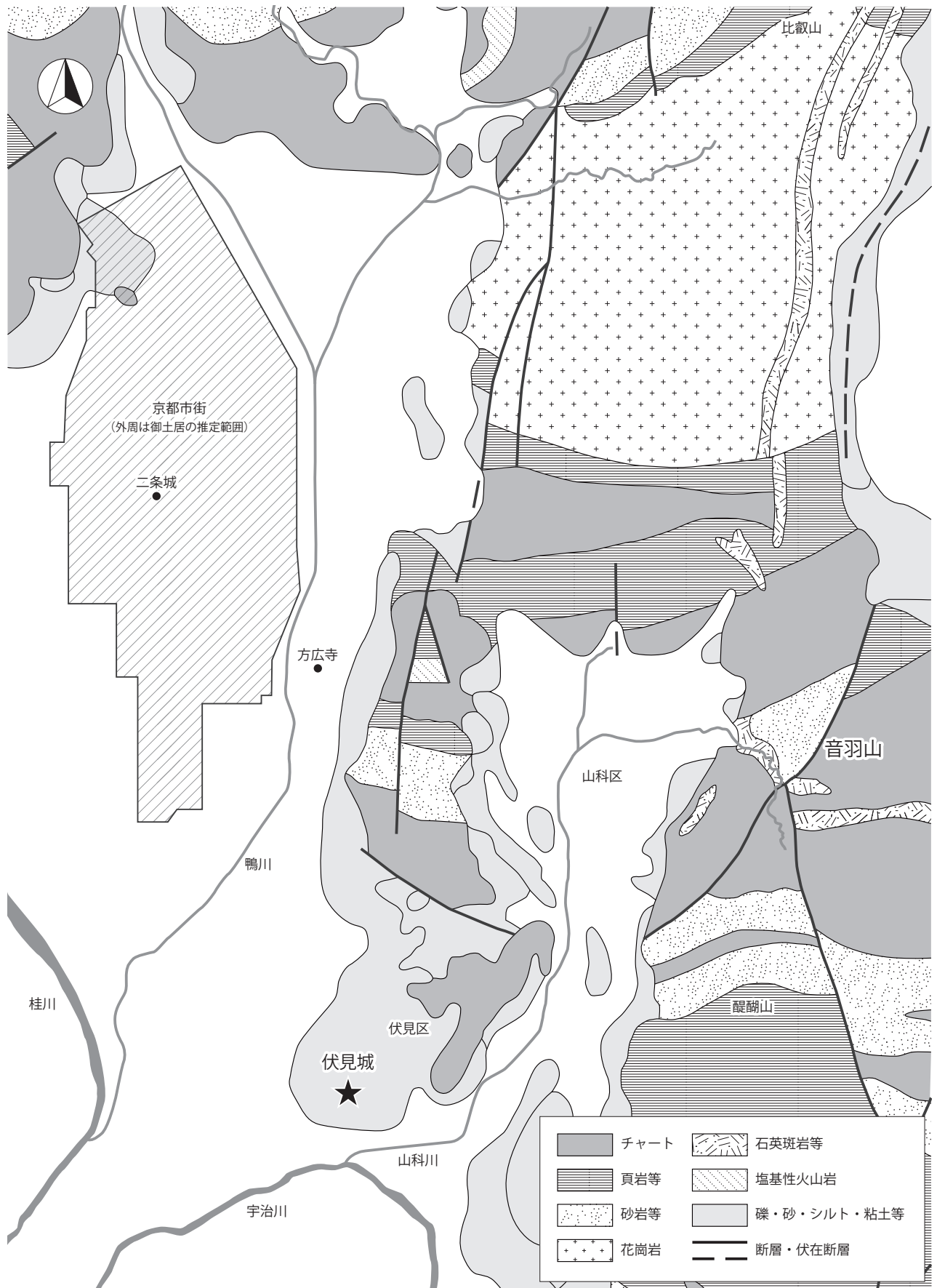


図 49 調査地周辺の地質図

築城に関し、「文禄三年二月初此より、廿五万人乃着到にて、醍醐、山科、比叡山、雲母坂より、大石を引出す事夥し」との記述がある。

3. 石組溝 08SD の構築年代と矢穴痕

今回検出した石組溝 08SD には、東側壁の北端部分 24 グリットで矢穴痕を残す花崗岩の切石 1 石 (図 50) が使用されていた。矢穴の特徴からこれまでの研究で慶長～元和期前後の切石であることが窺え、徳川による再建伏見城に関連する遺構である可能性を示すものといえた。

伏見城の再建は慶長 6 年 (1601) から開始され、翌慶長 7 年 (1602) 末にはほぼ再建がなっていたとされる。以後も作事は続けられるが、慶長 12 年 (1607) からの駿府城改築に伴いそれも停止され、元和 5 年 (1619) 以降は廃城方針となる。

慶長 7 年 (1602) の伏見城再建以降、大坂城へ移っていた大名屋敷が伏見城に帰還していることから、当時の大名屋敷地に比定される本調査地の石組溝 08SD も、伏見城第 IV a 期の初期に構築された可能性が高いと考えられる。

この様に考えるならば、図 50 の矢穴痕の使用年代を、これまでの元和期前後ではなく、石垣 01SL の転用石であれば慶長元年 (1596) に、石垣 05SL の残材であれば限りなく慶長 6 年 (1601) に近い年代に位置付けることができるものと思われる。

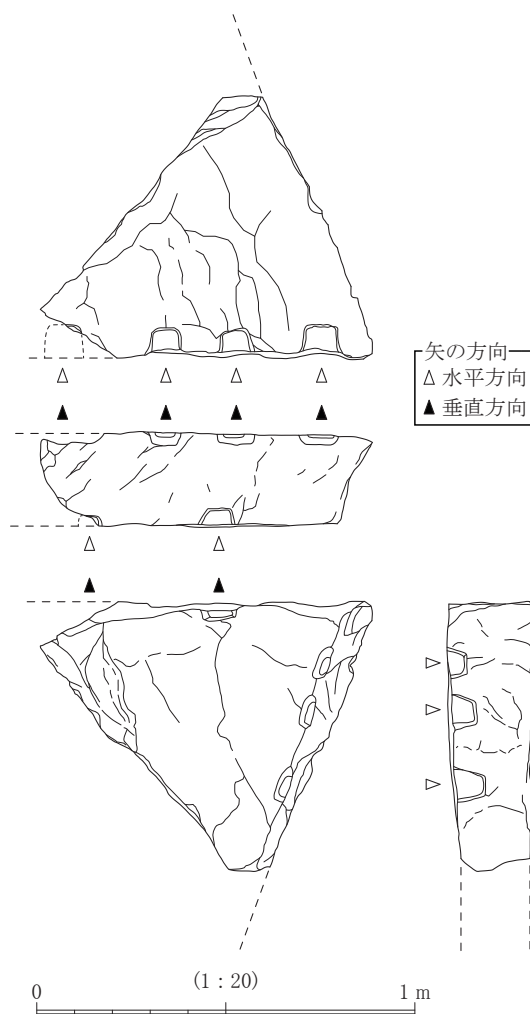


図 50 石組溝 08SD の矢穴石実測図

<引用参考文献>

- 小瀬甫庵『甫庵太閤記』(寛永 3 年) 桑田忠親校訂 岩波文庫 1984 年
- 聖母女学院短期大学伏見学研究会編『伏見学ことはじめ』思文閣出版 1999 年
- 武内良一「『山科の石』について - 伏見城関連 山科 (大塚・小山) の石切場 - (上)」『古代学研究』206 古代学研究会 2015 年
- 武内良一「『山科の石』について - 伏見城関連 山科 (大塚・小山) の石切場 - (下)」『古代学研究』207 古代学研究会 2015 年
- 森岡秀人「木幡山伏見城跡の桃山陵墓地内観察と「豊徳」期城郭提唱の意義」『京都橘大学大学院研究論文集』15 京都橘大学 2017 年

第2節 検出遺構と周辺調査遺構

1. 周辺調査の遺構

第2章第3節で概要を示した北側調査地①と南側調査地②で検出された遺構と、今回検出した遺構との関連を整理しておきたい。以下の内容は、各調査担当者との意見の総意をみた結果ではなく、筆者の個人的な推測にもとづく内容であることを最初に断っておく。特に両調査区共に、遺構平面図に座標の取り付けが無い場合、敷地境界線や道路側線で調整を図った。この点についても経年による周辺環境の変化は大きく、急傾斜地での測量機材での誤差も大きいと考えられ、完全に現況と全てが一致することは困難であったため、恣意的な配置となっている。

北側調査地①

北側調査地①で検出され、今回の調査に関係する遺構（図51・52）は、「石垣1」、「石垣1に伴う西側の縁石」、「石垣2」、「排水溝？」である。

「石垣1」は、「弧を描いて曲り、途中でとぎれてしまう」もので、石材は「一辺が1mを越えるものもあるが、一般的に伏見城に使用されている花崗岩を矢割りした石材ではなく、一見して庭園に使用するような自然石が主体」としている。

「石垣1に伴う西側の縁石」は、「石垣1の一段下がった西側にも、小ぶりの石列（延石）が平行して存在する」ものである。

「石垣2」は、「石垣1から、さらに東へ法面側に10m余り入った位置」にあり、「石垣1と同じく西向きで、ほぼ平行しており、検出した長さは9m弱、高さは残存良好なところで1.5mあり、主に前面が方形の花崗岩の切石で構築されている。石垣は20個以上の比較的大ぶりの石材で構築」されている。石材は、「花崗岩の切り石が主で、石垣の表面観察からでは、矢で割った痕跡のある石や、刻印のある石は確認できなかった」「2段のみが残存していた…、石

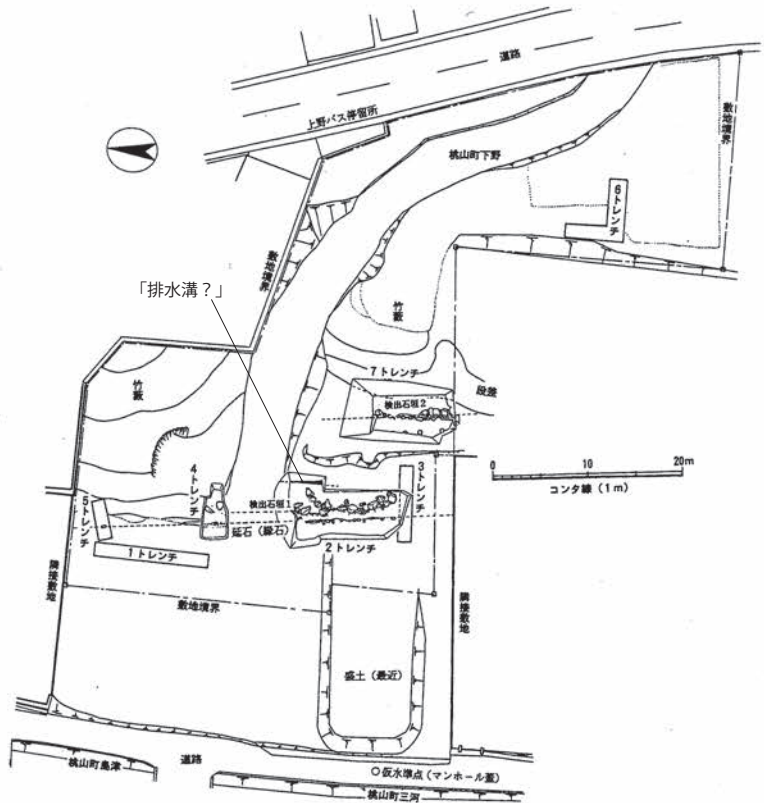


図51 北側調査地①平面図（梶川（1996）より転載・一部加筆、1：800）

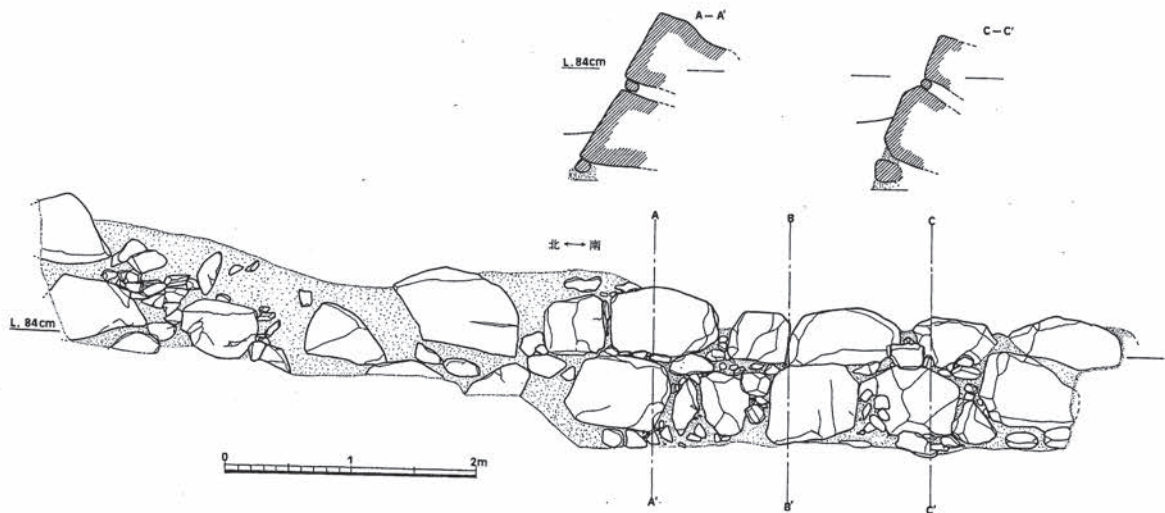


図 52 北側調査地①石垣 2 立面・断面図 (梶川 (1996) より転載、1:30)

垣の傾斜角度は 65 度前後」であった。

「排水溝？」の記載は無いが、報文中の平面図並びに写真に写るもので、石垣 1 と石垣 2 の間にある南北方向の石塊の入る溝で、溝の西側の一部が検出された。「近世～近代」と図中に注記されている。

今回これらの遺構の内「石垣 1」は、石組みは勿論、安定して据えられておらず、上面不揃いな石列で円弧を描き、石面を揃えていないなど、到底石垣とは考えられない。後述する石組溝の上にあることなどを考え合わせると、後世の遺構と考えられる。「石垣 1 に伴う西側の縁石」は、石垣 1 とは無関係と考えられ、西側の延石の石面が明らかに東側にあること、石垣 1 の下に見え隠れる東側の延石と共に、溝幅 0.5 ～ 0.6 m 余りを測る石組溝と考えられる。今回調査地の石組溝 08SD 北側延長部と推測することができる。「石垣 2」は、検出北端の石材も含め残存 3 段の石垣ではなかったかと考えられ、根石は南壁断面図から 1 段目のみの様で、根石中位に固い路面整地層があったようである。根石の設置は、地山を石垣前面から裏側切り土まで広く切り込んで地業を行った後、再び石垣設置部分を掘り込んで地業上に石垣を据えるもので、石垣 01SL とよく似ている。傾斜角度も同じである。石材は花崗岩としているが、よく似た石英斑岩等もあり慎重を要する問題であり、今は保留しておきたい。石材の加工法は、立面図や写真からも「切石」にはみえず、割石と考えられる。石材加工法、根石の設置法、石垣の傾斜角度等の類似から、今回調査地の石垣 01SL 北側延長部と推測することができる。「排水溝？」は、調査当時重要とは考えられなかったため記載がないが、今回調査地の石垣 05SL・根石設置溝の北側延長部と推測することができる。

南側調査地②

報文は僅かであり、1 枚の全体図と 2 枚の写真、3 枚のスケッチからなる。このうち南側調査地②で検出され、今回の調査に関係する遺構 (図 53・54) は、「第 2 ～ 5 トレンチの西寄り

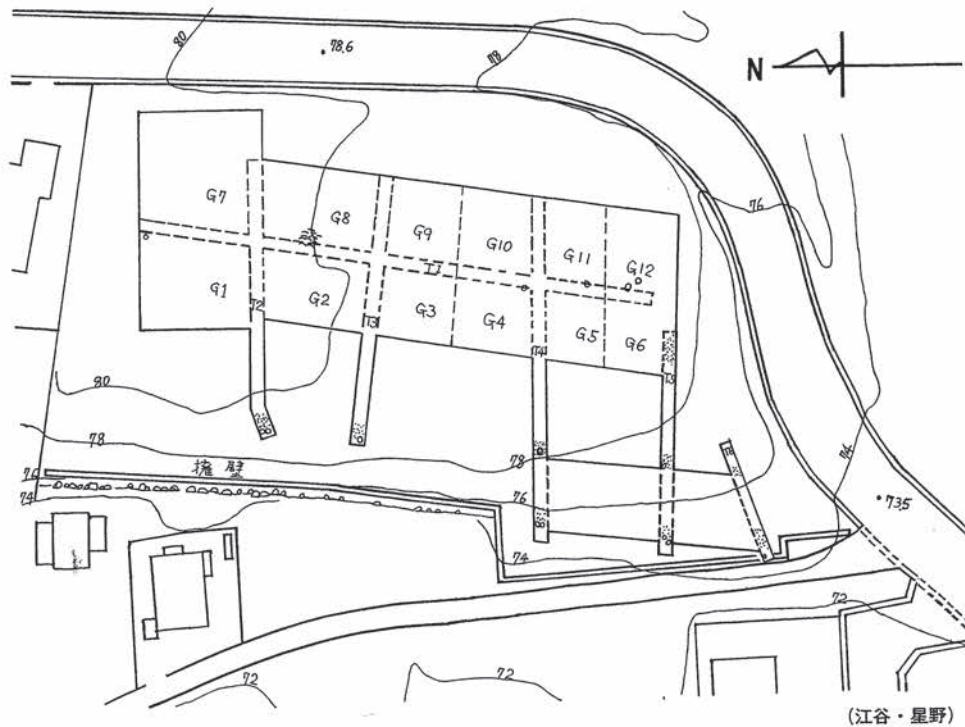


図 53 南側調査地②平面図（星野（2006）より転載、1：800）

T.P.77 の線で裏込礫と石垣石材を確認」とする石垣と、調査終了後の擁壁工事で現れた石列で「西面した石垣の最下段…、トレンチの4～6で確認したものと続くもの」である。

「第2～5トレンチの西寄り T.P.77 の線で裏込礫と石垣石材を確認」の「石垣」は、第2トレンチの南壁面のスケッチ（図54）と写真が残されており、その存在が確認される。スケッチから、2段余りの石材が残されていたようである。石材についての記述はない。

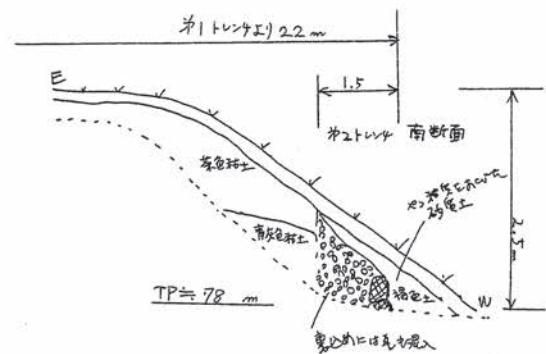


図 54 第2トレンチ南壁面スケッチ（星野（2006）より転載）

「西面した石垣の最下段…、トレンチの4～6で確認したものと続くもの」は、西側に面をもつ石列であることが確認できる。

今回これらの遺構の内「石垣」は、立面や根石の状況等の詳細は不明であるが、石垣であったことは裏込の存在からも首肯され、今回調査地の石垣 01SL 南側延長部と推測することができる。「西面した石垣の最下段…、トレンチの4～6で確認したものと続くもの」は、石組溝 08SD の東側壁と推測することができる。

2. 2時期の石垣と周辺調査遺構との関連

これらの北側調査地①と南側調査地②の各遺構と今回検出した遺構を、2時期の石垣を中心に並べたのが石垣 05SL 期の遺構配置図（図55）と、石垣 01SL 期の遺構配置図（図56）である。

石垣 05SL 期 (図 55)

石垣 05SL は、今回の調査区と同じように、北側調査地①と南側調査区②の両地点においても石垣自体は残存しておらず、全て解体搬出されたものと考えられる。しかし、その痕跡は根石設置溝や裏込栗石層として残されており、その存在は確実である。このことは、同じように北側調査地①では「排水溝？」として検出され、南側調査地②では既に遺構が削平されていたのか検出されなかった。

石組溝 08SD は、北側調査地①の「石垣 1 に伴う西側の縁石」(西側壁)や、南側調査区②の「西面した石垣の最下段…、トレンチの 4～6 で確認したものと続くもの」(東側壁)と同じ一連の石組溝の側壁石列で、3 調査区全てで検出されていて、石垣 01SL と同じ東へ 7° 43' の角度で並行して一直線に延び、総延長は 218m 余りを確認できたことになる。石垣 05SL・根石設置溝の西端と石組溝 08SD 東側壁面の距離は、約 3.6～3.9m (12～13 尺) の約 2 間である。これが路面(道路)の幅である。伊達街道沿いの調査例から推測すれば、この石組溝 08SD の西側には犬走と数段の石組(低い石垣)があって、大名屋敷があったものと考えられる。

石垣 01SL 期 (図 56)

石垣 01SL は、北側調査区①の「石垣 2」と南側調査区②の「石垣」と考えられるが、南側調査区②の「石垣」と今回調査区の石垣 01SL は直線で結べ、石組溝 08SD と同じ角度であったが、北側調査区①の「石垣 2」との角度は同じであるのに直線では結べず、東に約 3m (10 尺) の誤差が生じた。これについては、石垣に折れがあるためではないかと推測している。その出角と入角の位置は、「仮称・下板橋通」の東端と仮定した。この結果、「仮称・下板橋通」の北と南では路の幅に差があり、「推定南北通」の北が約 10m (33 尺)、南が約 6 m (20 尺) であった可能性を高くするものとなった。

なお、石垣 01SL 期の遺構配置図(図 56)では、掘立柱柵(塀) 03SA を今回の調査区での距離間隔で復元的に配置した。

3. まとめ

前項では、今回の発掘調査で確認した 2 時期の石垣の存在から、北側調査地①と南側調査地②の 2 件の既調査による検出遺構との関連について推測してみた。そこには、森島康雄氏が且つて指摘した、木幡山西麓における町割りの一部が姿を現したことになる。しかし、森島康雄氏が指摘されるように「安易な時期比定を慎み、検出した遺構の方向性や整地層との関係、各遺構や整地層・焼土層などから出土した遺物の構成などを総合的に判断し、根拠を明示して正確な時期比定を行うことが肝要」であることはいままでもない。火災痕は、戦国期の伏見城及び城下での大きな火災だけとっても、慶長 5 年(1600)の伏見城が落城した「伏見城の戦い」、慶長 10 年(1605)の立売町周辺大名屋敷の火災、慶長 15 年(1610)の「伏見大火」と暇がない。今回の路面焼土中の炭化物を放射性年代測定にかけようとしたが、こちらが望むような詳細な年代比定は誤差の範囲内であり無理である旨、分析会社から断られた経緯がある。このことは土器編

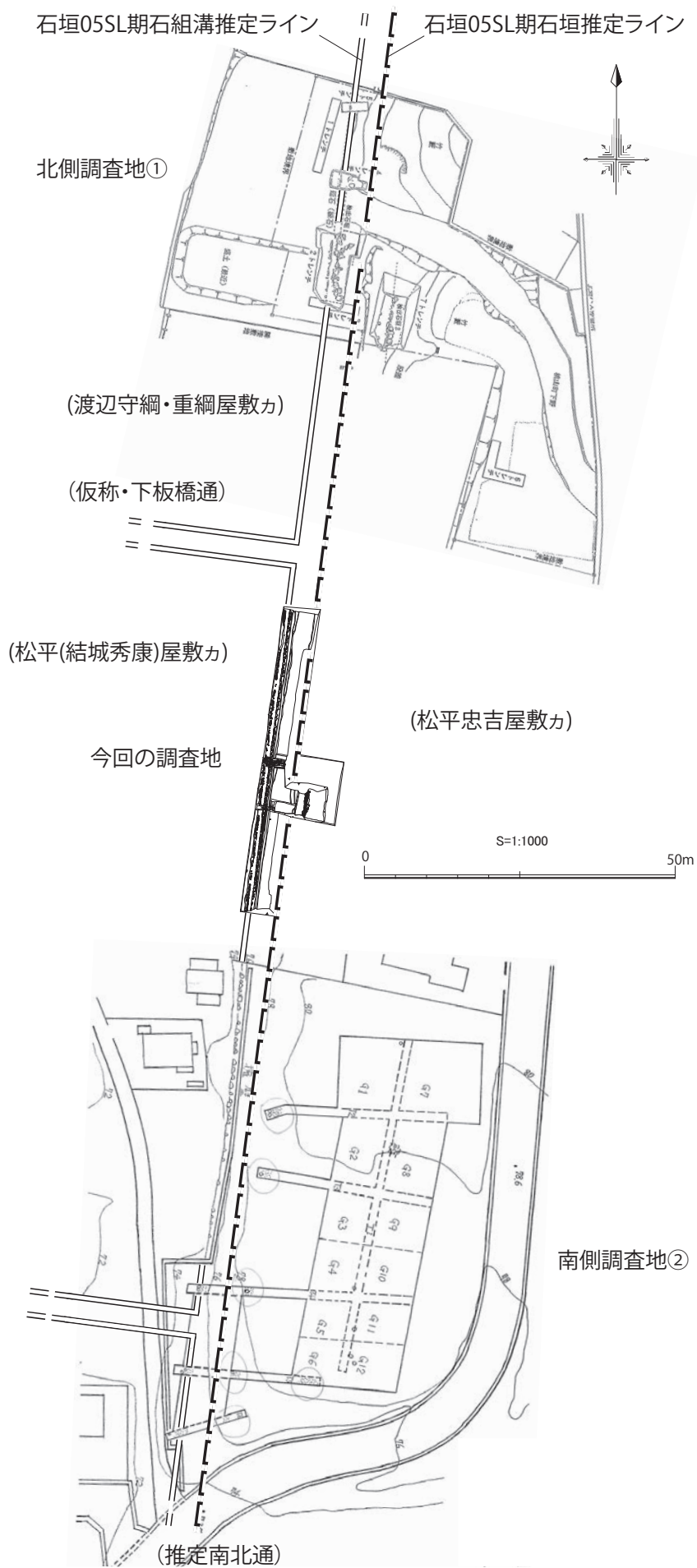


図 55 石垣 05SL 期周辺遺構推測図 (1 : 1,000)

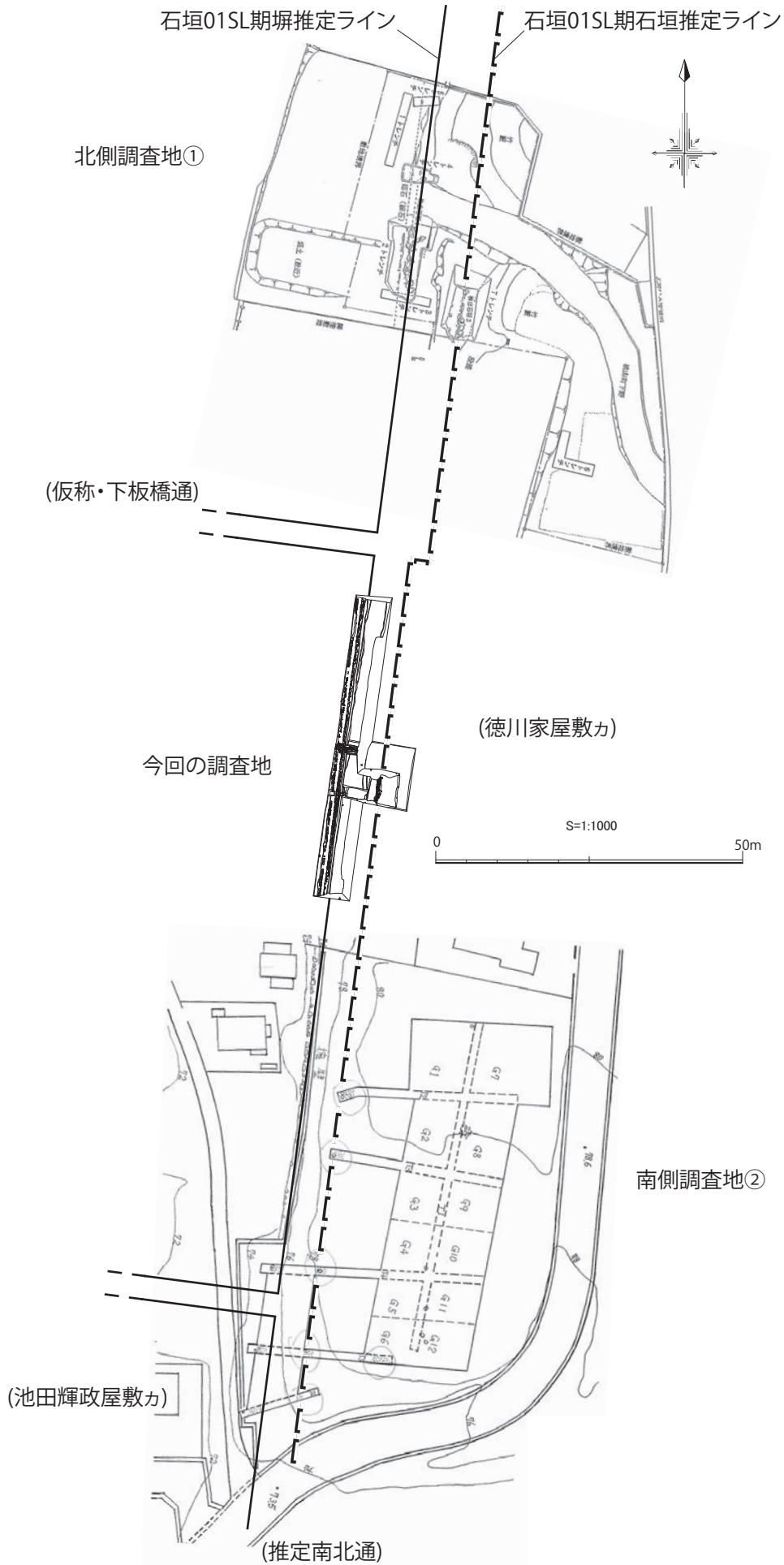


図 56 石垣 01SL 期周辺遺構推測図 (1 : 1,000)

年の年代比定でも同じであり、誤差の範囲といえる。慎重な調査が望まれる所以である。

〈引用参考文献〉

- 梶川敏夫「伏見城跡 No.68」『平成7年度京都市内遺跡試掘調査概報』京都市埋蔵文化財調査センター 1996年
星野猷二「50 伏見区桃山町下野 26～27」『器瓦録想』其の二 伏見城研究会 2006年
森島康雄「考古学からみた伏見城・城下町」『豊臣秀吉と京都一聚楽第・お土居と伏見城一』日本史研究会 文理閣 2008年
森島康雄「伏見城下町の考古学的調査」『ヒストリア』第222号 大阪歴史学会 2010年
長谷川達「伏見城跡」『京都府遺跡調査概要』第8冊 (財)京都市埋蔵文化財調査研究センター 1983年
久世康博「伏見城跡1」『昭和63年度京都市埋蔵文化財概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1993年
久世康博「伏見城跡 (FD32)」『京都市内遺跡試掘立会調査概要』昭和63年度京都市文化観光局 1989年
吉村正親「伏見城跡1」『昭和58年度京都市埋蔵文化財概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1985年
平田泰・布川豊治「伏見城跡」『平成18年度京都市埋蔵文化財概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2008年
小松武彦「伏見城跡」『平成10年度京都市埋蔵文化財概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2000年

第3節 まとめ

今回の調査では石垣 05SL 期の遺構変遷を3時期、石垣 01SL 期の遺構変遷を2時期検出した。特に石垣 01SL は、石垣 05SL の裏込の奥から検出されたことが特筆される。

この石垣 01SL 期と石垣 05SL 期の2時期の石垣の構築時期を考えてみたい。

今回検出された石垣の角度は、約65度である。因みに聚楽第の本丸石垣 (SW105) の傾斜角度は約55度であり、一辺0.7～1.0mの花崗岩の自然石を用いており、石仏などの転用石はなく大阪城と同様であるという。古淀城の石垣は、花崗岩を主体としてチャートが少量含まれ、自然石を必要に応じ粗割りした石積みであるという。また、天正十四年に築造を開始した方広寺の石垣 (石罫) は、西面には1m以上の高さのある石材が用いられ、大きな矢穴も存在している。南面石垣の延長部の最下段には、幅2.2～2.5m、高さ0.5～1.5mの巨石を据付、上段は小振りな石材を用いるが、石の隙間には石仏、石塔、石碑を多く用いているのが特徴的であるという。一方、木幡山伏見城の北堀西端南屈曲部の石垣は、裏込を伴わない石垣で、傾斜角度が62度もあるという。石材は全て花崗岩であったが、大半は自然石もしくは粗割り石であり、墨書が確認されているという。しかし、伏見城北堀の中央から東側にかけての石垣は、多量の裏込が充填され、石垣の傾斜角度は50～55度であった。石垣の傾斜は、古いほど直に積む傾向にあり、今回の石垣 01SL が石垣の傾斜角度のみでは古いタイプに属する。

石材の種類と加工法については、木幡山伏見城の北堀西端南屈曲部の石垣では、自然石と粗割り石で、花崗岩が大半を占め、多くの刻印が認められるなど、より新しい要素がみられたのに対し、今回の石垣 01SL では石材が花崗斑岩、砂岩、チャート、頁岩～粘板岩とさまざまであり、花崗岩が少ないことが大きな特徴である。自然石と粗割り石を用いて作られ、古い要素が多い。

伏見城の変遷は、4時期に分けるのが一般的である。今回の調査成果を総括的にみて、表1の4時期変遷に当てはめるならば、石垣 01SL 期は文禄5年 (1596) の地震以降に建設された豊臣の木幡山伏見城である伏見城第Ⅲ期に、石垣 05SL 期は「伏見城の戦い」以降に再建された徳

川の伏見城第Ⅳ a 期に相当するものと考えられる。さらに、その石垣 05SL 期の石組溝 08SD を壊して作られている石組暗渠排水溝 09SD は、伏見城第Ⅳ a 期末か第Ⅳ b 期以降に相当すると考えられる。

今後は周辺の調査の進展により、伏見城の全容がさらに明らかになることを期待したい。

<引用参考文献>

岩松保ほか「平安宮跡・聚楽第跡」『京都府遺跡調査報告集』第 156 冊（公財）京都府埋蔵文化財調査センター 2013 年

尾藤徳行・長戸満男ほか『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2010 - 7 2012 年

近藤知子「方広寺跡の発掘調査」『豊臣秀吉と京都』日本史研究会編 2001 年

中井均「城郭史からみた聚楽第と伏見城」『豊臣秀吉と京都』日本史研究会編 2001 年

中井均「伏見城と豊臣・徳川初期の城郭構造」『ヒストリア』第 222 号 大阪歴史学会 2010 年

星野猷二・三木善則「54 伏見区桃山町大蔵」「55 伏見区桃山町大蔵」『器瓦録想』其の二 伏見城研究会 2006 年

森岡秀人「木幡山伏見城の桃山陵墓地内観察と『豊徳』期城郭提唱の意義」『京都橘大学大学院研究論集』第 15 号 2017 年

丸川義広「伏見城の考古学的調査」『ヒストリア』第 222 号 大阪歴史学会 2010 年

森島康雄「考古学からみた伏見城・城下町」『豊臣秀吉と京都』日本史研究会編 2001 年

森島康雄「伏見城城下町の考古学的調査」『ヒストリア』第 222 号 日本史研究会編 2001 年

山田邦和「伏見城とその城下町の復元」『豊臣秀吉と京都』日本史研究会編 2001 年

表6 土器観察表

									※単位はcm、()は復元値
遺物番号	出土遺構	器形	口径	器高	底径/台径	形成・技法の特徴	色調	備考(器種・時期・産地ほか)	
1	1-1~11層	菊皿	(10.8)	2.2	(6.3)	全体に施釉、内面は中央部ふきとりか 底部は底面が露胎(一部、磨耗)	5Y6/2	瀬戸・美濃系 京XII期新(17c中葉)	
2	試掘3Tr	鉢	(20.6)	(1.6)	(16.2)	内面に施釉、比熱か 外面から底部にかけて露胎	2.5Y8/3	瀬戸・美濃系 大窯4後期(16c末~17c初頭)	
3	試掘3Tr	碗	(11.0)	(4.4)	-	内外面ともに施釉、外面下位は露胎	5Y8/1	瀬戸・美濃系(志野) 大窯4末(17c初頭)	
4	1-12~15層	碗	(6.2)	(1.75)	(3.0)	内外面ともに施釉 外面下位は露胎、底部は回転ヘラケズリ	5Y7/2	京焼 京XIII期中(17c末~18c初頭)	
5	攪乱	碗	(8.0)	(2.75)	4.0	内外面ともに施釉、外部は銅緑釉 底部は回転ヘラケズリ	7.5GY7/1	軟質施釉陶器 (17c後半~末)	
6	攪乱	播鉢	(17.2)	(5.3)	(13.4)	内外面ともに回転ナデ、内面に摺目	2.5YR6/6	信楽 (17c前半中葉)	
7	試掘2Tr	碗	(10.2)	(3.0)	-	内外面ともに施釉	5GY8/1	肥前系 (18c初頭)	
8	1-28層	天目茶碗	(6.7)	(2.55)	4.0	内面に施釉、外面は露胎し被熱か 底部は露胎し回転ヘラケズリ	7.5YR6/3	瀬戸・美濃系 連房I期(17c前半中葉)	
9	1-16~27層	皿	(9.2)	(1.85)	(4.6)	内外面ともに施釉 底部は露胎、高台は砂目	7.5GY8/1	広南地方(白磁) 京XII期古(16c末~17c初頭)	
10	1-16~27層	皿	(11.4)	(1.6)	(6.9)	内外面ともに施釉、底部は軸はぎ、高台内施釉	5GY8/1	肥前系(染付) (17c前半中葉)	
11	1-16~27層	壺	-	(5.2)	-	内外面ともに施釉	5Y8/4	華南三彩 明末(17c前葉)	
12	1-16~27層	播鉢	(19.0)	(4.85)	(13.0)	内外面ともに回転ナデ、内面に摺目	2.5YR5/4	丹波 (17c前半)	
13	08SD	羽釜	(24.0)	(2.9)	-	内外面ともにヨコナデ	10YR8/4	土師器 京XII期古(16c末~17c初頭)	
14	08SD	坏	(10.0)	(1.15)	-	内面の口縁部~体部にかけてヨコナデ 外面の口縁部はヨコナデ、体部はヘラナデ	10YR8/3	土師器 京XII期中(17c前半中葉)	
15	08SD	碗	-	(2.8)	-	内外面ともに施釉	7.5GY8/1	漳州窯系 (16c末~17c初頭)	
16	08SD	皿	(12.0)	(2.1)	-	内外面ともに施釉	2.5Y7/4	瀬戸・美濃系(瀬戸灰釉) (17c前半中葉)	
17	08SD	播鉢	-	(2.9)	-	内面は回転ナデと摺目 外面は回転ナデとヨコナデ	7.5YR8/6	信楽 (17c前半)	
18	08SD	向付	(10.6)	(2.3)	(6.2)	内外面ともに施釉 体下位から底にかけて露胎、回転ヘラケズリ	2.5Y5/2	肥前系(唐津) (17c前半)	
19	08SD	碗	(5.35)	(2.25)	3.0	内外面ともに施釉 外面下位は露胎、底部は被熱か	10YR8/2	肥前系(唐津) (17c前半)	
20	08SD	向付	(10.6)	(3.6)	(5.5)	内外面ともに施釉 体下位は露胎、回転ヘラケズリ、底部に胎土	7.5YR4/4	肥前系(唐津) (16c末~17c初頭)	
21	08SD	播鉢	(26.0)	(4.1)	-	内外面ともに回転ナデ、内面に摺目	2.5YR5/6	信楽 (17c前半)	
22	08SD	播鉢	(20.1)	(6.6)	(12.0)	内外面ともに回転ナデ、内面に摺目、底部に 離れ砂	5YR7/6	丹波 (16c後葉~17c後葉)	
23	08SD	播鉢	-	(5.9)	-	内外面ともに回転ナデ、内面に摺目	2.5YR5/6	丹波 (16c後葉~17c後葉)	
24	08SD	播鉢	(19.2)	(4.85)	(15.1)	内外面ともに回転ナデ、内面に摺目 底部は離れ砂	2.5YR6/6	丹波 (16c末~17c初頭)	
25	08SD	皿	(11.0)	(1.4)	-	内外面共に回転ナデ	10YR8/3	土師器 京XII期古(16c末~17c初頭)	
26	08SD	坏	(11.0)	(1.2)	-	内外面共に回転ナデ	7.5YR7/4	土師器 京XII期中(17c前半中葉)	
27	08SD	天目茶碗	(12.7)	(2.9)	-	内外面ともに施釉、外面下位は露胎	10YR2/1	瀬戸・美濃系 大窯4後半(16c末)	
28	08SD	天目茶碗	(6.3)	(1.5)	4.8	内外面ともに被熱、内面は施釉、外面は露胎、 底部は回転ヘラケズリ	10YR7/2	瀬戸・美濃系 大窯4後半(16c末)	
29	08SD	碗	(8.0)	(1.75)	(4.7)	全体に施釉、底部下位は軸はぎ	5GY8/1	景德鎮系(染付) (16c末~17c初頭)	
30	08SD	播鉢	(19.4)	(4.15)	(15.3)	内面に摺目、外面は回転ナデ、底部に離れ 砂	2.5YR3/3	備前 (16c後半後葉)	
31	08SD	播鉢	(26.2)	(9.05)	(14.0)	内外面ともに回転ナデ、内面に摺目、底部に 離れ砂	2.5YR6/6	信楽 (16c末~17c初頭)	
32	08SD	播鉢	(20.4)	(5.85)	(15.1)	内面に胎土目か、外面は回転ナデと摺目、 底部は回転ナデ	2.5YR5/6	信楽 (16c末~17c初頭)	
33	08SD	播鉢	(19.9)	(5.0)	(13.7)	内外面ともに回転ナデ、内面に摺目	5YR6/6	信楽 (16c末~17c初頭)	
34	08SD	皿	(15.0)	(1.9)	-	内外面ともに施釉、外面下位は露胎	2.5Y7/2	肥前系(唐津) (16c末~17c初頭)	
35	08SD	天目茶碗	(12.4)	(4.75)	-	内外面ともに施釉と回転ヘラケズリ 体下位は露胎	5YR2/2	瀬戸・美濃系 大窯4後半(16c末)	
36	08SD	碗	(13.9)	(3.2)	-	内外面ともに施釉	7.5GY8/1	漳州窯系(染付) (16c末~17c初頭)	
37	08SD	(鉢・盤カ)	(22.7)	(1.9)	(15.5)	内面と底部ともに回転ナデ 外面は回転ヘラケズリ	2.5YR3/3	備前 (16c後半後葉)	
38	08SD	壺	-	(2.8)	-	内面は回転ナデ 外面は施釉	7.5YR3/4	備前 (16c後半後葉)	
39	08SD	向付	(8.5)	(0.9)	(5.2)	全体に施釉、内外面は被熱か 底部は回転ナデ	2.5Y7/6	瀬戸・美濃系(志野) 大窯後期(16c末~17c初頭)	
40	08SD	(皿カ)	-	-	-	内外面ともに施釉、被熱	2.5Y8/1	福建省産(染付) (16c末~17c初頭)	
41	08SD	播鉢	(17.0)	(5.2)	(13.6)	内外面ともに回転ナデ、内面に摺目	2.5YR6/4	信楽 (16c末~17c初頭)	
42	08SD	皿	(14.8)	(1.6)	(12.0)	全体に施釉、内面に胎土目	7.5YR4/4	瀬戸・美濃系 連房I期(17c前半中葉)	
43	08SD	播鉢	(30.4)	(8.9)	-	内外面ともに回転ナデ、内面に摺目	2.5YR6/8	信楽 (17c前半)	
44	06SD	大皿	-	(2.9)	-	内外面ともに施釉、回転ナデ	2.5Y7/6	瀬戸・美濃系 大窯4後半(16c末)	
45	06SD	播鉢	-	(3.25)	-	内外面ともに回転ナデ、内面に摺目	2.5YR6/6	信楽 (16c末~17c前半)	
46	09SD	播鉢	(19.3)	(7.2)	(11.8)	内外面ともに回転ナデ、内面に摺目 底部に離れ砂	7.5YR7/6	信楽 (16c末~17c初頭)	

表7 鉄製品観察表

※単位はcm、()は残存長

遺物番号	出土遺構	種類	長さ	厚	形成技法の特徴	備考
47	6-4・5層	鎌カ	(7.6)	方形部0.3×0.5 円形部直径0.3	折れ曲がっていて、断面方形部(頸部)と断面円形部(茎部)があり、鎌身と茎先端部は失われる	鉄製品
48	6-4・5層	刀子カ	(5.3)	峰幅0.3、刃幅0.8~1.2	刃先があり、刀子とみられる	鉄製品
49	6-12層	釘	(5.0)	0.6×0.5	断面方形で、先端が尖る	鉄製品
50	根石設置溝	釘	(3.3)	0.6×0.3	断面方形で、次第に細くなる	鉄製品

表8 銭貨観察表

※単位は口径・厚がcm、重量がg

遺物番号	出土遺構	銭種	面径	厚	重量	備考(初鑄年ほか)
51	6-12層	元豊通宝	2.5	0.08	2.2	銅製品、初鑄1078年
52	3-1層	天聖元宝	2.5	0.1	2.4	銅製品、初鑄1023年

表9 軒丸瓦観察表

※単位はcm、()は復元値、圏線「○」は有り、「-」は不要項目が無し、空欄は不明、接合法は凡例																		
遺物番号	形式	分類名	遺構名	地区名	グリット名	接合法	三巴文		瓦当		文様区径	内区径	周縁		珠文		備考	
							巻き方向	圏線	径	厚			幅	高	径	数		復元数
53	桐文	1類A	09SD	2	5		-	-	(14.6)	2.2	(10.0)	-	(2.4)	0.8	-	-	-	53～63と同範
54	桐文	1類A	09SD	2	13		-	-	(14.0)	2.6	(10.0)	-	2.1	0.7	-	-	-	53～63と同範 生漆痕 丸瓦凹面コピキB
55	桐文	1類A	06SD	3	18		-	-	(14.8)	2.3	(10.0)	-	2.4	0.7	-	-	-	53～63と同範 丸瓦凹面コピキB
56	桐文	1類A	06SD	3	23		-	-	(14.4)	(2.2)	(10.0)	-	(2.2)	0.7	-	-	-	53～63と同範 丸瓦凹面コピキB
57	桐文	1類A	06SD	3	20		-	-	(14.8)	2.4	(10.0)	-	2.3	0.7	-	-	-	53～63と同範
58	桐文	1類A	08SD	3	20		-	-	(14.6)	2.5	(10.0)	-	2.3	0.7	-	-	-	53～63と同範
59	桐文	1類A	06SD	3	25		-	-	(14.0)	2.2	(10.2)	-	2.0	1.0	-	-	-	53～63と同範
60	桐文	1類A	08SD	4	8		-	-	(14.8)	2.5	(10.0)	-	2.5	0.7	-	-	-	53～63と同範
61	桐文	1類A	08SD	4	5		-	-	(14.6)	2.5	(10.0)	-	2.3	0.7	-	-	-	53～63と同範
62	桐文	1類A	05SL	3	3		-	-	(14.6)	2.5	(10.0)	-	2.3	0.7	-	-	-	53～63と同範
63	桐文	1類A	05SL	3	9		-	-	(14.4)	2.3	(10.4)	-	(2.0)	0.9	-	-	-	53～63と同範
64	菊文	2類A	試掘5Tr	4	1		-	-	(12.2)	2.0	(8.2)	-	2.0	1.0	-	-	-	小型
65	菊文	2類B	08SD	3	16		-	-	(14.6)		(10.6)	-	2.0	0.7	-	-	-	
66	菊文	2類C	06SD	3	22		-	-	(16.0)	(1.6)	(12.4)	-	1.8	0.7	-	-	-	丸瓦凹面コピキB 大型
67	左巻三巴文	3類A	08SD	3	23		左	-	(14.4)	2.0	(11.9)	(9.0)	1.8	0.7	0.7	(5)	12	
68	左巻三巴文	3類B	08SD	2	12		左	-	(14.6)	(2.0)	(10.8)	(8.0)	1.5	0.6	0.8	(4)	12	68～72と同範 丸瓦凹面コピキB
69	左巻三巴文	3類B	08SD	3	20	B1	左	-	(14.6)	1.8	(10.6)	(7.2)	2.0	0.7	0.8	(9)	12	68～72と同範
70	左巻三巴文	3類B	08SD	2	13		左	-	(14.0)	1.6	(10.6)	(7.0)	1.8	0.5	0.8	(4)	12	68～72と同範
71	左巻三巴文	3類B	06SD	3	23		左	-	(14.6)	2.0	(10.6)	(7.0)	1.5	0.7	0.6	(3)	12	68～72と同範
72	左巻三巴文	3類B	08SD	3	21	B2	左	-				(7.0)			0.8	(2)	12	68～72と同範
73	右巻三巴文	4類A	05SL	3	25		右	○				6.8			0.7	(5)	19	金箔瓦
74	右巻三巴文	4類B	08SD	4	5		右	○	(14.2)	1.6	(10.0)	(6.6)	2.0	0.5	0.6	(10)	25	
75	右巻三巴文	4類C	08SD 石組抜き取り 穴の埋め土	4	5		右	○	(16.0)	2.2	(12.0)	(8.6)	2.2	0.7	0.8	(11)	19	76・77と同範 丸瓦凹面コピキB 大型

※単位はcm、()は復元値、圏線「○」は有り、「-」は不要項目無し、空欄は不明、接合法は凡例

遺物番号	形式	分類名	遺構名	地区名	グリット名	接合法	三巴文		瓦当		文様区径	内区径	周縁		珠文		備考	
							巻き方向	圏線	径	厚			幅	高	径	数		復元数
76	右巻三巴文	4類C	6-4・5層	1	9~13		右	○	(16.4)	2.2	(12.0)	(8.8)	2.2	0.9	0.9	(8)	19	75・77と同範大型
77	右巻三巴文	4類C	08SD	4	8		右	○	(16.6)	2.2	(12.0)	(8.8)	2.3	0.6	0.9	(4)	19	75・76と同範大型
78	右巻三巴文	4類D	08SD	4	6		右	○	12.7	2.2	9.6	6.2	1.9	0.6	0.9	17		小型
79	右巻三巴文	4類E	06SD	3	17		右	○	(15.0)	2.1	(11.4)	(7.0)	2.0	0.7	1.2	(4)	11	80と同範
80	右巻三巴文	4類E	06SD	3	20		右	○	(14.8)	2.0	(11.6)	(7.0)	1.7	0.8	1.3	(2)	11	79と同範
81	右巻三巴文	5類A	08SD	4	7	B1	右	-	16.4	3.0	11.2	7.9	2.7	0.9	1.0	(9)	17	金箔瓦大型
82	右巻三巴文	5類B	08SD	4	5		右	-	(14.0)	1.7	(10.2)	(6.2)	2.0	0.6	0.8	(12)	23	
83	右巻三巴文	5類C	08SD	2	12		右	-	(17.0)	2.3	(12.8)	(10.0)	2.1	0.8	0.7	(7)	23	大型
84	右巻三巴文	5類D	08SD	4	4		右	-	(14.8)		(11.6)	(6.0)	1.7	1.0	1.1	(5)	11	85と同範丸瓦凹面コピキB
85	右巻三巴文	5類D	08SD	4	4		右	-	(14.4)	2.4	(10.6)	(6.6)	1.8	1.0		(6)	11	84と同範
86	右巻三巴文	5類E	08SD	4	6		右	-	14.2	2.0	10.4	6.2	1.8	0.8	1.1	11		86~98と同範丸瓦凹面コピキB・ゴザ状圧痕体部釘穴
87	右巻三巴文	5類E	08SD	4	6	B1	右	-	(14.6)	1.7	(10.8)	(6.0)	1.8	0.9	1.1	(4)	11	86~98と同範丸瓦凹面コピキB・ゴザ状圧痕体部釘穴
88	右巻三巴文	5類E	08SD	4	5		右	-	(14.0)	(2.2)	(10.4)	(6.4)	1.8	0.9	1.0	(6)	11	86~98と同範丸瓦凹面コピキB・ゴザ状圧痕
89	右巻三巴文	5類E	06SD	2	12		右	-	14.6	2.0	10.8	6.2	2.0	0.7	1.1	(7)	11	86~98と同範
90	右巻三巴文	5類E	08SD	2	12		右	-	(14.6)	1.6	(10.8)	(6.2)	1.7	0.6	0.6	(3)	11	86~98と同範
91	右巻三巴文	5類E	08SD 石組抜き取り穴の埋め土	3	20		右	-	(14.4)	2.1	(10.2)	(6.0)	2.1	0.8	1.0	(7)	11	86~98と同範
92	右巻三巴文	5類E	08SD	4	4		右	-	(14.6)	1.9	(10.4)	(6.4)	2.1	0.7	1.0	(3)	11	86~98と同範
93	右巻三巴文	5類E	08SD 石組抜き取り穴の埋め土	4	7		右	-	(14.0)	2.3	(10.0)	(6.4)	2.0	0.9	1.0	(4)	11	86~98と同範
94	右巻三巴文	5類E	08SD	3	16		右	-	(15.0)	2.0	(10.9)	(6.6)	2.1	0.8	1.1	(4)	11	86~98と同範
95	右巻三巴文	5類E	08SD	4	7		右	-	(14.0)	2.4	(10.4)	(5.8)	1.8	0.9	1.1	(4)	11	86~98と同範
96	右巻三巴文	5類E	3-1層	2	11		右	-	(14.2)	2.2	(10.6)	(6.0)	2.0	0.7	0.9	(2)	11	86~98と同範
97	右巻三巴文	5類E	08SD	2	11		右	-	(14.4)	2.0	(9.0)	(4.8)	2.7	0.7	1.2	(3)	11	86~98と同範
98	右巻三巴文	5類E	試掘5Tr	4	1		右	-	(14.0)	2.5	(10.4)	(6.2)	2.2	1.0	1.1	(3)	11	86~98と同範

※単位はcm、()は復元値、圏線「○」は有り、「-」は不要項目か無し、空欄は不明、接合法は凡例

遺物番号	形式	分類名	遺構名	地区名	グリット名	接合法	三巴文		瓦当		文様区径	内区径	周縁		珠文			備考
							巻き方向	圏線	径	厚			幅	高	径	数	復元数	
99	右巻三巴文	5類F	08SD	4	4		右	-	(14.4)	(2.2)	(10.4)	(5.6)	2.0	0.8	1.2	(8)	11	丸瓦凹面コビキB・内叩き・ゴザ状圧痕、体部釘穴
100	右巻三巴文	5類G	09SD	3	13		右	-	(13.6)	2.2	(10.6)	(7.6)	1.9	0.7	0.7	(7)	12	丸瓦凹面コビキB
101	右巻三巴文	5類H	08SD	4	5		右	-	(15.0)	2.5	(10.6)	(6.6)	2.2	0.9	1.0	(4)	12	
102	右巻三巴文	5類I	1層	1	9~13		右	-	(16.6)	2.2	(12.6)	(8.8)	2.0	0.7	1.1	(3)	13	大型
103	右巻三巴文	5類J	08SD	3	22		右	-	(14.2)	1.7	(10.2)	(7.0)	2.2	0.7	1.0	(4)	14	104と同范 丸瓦凹面コビキB
104	右巻三巴文	5類J	08SD	3	24	B1	右	-	14.0	1.7	(10.2)	(7.0)	2.0	0.8	1.0	(13)	14	103と同范 瓦当裏面コビキB
105	右巻三巴文	5類K	08SD 石組抜き取り穴の埋め土	4	7	B1	右	-	(14.4)	(2.2)	(10.8)	(7.8)	1.9	0.9	0.9	(6)	14	
106	右巻三巴文	5類L	06SD	4	1		右	-	(14.2)	(2.2)	(10.2)	(6.6)	(1.5)	0.6	0.8	(5)	14	107と同范
107	右巻三巴文	5類L	08SD	4	18		右	-	(13.6)	1.5	(10.0)	(6.6)	2.0	0.6	0.9	(6)	14	106と同范
108		不明	攪乱	3	22~24		右											
109		不明	08SD 石組抜き取り穴の埋め土	3	22													
110		不明	08SD	3	19										(1.0)	(1)		
111		不明	09SD	2	13		右					(5.4)			1.0	(3)		
112		不明	1層	2	9~13		右								1.1	(2)		
113		不明	08SD	4	2	B2						(6.2)			1.1	(2)		
114		不明	06SD	4	5		右		(14.0)	2.2	(11.6)	(8.4)	1.2	0.8	0.8	(6)		
115		不明	08SD	3	24				(14.6)	(2.3)			(1.5)	(0.8)	0.6	(4)		
116		不明	06SD	3	23				(14.0)				1.9	0.9	(0.6)	(1)		
117		不明	09SD	2	13	B2	右		(13.0)	(2.1)	(8.8)	(6.0)	2.1	0.7	0.8	(3)		丸瓦凹面コビキB
118		不明	06SD	4					(14.0)	-	(10.0)		2.0	0.8	1.2	(1)		
119		不明	08SD	3	24				(12.0)	2.0	(7.2)		2.3	0.6	0.9	(4)		丸瓦凹面コビキB 小型
120		不明	6-4・5層	2	9~13	B1			(14.0)		(9.0)		2.5	0.9	0.9	(2)		
121		不明	08SD	4	8	B1			(17.4)		(10.0)		2.2	0.9	(1.1)	(3)		大型

※単位はcm、()は復元値、圏線「○」は有り、「-」は不要項目か無し、空欄は不明、接合法は凡例

遺物番号	形式	分類名	遺構名	地区名	グリット名	接合法	三巴文		瓦当		文様区径	内区径	周縁		珠文			備考
							巻き方向	圏線	径	厚			幅	高	径	数	復元数	
122		不明	08SD	3	23				(12.4)	1.3	(8.4)	(6.0)	2.0	0.6	0.9	(1)		
123		不明	08SD	3	19								1.4	0.6	0.8	(2)		
124		不明	08SD	2	12				(11.6)	1.9	(8.4)	(5.2)	1.6	0.5	1.0	(3)		
125		不明	08SD	3	21				(14.0)	2.0	(10.0)	(7.0)	2.0	0.7	0.8	(2)		
126		不明	06SD	3	19				(12.4)	2.6	(9.0)	(6.6)	1.6	0.9	0.7	(2)		小型
127		不明	06SD	3	18				(13.2)	2.8	(10.0)		1.9	0.9	1.1	(1)		
128		不明	08SD	4	12				(14.2)	1.9	(10.6)	-	1.8	0.8	(0.9)	(2)		
129		不明	08SD	4	12				(14.2)	2.0	(10.6)	(6.0)	1.8	0.8	1.1	(3)		
130		不明	断割トレンチ	2	9				(14.0)	1.9	(11.0)	(6.6)	1.5	0.5	0.9	(3)		
131		不明	08SD	3	24				(15.4)	1.9	(11.2)	(7.2)	2.1	0.9	1.1	(1)		赤漆+金箔瓦
132		不明	08SD 石組抜き取り 穴の埋め土	3	20				(13.0)	1.8			2.0	0.5	0.9	(2)		
133		不明	05SL	3	3		右		(14.6)	2.2	(10.6)	(7.2)	2.0	0.7	0.9	(3)		
134		不明	断割トレンチ	2	9				(14.2)	2.5	(9.6)	(6.2)	2.3	0.7	0.8	(3)		周縁内側に面取り
135		不明	06SD	4	2		左		(13.0)	2.2	(9.6)	(6.4)	1.7	0.8	0.7	(1)		
136		不明	08SD	3	16								(2.2)	(0.7)	0.7	(1)		丸瓦凹面吊り紐+コビキB
137		不明	08SD	3	15	B1			(14.0)				1.9	0.8				
138		不明	08SD	4	4	B1			(13.2)	1.5	(9.4)		1.9	0.6				丸瓦凹面コビキB
139		不明	08SD	4	5	B1			(13.0)	1.5	(8.8)	-	2.1	0.6				小型
140		不明	08SD	4	23				(14.0)	2.0	(9.2)		2.3	0.7				

表 10 軒平瓦観察表

※単位はcm、()は復元値、圏線「○」は有り、「-」は不要項目が無し、空欄は不明、接合法は凡例																									
遺物番号	形式	分類名	遺構名	地区名	グリット名	瓦当				文様区		周縁								顎			平瓦厚	備考	
						上弦幅	下弦幅	厚	弧深	幅	高	上幅	面取り	下幅	面取り	左幅	面取り	右幅	面取り	高	上部厚	下部厚			高
141	唐草文	1類A	6-3層	2	9~13			(5.2)			3.6	(0.9)		0.7	内	1.6				0.7	3.9	2.3	3.2	2.2	142と同範
142	唐草文	1類A	1層	2	11			(5.4)			(3.7)	(0.9)		(0.8)		(2.2)				0.5	3.3	2.0	(3.0)	2.0	141と同範
143	唐草文	1類B	08SD	3	21			4.3			3.1	0.7		0.5		(2.5)				0.6	2.8	1.6	2.3	2.0	金箔瓦
144	唐草文	1類C	08SD	4	6	20.3	20.3	3.3	2.5	17.7	2.0	0.8		0.6		1.3		1.5		0.3	2.5	1.7	2.2	1.0	144~148と同範
145	唐草文	1類C	06SD	2	11			3.6	2.5		2.1	1.0	外	0.5				1.0		0.4	3.2	1.6	2.1	1.6	144~148と同範
146	唐草文	1類C	08SD	3	21	(21.0)	(22.4)	(3.7)	(2.0)	(18.2)	(2.2)	1.1	外	(0.6)		1.7				0.5	3.2	1.6	(2.3)	1.3	144~148と同範
147	唐草文	1類C	08SD	2	10			3.6			2.2	1.0	外	0.6				1.5		0.5	3.0	1.6	2.5	1.4	144~148と同範
148	唐草文	1類C	06SD	4	7			3.3			2.0	0.7	外	0.6		1.2				0.5	2.8	1.7	2.0	1.5	144~148と同範
149	唐草文	1類D	08SD	3	23	(20.6)	(22.0)	3.2	2.3	(16.0)	2.0	0.7	外	0.5		2.9				0.4	2.3	1.8	1.5	1.6	150と同範
150	唐草文	1類D	06SD	4	6									0.6						0.3					
151	唐草文	1類E	08SD	3	15			3.9	-		2.3	1.0	外	0.6						0.3	3.0	1.8	2.5	1.5	
152	唐草文	1類F	06SD	2	12	(21.2)	(22.0)	3.4	(2.5)	(15.0)	2.0	0.9	外	0.5		(3.0)				0.4	2.5	1.9	2.2	1.7	
153	唐草文	1類G	08SD	3	18			3.4			1.9	1.0	外	0.6		3.4				0.5	2.8	1.5	2.1	1.4	
154	唐草文	1類H	08SD	2	12			3.6			2.3	0.7	外	0.6						0.5	1.6	1.2	1.6	1.7	154~157と同範
155	唐草文	1類H	06SD	2	12			3.4			2.1	0.7	外	0.6				3.0		0.4	1.3	0.8	2.2	1.4	154~157と同範
156	唐草文	1類H	6-4-5層	2	9~13			3.6			2.2	0.7		0.7				-		0.5	1.9	1.1	2.1	1.4	154~157と同範
157	唐草文	1類H	08SD	4	12			3.4			2.1	0.8		0.5				3.5		0.5	2.1	1.4	1.8	1.4	154~157と同範
158	唐草文	1類I	08SD	3	18			2.9			1.9	0.6		0.4		3.1				0.4	2.0	1.0	1.5	1.5	
159	唐草文	1類J	08SD	3	21			3.3	-		2.1	0.8	外	0.5						0.3	1.7	1.4	1.8	1.4	
160	唐草文	1類K	08SD	4	8	(19.6)	(19.8)	2.8	2.0	(14.0)	1.5	0.7	外	0.6				2.7		0.6	1.8	1.3	1.2	1.5	
161	不明	1類L	08SD	3	20			(3.3)			(1.8)	1.0	外	(0.5)				(3.5)		0.4	1.6	1.1	1.8	1.7	
162	不明	1類L	08SD	3	23							0.9	外					3.5		0.3				1.6	
163	唐草文	1類L	08SD	3	21			3.6			2.0	0.8	外	0.8				2.3		0.4	2.2	1.2	2.0	1.6	

※単位はcm、()は復元値、圏線「○」は有り、「-」は不要項目が無し、空欄は不明、接合法は凡例

遺物番号	形式	分類名	遺構名	地区名	グリット名	瓦当				文様区		周縁								顎			平瓦厚	備考					
						上弦幅	下弦幅	厚	弧深	幅	高	上幅	面取り	下幅	面取り	左幅	面取り	右幅	面取り	高	上部厚	下部厚			高				
164	唐草文	1類L	08SD	4	12							0.8	外			2.4							0.3					1.4	
165	唐草文	1類L	06SD	3	20							1.0	外										0.5						
166	不明	1類L	08SD	3	16							0.9											0.3					1.5	
167	不明	1類L	06SD	3	22									0.9									0.5						
168	不明	1類L	08SD	3	15				-		-	-		0.7									0.5					-	
169	桐文・唐草文	2類A	08SD	3	22	(23.0)	(22.6)	4.7	(2.5)	(16.6)	(2.9)	0.9		(0.9)		(2.8)							0.5	4.0	2.0	3.0	1.8	170と同範	
170	桐文・唐草文	2類A	08SD	3	25			4.8			2.8	1.0		1.0		3.2							0.5	3.7	1.6	3.0	1.6	169と同範	
171	唐草文	2類B	08SD	4	3			4.8			2.8	1.1	外	0.9				(2.0)					0.6	3.0	1.7	2.9	1.6	金箔瓦	
172	巴文	2類C	09SD	3	13																		4.5			2.4	滴水瓦		
173	花文	3類A	08SD	2	12	(22.2)	(21.6)	5.5	(2.5)	(17.2)	3.1	1.4	外	(0.9)		2.2							0.5	1.0	3.1	2.9	1.6		
174	唐草文	3類B	08SD	3	20	(20.2)	(19.2)	4.9	2.0	(16.8)	2.9	1.3	外	0.7		2.0							0.5	3.2	1.3	3.5	1.2		
175	唐草文	3類C	08SD	2	9			(4.5)			(2.5)	1.3	外	(0.6)				2.2					0.5	3.0	2.0	2.7	1.4		
176	唐草文	3類D	08SD	3	17			3.7			2.3	0.9	外	0.5				4.0					0.4				1.3		
177	唐草文	3類E	06SD	4	8			(4.1)			2.6	(0.8)		(0.8)									0.6	(3.1)	(1.3)	2.9	(1.2)		
178	唐草文	3類F	08SD 石組抜き取り穴の埋め土	3	15			3.9			2.4	0.9	外	0.6		1.8							0.4	3.0	1.3	2.7	1.5		
179	唐草文	3類G	08SD 石組抜き取り穴の埋め土	3	17			(4.3)			(2.6)	(1.1)	外	(0.6)		(3.0)							0.5	3.0	1.8	(3.0)	1.4		
180	唐草文	3類H	6-4・5層	2	9~13			3.8			2.1	0.8	外	0.8		3.6							0.4	2.5	(1.3)	2.3	1.8		
181	不明	3類I	08SD	3	21								外			(1.9)											1.5		

表 11 丸瓦観察表

※単位はcm、()は復元値、「-」は不要項目が無い、空欄は不明																
遺物番号	分類名	遺構名	地区名	グリット名	全長	体部長	高さ	体部幅	弦幅	弧深	丸瓦厚	玉縁長		玉縁幅		備考
												a	b	a	b	
182	玉縁丸瓦	06SD	4	8			6.5	(13.0)	(13.0)	4.5	2.0~2.4					
183	玉縁丸瓦	6-4・5層	1	9~13			(5.3)	(13.6)	(13.6)	(3.6)	1.6~1.7					
184	玉縁丸瓦	08SD	4	6	23.9	20.2	5.9	13.1	12.5	4.2	1.6~1.8	3.4	3.7	6.5	11.0	
185	玉縁丸瓦	08SD	4	6	24.9	21.8	6.8	12.8	(12.8)	3.9	1.6~2.0	2.7	3.7	7.5	10.5	
186	玉縁丸瓦	06SD	2	11			6.3	13.1	12.3	4.8	1.5~1.7	3.8	4.1	8.0	12.6	
187	玉縁丸瓦	08SD	4	4			5.8	12.5	12.5	4.1	1.6~1.8	3.5	3.8	6.3	10.7	
188	玉縁丸瓦	08SD	2	11			6.6	13.0	13.0	4.1	1.4~2.4	3.7	4.1	(7.4)	10.4	
189	玉縁丸瓦	06SD	3	17			5.0	13.0	13.0	3.7	1.0~1.5	2.6	3.0	(8.2)	(10.8)	
190	玉縁丸瓦	08SD 石組抜き取り穴の埋め土	4	7			6.2	12.5	12.5	4.6	1.6~1.8	3.5	4.1	7.5	10.6	
191	玉縁丸瓦	06SD	2	10			6.3	13.2	12.5	4.6	1.2~1.7	3.7	4.1	8.5	11.1	

表 12 平瓦観察表

※単位はcm、()は復元値、「-」は不要項目が無い、空欄は不明											
遺物番号	分類名	遺構名	地区名	グリット名	長さ	幅		平瓦厚	弧深	弧線	備考
						広端	狭端				
192	平瓦	08SD	4	3	24.0	(21.2)		1.4~1.6	2.6		
193	平瓦	06SD	4	3				1.5~1.7	(2.3)		
194	平瓦	06SD	2	11				1.3~1.6	(2.5)		
195	平瓦	08SD	4	6			(19.5)	1.3~1.5	2.5		
196	平瓦	08SD	4	4				1.6	(1.5)		
197	塀瓦	1層	1	9~13		-	-	2.0			

図 版



1 調査前の状況（南から）



2 調査前の状況（北から）



1 調査地と伏見城城下町を望む（東から）



2 調査地、桃山町下野の平場、伏見城跡主郭部等を望む（南西から）



1 石垣 01SL と裏込 (北西から)



1 路面より上に残存する石垣 01SL (西から)



2 石垣 01SL と断割トレンチ検出の根石 (西から)



1 石垣 01SL の基礎地業と根石設置溝の断面（北から）



2 根石の傾斜（南から）



3 基礎地業の傾斜（西から）



4 裏込栗石の状況（北西から）



1 石垣 01SL 根石 (西から)



2 石垣 01SL 根石 (北西から)



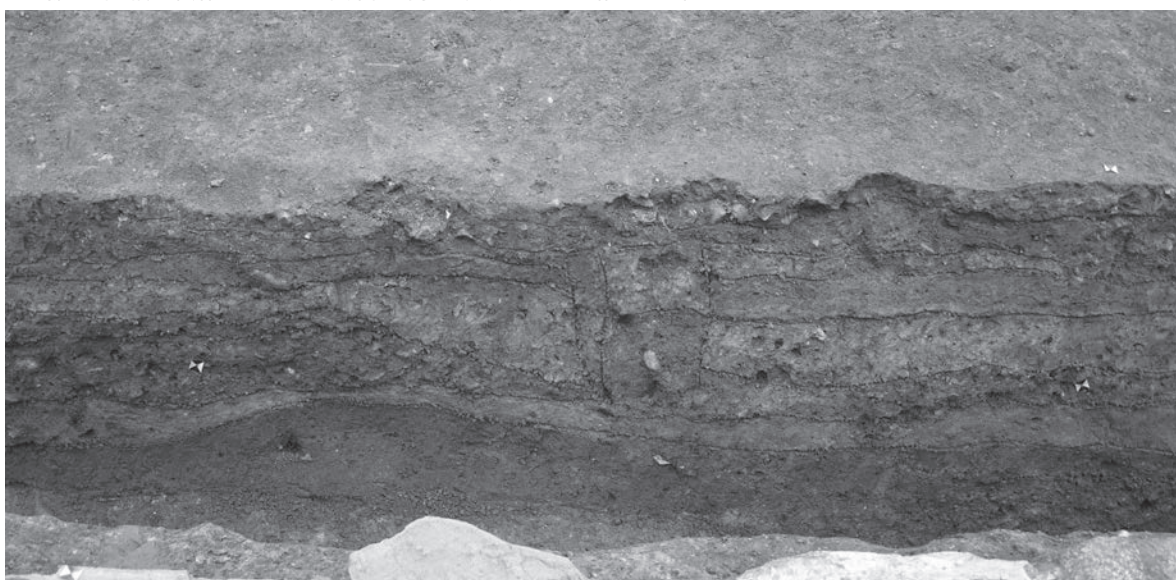
1 石垣 01SL 根石の北側細部（西から）



2 石垣 01SL 根石の南側細部（西から）



1 掘立柱柵（塀）03SA の根石を持つ柱穴 09SP（西から）



2 掘立柱柵（塀）03SA の柱穴 12SP（西から）



3 掘立柱柵（塀）03SA の柱穴 26SP・27SP（西から）



1 石垣 05SL 裏込 (北西から)



1 石垣 05SL 裏込と西側の道路 07SF (西から)



2 石垣 05SL 裏込と西側の道路 07SF (北西から)



1 石垣 05SL の裏込、根石設置溝と道路 07SF、石組溝 08SD (北から)



2 石垣 05SL の裏込、根石設置溝と道路 07SF、石組溝 08SD (南から)



1 石垣 05SL の裏込と壁面（北から）



2 石垣 05SL の裏込（北東から）



3 石垣 05SL の根石設置溝（北から）



4 石垣 05SL の裏込栗石状況（西から）



1 素掘り溝 06SD (南から)



1 素掘り溝 06SD 南半 (北から)



2 素掘り溝 06SD 北半 (南から)



3 素掘り溝 06SD 南半の溝の形状 (北から)



4 素掘り溝 06SD の南壁面 (北から)



1 石組溝 08SD の溝内完掘 (北から)



2 石組溝 08SD の溝内完掘（南から）



1 石組溝 08SD の溝内完掘（南東から）



2 石組溝 08SD の溝内（北から）



3 石組溝 08SD の溝内（南から）



1 石組溝 08SD の掘方完掘（北から）



1 石組溝 08SD の掘方完掘（南から）



1 石組溝 08SD 北半の掘方完掘（北から）



2 石組溝 08SD 南半の掘方完掘（北から）



3 石組溝 08SD 南半の溝内・掘方完掘（北から）



1 石組溝 08SD、24グリット東側列の矢穴のある花崗岩（北西から）



2 石組溝 08SD、24グリット東側列の矢穴のある花崗岩（西から）



3 矢穴のある花崗岩



4 矢穴のある花崗岩裏側



5 石組溝 08SD、6グリット東側列の方形加工された花崗岩（西から）



6 方形加工された花崗岩裏側



7 石組溝 08SD、6・7グリット溝底の焚火跡（北西から）



8 石組溝 08SD、6・7グリット溝底の焚火跡（西上から）



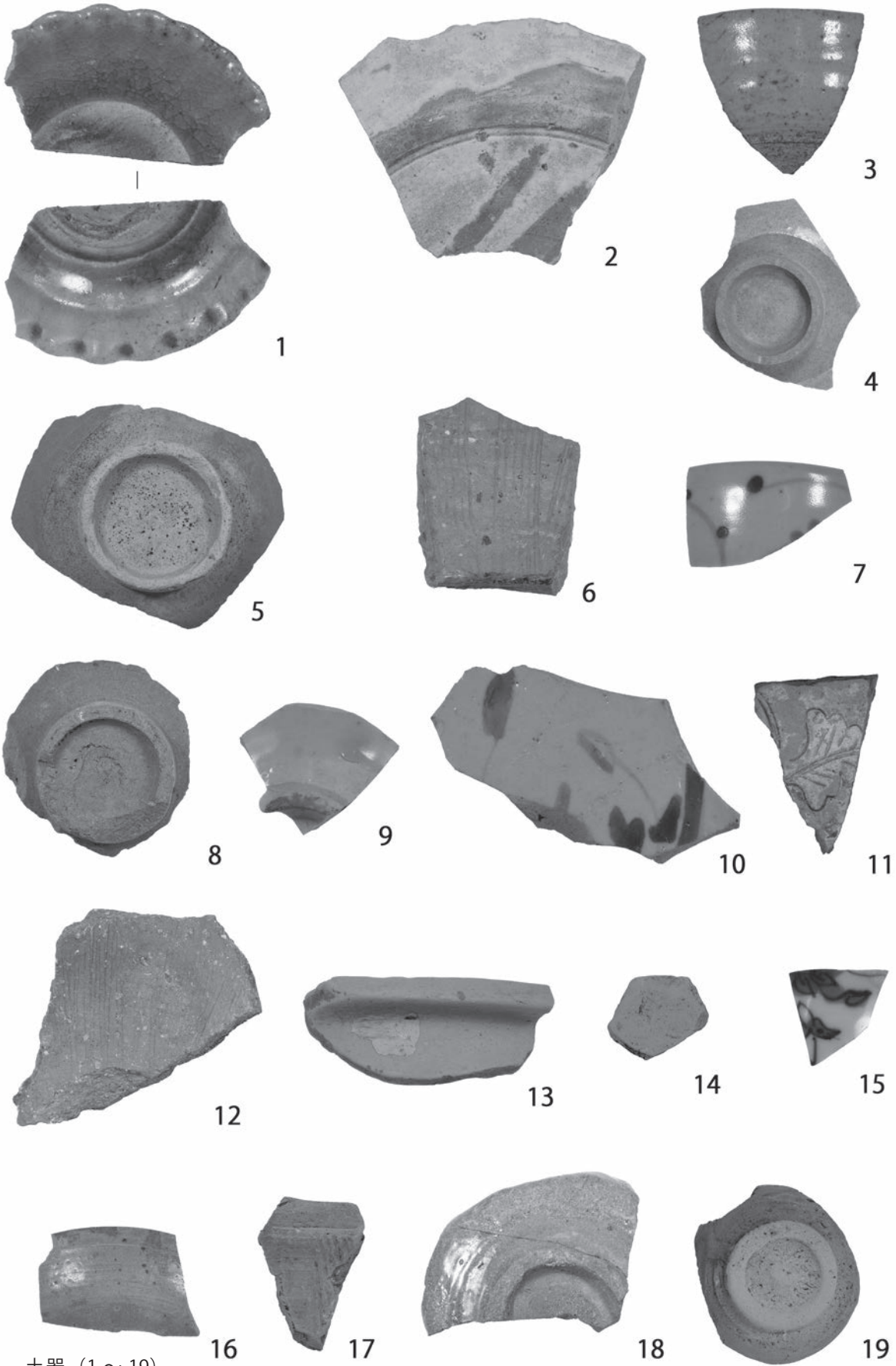
1 石組暗渠排水溝 09SD (西から)



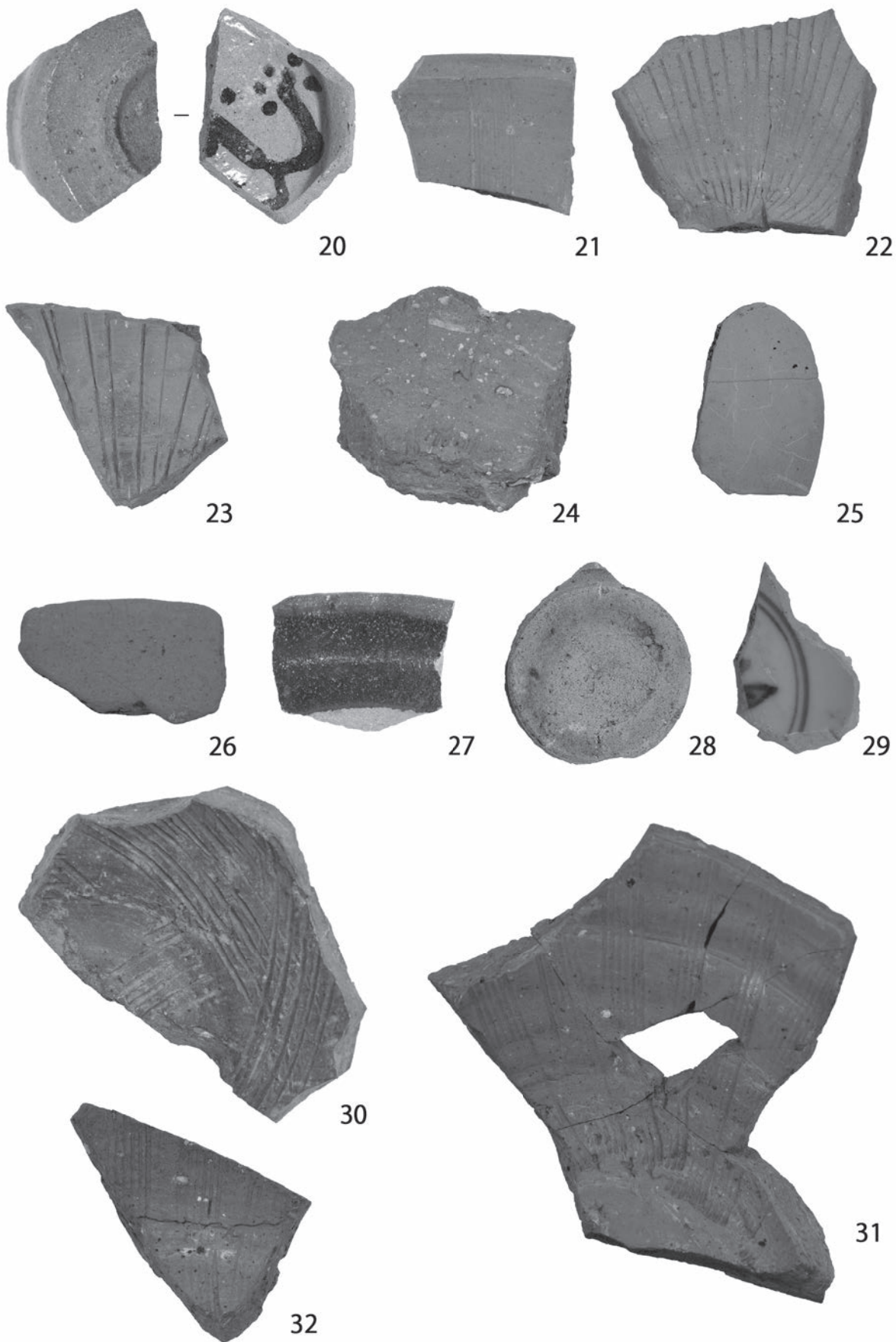
1 石組暗渠排水溝 09SD (南西から)



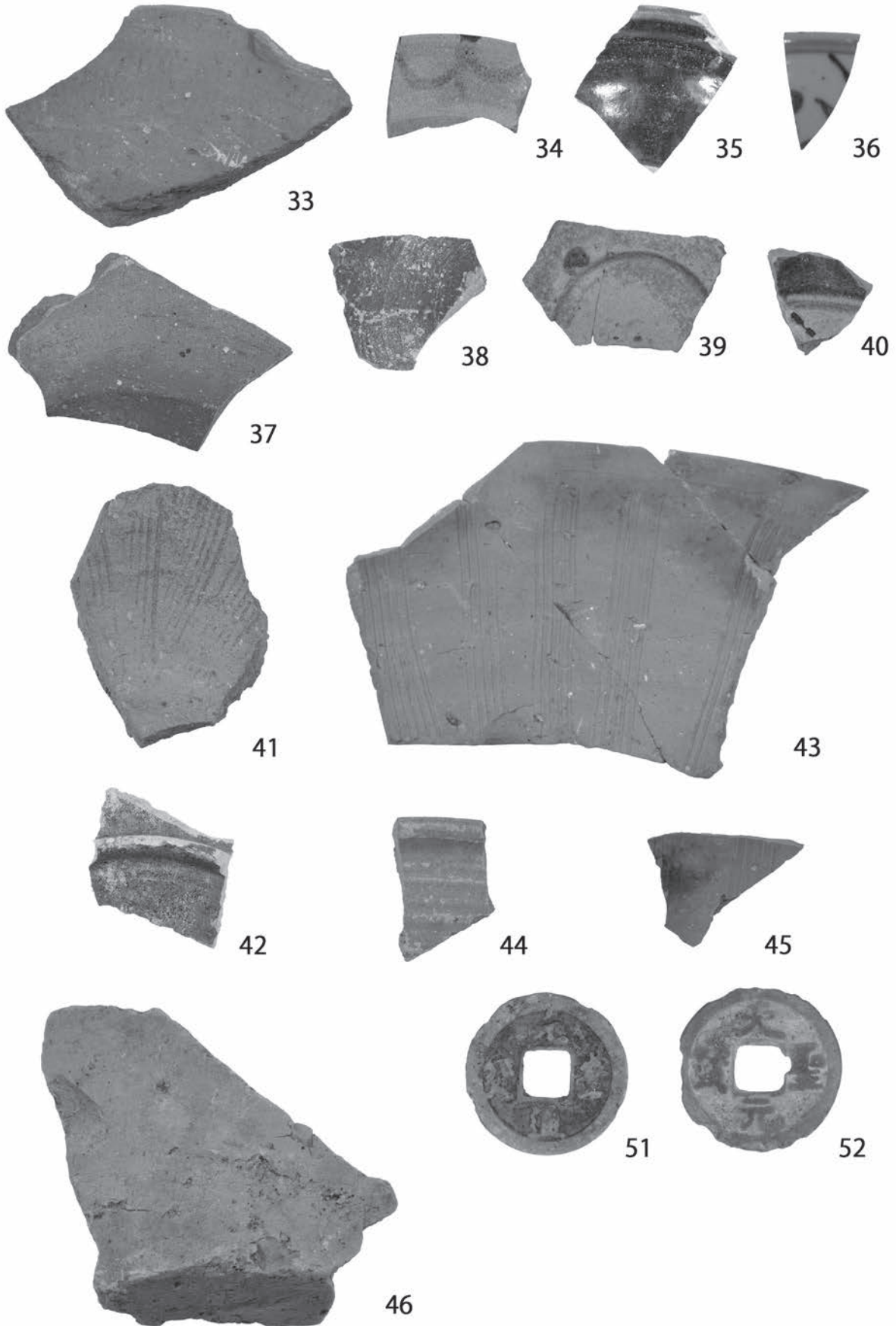
2 石組暗渠排水溝 09SD (北西から)



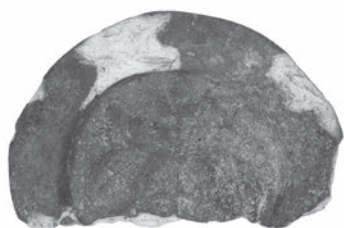
1 土器 (1 ~ 19)



1 土器 (20 ~ 31)



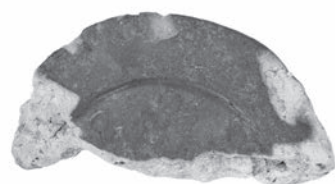
1 土器 (32 ~ 46)、銅錢 (51・52)



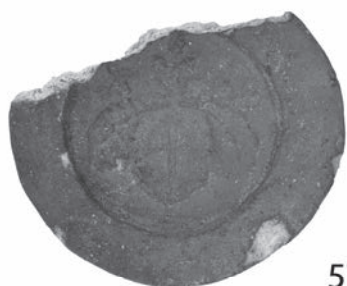
53



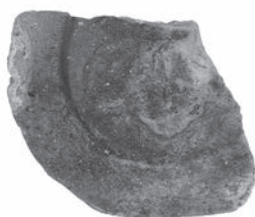
54



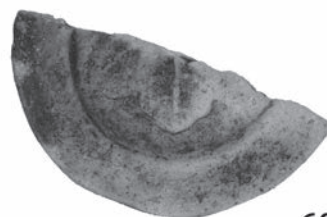
55



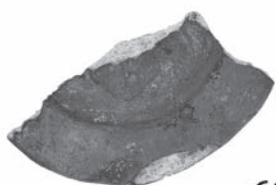
57



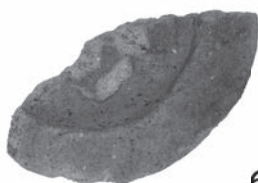
58



60



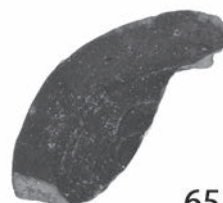
61



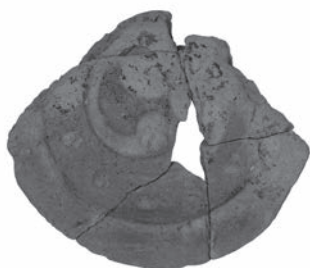
62



64



65



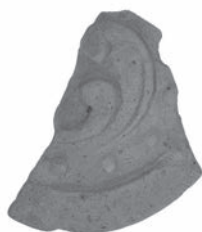
67



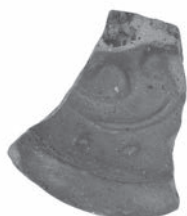
68



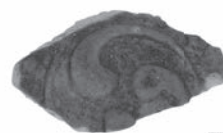
69



70



71



72

1 軒丸瓦 (53 ~ 72)



73



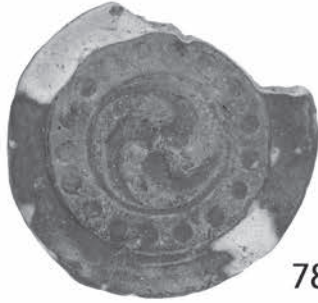
74



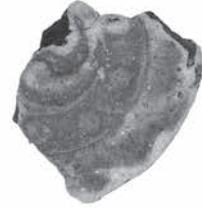
75



76



78



79



81



82



83



84



85



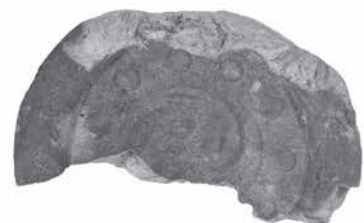
86



87

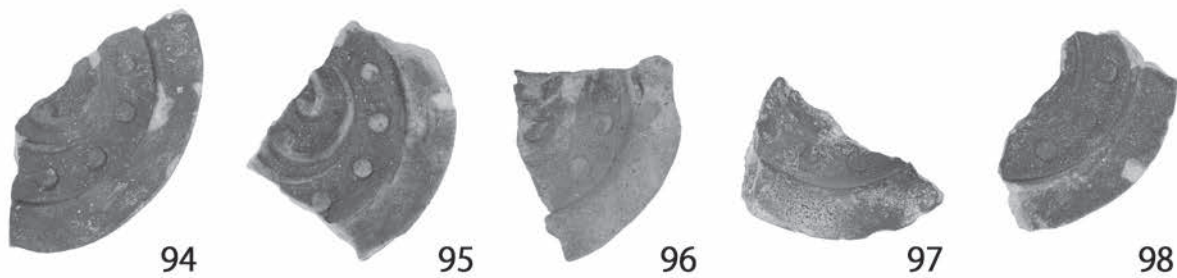
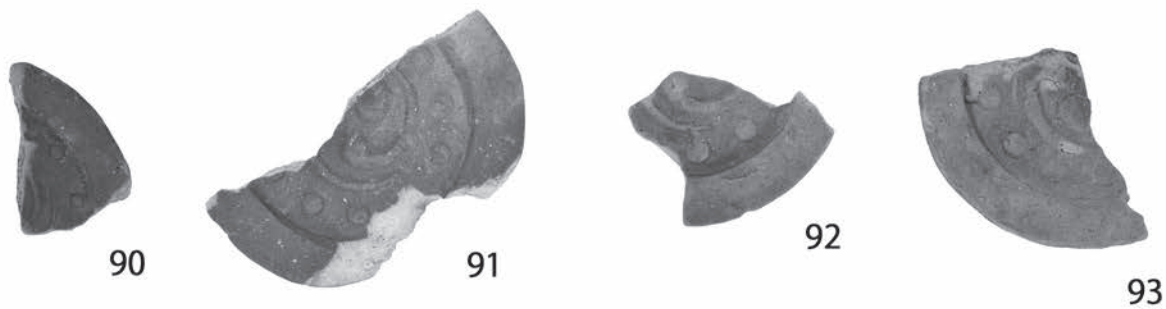


88



89

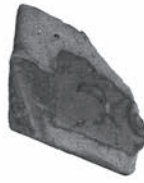
1 軒丸瓦 (73 ~ 89)



1 軒丸瓦 (90 ~ 107)



141



142



143



144



145



146



147



149



151



152



153



154



155



156



158



159



160

1 軒丸瓦 (141 ~ 160)

報 告 書 抄 録

ふりがな	ふしみじょうあと
書名	伏見城跡
副書名	京都市伏見区桃山町下野27-1の発掘調査
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	辻 広志（編）・千喜良淳・布村晋士・浅野広美・小林万容
編集発行機関	株式会社 四 門 西日本・中部支社 京都支店
所在地	〒600-8119 京都市下京区富小路通五条下る本塩竈町558-8 昭栄ビル5F
発行年月日	2018（平成30）年 3月 31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふしみじょうあと 伏見城跡	きょうとし 京都市 ふしみく 伏見区 ももやまちょうしもつけ 桃山町下野 27-1	26100	1172	34度 56分 13秒	135度 46分 25秒	2017年 10月16日 ～ 2017年 12月15日	370㎡	集合住宅建設工事

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
伏見城跡	平城跡	安土桃山時代 ～ 江戸時代	石垣・根石設置溝 ・塀(柵)・素掘溝・ 石組暗渠排水溝・ 道路・石組溝	土師器・陶磁器・瓦・金属製 品	石垣の発見

要 約	<p>伏見城跡における豊臣期と徳川期の2時期の石垣の存在と、遺構変遷が明らかとなった。</p> <p>豊臣期の遺構は、斜面下の石垣と、その西側の道路を挟んだ塀の支柱遺構がある。石垣は根石とその一部が残されていたもので、地上に出ていた部分は石垣表面が焼けて赤変し石爆ぜが生じ、路面も全面焼土や炭に薄く覆われていた。石垣の裏込めには、大型の割石を含む栗石が多数用いられていた。この焼土層は、慶長五（1600）年に伏見城が全焼した「伏見城の戦い」の焼土層と考えられるものであった。石垣の残りは現況で1段を残すが、根石がさらに約1m余り3段残存していた。石垣の特徴は、使用石材には花崗岩を含まず山科周辺の丹波帯の塊状母材を用いた、自然石と割石を組み合わせた割石積み石垣であった。</p> <p>徳川期の遺構は、豊臣期の石垣を埋め込む様に盛土整地した上面の西側前面に作られた石垣であるが、用いられた石材は全て残存しておらず、石垣設置溝と根石下の栗石や尻飼石等が僅かに残るのみであった。この石垣は、伏見城の廃城後に二条城や淀城に持ち運ばれたものと考えられた。また、石垣設置溝の西側には、焼土層を切る幅の狭い素掘り溝が1条と、それを壊す内幅60cmの直線的な石組溝が1条設けられ、延長約50mを検出した。</p> <p>また、出土遺物では赤漆の上に金箔を貼った金箔瓦の出土や、五三の桐の豊臣家の家紋瓦が散見されるなど多数の瓦が出土している。</p> <p>このように今回の調査は、これまで知られていた花崗岩の石垣や石組溝が徳川期伏見城のものであること、徳川期の石垣に埋め込まれた豊臣期の伏見城の石垣や「伏見城の戦い」によるものと考えられる焼土層を発見した。</p>
-----	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

伏見城跡

京都市伏見区桃山町下野 27-1 の発掘調査

発行年月日 / 平成 30 (2018) 年 3 月 31 日

編集・発行 / 株式会社 四門 西日本・中部支社 京都支店

〒600-8119

京都市下京区富小路通五条下る本塩竈町 558-8 昭栄ビル 5F

TEL : 075-353-0116 FAX : 075-353-0117

印 刷 / 三星商事印刷株式会社

〒604-0093

京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 300

TEL : 075-256-0961 FAX : 075-231-7141